

# 研 究 紀 要

## 第 4 2 集 (II)

総合教科〈環境学〉を実施して(1998年度)	大内淳也・武田 章 …… 1 永曾義子・中道貞子
総合教科〈環境学〉を実施して(1999年度)	大内淳也・中道貞子 …… 31 屋鋪増弘
1999年度〈世界学〉の取り組み	笠井智代・塩川 史 …… 67 吉田 隆
Global Classroom 1999 in Cape Town 報告	加藤 勇・塩川 史 …… 95 中道貞子
Global Classroom 2000 in Nara 報告	研 究 部・英 語 科 …… 121
人権・同和教育HR「戦争と人権」の実践	林 良樹・河合士郎 …… 167 荒木孝子・金沢節子
3年生における国語表現指導	金沢節子 …… 213

2 0 0 1

奈良女子大学文学部  
附属中等教育学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第65条の5第1項において準用する第26条の2及び第65条の5第2項において準用する第57条の3の規定に基づき、教育課程の基準改善のために文部大臣の委嘱を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものではないことに留意してお読みください。

## 総合教科〈環境学〉を実施して (1998年度)

1998年度〈環境学〉担当者 大内 淳也・武田 章  
永 曾 義子・中道 貞子

### I はじめに

本校では1991年度より、4年生を対象に、総合教科「環境学」を週2時間実施している。当初、理科2名、社会科1名、保健体育科1名の計4名の教師が担当してきたが、1997年度より理科1名に代わり、家庭科から1名が加わった。これまでの環境学の取り組みについては、本校研究紀要第33～40集に、毎年の実践報告を行ってきた。しかし、紀要第41集は、6年一貫教育の総括編であったため、1998年度の環境学について本紀要に報告したい。

### II 1998年度「環境学」の概要

(資料1参照。なお、比較のため年間計画表は1997年度と1998年度のものを並べ、フィールドワークに関する時間を網掛けにした)

これまでの環境学の年間計画は、その年度の担当教師が何度も打ち合わせをしながら試行錯誤を繰り返し、フィールドワーク・講義・講演会・見学会等を適宜組み入れて、ほぼ決まったパターンができてきていた。その中でも中心となるのが、生徒によるフィールドワークである。ところが、より充実したフィールドワークとその発表準備等のためには、それらの時間が十分に確保できていないのではないかという問題点が浮上してきた。これは、フィールドワークを始める時期の問題や、集中的に持続してフィールドワークに取り組める時期の確保等も含めた問題である。そこで、98年度の年間計画では、環境学の中心となるフィールドワークがより充実したものとなるよう、例年とは少し違った計画編成を試みたので、以下にその特徴を挙げる。

#### 1 オリエンテーション

例年通り、最初の時間は、環境学に関心を持って取り組めるように、動機づけと環境学とはどんな教科かを知らせるためのオリエンテーションを実施した。温暖化、酸性雨、リサイクルなど様々な環境問題に関する基礎知識をもとにした「環境クイズ」を行い、その後、回答しながら環境問題の概要を解説した。また、年間計画表を参照しながら1年間の取り組みについて説明した。

#### 2 ミニフィールドワークの実施

例年実施してきた岩井川の見学にかえて、ミニフィールドワークを実施した。

#### 3 フィールドワーク開始時期

フィールドワークの開始時期を少しでも早くするように配慮した。

## 【資料1】

## 1997年度年間計画表

## 1997年度 4年生環境学 年間計画

月/日	内容 と 日程	備考	通算
4/ 18	オリエンテーション 環境学とは～	大教室	2
25	岩井川FWのオリエンテーション	大教室	4
5/ 9	岩井川FW (雨天時はビデオ視聴)	大教室 (雨天時)	6
16	岩井川FWまとめ	各HR	8
30	講義Ⅰ「ゴミ問題」①林 ②勝山 ③永曾 ④松田 A: 講義② B: 講義③ C: 講義④	各HR	10
6/ 6	A: 講義③ B: 講義④ C: 講義①	各HR	12
13	A: 講義④ B: 講義① C: 講義②	各HR	14
20	A: 講義① B: 講義② C: 講義③	各HR	16
27	FWオリエンテーション (班分け、テーマ設定)	大教室	18
7/ 11	FW (テーマ決定、夏休み計画立案 → 提出締め切り)	放課後活用	
9/ 5	FW夏休み活動報告会 (午前中授業: 1時間)	各HR	19
12	フィールドワーク	各HR	21
26	フィールドワーク	各HR	23
10/ 3	フィールドワーク	各HR	25
17	フィールドワーク	各HR	27
31	講演会Ⅰ	大教室	29
11/ 14	中間発表会 (分科会: 発表5分、質疑応答5分)	大教室、物理	31
28	フィールドワーク	各HR	33
1/ 9	講義Ⅱ「リサイクル」①林 ②勝山 ③永曾 ④松田 A: 講義①&FW B: 講義②&FW C: 講義③&FW	各HR	35
16	A: 講義②&FW B: 講義③&FW C: 講義④&FW	各HR	37
23	A: 講義③&FW B: 講義④&FW C: 講義①&FW	各HR	39
30	A: 講義④&FW B: 講義①&FW C: 講義②&FW	各HR	41
2/ 6	総合報告会準備 (入検準備のため1時間)	各HR	42
20	総合報告会 (8グループ: 発表8分、質疑応答5分)	大教室	44
27	総合報告会 (7グループ: 発表8分、質疑応答5分)	大教室	46

## 1998年度年間計画表

## 《1998年度 環境学 年間計画》

月/日	内 容
1. 4/20	オリエンテーション (環境クイズ) ・ミニFW班分け
2. 27	ミニフィールドワーク「学校を見直そう」
3. 5/11	〃 まとめ
4. 18	〃 発表会 (クラスごと)
5. 6/1	FWオリエンテーション (班・テーマ決め・機材紹介)
6. 8	フィールドワーク
	講 義「今、サイクルを見直そう」
	A組 B組 C組
7. 15	社会科分野 [武田] 理科分野 [中道] 家庭科分野 [永曾]
	理科分野 [中道] 家庭科分野 [永曾] 保体科分野 [大内]
8. 22	家庭科分野 [永曾] 保体科分野 [大内] 社会科分野 [武田]
	保体科分野 [大内] 社会科分野 [武田] 理科分野 [中道]
9. 29	フィールドワーク
10. 7/13	FW夏休み計画表・個人で読書等課題 (午前中授業: 1時間)
11. 9/7	FW夏休み活動発表会 (午前中授業: 1時間)
12. 14	講 演「誰でもできるNGO」 (講師: 有地淑羽氏)
13. 28	フィールドワーク
14. 10/5	フィールドワーク
15. 12	フィールドワーク
16. 19	フィールドワーク
17. 26	中間発表会 (分科会: 発表10分、質疑応答5分)
18. 11/2	フィールドワーク
19. 9	フィールドワーク
20. 16	フィールドワーク
21. 30	フィールドワーク
22. 12/14	フィールドワーク
23. 1/11	講 義「ダイオキシンを考える」
24. 18	講 演「南極から見た地球環境問題」(奈良女子大 高田将志氏)
25. 25	ロールプレイング「ダイオキシンを考える」
26. 2/1	FW【発表準備 (プレゼンテーション講習・発表会予行練習)】
27. 15	クラス発表会
28. 22	最終発表会

## 4 講義と各教科との連携

環境学の時間の講義を減らし、環境学での講義内容と関連性のある内容を、各教科の授業の中に組み込んでもらうことにした。

## 5 中間発表会の時期

中間発表会も少し早めて、中間発表会以降のフィールドワークにかける時間も確保できるように考えた。

また、98年度の年間計画を立てるに当たり、メインテーマについても検討した。そして、身近な環境問題を考え直すことを視点を据え『今、生活を見直そう』とした。内容的にも、メインテーマを意識したものになっている。

## III ミニフィールドワーク

先にも述べたように、従来の川の見学会に代わって、1学期のはじめにミニフィールドワークを実施した。98年度のメインテーマを『今、生活を見直そう』としたので、ミニフィールドワークのテーマはこれを受けた形で、『学校生活を見直そう』とした。

ミニフィールドワークでは、学校内の問題を5つのテーマにわけ、班ごとに取り組んだ。

「学校の水」 学校での水の使用量は？何に水を使っているの？下水の状態は？

「学校の電気」 学校での電気の使用量は？どんなことに電気を使っているの？

「学校のガス」 学校でのガスの使用量は？どんなことにガスを使っているの？

「学校の紙」 学校での紙の使用量は？何に紙を使うの？使用後の紙の行方は？

「学校のゴミ」 学校でのゴミの量は？どんなゴミがどこからでるの？

班の構成は、各クラス男女混合 8～9人を1班とした。

フィールドワークの日程は以下の通りである。

4月27日・5月11日 フィールドワークの実施とまとめ

5月18日 クラスでの発表会

まとめ方は、模造紙1枚にまとめを書く形とした。このまとめは、発表後に教室前に掲示し、多くの人に見てもらえるようにした。また、まとめには、「調査で分かったこと、問題点」「問題点を解決するにあたっての班からの提言」を入れるようにさせた。

発表は、クラスごとに実施した。1班の発表時間は10分以内とし、質疑応答の時間を5分程度とった。

内容によっては、データが少なくやりにくいものもあったが、身近なテーマであることから、興味を持って取り組めた。

提言の中には、以下のようなものがあった。

「学校のゴミ」

- みんながいなくなったものを貸し出す「リサイクルハウス」を作ってはどうか。
- みなみ（註：学校出入りのパン屋）でパンを買うときは、自分用の容器を持って行ったり、1つの袋にまとめてもらう。
- ゴミ分別をきちんとやろう。輪ゴムや消しゴムなど使えるものは最後まで使おう。
- ゴミが多くなると、その分必要なゴミ袋も多くなる事を忘れないで、紙コップなどはつぶして、かさを減らして捨てよう。

### 「学校の水」

- ・冷水機は、出ているすべての水を飲んでいるだけでなく結構無駄なので水筒を持ってこよう。
- ・書道や家庭科・美術など授業中の水の使い方を工夫。
- ・トイレは2度でなく、1度で十分なので心がけよう。「音姫」を学校につけてください。
- ・学校のトイレは一度レバーを押すと大量の水（5リットル）が止まることなく流れる。個人で水の量を調節できるタイプに便器を変えればよい。
- ・石鹸を使うときは水を止めよう。

### 「学校の紙」

- ・古紙回収の徹底を。
- ・学校だけで古紙回収しても仕方ない。県がしっかり回収・処理して欲しい。
- ・必要枚数だけ印刷すべき。印刷を失敗した紙でも、使えるものは極力使おう。
- ・先生は、本当に必要かどうかを考えてプリントする。
- ・紙はできるだけ裏表使う。
- ・再生紙をもっと使っていくようにする。
- ・運営委員会は、掲示物とプリントするものを区別すべし。

### 「学校の電気」

- ・教職員室のクーラーを消しまくる<クーラー消しまくり隊>の結成
- ・ソーラーシステムの導入
- ・日直は、教室移動の時は電気を消したか必ず確認  
(教室の電気1時間つけっぱなし：750whの無駄。1週間で5.25kwh)
- ・自動ドアはいらない
- ・明るいとき、トイレの電気はつけない
- ・「電気消しまくり隊」を有志で結成。1回消す毎に1ポイントとし、月何ポイント消したかグラフにして競い合う。

### 「学校のガス」

- ・先生は、朝にストーブの鍵を開けて、生徒が自由に操作できるようにし、放課後に鍵を閉める。
- ・ヒーターの温度を2度下げただけで節約量844.15㎡、二酸化炭素削減量543.9kg、光熱費節約105310円になる。HR委員も鍵を持って、こまめに温度調節ができるようにすればいい。
- ・日直が教室移動の時にヒーターを消すようにする。

## IV 教師の講義について

教師による講義は、前半（1学期）と後半（3学期）に行った。

前年度は、担当教師1人当たり2時間の講義を1学期に行っていた。そうなると4回8時間の授業を講義に当てることになり、1学期はほとんどフィールドワークのための時間がとれない。そこで98年度は、環境学の時間には、担当教師1人1時間ずつの講義を行うこととし、1時間ではこなせなかった内容や、環境学で取り上げる講義内容と関連ある内容を、各教科の授業の中に組み込んでもらうことにした。こうして、それぞれの教科と連携をはかりながら、講義内容を削減することなく、1学期のフィールドワークにかける時間も確保し、夏休みにも、少しまとまった活動ができるように考えた。

1学期の講義は、メインテーマ『今、生活を見直そう』に沿って講義内容を考え、生活の中でも

「サイクル」をキーワードとして各教科の側面からの講義を行った。3学期は、98年度に大きな環境問題となったダイオキシンを取り上げた。

## 1 講義 I 「サイクル」の概要と各教科との連携

前述したように、環境学の時間に行う講義は、それぞれの担当教師1時間ずつとし、取り上げきれない内容を各教科の授業の中に組み入れてもらうよう申し入れ承してもらった。従来から、各教科の授業の中でも環境問題は多方面から扱われており、各教科での授業が、環境学の土台となっていた。98年度は、環境学と各教科の授業の関連性を教科ごとにまとめ、環境学の講義で取り扱う部分と各教科の授業で取り扱う部分を整理して調整するといった環境学担当者と教科担当者の連携をはかる作業を行った。

教科によっては、環境学担当者と教科担当者が同じ場合もあるが、必ずしもそうではないので、環境学担当者が仲介者となり、授業の時期、関連のある内容等を調整し、おおよそ次のような展開で、1学期の講義を行った。

理科では、環境学担当者と教科担当者が同じであったことから、自然界の循環の中で、炭素の循環・窒素の循環・水の循環を取り上げ、環境学と理科との時間を継続的に利用して講義を展開した。それぞれの「循環」について、自然科学的な側面から、そのしくみについて講義を行うだけでなく、人間生活と関連した内容を加味して、理科と環境学との融合をはかった。

社会科では、人口増加・生活の歴史的变化・エネルギー消費の問題・種々の地球環境問題などを現代社会の授業で取り上げた。環境学の講義ではそれらをふまえて、「大量生産→大量消費→大量廃棄」という現代社会の在り方が生じさせている諸問題について考えさせた。

保健体育科では、自然環境と健康の問題を取り上げた。環境学の時間に、自然環境保全のために何ができるのか、今何が問題とされているのかを考え、保健の時間には、自然環境が破壊されることによって生じた健康被害について考察した。

家庭科では、毎日のライフサイクルを見直して、生活する中で無駄なもの、改善できることを環境学の時間に考え、家庭科の時間では、消費生活の変遷やその中の問題点、消費者としての態度等を取り上げて、これからのライフスタイルへと関連づけた。

次に、各教科の側面から、「サイクル」をキーワードとした講義内容をまとめ、環境学での授業と教科での授業との関連性を示した。また、環境学または各教科で講義の際に使用したプリントの一部は資料参照。尚、98年度は、環境学のテキストとして、「地域からつくるあしたの地球環境」(実教出版)を生徒に購入させて講義でも使用した。

### 【自然科学的側面からの講義内容】 【資料2】

～自然界の物質の循環と人間生活～

#### 1. 炭素の循環

(1) 生態系における炭素の循環

(2) 炭素の循環と人間生活

\*炭素の循環における生物のかかわり

★炭素の循環における人間生活のかかわり

★ライフスタイルの変化と化石燃料の消費量

★二酸化炭素の排出量



## 2. 窒素の循環

### (1) 生態系における窒素の循環

### (2) 窒素の循環と人間生活

\*窒素の循環における生物のかかわり

★窒素の循環における人間生活のかかわり

★余分な窒素分→河川や湖沼から海に→貧栄養の水が富栄養化

## 3. 水の循環

### (1) 自然界での水の循環

### (2) 水の循環と人間生活

\*水の科学的な指標 科学的な水質判定（水温、透明度、におい、pH値、溶存酸素、COD、BOD、アンモニア性窒素、硝酸性窒素、リン酸イオンなど）・水生昆虫による水質判定法

★人間による水の汚染 河川、地下水汚染、湖沼の汚染、海水の汚染等

(注) 1～3を環境学と理科の授業で継続的に各1時間で扱った。

\*印は科学的な基礎知識を扱っている部分

★印は環境問題を考える上での応用的な内容を扱っている部分

## 【社会的側面の講義内容】

## 【資料3】

～大量廃棄のその先は……？～

### 1. 人口増加問題

- (1) 世界人口の増大（含む未来予測）
- (2) 世界の地域別増大率（同）

### 2. 生活の変化

- (1) 前近代の生活（例えば日本の江戸時代の生活）
- (2) 近代の生活（例えば戦前の生活）
- (3) 現代の生活  
（例えば「三種の神器」、「新三種の神器」、PC、自動車、家電製品その他）

### 3. エネルギー消費の問題

- (1) 産業革命以前のエネルギー消費
- (2) 産業革命後のエネルギー消費

### 4. 現代の地球環境問題 ※いくつかをピックアップして

- (1) 地球温暖化問題
- (2) 酸性雨問題
- (3) 砂漠化問題
- (4) オゾンホール
- (5) 熱帯林減少問題

### 5. COP3がなげかけた問題

### 6. 現代社会の「モノ」の流れとその問題点

- (1) 「大量生産→大量宣伝→大量消費→大量廃棄」  
「大量廃棄→大量生産」の循環のないことが問題＝ゴミ問題・リサイクル問題
- (2) リサイクルの現在－リサイクル法を題材に－

(3) 廃棄物処理問題—岐阜県御嵩町産廃処理施設建設を巡る住民投票を中心に—

(注) 1～5までを現代社会の授業で扱い、その後に行った環境学での講義では6を中心にした。  
現社での講義は、環境学講義の土台・支柱として位置づけられる。

【健康面からの講義内容】

【資料4】

～自然環境の調和と健康～

1. 自然環境とは

自然環境＝自然生態系 安定した物質循環（サイクル）

自然生態系では多種多様な物質が、それぞれの様式に従って循環している

2. 自然環境の保全

自然環境の保全を阻むもの

自然環境の保全のためにできること

自然環境破壊・・・土壌の劣化、土壌汚染、水質汚濁、大気汚染

3. 自然環境破壊による人体への影響

(1) 土壌汚染・水質汚染による健康被害

発生源 汚染物質 具体的な事例

(2) 電磁波による健康被害

(3) オゾン層破壊による健康被害

(4) ダイオキシンによる健康被害

健康被害を起こす原因の多くは・・・サイクルの崩れ

(注) 1～2の内容を環境学で扱い、3にある具体的な健康被害についての学習を保健の授業で扱った。

【家庭科的側面の講義内容】

【資料5】

～「家庭経済」の中の消費と廃棄～

1. ライフサイクルを見直そう

(1) 生活内容と使用する生活用品・エネルギーや食品など

(2) 生活に欠かせないものと無駄なもの

(3) 生活の中で改善できること

(4) 環境を守るための取り組み

(5) 環境破壊と生活の変化との関連

2. 生活の中の問題点

(1) 家庭のエネルギー消費

(2) 生活排水

(3) 家庭でできる4R

3. 消費生活と環境問題

(1) 四大食品公害

(2) 高度経済成長と消費生活の変化

(3) 真の豊かさとは何か

#### 4. 消費者として

- (1) 便利になった生活と問題点  
(例：輸入食品・加工食品の問題点)
- (2) 消費者としての選択

#### 5. これからのライフスタイル

- (1) ごみ問題
- (2) 節水・排水
- (3) リサイクル
- (4) 省エネルギー

(注) 環境学の講義では1～2を扱い、それを受けて家庭科の授業で3～5へと発展させた。

## 2 講義Ⅱ「ダイオキシンを考える」

「ダイオキシンを考える」をテーマにして、4人の教師が一斉に全生徒向けに大教室での講義を2時間実施し、その後、クラス毎にロールプレイングを2時間行った。

### (1) ダイオキシンをめぐる講義 (1/11に2時間)

4教科の教師がそれぞれの教科領域の側面から、ダイオキシンに関する基本的な事項などを中心に講義した。ただし無前提に「ダイオキシンは危険」ということをあおり立てることは避け、塩ビ協会作成ビデオや「科学的研究がまだまだ必要」という論調の科学者の意見も紹介した。

### (2) 場面設定：「本校の横に産廃処理施設建設が計画された」(1/11の講義後に説明)

上の場面設定を受け、次のそれぞれの立場から意見を表明するように指示を与えた。

a 市民 b 県庁・市庁 c 厚生省 d 環境庁 e 塩ビ製品製造企業 f その他(自分で想定する)

次週までに、a～fから4つの立場を選んで、想定される意見を各自廊下に掲示すること。また次週に、フィールドワーク班ごとに、a～eのどの立場から意見表明するかを抽選で決定する。

### (3) 文献調査などの調査活動 (1/25に1時間)

### (4) ロールプレイングの一例 (1/25に1時間)

議長「うちの学校の横に“産業廃棄物の処理場”が建設されることになりました。ここに様々な立場の方に集まってもらいました。いろいろな意見を伺いたいと思います。まず、市民から何か要望があるそうです」

市民「悪臭・健康被害等が心配なので、また、ダイオキシン問題が論議されているのに学校や病院の近くに処理場を建設するなんて反対だ。しかも観光都市奈良のイメージダウンにつながるではないか。ごみを運搬するトラックの増加による交通渋滞も考えられるし、とにかく反対。建設場所変更に関する住民投票を行うことを要求する」

役所「住民投票を行うことは構わない。しかし、結果がどうあれ計画は実行する。奈良市のごみは奈良市で処理する。これは当然だ。環境が心配なら環境庁に聞けばいい」

環境庁「処理場建設場所についてはいっさい関与しない」

市民「厚生省に伺いますが、健康被害の心配はないのですか？」

厚生省「ただいま調査中です」

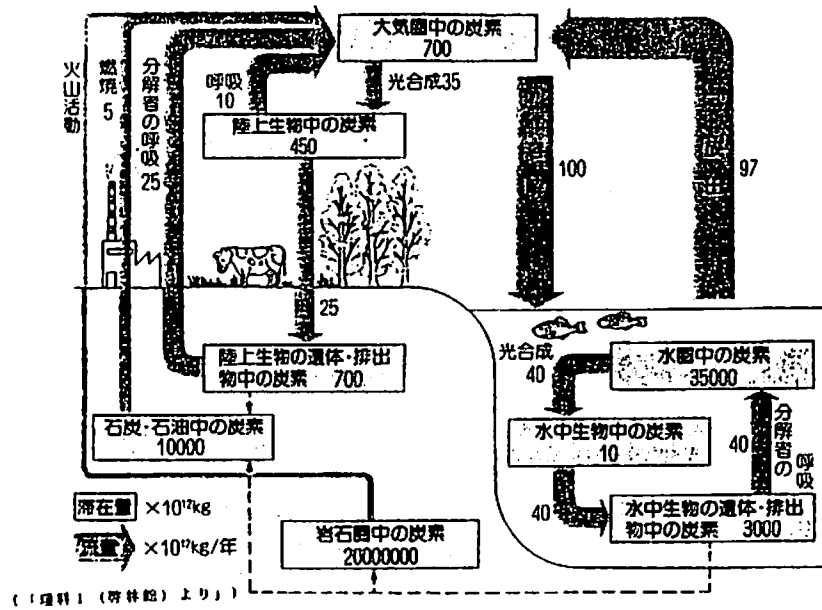
議長「企業側の言い分はありますか？」

塩ビ企業「塩ビ業界としましてはこの問題にはいっさい関与しません」

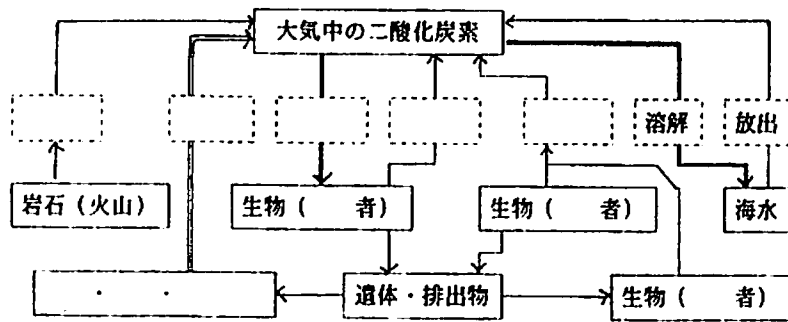
市民「住民がいくら要望しても処理場はつくるのか？市民のための役所だろう」

1. 炭素の循環

(1) 生態系における炭素の循環



生態系における炭素の循環 有機物の母格をなす炭素は、生態系を循環する。



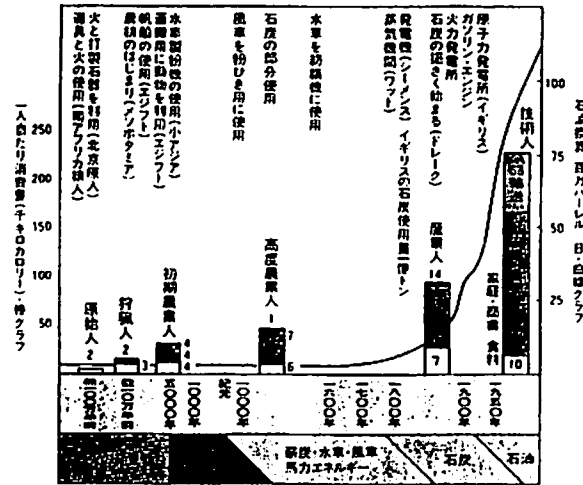
\* 「生物としてのヒト」がかかわっているところはどこか？

\* 「人間生活」とかかわっているところはどこか？

(2) 炭素の循環と人間生活

炭素の循環における生物のかかわりは、光合成で二酸化炭素が吸収されること、また、生物が有機物を分解して呼吸することにより二酸化炭素を放出することである。また、自然界の炭素の循環に人間生活がかかわっているのは、主に、石油・石炭・天然ガスなどの燃焼による二酸化炭素の排出である。ライフスタイルの変化がどれ位、化石燃料の消費量を増やしたか、また、二酸化炭素の排出量はどれくらいかを、次のデータから確かめてみよう。

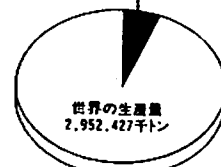
人類とエネルギーとのかかわり



人類の活動に占めるわが国の割合

原油輸入量 (平成元年)

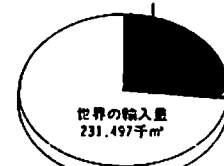
日本の輸入 178,343千トン(6.0%)



(出典)平成3年国連環境白書、原資料は「世界国際協会」、「総合エネルギー統計」。

木材材輸入量 (平成元年)

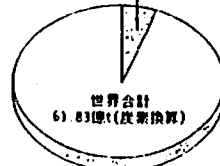
日本の輸入 60,849千m<sup>3</sup>(26.3%)



(出典)平成3年国連環境白書、原資料は「FAO貿易年報」統計年度1991年度。

二酸化炭素排出量 (平成3年)

日本(4.8%)



(出典)オーストラリアの研究所二酸化炭素情報解析センター(1991年)より環境庁作成。

「大量廃棄」のその先は……？ - 社会分野講義 -

1. 世の中の物の流れ-「モノ」のサイクル- (Text7.21,29,34,35p)

「大量生産」(資料A)



「大量宣伝」



「大量消費」



「大量廃棄」



?

(資料B, Text18.19p)

2. 「モノ」は「ゴミ」になったら「終わり」?

(1) 「ゴミ」の行方は? (Text18.19,39p)

(2) 「リサイクル」という言葉はもはや常識 (資料C)

しかし、「経済効率」という壁が…… ex 古紙回収 (Text22.23p)

3. なんとかする方法はないのか?

(1) 廃棄物処理施設建設は計画したものの……岐阜県御嵩町の例- (資料D)

住民投票がなげかけた問題は?

※新潟県巻町可免建設・沖縄県米軍基地問題・名古屋市米軍ヘリポート建設に関する住民投票

(2) 法律で規制する方法はないのか? (資料E)

リサイクル法の制定→しかし、実効性はあるのか?

Q. ではどうすればよいの?

→ Text60p

読んでみよう; 寄本勝美『ゴミとリサイクル』岩波新書

植田和弘『環境経済学への招待』丸善ライブラリー

A1

表 23-4 わが国の自動車の供給台数 (単位 千台)

	1960	1970	1980	1990	1995	1996
生産	760	5 303	11 043	13 487	10 196	10 346
四輪車	482	5 289	11 043	13 487	10 196	10 346
乗用車	165	3 179	7 038	9 948	7 611	7 864
トラック	308	2 064	3 913	3 499	2 538	2 429
バス	8	47	92	40	47	53
三輪トラック	278	14	—	—	—	—
輸入	4	20	48	253	405	454
輸出	50	1 094	5 967	5 831	3 791	3 711
差し引き	714	4 228	5 124	7 909	6 810	7 089

A2

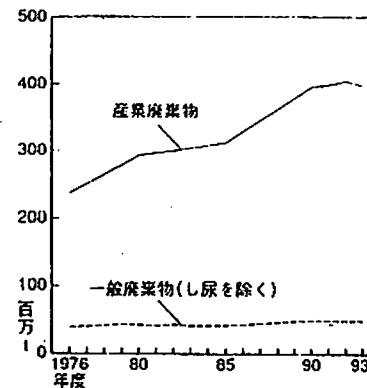
表 25-16 わが国の家庭用電器の生産高 (単位 千台)

	1965	1970	1980	1989	1990	1995
電気洗濯機	2 235	4 348	4 879	5 141	5 597	4874
電気冷蔵庫	2 313	2 631	4 282	5 018	5 048	5013
電気掃除機	1 435	3 526	5 265	7 138	6 851	6595
電子レンジ	—	414	414	1 876	4 790	4 673
カラー	98	6 399	10 909	12 578	13 243	7890
テレビ	4 060	6 089	4 296	—	—	—
計	4 158	12 488	15 205	13 983	15 132	—
ビデオテープレコーダー	—	—	—	4 441	28 242	27 921
ステレオセット	1 188	3 212	2 795	2 825	—	—

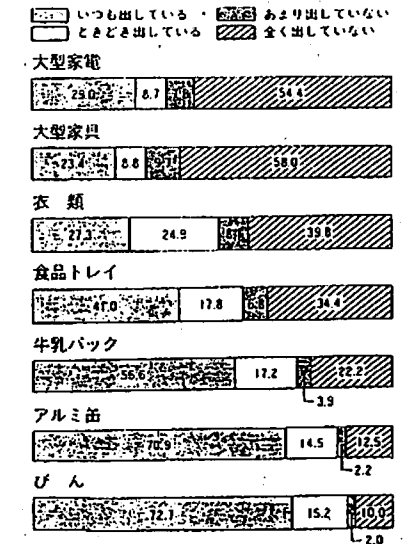
C

B

図 50-2 廃棄物年間総排出量



家庭ゴミをリサイクルに出す人の割合



注: 1994年における消費者アンケート  
資料: 新潟県環境政策局「リサイクル実践調査」

(注) 資料D, Eは新聞記事(省略)

「Text」とは『地域からつくるあしたの地球環境』(実教出版)

## 自然環境の調和と健康

### ・自然環境とは？

自然 ↔  
環境：

### ・自然生態系（＝自然環境）

本質的な機能 = 安定した物質循環（酸素・窒素・二酸化炭素・水など）

自然生態系では多種多様な物質が、それぞれの循環の様式にしたがって循環している。  
（循環のどの部分を取り出しても インプット＝アウトプット となる）  
多少の変動には対応する能力を持っている

人間を含め、あらゆる生物は何万年にもわたってダイナミックで調和のとれた自然生態系のもとで、その環境に適応して生存してきたので、調和の崩れた生態系の下で暮らしていくことはできない。

### ・自然環境の保全

自然環境を破壊しないようにすること（あたりまえのこと）

なぜできないか・・・？

豊かさの追求・便利さの追求・・・南北問題 人口増加

先進国が環境問題を重視しているのに対し、途上国は経済発展・開発を重視している。???

自然環境をひとたび破壊 → 回復するためには膨大な費用と時間  
→ 回復不能（永久に失われる）

自然環境を破壊すると

土壌の劣化・・・食糧生産を行うために人工的な肥料や莫大なエネルギーの投入

土壌汚染・・・作物生産不可能、健康被害

大気汚染・水質汚濁・・・健康被害

微量な汚染物質が土壌や海洋を汚染し、作物や魚類に蓄積されている（浄化は不可能）

・私たちにできることは（Think Globally Act Locally） できることから始めよう

現状を知ること

食いたい人は1人1日10ℓの水で生活しています。（ミニフィールドワークでトイレは1回でどれだけの水を流しているか知っていますね・・・） 日本人は1人1日1トンの水を使います。  
電気・ガス・石油・ガソリン・鉄・アルミ・プラスチック・ガラスなども・・・

基本は4R

Refuse（要らない） Reduce（減らす） Reuse（再利用） Recycle（再資源化）

一家団楽・環境家計簿・自動車・電気製品・風呂・洗濯・買い物・ゴルフ・自販機

便利さは・・・？（何が便利で何が不便・・・）

### ・自然環境破壊の影響は

誰の責任・・・？ 誰が背負うの・・・？

電磁波・・・

オゾン層破壊・・・

ダイオキシン・・・

国内発生源別ダイオキシン類排出量（g/年）

発生源	ダイオキシン類排出量	割合（%）
（焼却工程）		
廃棄物焼却	4,847.2～5,007.2	94.3～94.5
金属精錬	250	4.9～4.7
たばこの煙	16	0.3
その他	23.07	0.4
（漂白工程）	0.78	0.0
（農薬製造）	0.08	0.0
合計	5,140～5,300	100

（資料原典：環境庁中央環境審議会大気部会専門委員会資料）

体重1kg当たりの1日摂取量（μg）

摂取経路	摂取量	割合（%）
食物	0.26～3.26	50.0～92.4
大気	0.18	34.6～5.1
水	0.001	0.2～0.0
土壌	0.084	16.2～2.4
計	0.52～3.53	100

（資料原典：環境庁『ダイオキシンリスク評価検討会』報告書）

★毎日のライフサイクルを見直そう

時刻	生活内容	使用する生活用品・エネルギーや食品など
----	------	---------------------

★今、書き出したものは全て、生活になくはならないものですか？  
 ☆なくても日常生活に差し支えないものは？

☆無駄づかいしていると思うものは？

☆生活の中で改善できそうなことは？

★身の回りのもので、環境のために考え直す必要があると思うものはありますか？

★環境を守るために、どのような取り組みが考えられますか？

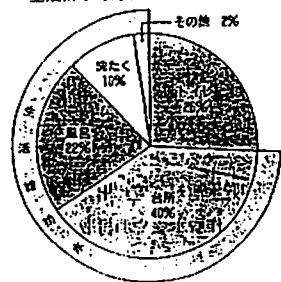
★なぜ、環境破壊が深刻になってきたのでしょうか？それは、私たちの生活の変化とどのように関わっていると考えられますか？

- 台所での注意
- ① 使用した古い油は紙などに吸わせて、燃えるごみとして捨てる。
  - ② 鍋や食器の油污れなどは、よき取ってから洗う。
  - ③ 米のとぎ汁は、植木などにまく。
  - ④ みそ汁などは残さないように人数だけつくる。
  - ⑤ 生ごみを流さないよう、三角コーナーなどに水切り袋をつける。

図4 もしこれだけのものを水に染したら  
 染み広がる面積(約25cm<sup>2</sup>/分)にするために必要な水の量(1分間の消費量)

しょう油 大さじ1杯 (15ml)	1.5杯
米のとぎ汁 茶巾かぶ(1杯) 1回洗い(約200ml)	4杯
みそ汁 大さじ1杯 (15ml)	4.7杯
マヨネーズ 大さじ1杯 (15ml)	12杯
牛乳 コップ1杯 (150ml)	9.4杯
ジュース コップ1杯 (150ml)	13杯
缶コーヒー 1缶(120ml)	14杯
日本酒 お椀1杯 (180ml)	24杯
天ぷら油 (約100ml)	330杯
家庭用洗剤を 使っている4人家族 の排水(1分/日)	109杯
家庭用洗剤を 使っている1人家族 の排水(1分/日)	10杯

生活排水の汚れの内訳

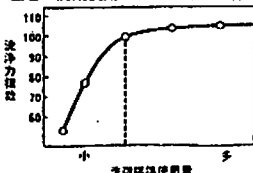


出典:「とりどろした排水の処理」(平成7年度環境省環境情報)

— Tankyu I —

- ① 右のグラフから、洗濯をするときの洗剤の使用量と洗浄力の関係を読み取ろう。
- ② 洗剤が、河川や下水処理場に大量に流れ込むと、どんな影響を与えるか調べてみよう。
- ③ 家庭で、石けんや合成洗剤などを使う際に注意することを考えてみよう。

図5 洗剤使用量と洗浄力の関係



資料:環境庁による。

CO<sub>2</sub>を家庭で減らす4つの作戦

作戦1 Reduce 国内編  
 (CO<sub>2</sub>削減法に等しい削減できる量)

- ①冷蔵庫の扉開を1日10回減らすと 2.0kg
- ②ガスコンロの火を1日5分なくすと 2.0kg
- ③換気扇を回すのを1日1時間短くすると 0.7kg
- ④食器洗いの温度を40℃から30℃にすると 19.9kg
- ⑤食器洗いで水の流しっぱなしを1日3分短くすると 1.8kg
- ⑥シャワーの出しっぱなしを1日3分やめると 15.4kg
- ⑦風呂を湯かすぎないと 12.5kg
- ⑧洗濯、歯磨きで水の流しっぱなしをやめると 1.8kg
- ⑨洗濯物をまとめて洗うと 2.6kg
- ⑩就寝時に暖房便所のスイッチを切ると 9.7kg
- ⑪人のいない部屋で照明のつけっぱなしをやめると 3.6kg
- ⑫エアコンの使用を1日1時間短くすると暖房の場合 13.8kg  
冷房の場合 6.0kg

- ⑬エアコン冷房時の設定温度を1℃上げると 6.0kg
- ⑭石油ストーブの使用を1日1時間短くすると 19.8kg
- ⑮ガスストーブの使用を1日1時間短くすると 10.5kg
- ⑯テレビを見る時間を1日1時間短くすると 4.7kg
- ⑰ステレオをつけている時間を1日1時間短くすると 5.3kg
- ⑱テレビゲームで遊ぶ時間を1日1時間短くすると 4.1kg
- ⑲掃除機をかける前に部屋を片づけると 3.6kg
- ⑳こみを1日1kg減らすと 67.6kg

作戦2 Reduce 屋外編  
 (公共交通機関の利用等)  
 (CO<sub>2</sub>削減法と削減できる量)

- ①自家用車での通勤・通学を電車にすると往復 10km×5回で 2.9kg
- ②自家用車での通勤・通学をバスにすると往復 10km×5回で 2.7kg
- ③自家用車でのレジャーなどを電車にすると 1回100km×5回で 29.4kg
- ④自家用車でのレジャーなどをバスにすると 1回100km×5回で 26.6kg
- ⑤自転車のアイドリングを1日5分やめると1年で 16.4kg

作戦3 Refuse (不要なものを拒否)  
 (CO<sub>2</sub>削減法と1年間で削減できる量)

- ①不要な家具の購入を1万円分控えると 5.3kg
- ②不要な家電製品購入を1万円分控えると 4.6kg
- ③不要な衣類の購入を1万円分控えると 5.8kg
- ④肉食を1万円分控えると 5.2kg

作戦4 Recycle (再生して使う)  
 (CO<sub>2</sub>削減法と1年間で削減できる量)

- ①3日で1本ガラス瓶をリサイクルに出すと 3.6kg
- ②3日で1本ペットボトルをリサイクルに出すと 2.4kg
- ③2日で1枚紙パックをリサイクルに出すと 7.2kg
- ④1日で1本アルミ缶をリサイクルに出すと 18.3kg
- ⑤1日で1本スチール缶をリサイクルに出すと 3.7kg
- ⑥1日で1枚食品トレーをリサイクルに出すと 0.7kg

※CO<sub>2</sub>削減量は炭素(C)換算量  
 作戦1~4のデータ出所:東京都「エネルギー・ダイアログ」、  
 環境庁「環境家計簿」

【消費生活と環境問題との関わり】

私たちの生活は、大変便利で豊かなものになりました。しかし、その豊かさとは、身の回りに物があふれ、毎日の消費生活の中で大量のゴミを排出し、地球を破壊する様々な環境問題を引き起こしています。  
 人間が快適な生活をすれば、必ず環境破壊が起こります。それをくい止めるには、縄文時代の生活まで戻らなければならないけれど、それは不可能に近いこと。かといって、このままの生活を続けていくと、人間の存在自体を危うくしていきます。  
 一人一人が、自然と環境問題を意識したライフスタイルを身につけることが大切でしょう。消費者としての態度が、環境をよくもし悪くもするという両面を備えているのです。

役所「再度十分な検討をしたところ、建設場所を市内の山中と変更した」

山の住民「それは困る」

知識人「さっきから住民は、自分のところはイヤダイヤだと言っているが、奈良市のごみは岐阜県で中間処理されて、最終的には福井県に捨てられている。この現状をどう思うのか？」

市民「……………」

市民「ところで環境庁、ダイオキシン問題が心配な塩ビ製品の規制を強化して下さい」

環境庁「ただいま担当者が出張中なので……………」

役所「話がそれた。自分たちのごみを自分たちで処理するのは当たり前だろう」

山の住民「でもそこは困る」

議長「環境庁、担当者は帰ってきましたか？」

環境庁「規制を強めます。塩ビ製品は製造禁止！」

塩ビ企業「そんなことをしたら私たちは失業だ。生活の保障はしてくれるのか？」

環境庁「……………」

塩ビ企業「そういう市民も塩ビ製品がなくなったら生活に困るはずだ。それに塩ビは1000度以上で焼却したら無害だ。厚生省そうだろう」

厚生省「調査中です」

別の厚生省「私は基本的に処理場は必要だと考えている。でも、本当はごみはブラックホールにほりこめばいい。近いうちに月にホテルも建つだろうし……………」

市民「酔っぱらってるのか？」

役所「炉の温度を規制してもらって大丈夫。だから建設する」

市民「害だけではなく、悪臭がひどいという噂がある。悪臭は困る」

役所「悪臭はしません」

市民「信用できない」

役所「建ててみないとわからない。その件については厚生省に調査をお願いしている」

厚生省「調査中です」

市民「やはり環境的にも心配だ」

役所「その点は環境庁にお願いしている」

環境庁「厚生省の調査結果を待ってから回答します」

議長「市民としてはどうしますか？」

市民「海に無人の人工島をつくり、そこに捨てよう」

役所「無関係な人が困るし、奈良には海がないし、海を埋め立てるには山を削らなくてはいけない。それに漁業との関係も……………」

市民「でも、うちの近くはイヤ……………」

<最後に一言ずつ>

企業「規制強化は困る。我々は製造業者なので、処理場建設には無関係だ」

厚生省「調査は継続していく。今のところ特に健康被害などの問題が起きていないので、様子を見る」

環境庁「規制値さえ守ってくれば、どこに建てても構わない」

役所「処理場は建設します」

市民「いずれにせよ、しっかりした調査と情報公開を」



(5) 取り組みをふりかえって

- ・ロールプレイング本番までには簡単な解説はしたものの、各役所の役割についての説明不足による混乱があった。
- ・「議論は面白く楽しかった」「円満解決は難しい問題」と感じた生徒が多かった。
- ・このような場面設定をした意図は切実感を持たせることだったがいささか現実性に欠けた。
- ・議論の推移は大体現実社会に近かったとも考えられるが、感想中に「みんな自分勝手」などの記載もあり、ここをスタート地点としてどう発展させるかが課題。

## V 外部講師の講演について

98年度は、2回の講演会を実施した。以下にその概要と生徒の反応を報告する。

### 1 9月14日 「だれでもできるNGO」 講師 有地謙羽氏

(1) 講演要旨

有地さんは、京都生協中の京田辺組合の中の環境グループで活動している方である。講演は、社会科教諭の武田が質問をして、それに答えていただく形で進められた。

有地さんがこうした活動にかかわりはじめた動機についての話や、その後、環境家計簿モニターに参加されたことが話された。

COP3での取り組みについて、以下のような内容が紹介された。

- ・環境フォーラムでのブースでは、野の花の写真を展示、イタドリやどんぐりの笛の紹介
- ・南の島のNGOをよぶ募金集め
- ・NGOの世話やニュースレターの発行
- ・平安神宮前に2万人の人が集まり、京都市内をパレードしたこと
- ・フリマ御池への参加

外国のNGOの印象、資金面などで外国との違いなどについても話があり、「私なりのNGOのやり方について」助言があった。その後、いくつかの質疑応答が行われて講演が終わった。

身近な立場からのお話で、生徒たちは熱心に耳を傾けていた。

(2) アンケート結果

(ア) 講演はわかりやすかったですか？

すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん	回答なし	
17	52	23	7	0	1	(%)

(イ) 講演内容に興味をもてましたか？

すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん	回答なし	
15	45	31	9	0	0	(%)

(ウ) 一番印象に残っている内容は？

- ・環境貯金箱や環境家計簿など自分の家での環境対策を楽しそうにやっておられること。
- ・南の方の小さな島の人々を呼ぶために、自分の家の畑で作った小豆でおぜんざいを作って売ったり、おつまみなどを売ったりして募金活動をしたお金を南の国へ送ったこと。
- ・日本政府のやわさ。環境問題に対して政府が相当消極的であるということ。
- ・大切なのは興味と好奇心であるということ。
- ・NGOとは身近なことから、環境問題に参加することなんだなあ。

## (エ) 講演の感想

- ・何事にも、好奇心や興味を持って取り組むこと。そして積極的に自分の考えていることや言いたいこと、聞きたいことを訴えることが一番大事だと感じた。NGOなんて、遠い世界の話だと思っていたが、何もそんなに構えなくてもいいんだと思った。一人一人が行動して、考えたことを政府に言っていかなないと、政府は動いてくれないとわかった。
- ・英語でうまくしゃべれないと、外国人と意見の言い合いなんかできないだろうと思っていたけど、熱意があれば何とかなるもんだと思った。12月に行われた京都会議の裏側で、多くの人達が意見を出し合い、環境問題に対する訴えがあったなんて初めて知った。国のエライさんだけで勝手に決めて押しつけていると思っていたが、多くの人々が直接ではないにしてもその会議に参加し、環境問題について真剣に考えているのだとあらためてわかった。
- ・有地さんは話をされている時とても楽しそうだった。そして楽しんで環境問題に取り組んでおられることがわかった。行動を起こすってそんなに難しいことではなく、気軽にできる身の回りのことから始めて、そういうことを身近な人にも呼びかけていけば、いずれは大きな社会の動きとなって、環境問題を解決する大きな力になるのだ。地球市民として地球のことを考えて行動する。これなら私にもできそうに思えました。今日の話は、家族にも話そうと思う。

## 2 1月18日 「南極から見た地球環境問題」 講師 高田将志氏 (奈良女子大学助教授)

### (1) 講演要旨

高田氏は自然地理学がご専門で、96年～97年にかけて2ヶ月間南極調査に行かれた。その際の様子を中心として、「南極から見た地球環境問題」と題して講演していただいた。

講演内容の一つの柱は、「氷河と地球温暖化」であり、もう一つは「南極調査時の様子」であった。

まず、氷河の形成過程と地球温暖化のメカニズム、温暖化の進行がもたらす現象についてOHPを使用しながら説明がなされた。そして、地球温暖化によって世界的には氷河が縮小気味にあるのではないかという“推測”を紹介された。

次に実際に南極調査に行かれた際の体験談、南極の自然環境、研究調査の様子、南極での生活などについてスライドをまじえて紹介された。

実際に南極で現地調査をされた先生のお話と言うことで、生徒たちは、熱心に耳を傾けていた。

### (2) アンケート結果

#### (ア) 講演はわかりやすかったですか？

すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん	回答なし	
28	37	29	5	0	1	(%)

#### (イ) 講演内容に興味をもてましたか？

すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん	回答なし	
25	47	21	7	0	0	(%)

## VI フィールドワーク

### 1 班分けとテーマ決定

班分けは、活動しやすい人数や組成等を考慮して、男女同数で1班8名（1クラス5班）とした。取り組んでみたいテーマを決めてから、そのテーマのもとに集まって班を作るクラスもあれば、く

じで班分けしてから、集まったメンバーでテーマを考えるクラスもあった。

班ごとに、班長・副班長・会計責任者を決め、班長を中心にテーマを決定していったが、その際、フィールドワークに適したテーマか、他の班との重なりはないか等に留意し、多少の調整を行った。フィールドワークを進めていくうちに、テーマが微妙に変わっていった班もあり、最終的には後に報告するテーマとなった。各班には、助言・支援・監督者として担当教師を配置した。

## 2 班別フィールドワーク活動

フィールドワークが始まると、生徒達は様々な場所に赴いて様々な活動を展開する。文献調査のため、学校図書館、県立・市立等の図書館、インターネット検索のためパソコン教室などを利用した。また時には官公庁や企業、各種団体などを訪問したりと、様々な角度からの視点で、より幅広い情報を入手しようと活動するのである。

班別フィールドワークにおいては、毎回事前に活動計画書を担当教師に提出させ、活動が妥当であるか、危険性がないかなどのチェックをした。また、活動の翌日には活動報告書を提出させることで、担当教師が活動内容を把握するとともに、生徒自身の活動のまとめとした。

夏休み期間中も、フィールドワーク活動が有意義に行えるよう、夏休み前に計画書を提出させ、休み明けに活動報告会をした。

## 3 中間発表会

前年度までは、11月中旬～下旬にフィールドワークの中間発表会を行ってきた。ここで出された質疑応答をもとにして、さらに充実したフィールドワークを発展させていくために、中間発表会は意義あるものとなるはずである。しかし、実質的には、中間発表会以降、あまりフィールドワークの時間がとれず、中間発表会で出された意見を充分生かしきれない班も多いように感じられた。そこで、これまでよりもフィールドワークの開始時期を早くした分、中間発表会も少し早めて、中間発表会以降もフィールドワークにかける時間を確保できるように考えた。中間発表会の時期は、当初10月初旬に予定していたが、生徒達の取り組みの様子を見て、ある程度まとまったものができてからということで10月下旬まで延ばすこととなった。

場所や時間の関係から、テーマが比較的似通った2つの分科会に分け、発表時間10分、質疑応答5分とした。調査内容のまとめ、進行状況の確認、今後の活動への課題を見いだす等よい機会であった。

## 4 レポートの作成

半年近くにわたるフィールドワークの成果のまとめとして、班ごとにレポートを作成させた。作成要領は【資料6】参照。提出期限が2学期末ということで、比較的早くからレポート製作に取り組む班もあれば、期限ぎりぎりまで右往左往する班も見られた。

教師は冬休み中にこのレポートに目を通し、3学期になってから生徒にアドバイスを与えた。このレポートをもとに、3学期は最終発表会の準備をした。概ねレポートはよくできていた。

## 5 最終発表会

2月には、フィールドワークの総まとめとしての最終発表会を行った。全班の発表を行うには1回では十分な時間がとれないので、まずクラス発表会を実施し、そこで優秀な班を選び、学年全体で最終発表会を行うことにした。発表時間は10分、質疑応答5分とした。

限られた時間内に、いかにうまく報告するか、また、視聴覚に訴える発表方法の工夫をしていかに効果的な発表にするかなど、プレゼンテーション能力も重要である。

クラス発表会・最終発表会とも、生徒同士で採点し教師の評価と合わせて、最優秀班を選出した。

最優秀班は、3学期の終業式において、中高全生徒の前で環境学の取り組みの代表として再発表を行った。これには「先輩生徒による後輩への教育力を期待する」という目的がある。

## 6 各班の内容

### ■A組1班「遺伝子組み換え食品」 (永曾担当)

最近クローズアップされてきた遺伝子組み換え食品をテーマに、遺伝子組み換えとはどういうことか、なぜこのような食品が出回ってきたのか、その食品の特徴、長所・短所等を取り上げて調べた。さらに、日本政府とアメリカ・カナダ政府との関係、実際の食料品売場での対応、消費者としての態度等についても調べて考察している。まだ新しい食品であり、人間や環境への問題についてはわかっていないことも多く、国々で対応の仕方にも違いがあるため、今後どのように扱われることになるのか注目したいテーマである。

「日本政府（厚生省）への提言」政府は消費者の権利を守り、遺伝子組み換え食品の表示を義務づけること。正確な情報を公表すること。

「消費者への提言」遺伝子組み換え食品に関心を持ち、新しい情報を集め、自分たちの権利を守るために表示を義務づけることや、環境への影響に対して政府に働きかけること。

〈訪問先・取材先〉

市民生活協同組合ならコープ組合活動室室長管正光氏（奈良市恋の窪）／スーパー中村屋（紀寺町）／京都たんぱく（京都市伏見区横大路）／スーパーいそかわ（小西通り・餅飯殿・鴻池）／ジャスコ／コープかつらぎ店／Aコープ青山店／コープ西の京店

### ■A組2班「古紙の正体」 (大内担当)

私たちの生活に身近な資源である「紙」。最近はそのリサイクルが叫ばれているが、その仕組みや問題点について調べている。古紙の再生過程を学ぶために実際に再生工場の見学に行ったり、古紙がうまくサイクルしていくためには何が必要なのかという観点から古紙の価格に関する考察、容器包装リサイクル法の内容など、様々な観点から調査を重ねている。その上で、以下の提言を述べている。

「内閣総理大臣・環境庁長官への提言」

- ・古紙業界全体への助成金の拡大
- ・再生紙製品の価格の補助 具体的な手段として、1) メーカーへの助成金拡大と再生紙製品の価格の上限の制限 2) メーカーへ卸売店を経由しない産直運動の勧告 3) 再生紙製品企業の設立を補助し、自由競争化を促進

「国民への呼びかけ」

- ・古紙回収、紙の節約の促進
- ・容器包装リサイクル法の知識の普及
- ・古紙再生製品の需要拡大

「各都道府県知事・市町村長への提言」

- ・公共施設における再生紙製品の利用促進
- ・自治体による回収と回収業者への補助

〈訪問先・取材先〉

古紙再生促進センター／春日共同作業所／奈良紙業／ダイエーグループ広報CS企画／奈良県森林組合連合会／大阪製紙

## いよいよフィールドワークの始まりだ

### 1, フィールド・ワークの進め方

(1) 班の分け方……1クラス5班、1班7～9名、男女半々。

(2) 班が決まったら

① 班長、副班長、会計係を決める

② 班内で相談し、研究テーマを第2希望まで決める。

ミニFWをもとにした内容、または私たちを取り巻くさまざまな環境問題の中から、関心のある研究テーマを選ぶ。

多くの班で同じテーマが重なった場合には、調整をする場合がある。

③ 具体的な調査対象を挙げながら、調査の方法を考えていく。

どこで、どんな人にどんなことを尋ねたらよいのか、どんな文献を読めばよいのか、など。

④ 大体の調査日程を決める。

⑤ 以上のことを「研究テーマ票」に記入して先生に提出。

※3～4班ごとに担当の先生がつく予定

(3) 調査活動の目安

① 1学期…テーマの決定、フィールド・ワークの開始

② 夏休み…各自テーマに沿った本を一冊読み、800字以下の感想文を9/7に提出  
各班でフィールド・ワークをすすめる。夏休み明けに報告会あり。

③ 学園祭まで…講演

④ 学園祭後…フィールドワーク

⑤ 10月…研究・調査のまとめの開始、フィールドワーク中間発表会

⑥ 12月…レポート提出。12/21午前中。各担当の先生に提出。

⑦ 2月…クラス発表会・総合報告会

(4) 調査活動をしていくときの注意

① 調査、取材をする前にはあらかじめ文献などで予備知識を得て、取材することを整理しておく。

② 人と会う場合は、電話などで予約をとり、用件・日時・人数・場所などを知らせる。約束した時刻の5分前に到着する。こちらの都合で絶対にキャンセルしてはならない。相手は、あなた達の調査・研究のために時間を割いて下さって

いるということを忘れてはならない。

③ 調査に出かける時は「活動計画書」に必要な事項を記入し、担当の先生に提出。  
調査の翌日には「活動報告書」を担当の先生に提出。

④ 学校の「依頼状」が必要なときは担当の先生にもらう。

⑤ 調査には2人以上で行く。途中で事故が起こったときは、すぐに警察に駆け込むか、学校に連絡する。学校の電話……0742-26-2571

⑥ 取材中の写真撮影や録画・録音をする場合は、相手の了解を得る。

⑦ 取材中の言葉づかいや礼儀には十二分に気を付ける。

### 2, 発表会とレポート

(1) 発表会

① 中間発表会…10/12 (各班10分発表、5分質疑の予定)

それまでの調査をまとめ、経過、問題点などを報告する。

② クラス発表会…2/1 (各班10分発表、5分質疑の予定)

レポート冊子をもとに発表する。

※発表の形式は自由。発表内容が濃いものであると同時に、図、劇、ビデオ、紙芝居、スライドなどで工夫し、みんなが聞いてくれる発表をめざそう。

※クラスで優秀班を選び、総合報告会にて発表する。

③ 総合報告会…2/22

(2) レポート (詳細は2学期に連絡する)

① B5横書き400字詰め原稿用紙50枚程度 (写真・図表を含む)。

② 表紙 (タイトル、班No入り)、目次、協力者表、参考文献、あとがき、感想を付ける。協力者には、後で学校から連絡が取れるように、郵便番号・住所・電話番号・企業名・担当者の部署・担当者名を忘れないように記入しておく。

③ 研究したテーマについて、班で考察したことを、国連事務総長、各国政府、日本首相 (政府)、奈良県知事、奈良市長などへの提言のかたちで入れること。

### 3, FW・発表会・レポート作成で使う物について

(1) 先生にもらえる (貸し出しされる) もの

模造紙、マジック、フィルム (24枚撮り)、現像代、レポートに貼る写真の焼き増し代、通信費 (切手等)、ビデオテープ (VHS、8ミリ)、OHPシート等  
※自分たちで買う前に、まず先生のところにあるかどうかを聞くこと。

また、領収書がないと払い戻しはありません。レシートではダメ。

(2) 班全員で負担するもの…交通費、食品、個人の所有物になりそうなもの等。

### ■A組3班「飲み水」 (武田担当)

人間の生存に欠かせない飲み水について、詳しく調べてみようということで調査が開始されている。

まず、奈良市の浄水場を訪問し、「奈良市の水道水の水源地」「浄水場の仕組み」「トリハロメタンの問題」などについて情報を得た。次に水道水の水質基準や水道水に含まれる薬物とその人体に対する影響などについての科学的調査に入った。続いて家庭用の浄水器に着目し、その種類、仕組み、機能調査をした。また、近年普及の増大しているミネラルウォーターを取り上げ、その種類、販売数の変化、利用に関するアンケート調査を通じて、多くの人が多かれ少なかれ水道水に対する不安感があることを確認している。

「奈良市民とマスコミに対する提言」 水道水の元である川をきれいに保とう。マスコミはトリハロメタンについての報道をさらに進めるべきである。

〈訪問先・取材先〉

奈良市緑ガ丘浄水場(奈良市立石) / ヘルシーショップ若草屋(奈良市大宮町)

### ■A組4班「医療廃棄物」 (大内担当)

「医療廃棄物」・・・医療行為に伴って排出される医療機関からの廃棄物。このような問題に興味を持ち、感染症の危険や不法投棄の問題など、鋭い視点から意欲的に切り込んだ調査であった。

まず、「医療廃棄物とは」ということについて整理が行われ、その上で実際の医療廃棄物の扱われ方、過去の事例から医療廃棄物による健康被害の実態などを検討していくことになる。その後、実際に各医療機関を訪ねるなどして、医療廃棄物の取り扱いの実態を調査し、その際に大病院と個人開業医院の抱えている問題の違いなどを明らかにしていった。そのような調査をふまえて、以下のような提言を述べている。

「国に対して」

- ・不法投棄を取り締まるべきだ。
- ・医療廃棄物処理業者の地位を向上し、業者が機関に指導できるようにするべきだ。

「厚生省に対して」

- ・各医療機関に医療廃棄物処理のマニュアルを提示し、それに従って指導していくべきだ。

「各医療機関に対して」

- ・医療廃棄物の処理の仕方やリサイクルの現状などの情報交換、一般人への公開などを目的に「医療廃棄物フォーラム」のようなものを開催すること。

〈訪問先・取材先〉

奈良女子大附属高校保健室 / 藤岡病院(北葛城郡河合町) / 国立奈良病院 / 奈良メディスポ(生駒郡三郷町) / 有山歯科(生駒市北大和) / 大阪大学医学部附属病院臨床検査部

### ■A組5班「原子力発電所」 (武田担当)

種々の賛否両論がある原発について、「原発は今本当に必要なのか」を見極めるために調査が開始されている。まず、原発に関する現状、原発の歴史、その仕組みが調査された。そのうえで、原発推進側と反対派側の意見を紹介している。さらに世界の原発事故についての調査報告がなされ、最後に結論として提言が行われている。

「提言」 まず賛成反対を言う前に、もっと多くの情報を国民は知るべきだ。国民の意識が低すぎるのがまず問題である。また、国民はマスコミや企業が発する情報を敵しい目で監視し「情報隠し」をさせないようにせねばならない。

〈訪問先・取材先〉

(株)日本原子力発電発電本部（東京千代田区）／(財)原子力発電技術機構広報企画室（東京港区）／原子力発電所（敦賀市）

■B組1班「ダイオキシン」（武田担当）

ダイオキシンは最近特に話題になってきており、我々の生活に直接関係するものなので、もっと知らなければならないというのがテーマ設定の理由である。

調査内容は、ダイオキシンに関わる事件（セヴェソ事件、ミズーリ州の汚染事件、ベトナム戦争での枯葉剤使用）、化学的側面やその毒性、排出基準や摂取量に関する人体への影響（その評価をめぐる問題）、「主な排出先」とされている焼却施設やシステムに関する調査などである。

「我々個人に対する提言」 ゴミの排出量を減らし、リサイクル率を高める／近海物や養殖物の魚は食べない／もっとゴミ収集、処理方法に関心を持つ

「産業界に対する提言」リサイクル製品製造の促進／製品に塩ビを使わない

「行政機関に対する提言」環境教育の充実と普及を促進する／リサイクル社会、経済システムの実現を促進する／ダイオキシンの研究を推進する／塩ビ製品製造を規制する

〈訪問先・取材先〉

大阪府環境農林水産部ダイオキシン対策チーム／奈良県生活環境部廃棄物対策室一般廃棄物係

■B組2班「合成洗剤・シャンプー」（永曾担当）

毎日使っている身近なものとして合成洗剤やシャンプーがあるが、これらは河川などの汚染の原因になっていると聞くがその実態を調べてみる。また、植物原料の洗剤が増えて、自然に優しいとか手に優しいというCMがあるがそれらは本当なのか。このような理由からテーマを決めた。

洗剤の歴史や洗剤による汚染を調べていくと、合成洗剤よりも石鹼の方が環境にも人体にも優しいことはわかるが、実際には消費者のほとんどが合成洗剤を使っているため、石鹼をおいていないスーパーが多かった。また、直接肌につけるシャンプーも合成シャンプーがほとんどで、決して手肌に優しい物質ではなかった。そこで、今後消費者としてどのようにしていく必要があるのか考えている。

「環境庁長官への提言」

- ・石鹼の生産にもっと力を入れ、合成洗剤よりも石鹼をできるだけ普及させる。
- ・石鹼と合成洗剤の違いを明確にし、公表して住民が石鹼と合成洗剤を選べる市場を作る。
- ・合成洗剤の標準使用量をもっと正確にし、最低限度の使用に抑えることを住民に呼びかける。
- ・厚生省などと石鹼に関する講演会を開いていく。安全な石鹼製品を研究開発し、生産販売する。

最後に、私達消費者は、合成洗剤による被害の対象として、加害者を企業にばかり考えがちだが、環境をよくするためには、私達消費者の努力と企業による環境に優しい商品の販売と行政による環境対策の全てがかみ合うことが必要だと思う。

〈訪問先・取材先〉

奈良県生活科学センター（奈良市登大路町）／ネイチャー生活倶楽部（熊本県菊池市）／学校周辺の住民へのアンケート／スーパー数店舗

■B組3班「コンビニと地域問題」（大内担当）

便利で身近なコンビニエンスストア。しかし、便利さを求めるのとは反対に、コンビニが地域環境に与える影響について調査・検討している。調査は主に、コンビニの利用者層を明らかにし、24時間営業ははたして経営的に効果があるのか？消費者はコンビニに何を求めているのかなどを考察している。その上で、コンビニの1日の電気の消費量や弁当等など食品の残飯の量、また、深夜営業に関し

てコンビニが少年少女のたまり場になっていて、生活指導上の問題が起きていることなどに言及している。

「コンビニエンスストアへの提言」

- ・24時間営業の再考
- ・リサイクルのためのゴミ箱の充実
- ・販売量に見合った仕入れ量の検討

コンビニも環境問題には関心が高く、いろいろと工夫しようという姿勢が多く見られた。ただし、便利さを求めるとどうしても無駄が生じるため、われわれ消費者も便利さだけを求めるのではなく、環境のことをよく考えて行動しなくてはならない。

〈訪問先・取材先〉

ファミリーマート（奈良県内数店舗）／ローソン（奈良県内数店舗）など

#### ■B組4班「包装について」（大内担当）

お中元やお歳暮、プレゼントなどの際に行われるきれいな包装。この包装が資源の無駄か否か？という問題意識から調査にあたっている。調査を進めて行くにあたり、各企業も簡易包装には肯定的な意見が多く、理解を示す場面が多かったのだが、実際に肝心な場面になると消費者もきれいな包装をのぞんでしまうというジレンマも見られ、苦勞したようだ。結局、企業も簡易包装などの努力によって資源の無駄づかいを減らしたいという姿勢は見られるのだが、消費者の意識の問題と、そこに再生紙を利用するということになる、そのコストの問題が立ちはだかった。そこで、班では問題を解決する一つの方向として、非木材紙「ケナフ」について調べ、ケナフを普及させることを提言している。

〈訪問先・取材先〉

近鉄百貨店／奈良ファミリー／ザ・パック株式会社／CO-OP西の京店／オークワあやめ池店／ローソン／ファミリーマート

#### ■B組5班「家庭と水」（中道担当）

私達の生存にとっても欠かすことのできない重要な水だが、あまりにも勝手に使いすぎている。大切な水を、家庭の中から見ていこうという視点でフィールドワークに取り組んでいる。

家庭をめぐる水のサイクル、奈良の汚水～大和川～、水道局、浄水場、浄化センター、水の汚れ、奈良県の水質基準、水と家庭、節水のすすめ、本当の節約 という内容で、自分たちが使う水がどこから来て、どこへ行くのかを追った。また、家庭での水の使用量を調査し、節水のあり方を検討した。

「政府に対する提言」

- ・「水法を作ろう」今の日本のしくみの中では、水質・浄水場・下水処理場のそれぞれの管理部署が違っている。たとえ一つの機関が水をきれいに、大切に使おうと努力しても他の機関とのかみ合わせがうまくいかないとその考えもうまくはいかない。そこで「水」という一つのテーマに沿って働く「水法」をつくり、縦割りとなっている今の問題を解決できたらと考えた。
- ・企業の節水道具の開発を推進し、地方や家庭への働きかけを行おう。

「地方に対する提言」

- ・「ダム建設の前に節水を」許可されないようなダム建設を申請する前に、地元民にもっと節水を呼びかけることが大切である。

「家庭に対する提言」

- ・「節水・汚れ対策に対する理解と節水道具の取り入れ」何故節水が必要なのか、何故汚れ対策が必要なのかを考え直して欲しい。



### 〈訪問先・取材先〉

奈良市水道局企画課／奈良県生活環境部環境保全課水質係／緑ヶ丘浄水場

#### ■C組1班「リサイクルー主にペットボトルー」 (武田担当)

ペットボトルのリサイクルは最近話題になってるので、それを調査しようと考えた。

序論では、ペットボトルの歴史、成分と用途、再資源化状況が述べられている。そして本論ではリサイクルの過程について触れた上で、回収時・工場・製品化などの側面における問題点を指摘している。また、リサイクル意識の問題を取り上げ、リサイクル法、リターナブルシステムについての調査を行っている。

#### 「環境庁長官への提言」

ペットボトル回収推進のための法律や宣伝を促進する／リサイクル業者を補助する。

#### 「奈良市長への提言」

回収率向上のために宣伝やゴミ箱を設置を進めるなどリサイクルを促進してほしい。

#### 「企業への提言」

回収の容易なペットボトルを作してほしい／飲料メーカーがもっと回収やリサイクルに関与すべき。

### 〈訪問先・取材先〉

大和郡山市経済環境部清掃センター／奈良市環境清美センター資源対策課／(株)根来産業広報案内課／生駒市役所環境課

#### ■C組2班「遺伝子組み換え調査報告」 (中道担当)

バイオテクノロジーとは何かから始まり、将来どういう利用法がなされるだろうかということまで調べ、この技術が何のために存在し、この先私達に何をもちたらすのかを考えるきっかけにしようとした。具体的には、バイオテクノロジーとは？、遺伝子組み換え食品の安全性について、遺伝子組み換え作物・商品の現状。遺伝子組み換え食品の取り扱い、遺伝子組み換え食品及びバイオテクノロジーに関する消費者の意識調査について取り組んだ。

「マスコミ・研究者・政府への提言」 正しい情報をかたよりなく消費者に提供すること

「政府に提言」 研究のために国がもっと積極的に（資金投入など）取り組むこと

「消費者への提言」 「絶対いや」という先入観を一度捨て、科学的知識→将来性など幅広い立場で、もう一度よく考えてみることを。

「研究者に提言」 地球環境をよくするための植物を開発すること（環境浄化のできる作物、砂漠・荒れた土地でも育つ植物の育成など）。バイオテクノロジー・遺伝子組み換えは安全かどうかを説明すること。

### 〈訪問先・資料請求先〉

奈良先端科学技術大学院大学／大阪ハイテクノロジー専門学校／バイオカレッジ京都／農林水産省農業生物資源研究所／JA園部アグリバイオセンター／国立環境研究所／滋賀県農業試験場／植物工学研究所／庄内バイオ研修センター／バイオセンター株式会社／サントリー株式会社研究センター／生協ならコープ

#### ■C組3班「花粉症から見る環境」 (中道担当)

今までにないような新しい観点から環境問題を考えたいと、「花粉症から見つめる環境」に取り組んだ。花粉症は、スギ林の増加やアスファルトの増加などとの関連が言われていることもこのテーマを選んだ背景にあった。

具体的には、花粉症とは何か、スギ植林面積の増加、スギ利用の減少、道路舗装と大気汚染、宅地

開発との関連、食習慣の変化、母乳保育の減少、花粉症と遺伝、ハウスダストによる鼻炎という、いろいろな角度から、花粉症を考えている。

しかし、花粉症の原因を特定することは難しいことであり、この班の最後の提言は曖昧なままで終わっている。レポートの最後は以下のような言葉で結ばれている。

「1年間の環境学を通じて、花粉症の原因について知ると同時に、そんなに自然を破壊すべきなのか、またそうする必要のあるのかを考えさせられた。これらは、〈便利さ〉を求めすぎた人間に〈欲望〉が生まれてきたのに対してのしっぺ返しだと思う。環境問題に関しては、様々な問題があるけれど、今のことも含めて少しずつ見直してみるべきだと思う。」

〈訪問先〉

奈良女子大学生生活環境学部 久保先生／菅原医院／七条養護学校 久保田先生

#### ■C組4班「食品添加物」 (永曾担当)

食べ物という一番身近なものに含まれている食品添加物であるが、調査するには奥が深く幅が広すぎるため、日本と外国との扱われ方の違いを中心に進めていった。外国の製品を調べるには、保存がきき扱いやすいということで世界各国のお菓子をもとに調査した。

食品添加物の歴史や種類、表示についての事前学習をして、夏休みに世界各国のお菓子を集めた。外観や表示、風味等を比較し、主に着色料の実験を行った。その後、輸入食品と検疫についても調べている。

「政府（特に首相と厚生省）に対する提言」

- ・食品添加物の安全性についてもっと詳しく調査して下さい。そしてその危険性を認識し、外見をよくするために使用するなど、必要以上の添加物の使用を規制して下さい。
- ・食品メーカー等企業の利益を優先せずに、添加物の表示について、消費者にもっと多くの情報を与えるようにして下さい。

「企業への提言」

- ・食品成分表示には、実際に添加物が使われているのに、入っていないと記しているものがたくさんあると聞きます。そんなことはやめて正しい情報を消費者に公開して下さい。私達には“知る権利”があります。また、過剰な添加物の使用は控えて下さい。
- ・企業は社会の一員としての自覚を持って、利益ばかりを追求せずに消費者の健康を考え、良心を持って商品を作って下さい。そうしないと、いずれ消費者がその商品も企業も見放してしまうでしょう。

「家庭に対して」

- ・食品添加物と上手に付き合おうと思うのなら、まず第一に正しい知識を身につけて下さい。そうすれば色や見た目に惑わされないでしょう。また、添加物がたくさん入った食品を買わないようにして下さい。そうすると自然に添加物が過剰に入った商品はなくなります。自分の身体を守るためです。簡単なことなので、是非実行して下さい。

〈訪問先・資料請求先〉

奈良県奈良保健所／生活協同組合コープ大分 佐々木猛士氏／日本食品添加物協会

#### ■C組5班「携帯電話」 (中道担当)

街中や電車などでよく見られる携帯電話は、便利だからというだけで、何も問題はないのかという事に興味を持って調査した。

携帯電話には3つの解決すべき問題点があると考え、以下の点について調査した。

- ①生活に与える影響について 「携帯電話を使用するにあたってのマナー」「なぜこんなに普及した

のか」「携帯電話を使うことによるライフスタイルの変化はあるのか」

②人体や電子機器に影響があると考えられている電磁波について 「電磁波とは？」「本当に電磁波は危険か」「携帯電話からの電磁波」

③自然に与える影響について 「携帯電話は何故捨てられるのか」「どのように捨てられるのか」「リサイクルの流れは？」

「今現在携帯電話を持っている、また、これから将来持つかもしれない人達への提言」

- ・マナーについて 携帯電話を使っている自分を見ているもう一人の自分を常に持っていて下さい。
- ・電磁波について まず関心を持つことから始めて下さい。使用制限されているところでは電源を切ってください。
- ・廃棄について 買い替えの時は必ず古い方の携帯電話を販売店に持って行ってください。リサイクルルートはできています。

「電磁波の研究所へ提言」

人体に対してどうなのか、一般人の納得できるようにもっと研究を進めてください。

「公共交通機関を運営している会社へ提言」

電車・バス内ではマナーの面から、電波が届かないようにする機器を設置してはどうか。

「国・携帯電話製造・販売会社へ提言」

病院・飛行機・新幹線などの使用制限されているところでは電波が届かないようにする機器を設置してはどうか。

「携帯電話製造・販売会社へ提言」

古い携帯電話を店に持ってきた人には新しく買うものを少し値下げなどのことをする。

〈訪問先・資料請求先〉

ドコモショップ JR奈良駅前店／横浜金属株式会社／NTT関西移動通信網株式会社CS推進部お客様相談室／国立奈良病院庶務部

## VII 一年間の活動を終えて

### 1 年度末アンケートの結果

一年間の活動を終えて、年度末に次のようなアンケートを実施した。結果は次の通りである。なお、数字の4段階は、4「そう思う」・3「どちらかというと思う」・2「どちらかというと思わない」・1「そう思わない」を示している。

◆次の取り組みについて答えて下さい

(1) 前期講義「サイクル」

	4	3	2	1
①理解できた。	16%	45%	35%	4%
②興味が持てた。	6%	43%	37%	14%
③意見や感想を書きなさい。				

- ・身近なこともあったから興味が持てた。気をつけることはたくさんあると思った。
- ・理科で講義、社会で事件、保健で健康、家庭で生活と4つの分野に分けての講義だったので、話ごとちゃにならず、スムーズに理解できてよかった。

(2) 後期講義「ダイオキシン」

	4	3	2	1
①理解できた。	10%	41%	46%	3%
②興味をもてた。	23%	42%	29%	6%

③意見や感想を書きなさい。

- ・大教室で先生方が続け様に講義をする。目指すは「万物創世記」といことで、スピード感のある講義だった。とても身近にダイオキシンというものを感じた。
- ・怖い物質だが、避けては通れないことだと思った。しかし上手に減らす方法もあることが分かった。
- ・「ダイオキシン」という言葉を最近よく耳にするけれど、実際にどんなものでどう影響するのかということを知れる機会になってよかった。

(3) 2回の講演会

	4	3	2	1
①理解できた。	16%	59%	23%	2%
②興味をもてた。	34%	45%	18%	4%

③意見や感想を書きなさい。

- ・環境問題について積極的に取り組む姿勢がすごいと思った。意識を高めて実際に行動することが、難しいけれど大切だと思う。
- ・南極の話は良かった。あんな仕事もいなと思った。
- ・僕らの体験できない話を聞くのはおもしろい。色んな人の話が聞けておもしろかった。もっとたくさんの方の話が聞きたかった。

(4) ミニフィールドワーク

	4	3	2	1
①積極的に取り組めた。	26%	44%	23%	7%
②うまくやれた。	17%	43%	34%	6%
③時間は十分あった。	9%	30%	40%	21%

④意見や感想を書きなさい。

- ・自分たちの身の回りのことを自分たちで考えて調べるのでとても楽しかったし、学校生活を考え直すことができてよかった。
- ・もう少し時間が欲しかった。けれど、学校というところを特定したおかげで、フィールドワークは進めやすかった。

(5) フィールドワーク

	4	3	2	1
①班で選んだテーマは・・・				
②テーマ選択はうまくいった。	28%	35%	25%	12%
③積極的に取り組めた。	25%	44%	24%	7%
④うまくやれた。	19%	43%	31%	7%
⑤チームワークは良かった。	22%	32%	36%	9%
⑥時間は十分あった。	16%	44%	32%	9%

⑦意見や感想を書きなさい。

- ・とにかく時間外活動が多くて、班員に迷惑をかけた。外部との交渉やお礼状の書き方など、大変社

会勉強になった。外に開いた活動ができたと思う。

- ・ やっと方向性が分かってきて、活動が楽しくなってきたなというところで終わってしまったのが残念。
- ・ やる気のある人ない人の差がありすぎて、やる気のある人ばかりが大変で、疲れていたような気がする。しかし、調査することで、私自身の体験や知識も増え、とても満足している。

(6) 発表会について

	4	3	2	1
①積極的に取り組めた。	28%	44%	24%	4%
②発表方法はうまくいった。	17%	41%	35%	8%
③発表準備の時間は十分あった。	6%	36%	38%	20%
④意見や感想を書きなさい。				

- ・ 1年間調べたことを発表するには時間が足りない。もっともっと伝えたいことがあったけど、少ししか言えなくて悔しかった。
- ・ 全体的にレベルが高く、とても良かった。
- ・ 自分の考えを、はっきりみんなに伝えるのが難しい。違うように受け止められるといけないので、発表を分かりやすくするのは難しかったが、班としての考えはちゃんと伝えられたと思う。
- ・ まあまあのできだったと思う。でも発表とかは大変な作業だった。発表の準備の時間がなかった。
- ・ 色んな班の発表を見て、発表方法や内容に驚いたりした。発表方法をもっと工夫するべきだった。

◆環境学全体について答えて下さい。

	4	3	2	1
(1) 積極的に取り組めた。	15%	47%	31%	7%
(2) 興味が持てた。	18%	55%	23%	4%
(3) 環境学を学んだことによって、日常生活スタイルは変わりましたか。				
①家庭生活面で変化があらわれた。	8%	36%	36%	20%
②学校生活面で変化があらわれた。	3%	20%	50%	27%
③読書傾向や学習面で変化があらわれた。	6%	18%	43%	32%
④具体的な生活面での変化があれば書きなさい。(例：シャンプーを変えた)				

- ・ 冷蔵庫の開けっばなしや電気のつけっばなしに対してうるさくなった。節水を心がけている。
- ・ 広告の裏をメモに利用する回数が増えてきた。
- ・ エアコンの温度を少し上げた。ゴミをよく分けるようになった。
- ・ 時々家族に教えてあげるようになった。
- ・ 環境学をやる前から水の無駄遣いや冷蔵庫の開閉、電気の使い方、暖房のことなどに気をつけるようにしていたから、特に変わることはない。
- ・ 環境に対する見方が変わった。私たちの地域でもゴミの分別回収が最近始まり、母はうっとおしがっていたけど、僕は積極的に取り組もうと思う。
- ・ 環境に関連する記事を読むようになった。ダイオキシンのニュースは、つい聞いてしまう。

(4) 1年の活動を通じて、次のどれが良かったですか。○を2つして下さい。

ア、ミニフィールドワーク	21人	エ、講演1「誰でもできるNGO」	33人
イ、「サイクル」の講義	4人	オ、講演2「南極から見た地球環境破壊」	58人

(5) 後輩に「環境学はこんな教科だよ。」と説明するなら、どんな説明をしますか。また、どんなアドバイスをしますか。

- ・日常生活に役立つことの多い科目。調べることも多いし、レポートに書いたときにちょっと感動できる。ただ、テーマを軽く決めてしまうと、一年間ずっとそれについて考え続けないと駄目なので、テーマはきちんと決めるべきだと思う。あと、本で調べるよりは現地に行ってみたり、電話したりするほうがいいと思う。
- ・自分次第だと思う。自ら取り組みれば、充実した一年になるし、それから逃げれば無駄な一年になる。ためになるのは絶対です。全てはあなた次第。
- ・自分たちで興味のある環境問題について調べて、発表する。班で協力しないと良い発表はできないし、やる意味がないのでみんなで協力して。テーマ選びは大切！
- ・一番自分たちの生活に身近ですぐに活用できる教科。たくさん色々な日常生活のことについて知れるので改善しようと思う気持ちがあればすぐに実行できる。眠くても講義は聞いたほうが◎。
- ・一年を通して環境に関するテーマを一つ選び、調べ、発表する科目。  
テーマ選びが大切。テーマが大きすぎると調べにくい。  
発表方法を工夫すると、みんなに分かってもらいやすい。  
自分たちの生活を見直せる。(この教科はこれから必要だと思う)  
積極的に取り組むこと。  
考え、意見をお互いに交換しあうこと。(討論が必要)
- ・人間が評価される教科だね。テーマは本当に興味もてるのが良し。一年間続けるものだし。難しいけれど、地球環境が今危ないのがよく分かる。
- ・調べるテーマに関する仕事をしている人に話を聞きに行くと、分かりやすく説明してもらえて、発表にも使いやすい。インターネットや本などから探ただけでは、発表にいいものが使えない。
- ・人から話を聞くだけでなく、自分が興味を持ったことを自発的に研究できる教科。だからテーマ設定がとても大切になってくる。私の場合は自分の一番興味を持っていたことを研究できて、すごく楽しかった。けれど、班の中でも興味を持っている人と、持っていない人で取り組み方がだいぶ違ってくるのがしんどい点。ほんとに自分の興味を持っていることをテーマにできたら、一年もそれについて調べられるなんて、こんないい機会はない。そんなテーマを見付けられたら、自分の将来も左右する、素晴らしい一年になるはずだ。
- ・積極的に取り組みれば、この上ない経験をつかむことができるが、何でこんなことせんなあかんねんと思ってしまうと、一年間無駄な時間を過ごすことになり、素晴らしい体験をする機会を捨てることになる。これほどもったいないことはない。
- ・環境学とは地図と方位磁石だけを与えられ、そこから先は自分の考えをもって進み、色々なことを発見し、最後に自分なりの答えを出すもの。それは苦悩の日々であり、容易ではない。
- ・環境学は時代に反映した教科だと思います。何十年も前だったら、このような教科は考えられなかったことだと思うし、今ほど必要ではなかったと思います。だから、環境学というのは今ではとても大切だし、理解や興味のためには重要だけれども、本当ならば環境学をしなくてもいいくらいの環境が望ましいと思います。

## 2 成果と課題

### (1) 年間計画と各教科との連携（教師の講義の位置づけ）

98年度の環境学では、より充実したフィールドワークの取り組みをめざした。また、環境学と各教科との連携を深め、より総合化された「環境学」にしたいと考え、各教科からのバックアップを受けて、講義の時間を各教科の時間へと組み込むことを試みた。その結果、環境学担当者と教科担当者とが、環境問題をテーマにタイアップした授業を実施することができたことは有意義であった。例年であれば、環境学の講義は環境学担当者4名だけが取り扱っているものを、98年度は各教科の授業担当者にまで意識を広げることができた点でもよかったと思う。

しかし、問題点もいくつか残ったので、この点について検討し、次年度以降の課題としたい。

先ず、生徒の受け止め方はどうであったのか。環境学の授業で学習した内容の続きを、教科の授業で受けることになったり、関連した内容が、環境学の授業と教科の授業とで交錯していることになったりする。環境学の時間内の講義であれば、講義の時期が集中するが、教科に組み込むことで時期がずれ、生徒は全体像を把握しにくかったのではないだろうか。

一方、教師の側から見れば、講義内容の一部を各教科の時間に組み入れた分、他教科の講義内容を把握しにくくなった。昨年度までは、前もって、環境学として扱う講義内容をまとめた自作のテキストを作成していたが、98年度は、各教科の授業で使用したプリントをその都度お互いに配付することとしたため、環境学用のテキストとしてまとめたものがないことも理由の一つであろう。講義を始める前に、担当者によって十分議論し、「何を、どの時期に、どんな角度から」教えるのかを、教える側がまず認識しておく必要がある。今後も講義の一部を各教科に組み入れていくのであれば、今までも増して、十分な関連教科の連携が必要であると考えられる。

### (2) フィールドワークについて

生徒達の声にもあるように、フィールドワークが成功するかどうかはテーマ選びに左右される。しかし、毎年の取り組みを参考にして、過去のテーマと重ならないよう、また、98年度の各班の中でもテーマが重ならないように調整しながらテーマ決定をしていくことは意外と困難であった。時代の流れの中で、新しく社会問題となっているダイオキシンや遺伝子組み換え食品などのテーマは、過去にない新しいテーマとして取り組んでみるのはよい。しかし、まだ社会全体でも研究段階であり、多くの資料を集めることや、どのような切り口でそのテーマに迫っていくかが難しい。また、過去にも何度かテーマに上がっているものでも、研究方法や問題意識の持ち方に違いがあれば、今までにない研究になるであろう。まずは、自分たちの興味関心のある研究してみたいテーマが班員共通のものでうまく決まればよいが、テーマが大きすぎたり、実際に取り組もうとすると何をどのように調べればよいかわからなかったりすると行き詰まってしまう。最初、生徒達がテーマ決定の段階で予想していたことが、研究していくうちに思わぬ方向に進んでいくこともあった。教師も、あらゆることを予想しながら、よりよいテーマ決定のためのアドバイスをし、フィールドワークが始まれば、常に班の進行状況を把握して生徒達の研究がうまく進められるよう見守っていかねばならない。

フィールドワークの進め方にはいろいろな方法があるが、最近はインターネットの活用によって、瞬時に調べたいことが詳しく検索できるようになってきて大変便利である。しかし、生徒たちはつい文献やインターネット等に頼りすぎる傾向がある。実際に足を運び、外部の人達との様々な交渉を通じて得るものには大変大きいものがあるので、今後も、どんどん外の世界にも目を向けた活動を工夫していってもらいたい。

### (3) 環境学の位置づけ

ミニフィールドワークの結果からも明らかなように、環境学を学んでいる学校にしては、ゴミの量が多く、まだまだ使えるものも平気で捨てられている。分別の仕方も不徹底であり、ゴミが散乱していることもよく見かけられる。また、水や電気等のエネルギーももっと無駄をなくすことはできるはずである。そこで、ミニフィールドワークの取り組みを生かして、生徒会活動と連携し、つけっぱなしの電気を消したり、出しっぱなしの水道を止めたり、散乱しているゴミをきちんと分別するなどの学校環境の改善に貢献した生徒に、ポイントを与えていくシステムを考えてみようとしたが、なかなか自主的な生徒会活動には発展していかなかった。これは、環境学を学ぶのは4年生であるが、生徒会活動の中心となるのが5年生であり、4年生からの提案を5年生が引き受けるといことが難しいせいもあっただろう。しかし、発展しにくい理由はそれだけではない。生徒達の学校生活のなかで、環境学という教科に頼るのではなく、あらゆる活動を通して、環境を考える機会やそれが実践できるシステムを取り入れていくことが必要であろう。

また、99年度からは、環境学は3年生で実施していくことになっている。担当教科も今までのように固定せず、その年度によって担当する教科が変わっていく予定である。そのため、内容的なものの検討も必要であろうが、環境学の授業だけで終わらないよう、学校全体として環境学をどのように位置づけるのかの検討も必要であろう。

### (4) これからの生き方と環境問題

環境学の成果は、今後、環境学を受けた生徒達が、それを発展させて、環境問題とどのように関わっていくかということで評価されるだろう。

生徒達の中には、環境学を学んだことがきっかけで、環境問題について最先端の研究をしていきたいという希望を持ち、環境に関わる大学の学部や学科に進学していく者もいる。

しかし、そういった研究に携わることだけが環境問題と関わっているわけではない。環境問題は、人間が生活するあらゆる場面で切り離すことのできないものである。環境問題との関わりは、地球規模の中ですすんでいく環境問題を視野に入れる必要がありながらも、一方では、自分自身の日常生活そのものを見直す取り組みとの両面性をもっている。環境問題を特別なこととは考えずに、自分のライフスタイルの中で、ごく自然な形で、環境への負荷の少ない生活ができるきっかけを与えるものになってほしいものだと思っている。



## 総合教科〈環境学〉を実施して (1999年度)

1999年度〈環境学〉担当者 大内淳也・中道貞子  
屋鋪増弘

### I. はじめに

1999年度環境学は、理科(2名)・保健体育科の教師と、家庭科教諭に代わって技術科の教師が担当した。技術科の担当者が1999年度末で定年退職のため、1999年度に実施した環境学については3名の担当者により報告したい。

1998年度まで3年生で実施していた総合教科「奈良学」を廃止し、1999年度からは、「環境学」を3年で実施することになった。

- ・私達を取り巻く環境について、どんな問題があるかを知るとともに、自分が何を、どのように行動していけばよいかを考えていける生徒の育成
- ・総合的な学習として、自らが課題を見つけ、自分で主体的に活動を進めることのできる生徒の育成を目標として進めることを確認した上で、年間計画を立てた。

次ページの【資料1】は、99年度の年間予定表である。

4年で実施していたときには、すでに奈良学の学習を終えており、フィールドワークのやり方などについてはいろいろな経験をしてきていた。しかし、99年度からは、これまで奈良学が果たしていた役割を、環境学で担う必要が生じた。また、3年の3学期には、スキー行事という大きな行事があり、生徒たちが大変忙しいことを配慮し、発表会を含めたすべてのフィールドワーク活動を2学期中に終えるように計画した。

また、環境学の時間内に行う講義は、3学期だけとした。講義の時間不足を補うため、また、前年度の総合教科以外の教科の連携授業をふまえ、これをより充実したものにするため、99年度の講義は、できるだけ、環境学の講義の時期とあわせてもらうように、各教科に依頼した。テキストは前年と同様の市販テキストを購入させた。

### II. フィールドワークについて

#### 1. 取り組みの経過

今年度のフィールドワークは、例年通り、1クラス40名を5班に分けた。1つの班の構成は男女が同数になるようにした。教師は、1人3～4班を担当して指導した。

(1) 5月7日 今までのフィールドワーク紹介、班分け、テーマ希望調査 【資料2】

1991年度から98年度までに実施したフィールドワークのテーマを一覧表にして示し、以下のような説明をした。

<今までのフィールドワークの内容についてキーワードを拾ってみる>

\*ごみ 家庭・学校・公園・産業廃棄物・医療廃棄物； ダイオキシン

## 【資料1】

## 環境学 年間予定表 (1999年度)

4月 16日	環境学オリエンテーション
23日	(中学内科検診)
30日	全校レクリエーション
5月 7日	今までのフィールドワーク紹介、フィールドワークの班分け・テーマ希望調査
14日	フィールドワークに向けてのオリエンテーション その1
21日	中間考査
28日	フィールドワークに向けてのオリエンテーション その2
6月 4日	フィールドワーク 班ごとの話し合い テーマ・進め方について
11日	フィールドワーク
18日	フィールドワーク
25日	フィールドワーク
7月 2日	期末考査
9日	フィールドワーク (午前中授業のため、1時間)
9月 3日	フィールドワーク (午前中授業のため、1時間)
10日	フィールドワーク 中間発表会 (各クラスにて)
17日	学園祭準備
10月 1日	フィールドワーク
8日	フィールドワーク
15日	フィールドワーク
22日	中間考査
29日	フィールドワーク発表について プレゼンテーションの方法の話
11月 5日	(行事のため、環境学の授業なし)
12日	フィールドワーク 発表準備
19日	講演「宇宙太陽光発電」京都大学 松本紘氏
26日	フィールドワーク クラス発表会
12月 3日	フィールドワーク 全体発表会
1月 14日	学校のごみ実態調査大作戦 (ごみを調べる)
21日	公開研究会
28日	学校のごみ実態調査大作戦 (壁新聞づくり)
2月 4日	スキー行事
18日	ごみ焼却場や最終処分場の見学
25日	ごみに関する講義
3月 3日	ごみ問題について提言

- \*水 飲み水・水道水・清涼飲料水・下水・川・水質汚濁・酸性雨
- \*大気 大気汚染・騒音・フロンガス
- \*エネルギー 原子力・太陽・火力・自然エネルギー； 電池・車
- \*リサイクル 発泡スチロール・紙・缶・びん・ペットボトル；ごみ
- \*食品・健康 添加物・農薬・外食産業・殺虫剤・たばこ・健康食品・花粉症・遺伝子組み換え食品
- \*開発 奈良駅前・高の原・学園前・シルクロード博・学研都市・道
- \*自然 自然保護・ホテル・シカ・森・都会と田舎
- \*人間生活 自動販売機・意識・閑空・過剰包装・環境と心・コンビニ・トイレ・ゴルフ場・奈良ファミリー

<テーマ設定にあたって>

- ①自分が一番興味のもてる分野は何か 大きなキーワードを考える。
- ②その中に含まれる要素にどんなものがあるか。
- ③どんな角度から攻めていけるのか。

次に、教師の方で行った班分け（名列順に男女が同数になるように分けた）を発表し、班内でテーマについて話し合わせた。他班との重なりが生じた場合や、内容が妥当でなかった場合を考え、テーマについては、第2希望まで書かせた。

(2) 6月14, 28日 フィールドワークに向けてのオリエンテーション

フィールドワークについてのオリエンテーションは、各教師が以下のような内容で、クラス毎に、それぞれ1時間ずつ説明を行った。

①科学的なアプローチの仕方について 【資料3】

- ・科学的な水質判定の方法について
- ・水生昆虫による水質判定法について
- ・大気の調査方法について
- ・物質の性質の調べ方について

②インターネットによる情報収集【資料4】

- ・方法
- ・目的のページが見つかったら
- ・インターネットで情報収集するときの注意

③アンケート調査について 【資料5】

- ・何を調べたいの？
- ・誰に対して調べるのか？
- ・調査票の作り方
- ・調査票のチェック
- ・分析
- ・アンケート調査のエチケット

④訪問して取材する場合の心得；プロットの作り方について 【資料6】

(3) 6月4, 11, 18, 25日、7月9日 班毎の活動

例年のように、毎回、事前には活動計画書を、事後には活動報告書を担当教師に提出させた。

(4) 夏休みの宿題

夏休み中に、各自班のテーマに沿った本を一冊読み、800字以下の感想文を書くことを宿題とした。

(5) 9月3日（1時間） 中間発表会の準備

(6) 9月10日 中間発表会

例年は、10月以降に行っていた中間発表会を9月10日に実施した。中間発表会は、3つのグループに分けて実施した。1班の発表時間 10分、質疑応答 5分とし、各自にコメント用紙を配布して、感想・意見・質問・提案などを書かせた。このコメント用紙は、発表会後に各班に渡して、その後のフィールドワークの参考資料とした。

## いよいよフィールドワークの始まりだ

### 1, フィールド・ワークの進め方

(1) 1班の分け方……1クラス5班、1班7～8名、男女半々。

(2) 班が決まったら

① 班長、副班長、会計係を決める

② 班内で相談し、研究テーマを第2希望まで決める。

私たちを取り巻くさまざまな環境問題の中から、関心のある研究テーマを選ぶ。  
多くの班で同じテーマが重なった場合には、調整をする場合がある。

\*今日は、①・②について決定し、研究テーマ票を提出する。

\*思いつきでテーマを決めると、後々苦勞することになる。次の③・④についても考えながら決めよう。

③ 具体的な調査対象を挙げながら、調査の方法を考えていく。

どこで、どんな人にどんなことを尋ねたらよいのか。どんな文献を読めばよいのか。どんな実験や観測をすればよいのか、など。

④ 調査に要する期間を考慮して、大体の調査日程を決める。

\*3～4班ごとに担当の先生がつく予定

\*③・④については、6月4日に話し合う予定

### (3) 調査活動の目安

① 1学期……テーマの決定、フィールド・ワーク開始（活動は6月になってから）

② 夏休み……各自テーマに沿った本を一冊読み、800字以下の感想文を9/3に提出  
各班でフィールド・ワークをすすめる。夏休み明けに中間発表会。

③ 学園祭後～10月……フィールド・ワーク

④ 11月……研究・調査のまとめ、フィールドワーク発表会の準備

⑤ 11月26日・12月3日……発表会。

⑥ レポート提出……12月21日(火)午前中。各担当の先生に提出。

(4) 調査活動をしていくときの注意 別紙

### 2, 発表会とレポート

#### (1) 発表会

① 中間発表会……9/10（各班10分発表、5分質疑の予定）

それまでの調査をまとめ、経過、問題点などを報告する。

② クラス発表会……11/26（各班10分発表、5分質疑の予定）

\*発表の形式は自由。発表内容が濃いものであると同時に、図、劇、ビデオ、紙芝居、スライド、パソコンのホームページ形式などで工夫し、みんなが聞いてくれる発表をめざそう。

\*クラスで優秀班を選び、総合報告会にて発表する。

③ 総合報告会……12/3

#### (2) レポート（詳細は2学期に連絡する）

① B5横書き400字詰め原稿用紙50枚程度（写真・図表を含む）。

② 表紙（タイトル、班No入り）、目次、協力者表、参考文献、あとがき、各人の感想を付ける。

協力者には、後で学校から連絡が取れるように、郵便番号・住所・電話番号・企業名・担当者の部署・担当者名を忘れないように記入しておく。

③ 研究したテーマについて、班で考察したことを、国連事務総長、各国政府、日本首相（政府）、奈良県知事、奈良市長などへの提言のかたちで入れること。

### 3, FW・発表会・レポート作成で使う物について

#### (1) 先生にもらえる（貸し出しされる）もの

模造紙、マジック、フィルム（24枚撮り）、現像代、レポートに貼る写真の焼き増し代、フロッピーディスク、通信費（切手等）、ビデオテープ（VHS、8ミリ）、OHPシート等

\*自分たちで買う前に、まず先生のところにあるかどうかを聞くこと。

また、領収書がないと払い戻しはありません。レシートではダメ。

(2) 班全員で負担するもの……交通費、食品、個人の所有物になりそうなもの等。

《1》科学的な水質判定

(1) 水温 水の温度が高いほど、溶けうる気体の量は少なくなる。

DO・COD・BODなどが影響される。

(2) 透視度・濁度 水道水などは濁っていないが、汚れた水ではかなり濁っており、この水を透明な筒に入れて上からのぞくと底に置いた小さい文字が見えなくなる。どれくらいの深さまで底の小さい文字が見えるかで透視度を表す。

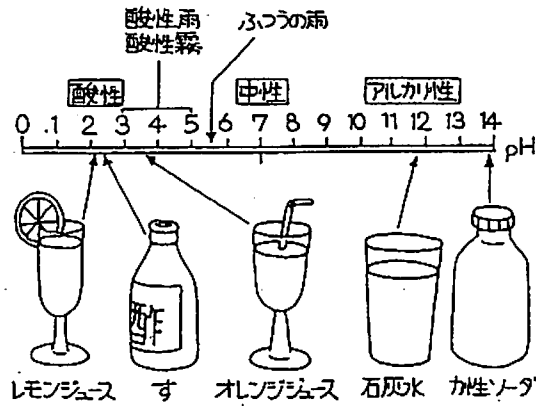
湖水などでは直径30cmの白い円盤を沈めていき、円盤が見えなくなる深さ(m)を透明度といっている。

(3) におい 藻類の発生、工場の排出する化学物質や腐敗などによるにおいがある。

(4) pH値 酸性やアルカリ性の程度を示す値のことで、0~7.0までが酸性、7.0が中性、7.0~14.0の間がアルカリ性。

わが国の水道水の基準では、pH値は5.8~8.6となっている。

pHの値が小さいほど酸性が強い。pHの値が1だけ小さくなると酸性の度合いは10倍になる。100%オレンジジュースはpHが3.5くらい。食酢はpHが2.5くらい、レモンジュースはpHが2.3くらい。私たちの胃液はpHが1.3くらいで強い酸性である。きれいな水でも空気中の二酸化炭素が溶け込んでいるので、pHが5.6くらいである。



(図は「みんなの地球」オーム社 p,34 より引用)

(5) SS値(懸濁物質、浮遊物質: Suspended Solid) 砂のような無機物や小さい有機物は、水に溶けない固体として水中に懸濁したり浮遊したりしている。小さいので魚のえらにくついて呼吸を困難にしたり、水を不透明にして藻類の光合成を妨げたりする。いずれは底に沈んで水底で生活している生き物に害を与える。

《2》水生昆虫による水質判定法

川がどれくらい汚れているかは、先のBODで測れるが、住んでいる生き物を調べることによっても知ることができる(生物モニタリングという)。

例えば、サワガニやトビケラ、ヘビトンボなどの住んでいる川はとてもきれいな川であり、ヒルやミズムシなどがある川は汚い川であるといえる。

(次ページの図参照)

《3》大気を調べる

(1) 温度の測定 (テキストP.67)

(2) 大気中の成分濃度の測定  
ガス検知管を用いる方法

(3) 二酸化窒素の測定(テキストP.78)  
サルツマン試薬を用いる方法

(4) 植物を用いた大気汚染の調査(テキストP.81)

《4》物質の性質を調べる

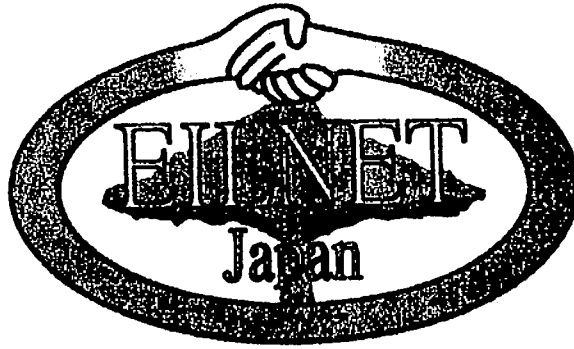
(1) プラスチックの分類 (テキストP.70)

(2) 食品添加物の調査 (テキストP.74)

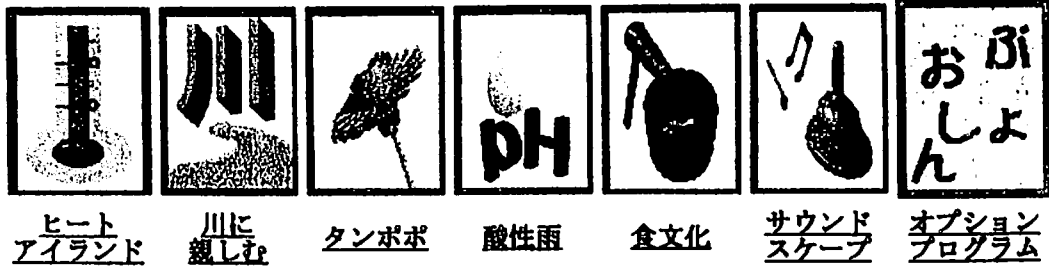
(3) 合成洗剤と石けん (テキストP.76)

# 環境学習ネットワーク

＝ 環境データ観測・活用事業 ＝



*Environmental Investigation and Learning in Japan*



ヒート  
アイランド

川に  
親しむ

タンポポ

酸性雨

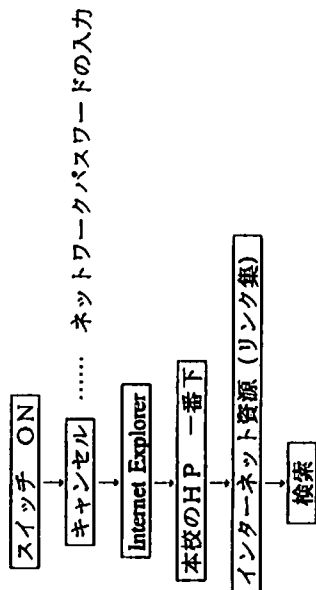
食文化

サウンド  
スケープ

おビ  
しょん  
プログラム

## インターネットネットによる情報収集

### (1) 方法



### 1. YAHOO! JAPAN

- ・ カテゴリーによる検索
- ・ キーワードによる検索

情報の絞り込み

- 【例】 1つのキーワード ..... 千数百ものHP  
 2つのキーワード ..... 40のHP  
 ※キーワードとキーワードの間にスペースを入れる。

### 2. goo

(2) 目的のページが見つかったら

1. HPのアドレスを記録しておく。
2. フロップピーにファイルする。  
(引用するかどうかはつきりしないときはプリントアウトしないこと。)
- (3) インターネットで情報収集するときの注意
  1. どのような情報を得たいのかはつきりさせること。
  2. 目的のHPが見つかったら、その発信元を確認すること。  
誰が、どのような立場で、何のなめに、その情報を発信しているのか、HPの内容についてよく考えること。
  3. HPの情報を単に引用しただけのものか、発信元が独自に得た情報なのか、他の誰かが考えたことを単に引用しただけなのか、発信元が独自に考えたことなのか。
  4. 目的のHPが1つ見つかったとしても、それだけではなく他にいくつも見つけること。  
立場や考え方が異なるHPの情報を比べてみる。
  5. HPはリンクをはっていることが多いので、リンクを次々にたどって、多くの情報を得ること。
  6. HPを読んで、分りにくいところがあったり、疑問点が出てきたりしたら、発信元に電子メールなどで問い合わせること。

## アンケート調査について

これから始まる環境学のフィールドワークの時、教科の活動や学年の活動、学園祭などでアンケート調査を利用する人がよく見られます。ただ、その内容を見ると「何を調べたいのか?」「何を聞きたいのか?」「調査結果をどうしたいのか?」というような点が曖昧なアンケートが多くあります。アンケート調査って一体どのようなものなのでしょう?

## ＜何を調べたいの?＞

当然、まず第一に考えなければならないことは「何を調べるのか」ということを明確にすることです(調査の目的)。これが無くては話が始まりません。「何となく調べてみよう～」では何も得ることはできないし、調査する方も回答者も時間の無駄だし、紙の無駄です。(調査者は回答者の貴重な時間と紙という大切な資源を使っているという意識を持つ)

## ＜誰に対して調べるのか＞

調査の目的が決まったら、調査対象を決定しなければなりません。例えば、「好きな音楽は?」という質問でも、その調査対象によって結果が異なることはよくあることです。学校の中でも男子と女子とか中1と高3ではかなり違った結果が出る人が多いでしょう。

## ＜調査票の作り方＞

調査の目的と調査対象が決まったら、いよいよ調査票の作成にはいります。アンケート調査の重要なポイントはどのような調査票を作るのかということです。そこで、まず注意して欲しいことは以下の4点です

- 1) 依頼する情報は、必要最小限にとどめること
- 2) 答えられる質問であるかどうかを確認すること
- 3) 正直に答えてもらえる質問かどうかを確認すること
- 4) 拒否されないで、答えてもらえる質問であるかどうかを確認すること

1)については最も一般的な注意点となります。例えば情報(答え)が既に存在しているのに、わざわざ質問(よく「一応聞いてみる」といって・・・)してみたり、「面白そうだから・・・」などといった理由で内容とあまり関係のない質問項目が含まれているような場合がありますが、これは時間や資源の無駄だし、回答者に対しても失礼なので注意してください。2)については「あなたは一日にどのくらいテレビを観ますか?」といった質問に対し、{2～3時間・1時間くらい・全然観ない}などといった選択肢が用意してある場合などにあてはまります。選択肢の中に適当な答えがなかったり、その日によって答えが変わってしまうことが考えられます。「月曜日は全然観ないけど、日曜日は4時間くらい観る・・・」など。また、「あなたは、一日何時間くらい勉強をしますか?」という質問に関しては、どの程度回答者が正直に答えてくれるか疑問です。(ちょっとくらい時間を多く答えますか?)

また、個人のプライバシーに関することを調査する必要がある場合は細心の注意が必要なことはいうまでもありません。

## ＜調査票のチェック＞

調査票の質問は調査の目的(何を調べたいのか)によって決まるものですから、調査票を見るとどのような調査なのかということは明確になる場合が多いといえます。けれど、データは回答者によって生み出されるものですから、質問を考えるときには回答者の側に立った考えが重要になります。頑張って調査している者にとっては、理解できる質問項目でも、その調査のことを全く知らない回答者にとっては理解できないものであることも多いものです。注意しましょう。(説明不足のアンケートがよくあるし、返ってきた答えをみると、こちらが考えていたような答えでない場合がよくあります)

また、「あなたの家族構成は?」という質問も難しい質問です。その人が独身であれば、家族とは両親と兄弟と・・・結婚していれば妻や子供になるからです。やはり回答者の側に立って再度考えてみる必要があります。(できあがった調査票を近くにいる友達で試してみるとよいでしょう)

これもよくある落とし穴ですが、無意識に二つの質問項目を結びつけているときに起こるもので、*ダブルクエッション*と呼ばれています。例えば「あなたは医者になって病院で働きたいですか?」という質問は*ダブルクエッション*です。回答者は医者にはなりたいたくもしいけれど、病院では働きたくないと思っているかもしれないし、その逆も考えられます。この質問は明らかな例ですが、このような質問は意外と多いのです。あなた達が作り上げる調査票は大丈夫でしょうか?

## ＜分析＞

調査票を完成させた段階でアンケート調査はほぼ終了していると言えます。それほどアンケート調査における調査票の意味合いは強いのです。回収された調査票はあらかじめ考えられているような手法によって分析されます。(つまり、調査票を作る段階でどのように分析するのかが決まっていないとダメなのです)

分析の手法としては、度数分布やクロス集計(男女別でAが何人とかBが何人とか)などが考えられます。(統計学的な計算法は他にもいろいろありますが・・・)くり返して言いますが、「面白そうだから調べてみよう・・・」という調査票からは結局何もわからないことが多いのです。

## ＜アンケート調査のエチケット＞

アンケート調査に協力してもらった場合には、その結果をきちんと伝えることがエチケットです。一人一人に結果を送ることが難しい場合には「結果は〇〇にて公表します」ということをあらかじめ伝えておくことがよいでしょう。聞きっぱなしの調査はよくありません。

**頑張って、素晴らしい調査票を作って下さい**

## 訪問して取材する場合の心得

中3 環境学資料 9905

## 見本

平成 年 月 日

1 訪問する場合、遅くとも1週間前までに、電話で用件・訪問希望日時・参加人数などを知らせ、了解を得る。

例：私は、奈良女子大学附属中学校3年生の〇〇です。私たちは、今、環境問題について学習しています。私の班は、「水」について調査しています。このことについて取材させていただきたいのですが、ご協力をお願いできますか。

2 調査・取材する内容をよくまとめておく。内容についての予備知識がないと、無意味であるばかりでなく、訪問先の方々にも大変失礼である。

3 訪問先の都合で、「環境学」の時間帯に訪問できるとは限らない。そのときは、土曜日の午後や課外を活用することも考える。

4 約束できた日時を勝手にキャンセルしてはいけない。こちらの都合ばかり考えてはいけない。

5 訪問するときは、当日の「昼の会」までに「フィールド・ワークについて（お願い）」の文書を担当の先生からもらい持っていく。他に、班長は「活動計画書」を担当の先生に提出する。翌週の月曜日に、班長は「活動報告書」を提出する。

6 取材で写真撮影、録画・録音したい場合は、必ず事前に了解を得ておく。これは絶対守ってほしい。

7 訪問するときは、班全員で行くのが望ましい。分担する場合は、必ず2人以上で行く。約束日時の5分前には、必ず訪問先に集合している。

8 トラブルが発生したときは、すぐに学校に電話する。  
学校：0742・26・2571

仮に、大きなトラブルが発生した場合は、警察に連絡する。

9 訪問先では、言葉使いや礼儀に気をつける。

10 フィールド・ワークに出かける場合、保護者にも用件を伝えておく。特に帰宅が遅くなる場合は、その旨を伝える。

様

奈良女子大学文学部附属中学校  
学校長 杉峰 英憲

## フィールド・ワークについて（お願い）

拝啓

平素は、本校の学校教育にご協力いただきありがとうございます。

さて、本校では、総合学習として、中学3年生で「環境学」を実施しております。その教育的なねらいは、環境問題に関わる学習内容について、教室の中だけでなく、現実の社会に触れ、調査・研究、考察することにより、環境の問題に対する認識を高めようとするものです。

つきましては、生徒にフィールド・ワーク（校外での学習活動）を課しておりますが、皆様方には、この学習活動に深いご理解をいただき、是非ともご協力をお願いしたい次第です。何かとご多忙のことと思いますが、生徒が訪問させていただきますので、ご指導賜りますようお願いを申し上げます。

失礼なことがございましたら、恐縮ですが、学校までご連絡ください。何卒、よろしくお願い申し上げます。

敬具

連絡先：奈良市東紀寺町1-60-1

奈良女子大学文学部附属中学校

環境学担当教諭 大内 淳也 屋鋪 増弘

中道 貞子 上浦 一道

TEL：0742-26-2571

FAX：0742-20-3660



(7) 10月1, 8, 15日 班毎の活動

(8) 10月29日 発表について 【資料7】

発表の手引きを配布し、例年以上にプレゼンテーションの方法についても丁寧に指導した。また、レポート作成についてもプリントを用いて説明した。

(9) 11月12日 発表準備

(10) 11月26日, 12月3日 発表会(クラス発表会、総合発表会)

まず、クラス毎にフィールドワーク発表会を実施した。各自に以下の観点から評価させ、各クラスで評価の高かった上位2班合計6班の発表会を次の週に実施した。

【1】テーマに対するアプローチの仕方は適切でしたか？

【2】調査研究は深く詳しく行われたと思いませんか？

【3】考察や提言の質はよかったですか？

【4】発表方法は工夫され、わかりやすく伝えられていましたか？

それぞれの観点について、<5…とてもよい 4…よい 3…ふつう 2…あまりよくない 1…よくない>の5段階で評価させた。

最優秀班は、3学期の終業式で、生徒全員の前で発表を行った。

## 2. 各班の内容

レポートの最後には、班からの提言を付け加えるように指示を与えた。以下に、提言を中心に、各班の取り組みを紹介する。

### ■A組1班「絶滅寸前のメダカ」 (中道担当)

<班の提言より>

小川や田んぼには、たくさんの生き物がいます。私達が調べてきたメダカは、その中の1つに過ぎません。メダカだけでなく、フナ、ドジョウ、ヤゴ、ゲンゴロウなど小川にすんでいる生き物は今、どんどん減ってきています。小川だけではありません。自然界から、昆虫、動物、そして植物までが失われつつあるのです。私達人間は、それに気づかずに、便利になったところで平気で暮らしています。メダカは、場所によって少しずつ違うので、保護したら、元の場所に返してあげなければなりません。それに、メダカを保護することで、メダカだけを増やし、ほかの生態系を壊してしまってもいけません。だからそのためにも、壊された自然を元に戻さなければなりません。でも、はっきり言ってコンクリート化した用水路を破壊して昔の状態に戻すのは、無理だと思います。コンクリートで固めた事により、人々の暮らしは楽になり、農家の生産量も、アップしました。それを今更、メダカのために壊す人は、どこにもいないでしょう。私達人間が自然を壊し、汚してしまったのは、事実です。でも、暮らしの中で、しょうがない面もあると思います。

では、私達に今できることは何なのか考えてみました。日本中にあるコンクリート化された用水路や、埋め立てられた小川、環境破壊につながるものを取り除くのは、まず無理です。それよりも、今少しでも残されている自然を守っていくことが、私達の役目だと思います。そのためにも、この環境学を通して、私達を含む、子供からお年寄りまで、すべての人に提言したいことは「もっと自然に関心を持って、接してほしい」ということです。私達は今まで、身の回りの生き物や自然に、興味を持ったことが、あまりありませんでした。みなさん、1度近くの川や池を、よーく見てみてください。意外に、いろいろな生き物がいるはずですよ。それを見れば、誰も自然を壊すことはできないはずですよ。私達もメダカを通して、周りの自然に目を向けるようになりましたが、このメダカも、絶滅危惧種だ

# 発表の手引き

環境学もこれまで調査活動を続けてきた成果をまとめる時期になりました。11月26日(クラス発表会)には自分たちの調べてきたことをみんなに分かりやすく発表してもらいます。発表の要領を以下に示しますので、これを参考にしてみんなの心に残る発表を工夫してみてください。

## 発表の要領

自分たちがこれまで調べたことや考えたこと、思ったことを、みんなに分かりやすく伝えるということに重点を置いて発表を行ってください。前に中間発表会を行いました。必要なことや重要なことなら重なって発表してもかまいません。クラス発表会で優秀であった班は、12月3日の全体発表会で発表してもらいます。そして、そこで最優秀に選ばれた班は、終業式の時に全校生徒に発表してもらいます。

### 1. 発表内容

#### ①テーマ設定の理由

#### ②調査の内容・結果・考察

考察は、調査結果からどのようなことが考えられるか、班員の感想などとともに、班での考えをまとめる。

#### ③班からの提言

どこへ、または誰に対して、何を根拠にどのようなことを訴えたいかを明確に!

\*①②③の分量は、班独自に、内容の比重を考える。

まとめ方も自由。必ずしも、①②③としなくとも、工夫するとよい。

### 2. 発表時間

・1グループ15分の発表とします。

※必ず時間内に終わるよう練習しておいて下さい。

・5分くらいの質疑応答の時間をもうけます。

・下のような言葉を発表の最初と最後に言うことで、めりはりのある発表にしてください。

私たち( )班は、( )というテーマでこれまで調べてきたことを発表します。.....  
これで( )班の発表は終わります。何か質問・意見はありませんか。

### 3. 役割分担

各クラスで司会進行役、発表の順番を相談して決めておいて下さい。また、当日の発表が手際よくできるように、各班で以下のことを事前に相談して考えておきましょう。

- ・発表者
- ・OHPなど視聴覚機器の操作、連携
- ・資料の提示、配布
- ・照明のON・OFF

### 4. 評価

#### ・相互評価

発表会を成功させるのは発表者が聞き手に分かりやすく発表することはもちろんのことですが、聞き手の皆さんがどんな態度で臨んでいるかも鍵を握っています。自分たちの班の発表が迫っているからといって他の班の発表を聞かずに作業したり、相談したりすることはやめましょう。発表をしっかりと聞いて互いに公正に評価して下さい。

#### ・自己評価

率直に自分の発表を振り返ってみて、どこをどうするともっと分かりやすい発表をすることができたか、または自分はどんな点で工夫したかなどを、自分自身で評価してもらいます。

## 発表の構造

PRESENTATION (プレゼンテーション) とは、発表・提示と訳されるもので、その基本は「見せる」ことにあります。これまで調べてきたテーマについて自分たちの考えを発表する場ですから、調査した内容や主張、結論をどのように伝えるかも十分に考えて発表して下さい。

発表のリハーサルをし、効果的で心に残る発表にしよう。

音声情報だけでなく、視覚からの情報を組み合わせた方が興味深く、訴える力が強いものです。「話す」より「見せる」ことに重点を置いて発表を考えていこう。

### 1. 発表を考える手順

- ① 何を伝えたいか考える。
- ② 発表の構成を考える。
- ③ 発表の要旨をまとめたレジメを作る。
- ④ スライドやOHP (オーバーヘッドプロジェクター) で何をみせるか。
- ⑤ それらをどのように組み合わせるか。

## 2. 見せるものを作る

### <模造紙を使う>

- ① 数字をグラフ化して提示する。
- ② マジックなどを使って色分けする。
- ③ イラストを描いたり、表を作ったりする。
- ④ 伝えたいことを短い言葉で表示する。
- ⑤ 発表者が指し示しながら説明する。

### <ビデオを使う>

- ① 事前に時間を計って編集するとよい。
- ② 映像だけを流して発表者が説明を加えるなどの工夫をする。
- ③ 口頭で説明しにくい状況や事象を分かりやすく説明することができる。
- ④ 効果的に使うためにできるだけ短く編集する。

### <OHPを使う>

- ① 明るい部屋でも映せる。
- ② 不必要なときはスイッチを切ること。
- ③ 部分的に隠し（マスキング）、説明にしたがって情報を出すことができる。
- ④ TP（OHP用フィルム）を重ねることで情報を追加していくことができる。

### <パソコンを使う>

- ① 表計算ソフトで描いたグラフをそのまま表示することができる。
- ② デジタルカメラの画像が表示できる。
- ③ presentation用ソフトを使えば、写真やグラフ、文字を効果的に組み合わせることができる。

※ 使える機械の台数が少ないので、使えないこともある。使いたい班は事前に申し出ること。

## 3. 発表原稿を作る

発表は原稿を読むものではないということを確認しておこう。では、原稿は何のために作るのか？ それは、発表の内容を言葉にしてみようとするためのもので、更に発表当日分からなくなったときの切り札とするためのものです。

- ① 発表原稿は話し言葉で書くようにする。
- ② 参考文献の棒読みは聞くに耐えないから、要約した自分の言葉に置き換える。
- ③ 難解な表現は自分が理解した内容に置き換える。
- ④ 声に出して練習し、読みにくいところはないか、時間配分はよいかなどをチェックする。
- ⑤ 発表原稿から、発表メモに作り換える。

※ 発表原稿はレポートの原稿のことではありません。発表原稿とはあくまで発表のための下書きのことです。

## 4. 発表時

- ① レジメ（報告する際、要旨を記して聞き手に配布するもの）を用意する。用紙は配布されたB4サイズのもの。資料を使う班は、各自でプリントなどを用意すること。  
※ 最初に「何を、どう発表するか」のアウトラインを聞き手に伝える。
- ② 顔を上げてゆつくりと話す。決して読むのではない。  
※ 1分間に350字ぐらいの速度が適当と考えられている。練習の段階で自分のスピードがどれくらいか計っておくとよい。
- ③ 話はできるだけ具体的に。実例を示してから一般的な話に入っていくスタイルを取るのがよい。
- ④ 聞き手に考える時間や間を与えてやる。
- ⑤ 聞き手を楽しませる工夫をする。
- ⑥ 発表が盛りだくさんで時間が不足すると思われるときには大胆に切り捨てる。

### グループによるプレゼンテーションのための診断チェックリスト

①	テーマ設定の説明はできるか	YES	NO
②	話のきっかけとして具体的な例を考えられているか	YES	NO
③	視聴覚資料（OHP・スライド）を準備したか	YES	NO
④	発表の骨子を提示できるか	YES	NO
⑤	レジメは完成しているか	YES	NO
⑥	資料（図・写真・スライド）の説明はできるか	YES	NO
⑦	発表時の役割分担はできたか	YES	NO
⑧	視聴覚機器の使い方は分かっているか	YES	NO
⑨	グループの最終打ち合わせはできているか	YES	NO
⑩	発表原稿はできているか	YES	NO
⑪	リハーサルはしたか	YES	NO
⑫	リハーサルは何分かかったか	約（      ）分	

※発表要旨の提出しめ切りは11月22日（月）です。各担当の先生に提出すること

からといって、「とっただけいけない」ということはないと思います。とったり、育てたりして、自然や生き物と接することが大切なのです。ほんの小さな生き物から、私達はたくさんの方のことを学びました。そして、この小さな生き物、メダカが住める環境は、どんな生き物にも優しい環境といえるでしょう。もう1度、人間の手で「活気あるメダカの学校」を復活させましょう。

<訪問先・資料請求先>

前橋市児童文化センター 野メダカを育てる会／メダカの中井／山形県 メダカの学校／山梨県 メダカの学校／福岡県 メダカと自然を守る会／社団法人高知県生態系保護協会

## ■A組2班「騒音」 (中道担当)

<班の提言より>

私たちが環境学の学習で「騒音」を取り上げたのは、私たちにとって、また私たちの周りの人々にとって「音とはどのようなものなのか」と、疑問に思ったからです。人には五感というものがあり、音感もその中の一つです。その音感の中で、人々は快音、不快音を感じ取っているのです。その中の不快音が社会で呼ばれている「騒音」というものなのです。

しかし、これが騒音でこれは騒音ではないという基準はないのです。ピアノの音、工場の音、犬の鳴き声、隣の家夫婦喧嘩、これらを不快音と感じる人、そうとは思わない人、それは人それぞれなのです。さて本題へとうつりましょう。「騒音」、これは私たち日本人の中では公害となり、大きな問題とされていますが、私たちは騒音について調べているうちに、「騒音」とは人間が作り出したもので、私たちがこの地球で生存する限り、なくせないものではないかと、考えるようになりました。たとえば、今問題になっている自動車の排気ガス。これを減らすためには自動車を廃止しなければなりません。しかし、今の私たちには車、電車、飛行機などは交通手段として欠かす事の出来ないものだと思います。しかし、そのような乗り物を使うと、排気ガスは出てしまうのです。「排気ガスを減らそう、二酸化炭素を減らそう」いろんな運動が各地で起こっていますが、人間が生きていく以上排気ガス、二酸化炭素はくっついてくるものだと私たちは考えます。騒音も同じ事です。「ピアノがうるさい」と言っても、ピアノも練習しなければ、テレビに写っているような音楽家達は生まれていなかったでしょう。飛行場訴訟、電車騒音なども、さっき言ったように私たちには欠かせないものなのです。奈良県にはめだだったものはありませんが、工場もその一つです。しかし工場も私たちのために物を作ったりしています。そして、それと同時に騒音はくっついてくるのです。「だから、工場とかも無くせばいい」。そうではないのです。私たちは、今のこの私たちが作り出した環境と共生していかなくてはならないと思います。「どうやって共生していくのか?」。それは今の大人達がいろいろな事をしてきています。奈良市役所の“NO MY CAR DAY”もその一つです。私たちは中学生の間からいろんな環境問題について調べてきて、大人になった時に今の大人以上の活動がしたいと思っています。「共生」それは、私たちになくてはならないものになってしまったのです。

## ■A組3班「太陽エネルギー」 (屋鋪担当)

<班の提言より>

太陽光発電は、私達が未来に生きる為の鍵の一つだ。科学の技術が発達していくのに比例してエネルギーがたくさんいるようになり、それに反比例して、石油・石炭などの科学燃料が底をついて来た。このままでは近い将来にもなくなってしまうだろう。また、火力発電で発電する際に出るCO<sub>2</sub>の量も問題になっている。日本は平成9年の地球温暖化防止会会議「COP3」で「2012年までにCO<sub>2</sub>の排出

量を1990年の時点に比べ6%削減する。」と約束した。この両方の点で注目されているのが「太陽光発電」なのだ。太陽光発電は、無限ともいえる太陽の光によって電気を起こし、また、クリーンなエネルギーで、CO<sub>2</sub>が発生しない。システム製造時に発生するCO<sub>2</sub>の量も石油火力発電と比較して10分の1程度だ。ただ、問題があるといえば価格だが、大勢の人が利用するようになれば自然と下がってくる。私達の学校にもシステムが設置されている。年間の発電量は年間消費量の10分の1弱と予想されている。それだけでもCO<sub>2</sub>にして4320kgカットになる。原油にすれば5840ℓ分。200ℓドラム缶約30本分。エコカーなら地球5週できるくらいの量だ。普通の家庭であれば、電力のすべてを太陽光発電でまかなうことも可能だ。だから私達は、全国の各家庭に太陽光発電システムを設置し、自分達の電力は自分達で生産することを勧める。年々太陽光発電のシステムを導入する家庭が増えてきているが、それでも今のままでは「COP3」での約束を守るのは限りなく不可能に近い。でも、これもきっと私達の心がけ1つで変えられる。つまり、すべてはこれからの私達にかかっているのだ。

また、最近宇宙太陽光発電の研究が進められている。宇宙に出れば資源は少なくとも地球の50万倍以上あるし、曇りの日だってない。30分で地球1年分のエネルギーが出ている。その全てを吸収できるわけではないが、これを利用しない手はない。特徴としては、まず巨大なエネルギー源であること。太陽光発電と同じく無公害であること。そして、今の技術の延長線上で開発可能なことなどがある。地上の太陽光発電のスケールを大きくし、より確実にしたようなものと言える。将来的には宇宙太陽光発電が発電の中心になっていくだろうが、それまでの数10年間どんなエネルギーに頼っていくかは私達の問題だ。限りある資源、環境のことを考えると「太陽光発電」こそ、私達が選ぶべき発電方法ではないだろうか。私達が今まで太陽エネルギーについて調べてきた結果言えることは、「各家庭それぞれがクリーンな太陽光発電所となり、自分達の電力は自分達でつくる」つまり、各家庭にソーラーシステムを設置し、電力の自給自足をしようということだ。少し大げさかもしれないが、これくらいの気持ちが必要だ。もっともっと電気の大切さを実感しないといけない。冷蔵庫を開け放さない、電気をちゃんと消す、必要以上に冷暖房を入れない。まずはそんな身近で基本的なことからみなおして、電気の節約をはじめてみるのもいいだろう。

#### ■A組4班「川」 (中道担当)

<班の提言より>

唐突ですが、みなさんのまわりの人はいつ洗剤を使っていますか。洗濯の時、洗車の時、お皿洗いの時などほとんどしょっちゅうですね。確かに洗剤を使うと汚れもよくとれます。でも考えてください。よくとれるという事は化学薬品がいっぱい＝自然によくないという事なのです。自然によくないというのは目でわかるのと正確な検査をしてわかるの2種類あります。前者の症状としては、

- ・川の色が汚なあい白と緑が混ざったような色になる。
- ・ゴミが捨ててある。 ・洗剤の泡が長い間たったまま流れる。

です。後者のほうで私達が行った検査というのは、COD・pH・アンモニウムイオン・リン酸イオンの値を調べるということでした。pHを除いたほかのものは一般的に数値が高くなるほどその調べた液体は汚れている、合成洗剤が多いです。つまり、良くないということです。「でも中流でも上流とちょっとしか変わらないじゃんかよ」と思った人。それは間違っていないけど甘い考えです。なぜなら中流では少し値が高いたくでも魚は死に、異臭もしたからです。だから数値は見た感じ少なくても、実はすごく危ないのです。

そんなわけで、世の中の皆さん、特に先進国に住んでいる人、洗剤の使用量を少しでも減らしてく

ださい。減らしてなお環境に良いものを使ってくれとありがたいです。

次は山の開発についてです。森でも林でもジャングルでも木は同様に沢山ありますが、ここで山をとったのは理由があります。それは日本に山が多いのと、「土砂崩れ」という言葉がより似合いそうだからです。そもそも土砂崩れは何故起こるのか？これもいろいろと理由はあるけれど最大の理由は、木が少ないということです。木があると根っこが土を離さず、またゆっくりと時間をかけて雨水を地下水にします。ところが、木がないと土を保持できません。そのため、大雨が降った時にその雨と一緒に土が流出するのです。国の政策として、是非木を守ってほしいです。どんどん自然を壊さないで自然を残して問題を解決してください。

<訪問先>能登川

### ■A組5班「現在の食品状況」 (大内担当)

<生徒の要約と提言より>

ファミレス、コンビニ、食べ放題の店、各家庭……。それぞれにおけるゴミ、食べ残しなどを少しでも減らすことはできないのか？という思いからゴミなどの実態について調べてきました。思っていた以上にゴミが多かったり、思っていたほど多くなかったりと、驚きの連続でした。

豊かになることは必ずしも良いことばかりではないのです。お金があって、物があって、甘やかされて……。こんな環境にいて、贅沢にならないわけがない……。ゴミを捨てる時や食べ残しをするとき、私たちの心の中には罪悪感やためらいというものがありありません。食べ放題、ファミレス、コンビニなど商売になるとこれらの感覚はさらにひどくなります。

あるレストランで、「生ゴミを肥料にすることはしないのですか？」と質問すると、「それにはとてもコストがかかるから……」という返事が返ってきました。やはり企業では「環境」よりも「儲け」を優先させるんだなと思いました。ただ、このような考え方はみんなが持っているものであるという気がします。

物があふれている世の中で、私たちにできることは、少しでも身の回りのゴミを減らしていくことだと思います。みんなが少しずつでも頑張れば「ちりも積もれば山となる」となるでしょう。一人一人が心掛けるようにするためにも、企業が動くことが必要です。企業の影響力は大きいので、将来の住み良い未来を考えて行動して欲しいです。

<訪問先>

レストランシャロン奈良ロイヤルホテル店／ファミリーマート奈良教育大前店／レストラン馬酔木／北新地まぐろ亭奈良本館／マクドナルド奈良三条店／奈良市環境清美工場

### ■B組1班「田んぼ」 (上浦担当)

<生徒の要約と提言より>

1学期にテーマを「田んぼ」と決めて活動を始めた。しかし、それでは少し幅が広すぎるということで、いくつか絞って調査をした。

#### 1. 消費者アンケート

学校の近くのマーケットに買い物に来ている主婦などに、稲作についてのアンケートを実施。

#### 2. 生産者アンケート

消費者とは逆の立場にある人の意見を調査するため、班員の農業をしている親戚などに実施。

### 3. 合鴨農法・鯉農法

農薬を使わない農法として調べ始めた。中間発表会で結構質問が集中したので、詳しく調べることになった。両方とも、インターネットを利用して、調査を進めた。

提言：政府は、これから減反政策だけを考えるのではなく、稲作に対する消費者の意見を取り入れるべきだ。そして、稲の無農薬栽培や有機農業への取り組みもどんどん支援していくべきであると思う。

#### ■B組2班「母なる大地 加茂」 (屋鋪担当)

<班の提言より>

環境学で調べて、分かった問題点は熱帯林で非伝統的な焼き畑移動耕作を行っている事だ。焼き畑を大辞林で調べると『草地、林地などを焼いた跡に作物を植えて収穫する耕作地、また、そうした農作法。焼却による肥料の効果がうすれると放置して林地などに戻す』とあるが、この問題は熱帯林の破壊の原因の所にあるように、熱帯林開発のための道路が増えるにつれて、現地の人々が奥深くで焼き畑を広げていく事だ。道路を作る事は人間生活において今や必要不可欠な物にちがいない。しかし、文明社会になじまずに、できるだけ昔ながらの生活を望む人々がいる所で、いたずらに道路を増やすことはいかかなものかと思う。例えば現在焼き畑移動耕作をしている人々が一定の農地をあたえられ、その中で近代的な農業が行えるようになるのなら、守るべき熱帯林と開発しても良い地域とを区別できると思う。熱帯林は地球規模で守らなければならない人類の財産である。したがって熱帯林がある国々にまかせず、地球上のすべての人々が知恵を出し合って、どれぐらいの規模の熱帯林を残すべきなのか、残すために生じる近代化への遅れやその国の損失のための援助をどのように行えばよいか考える。そうすれば熱帯林の破壊の他の原因である適度の薪炭材の採取や、不適切な商業的伐採に対する保証もできると考える。世界規模で見たとき近代国家とそうでない国々の差はあまりにも大きく、早く近代国家になろうとする国のあせりと、すでに近代国家を自負する国のエゴが、この問題の根本的問題だと考える。人々は自然がいかに我々に恵みを与えてきたかをもっと考えて行動すべきである。

日本に目を向けてみても、日本は世界第2位の森林などの緑におおわれる率を誇りながら、一方では丸太の輸入が世界の約半分を占めるという現実がある。木は農作物のように短い期間育つ物ではなく、今、苗を植えたとしても孫やひ孫の時代にならないと伐採できないが、世代をこえて計画的にすれば、輸入を減らすことができ、日本の森林を守りながら利用も可能だと考える。しかし、この問題になるのが林業に従事する人口の減少と過酷な労働とそれに見合う収入がないことだと思う。この点に関しては、林業に従事する人々が喜びを見いだせる保護を政府に求めなければならない。加茂のアンケートの中に見られた宅地ゴミ焼却場があったり車が増えたりしたための排ガス問題、宅地が開発されたために緑が減っていることなど、世界的に見ても日本に目を向けても、また、せまい地域に至っても根本的なことは同じだろうと思う。それは、人々が追求する便利で快適な暮らしと自然の調和がくずれてきているということだ。快適な暮らしを手に入れた人々はもっと上の快適さを求め発展途上の人々はそれに追いつけ追いこせと目の色をかえている。しかし、人間はあくまでも自然界のひとつの生物にしか過ぎないのだから、自然を守り育て、それを少しだけ受けるという謙虚さをもつべきだ。そしてなによりもこの謙虚な心を科学者、政治家などの人々に持ってもらいたい。

<訪問先>加茂町立図書館 木津町総合庁舎

## ■B組3班「使い捨て商品について」 (大内担当)

### <班の提言より>

ペットボトルなどはリサイクルして服や文具にしたところでその先はゴミとなってしまいます。だから今、必要なのは、新しいプラスチックを開発することだと思ふ。今のままでは、結局ゴミになってしまうので、トレーなどに使われているものは、もう一度回収してトレーとして使用することが出来るようにする。こういった新しい素材を企業が開発していくべきだと思ふ。おむつや割りばしに関していうと、木の再利用ということは出来ているみたいだが、燃やしたときは二酸化炭素が出る。よってあまり使いすぎは良くないと言える。しかし、今更布おむつや自分の箸を使うのは無理だと思ふ。だから企業や研究所などによって微生物によってすべて分解できる材質の開発・使用をしてほしいと思ふ(コンポストのように)。スーパーに対しては、もっと多くのスーパーでも回収をして欲しい。またペットボトルの回収ももっと多くのスーパーでして欲しい(これに関してはスーパーよりもコンビニの流通業界の方が進んでいるので)。また売っている物に、なるべくリサイクル出来る物を使用して欲しい。例えばトレーなどはすべてリサイクル可能なマークの入った物を使用したりする。サララップなどの一度はがしたら使わないような物は、減らす。もしくはダイオキシンの出ないポリプロピレンの物を使う。そして回収容器を入り口の横に置くなど本格的に回収をし、めんどくさがらずにして欲しい。それに対して消費者には、トレーをちゃんと洗ってから回収容器に入れ、牛乳パックもちゃんと洗って開いて入れる。回収できない物は入れないようにする。スーパーに自分のカバンを持っていくなどして意識を高める必要がある。コンタクトの企業に対しては、包装用のケースを小さくしたり今の5番では一応ダイオキシンはポリプロピレンだが、6番などにしてトレーみたいに回収したりし、資源のリサイクルに積極的に取り組むべきだと思ふ。また本体の衛生面をよくした使い捨てではない普通のコンタクトの開発などをして欲しい。そして国などには、焼却炉をダイオキシンの出ないような物にして欲しい。ペットボトルや缶などに特別に税金をかけ、リサイクル化のお金に使ったりすると思ふ。国・企業・消費者の3つのサイクルがうまく回る必要があると思ふ。

### <訪問先>

ミリオン紀寺店/オークワ法蓮店/㈱P&Gお客様相談室

## ■B組4班「過剰包装」 (大内担当)

### <班からの提言より>

「過剰包装」 この問題にあたる時、国に要求されるのは国民が取り組みやすい環境をつくることである。つまり、金銭という面で国民をバックアップしていくのである。ドイツが環境先進国となったのは、市民運動が原因ということだ。

日本でもそのような運動が94年頃に起こったが、現在では影を潜めている。けれどもこのような動きはなくなってしまったわけではない。国が何らかの動きをすれば、また再び動き出すに違いない。「何らかの動き」、そこに「法制化」ということを当てはめることとする。

- ・商品の包装に税金をかける
- ・ゴミ回収の有料化

この2つのことを行うだけでも、ゴミを減らすために、コストを抑えるために過剰包装はなくなっていくのではないかと考えた。

環境保全をただのブームで終わらせてはいけない。ここからの私たちの動きが国を動かすかもしれないのだ。



## <訪問先・資料請求先一覧>

ドイツ連邦総領事館／アメリカ領事館／スウェーデン大使館／高島屋本社社会貢献室／近鉄百貨店庶務課／そごう総務部／阪急百貨店宣伝装飾部／積水化成成品工業

### ■B組5班「コンビニへのそぼくなギモン」 (上浦担当)

#### <活動内容の概要>

現在、ローソン・ファミリーマート・デーリーヤマザキ・セブンイレブン・サークルKなど、町にあふれているコンビニエンスストアが、どのように経営されているのかということ「環境」という接点で調べようとした。理由は、普段何気なく利用しているコンビニについてあまり知らないことと、24時間開けていて何が起きているのか知りたかったからという。

いくつかのコンビニを訪問した結果を、一覧表としてまとめている。調査項目は、ペットボトルの回収・生ごみのコンポスト化・太陽光発電・天然ガス自動車・フロンガスの削減・リサイクルユニフォームという観点で実施している。

さらに、コンビニと電力、コンビニを訪れた人へのアンケートについてもまとめている。

### ■C組1班「電気の消費量」 (上浦担当)

#### <活動内容と提言より>

私達の生活に必要な不可欠な電気。それにもかかわらず電気は無頓着な私達。資源の残りも後わずか。一体どうなっているの？そこで私達は電気をくわしく調べてみることにした。グラフにしてみるとかなりの電気量だ。そこで私達にも簡単にできる節約法を聞きに、関電事務局に行った。夜、コンセントを抜く方法が効果的で、約1割も浮かすことができるとか。次に今のエネルギー事情などを詳しく知るため、関電（大阪にある南港発電所 火力発電所）にも行った。石油はあと44年、LNGは63年、ウランは73年で枯渇してしまうそうだ。太陽光、風力、地熱発電などクリーンな新エネルギーが開発、研究されているが、日本のエネルギーの主体となるにはまだまだほど遠い。最後に、何か電気をテーマに実験してみようと水力発電の原理、水車づくりもした。

私達は電気について以下のことを提言する。

- ・政府はもっと、宇宙太陽光発電に積極的になり、補助金を出すべきだ。
- ・家の太陽光発電を利用しやすくするためにもっと補助金を出して！
- ・自動販売機を夜中OFF！（冷やす、暖めるのは予冷）
- ・下水道で発電をする（これはなかなかいいと思うのですが…）
- ・ゴミを燃やして発電する。
- ・雷の数千ボルトの電気を利用できないか…。
- ・家の電気量、使用時間を制限する。
- ・ネオンサインを減らす！
- ・テーマパークなどの異常なまでの装飾の光を必要最小限にする。。
- ・白熱球より蛍光灯を利用する！（蛍光灯の方が電気効率がいいんです）
- ・テレビ・ラジオの深夜番組を減らす。
- ・時計・ラジオを計算機みたいに、太陽電池式にする。
- ・クリスマスツリーのちかちか。あれは、イブとクリスマスの日だけでいい。
- ・電車の駅の明かりを少な目にする。

・冷蔵庫は昼カット（予冷だけでものを冷やす）

☆家の電気量、使用時間の制限というので、それ以上になったら、税金をかけるというのはどうでしょうか？色々考えてみましたが、まず「私達現代人の意識改革」が必要だと思います。もっと、電気に対する意識を高めなくては…。身の回りのちょっとしたことからいいんです。みんなで少しずつ節約を心がければ…。ある本に書いてありました。「いったん覚えた快適な生活を捨てろという方が無理だ」と。それはそうだと思います。もっと根本的に、今までの価値観や、生活パターン、慣習などを完全に変えていかなければ。

### ■C組2班「おかし」（大内担当）

<班の提言より>

私たちは、この環境学という授業を利用して、一番身近にあるお菓子について調べていきました。いろいろなことが分かりだしたし、レポートにも一部しか載せられなくて残念です。特に最近はお菓子の需要も増え、私たちが気を付けるべき点はたくさんあります。

そこで私たちは以下のことを提言します。

- ・会社はなるべく簡易包装を進めること
- ・私たち国民もゴミの量を考えながらお菓子を買うこと
- ・お菓子は、値段、パッケージなどだけではなく、しっかり原材料を確かめてから買うこと
- ・最低限の知識として、着色料や甘味料などの食品添加物の危険性を知ること

以上のことを実行すれば、未来は明るい！

地球に生きるみなさんへ！

### ■C組3班「川とその周辺」（屋鋪担当）

<班の提言より>

川に調べに行く前の私達の予想は、「上流が一番きれいで動物の種類も多く、中流・下流・合流地点といくに従って川は汚くなり動物の種類も減る。」というようなものでした。しかし実際に調べに行った後の結果は、私達が考えていたものとは少し異なっていました。まず生き物の種類の数についてですが、7月と10月の調査ではいずれも下流が一番多く、その次に合流地点、上流、中流となっていました。次に、川のきれいさについてみてみると、導電率の値が7月の中流が一番多かったり、CODの値が上流と中流が多く、下流と合流地点が少なかったりと、必ずしも上流・中流・下流・合流地点の順にきれいだというわけではないということがわかりました。また、7月と10月を比べると、10月のpHの値が水道水とほとんど同じ7.5前後を保っているのに対し、7月の方は合流地点に行くにつれ値が大きくなり9にまでなっています。導電率は10月の最高値が140ぐらいであるのに対し、7月の最高値は360を越えています。これらのことより、7月よりも10月のほうがきれいだったという事になりますが、この理由には、10月の調査に行く日の2日か1日前にたくさんの雨が降ったためだと考えられます。

岩井川は6月の梅雨時になると、とても大量の雨水が流れ、水路をはみ出していました。そうかと思えば8月の雨がほとんど降らないときは水も流れず、汚い油のようなものがたまっているばかりでした。しかしこの頃は毎日水が流れています。ダムで水を流せば毎日川は流れると読んだことがあります。それで「もしかしてダムができたのかな」と思いました。ダムをつくるよりも山を残しておいたほうが良いという意見や、ダムをつくったほうが良いという両方の意見がありますが、川に水が流

れるのならダムがあってもいいと思います。

岩井川は近頃変わりました。工事の説明書きには、「岩井川を昔の姿に戻そう」というような事が書いてあり、大小いろんな石をしいています。そういう試みは素晴らしいと思うのでどんどんやって欲しいです。しかしこれで上手く行ったのかと思いきや、家からの生活排水が流れ込み、今では青緑色のような灰色のようなものがたまっているし、上流から流れてきた水に混ざって下流のほうへ流れています。地方自治体は、まず下水処理をして欲しいと思います。そうしなければ川に下水が流れ込むばかりで、とうてい川はきれいにならないと思うからです。それから、「川を元に戻そう」という事をやればもっと上手くいくと思います。

<調査地>岩井川

#### ■C組4班「酸性雨」 (屋鋪担当)

<班の提言より>

今までみてきた酸性雨の被害や、大気汚染の被害は、全て人間の活動が原因となって発生したものだ。私達は豊かな社会を夢見て鉄道をひろげ、橋をかけ、船をつくり、車をつくり、生活を豊かにするための道具をいろいろと作ってきた。その生産工場からは、大量の煙がでて公害が発生した。生産した便利な道具からも騒音や排気ガスの公害が発生している。不要になったものを燃やすと有毒ガスが出る。そのまま捨てるとゴミ公害になるのだ。大気を汚すのは何十億年もの昔から行われてきた火山活動も同じだが、それは自然のいとなみに組み込まれてきた。しかし、人間の経済活動で生まれる大気汚染は人類にとって初めてで対処に手こづっている状態だ。私達の目指した豊かな社会とは何だったんだろう……。これから目指さなければならない豊かな社会とは、どんな社会なのだろう。

地球上の全ての生き物が安全に暮らせるためには、空気を汚さないことが第一歩だ。そのため、産業界では、最近になると製造段階で環境を汚さない商品、使用段階で体や環境に被害を与えない商品、捨てる段階で環境を汚さない商品が求められるようになってきた。また、社会の発展には人や物を運ぶ手立てがもっと必要になるだろう。排気ガスが全くでない「電気自動車」しか走らない都市、周りの資源を守り、ともに暮らすしくみをもった社会を作り上げなければならない。しかし、残念ながら今の都市・社会環境は完全とは言えない。身近な商品に異常を見つけたら、「環境に悪いのでは？」と疑ってみななければならない。地上に住んでいる生き物たちみんなが、同じ空気を吸って生きている。衣料品の被害や木の立ち枯れがあるときは、私達の健康にも影響があると考える必要がありそうだ。

#### ■C組5班：車と環境問題 (上浦担当)

<要約と提言より>

今まで調べてみて、車は便利なものだけど、様々な形で地球を、そして私たち自身をもむしばんでいきます。その被害を少しでも少なくするためには、一人ひとりの認識と、協力が大切なのです。そこで私たちは次のことを提言します。

1) 週に1回ノーカーデーをつくりましょう。

国民全員が同じ日に車に乗ることを禁止するのではなく、個人で、○曜日は乗らないようにする、と心がけていけばよいと思います。

2) 近くに行くなら、歩くか自転車で。

寒い冬や暑すぎる夏は、便利な車がイイとは思うけど、自分の体の健康、そして環境のためにも歩くか自転車をもっと利用する。

- 3) 車で買い物に行くときは家族に声をかけ、一度の外出ですむようにしましょう。
  - 4) 車を利用するときは、予め目的地までの道順を確認し、無駄な走行をなくしましょう。そうすれば、道にも迷わず、時間も節約できるのです。
  - 5) 車を選ぶときは、少しでも環境によい車を選ぶようにしましょう。
  - 6) アイドリング中は、想像以上に燃料を消費します。停車が長くなるようであれば、エンジンを切って待つようにしましょう。
  - 7) きちんと整備点検された車は、ガソリンの節約や大気汚染の防止にも効果的です。日常の点検や定期点検につとめましょう。
  - 8) 自動車の急発進、急加速はガソリンのムダになるのでやめるようにしましょう。
- ☆自動車の環境への影響は、製造や走行によるものだけではないのです。洗車の際の水の消費量を減らすことも大切です。朝露がついているときや雨上がり直後は、洗車のチャンスです。お風呂の残り湯を洗車に使うこともできます。

<資料請求先>

国立環境研究所環境情報センター／環境庁大気保全局自動車対策第二課

### Ⅲ. ごみ問題について

3学期に「学校のごみ実態調査大作戦」と銘打って、ごみ問題に取り組んだ。講義だけでなく、ごみ焼却場や最終処分場の見学、学校のごみ調査などもあわせて実施した。

#### 1. 取り組みのねらい

以下のようなねらいでごみ問題を通して環境について考えさせる取り組みを行った。

- (1) 次のことを生徒自身にまず気づかせる。
  - ・生徒自身がいろいろなごみをたくさん出していること。
  - ・ごみは形を変えても決してなくならないこと。
- (2) 次のことから、環境に関する多様な考えを理解することができ、環境について個々の生徒がそれぞれ自分の考えを持てるようにする。
  - ・ごみなどの環境の問題については、その人の立場によりいろいろな考え方があること。
  - ・環境問題には決まった答えがないこと。

#### 2. 取り組みの概要

- (1) 学校のごみ実態調査大作戦（ごみの調査）……2時間（1月14日）【資料8】

フィールドワークの時と同様の班（1班8名）毎に、学校のごみを基準に従って分類し、それぞれの重さを測って記録した。次のⅠ～Ⅲのごみを調べた。

- Ⅰ. ごみ置き場のごみ……冬休み中の各学年のごみ
- Ⅱ. 3年教室前のごみ……1月11～14日の各学年のごみ
- Ⅲ. 校舎の周りのごみ

- (2) 学校のごみ実態調査大作戦（壁新聞作り）……2時間（1月28日）【資料9】

班毎に学校のごみの調査結果を模造紙1枚の壁新聞にまとめた。作成した壁新聞は廊下にはり出し、本校の教職員、生徒全員が見られるようにした。そして、3年の生徒全員が一番良かった壁新聞を選んで投票し、相互に評価した。

(3) ごみの行方の見学……2時間（2月18日）

学校のごみの行方を実際に見学するというので、生徒は3つのグループに分かれて、次の3カ所をそれぞれ見学した。

1. セキスイ化成成品工場（発泡スチロールのリサイクル工場）
2. 奈良市環境清美工場（学校のごみが運ばれて行くごみの中間処理場）
3. 京都市水垂最終処分場（奈良市環境清美工場でできたごみの処分物は大阪湾の最終処分場に行くが、大阪湾に行くかわりに近く Kyoto のごみの処分場を見学することにした。）

見学の様子は、写真に撮っておいて、次の「環境学」の時間に各見学グループの係の生徒がそれぞれ報告した。



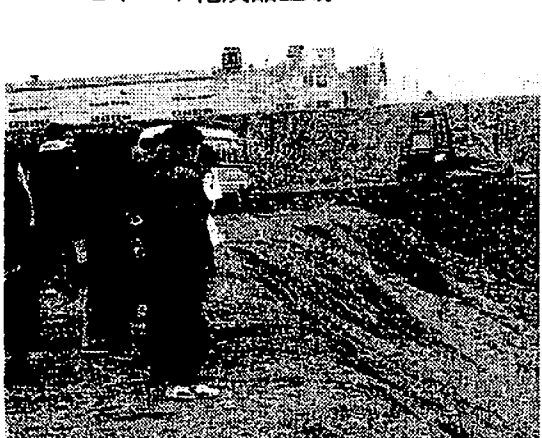
学校のごみ実態調査風景



セキスイ化成成品工場



奈良市環境清美工場



京都市水垂最終処分場



## 環境学についての連絡

- ★ 環境学フィールドワークのレポートについて  
提出は、12月21日(火) 午前中です。  
遅れないように、各担当の先生のところに提出して下さい。

- ★ 3学期の環境学について  
3学期の環境学は、以下のような計画で行います。  
メインテーマ：

ごみは21世紀に残していいの?~ごみ達の叫び~

1. 学校のごみの実態調査大作戦
  - \* 1月14日  
11日~14日までのごみを、14日の環境学の時間に調査します。  
内容は、<ごみを分ける><ごみを測る><ごみを記録する>  
詳しい方法は、3学期に説明します。
  - \* 1月28日  
これが学校のごみの実態だ!  
壁新聞づくり 8人1班で1枚の壁新聞作成
2. ごみ達の叫びを聞こう
  - \* 2月18日(午後)見学  
奈良市環境消美工場、京都水垂最終処分場など3班に分かれて見学
  - \* 2月25日 講義  
ごみについて考える
  - \* 3月 3日 ごみ問題について提言!

1999/12/20

## 環境学担当者からの連絡とお願い

環境学担当 上浦・大内・中道・屋鋪

3学期の環境学 <ごみは21世紀に残していいの?~ごみ達の叫び~>を実施するにあたり、以下のような協力をお願いします。

1. 1月11日の始業式の日の掃除について
  - \* 大掃除のとき、教室のごみはすべて、ごみ置き場に持っていく。担当者(上浦・屋鋪)が袋に学年とクラス名を書きます。一朝の会で連絡する。
  - \* それ以後のごみは、教室においておく。
  - \* 式の折に、環境学での取り組みの連絡をする。
2. 1月14日(金)の作業
  - \* 14日の昼の会で、各クラスのごみを中3教室前に届けてもらう。学年・クラスを明記する。一中3の教室で調査:1クラス

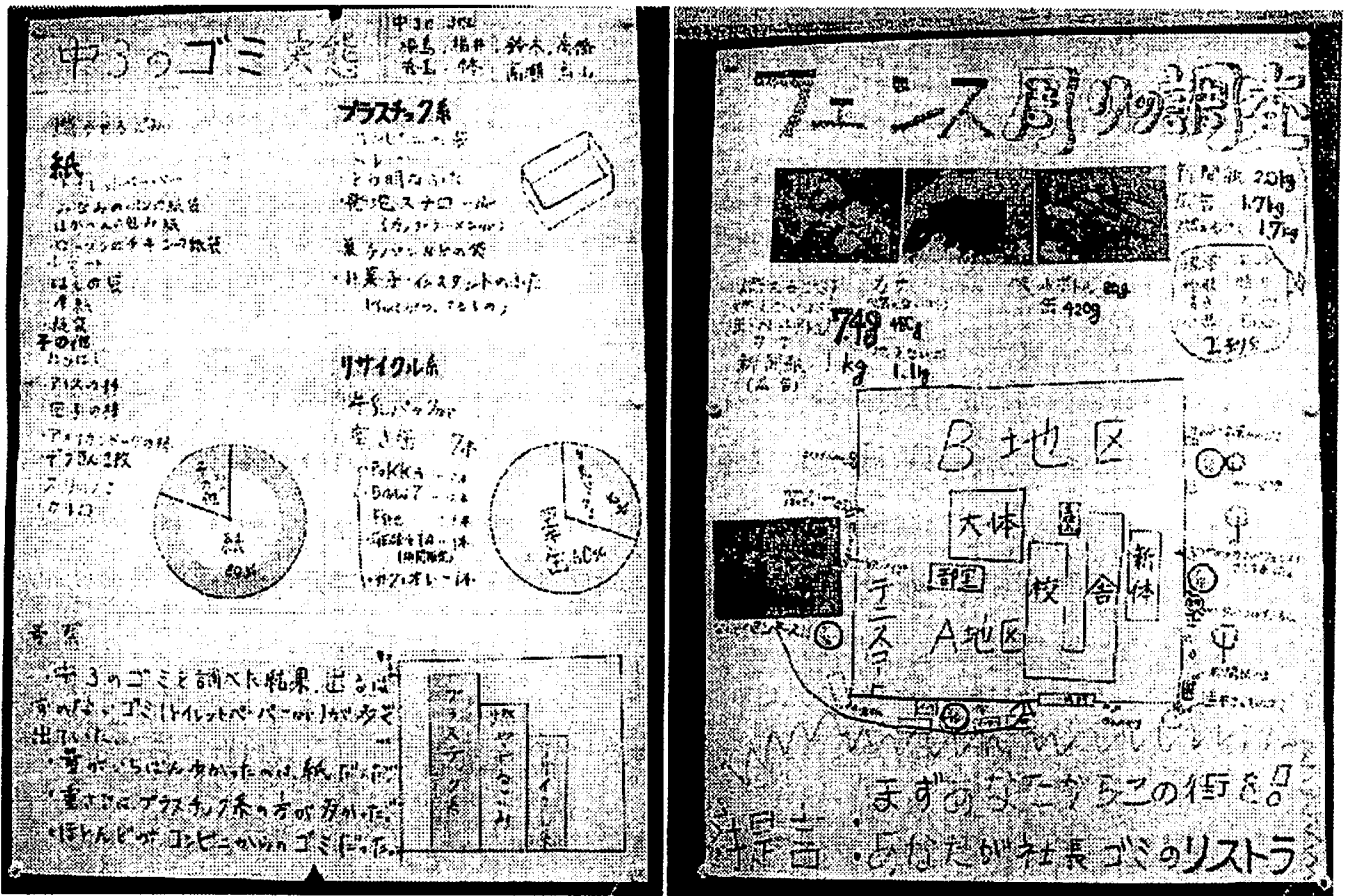
<ごみの実態調査>でこんな事をやる予定です。

- \* ごみを分類する
  - 1 燃やせるごみ 紙 ; 生ごみ ; その他
  - 2 燃やせないごみ ガラス ; 陶器 ; 金属 ; スプレー ; その他
  - 3 その他のプラスチック
  - 4 リサイクル系 紙バック ; ペットボトル ; 缶
- \* ごみを測る それぞれのごみの重さを測る。
- \* ごみを記録する どんなごみが、どれだけあったかを記録する。

- \* 1月28日(金) 6, 7時間日 これが学校のごみの実態!  
壁新聞づくり 8人1班で1枚の壁新聞作成



【資料9】



(4) 模擬講義「ごみ問題を語る」……2時間（2月25日）

始めに先週の見学の報告があり、その後30分間、ビデオ「ごみの真実」（第18回教育番組国際コンクール日本賞初等教育部門受賞作品…アメリカの作品）を視聴した。

次に4人の教師が次のA～Dの人物に扮し、それぞれの人物の立場に立って約10分間、次のように主張した。

A. 環境保護団体 事務局長（市民代表）……「キーワードは3R」

環境を守るために何が大切で、一般市民は何をしなければならないかよく考えなければならない。環境を守るためにはリサイクル・リユース・リデュースが大切だ。

B. 某大学教授……「リサイクルは無駄だ」

リサイクルが結局は環境破壊を起こしており、リサイクルより「ものを大切に使う」という精神こそ今必要である。

C. 某有名自動車メーカー社長……「便利な今の生活やめられる？」

私たちは技術革新のおかげで便利で豊かな生活をおくることができ、大量生産、大量消費がそれを支えている。企業は環境を守る努力をしながら、便利なものをたくさん生産するので、皆さんはそれをどんどん使って欲しい。

D. 元国連事務総長……「南北問題を考えよう」

環境問題は地球規模の問題であり、南北差の問題が特に重要で困難な問題を抱えている。環境問題は、それぞれの国の立場に立って考えていかなければならない。

その後、生徒達にA～Dの人物に対して質問させたり、意見を述べさせたりした。



(5) いろいろな教科における、ごみに関する授業

2月15～25日の間に、いろいろな教科で次のようなごみに関する授業を行った。

◆国語科「新聞記事を書こう」……【研究紀要第42集（Ⅱ）P.213～】

新聞記事「お弁当悲しい命の旅」を読んで、8コマ漫画「弁子ちゃんの生涯」に添える新聞記事を書く。

◆数学科「リサイクルで数学する」

アルミ缶を原材料から製造したときと、リサイクルして製造したときの、使用電力量と経費を計算し、リサイクルで電力や経費がどれくらい節約できるか計算した。次に、パソコンを使って、牛乳瓶のリサイクルのシミュレーション（表計算ソフトでもとの牛乳瓶の本数、回収回数、回収率から牛乳瓶の残存本数を計算する）を行った。

◆社会科「ゴミは21世紀に残していいの？—社会科編—」（全3時間）

①大量のゴミはなぜ発生するのか？

「大量生産→大量宣伝→大量消費→大量廃棄→大量のゴミの発生」というサイクルを説明してから、「“大量のゴミ”から“生産”への道筋（＝リサイクル）」がないことが問題点であることを指摘。

②一廃と産廃

「ゴミ＝廃棄物」を大雑把に2分類すると「一般廃棄物」と「産業廃棄物」になること、それぞれが法律上どのように定義されているか、一廃と産廃の排出量比や総排出量について解説。

全国（95年）          奈良

一廃    約5千万トン      50.3万トン

産廃    約4億トン        128.7万トン

次に、最終的にはどのように処分されているのかについて、各種処分場（遮断型最終処分場、管理型最終処分場、安定型最終処分場）の解説と図解を見たのちに、「処分場からの有害物質排出」という新聞記事を読み、「ゴミは処分場に入れば大丈夫」という認識の誤りを指摘した。

③奈良と産廃問題

まず「奈良で出た廃棄物はすべて奈良で処理されているわけではない」とことや「奈良近辺の処分場所在地」について新聞記事や地図で確認。

そして、「山のなかのゴミの山」と呼ばれている産廃によって出来た「ゴミの山」の写真を見て資料の解説を読み、産廃問題は我々のすぐ近くで起こっていることについて認識させた。

最後に、「どのようにすればこの問題は解決できるのだろうか？」と問いを投げかけて授業を終えた。（ここまで1時間）

※続く2時間で「ゴミとリサイクル」をテーマとしたテレビのドキュメント番組（NHKスペシャル「リサイクルは幻想か」「環境革命は企業を変える」）を視聴した。

◆理科「物質の循環とごみ」

「サイクル」をキーワードに、炭素の循環と人間生活、窒素の循環と人間生活について、それぞれ1時間の講義を展開した。理科2分野では、物質の循環として「炭素の循環」「窒素の循環」が取り上げられているが、本講義では、それぞれの内容に「人間生活」を関連させ、化石燃料の燃焼とそれに関わる二酸化炭素の増加、森林破壊による二酸化炭素吸収源の減少、窒素肥料の合成とそれに関わる富栄養化の問題を取り上げた。

その後、「ごみとサイクル」をテーマに、1時間の講義を行った。この中で、ゴミを構成する、金属・紙・ガラス・プラスチック等の物質の性質について説明し、プラスチックを燃焼させる演示実験

を行った。

◆技術家庭科「家庭から出るごみ、産業廃棄物など」

◆保健体育「ごみと健康…ダイオキシンを中心に」

(6) ごみの提言作成……2時間(3月3日)

生徒が1人ずつ、B5判の用紙にごみ問題のポスターを描き、その裏にポスター制作の意図(生徒のごみ問題に対する提言)を書いた。……【資料10】

### 3. 取り組みに対する生徒の評価

2000年3月に、1年間の授業を受け終えた生徒を対象に「環境学」のアンケート調査を行った。3学期の取り組みに関係しているところだけを取り出して、次にその結果を示す。

なお、4～1は、4：そう思う、3：どちらかというと思う、2：どちらかというと思わない、1：そう思わないを表しており、数値は、回答者数を%で表したものである。

質問1 3学期の「学校のごみ調査」について

	4	3	2	1
①興味もてた……………	36	44	14	6
②壁新聞づくりはうまくいった……	24	46	24	6

[意見や感想]

- ・分別がなっていない。(15人)
- ・いろんな所にゴミがあった。(9人)
- ・ゴミ分けはくさかった。(5人)
- ・学校から出るゴミは意外と多かった(4人)
- ・壁新聞良かった。(4人)
- ・ゴミの多さにびっくりした。いつもは(分別はしているが)適当に捨てているゴミが、ゴミ袋を調べてみるといろんな種類のゴミがあり、自分自身やってみて、すごく気をつけようと思った。かなり私自身に影響を及ぼした。ゴミを捨てるときにあのことを思い出すようになった。

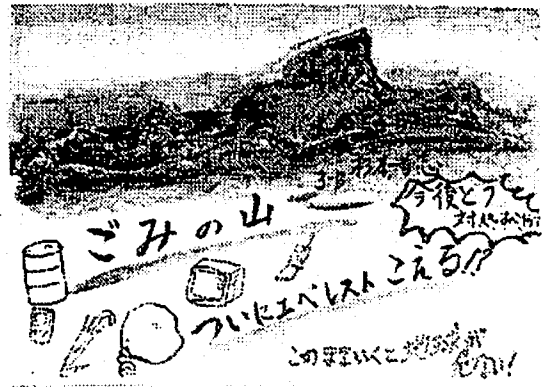
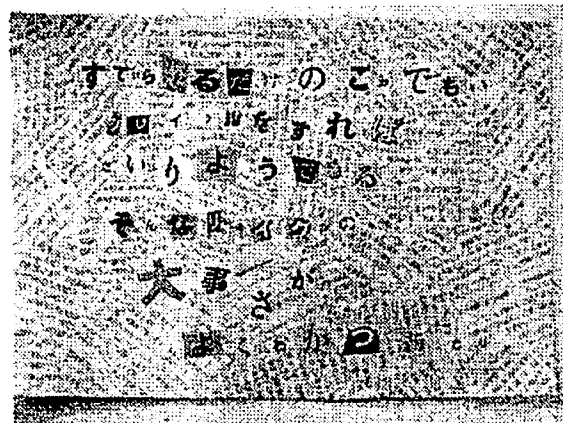
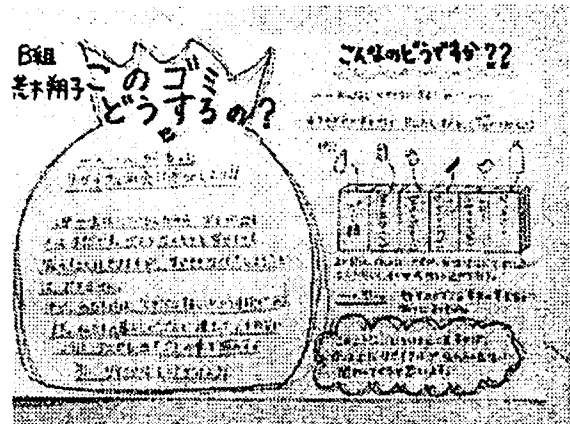
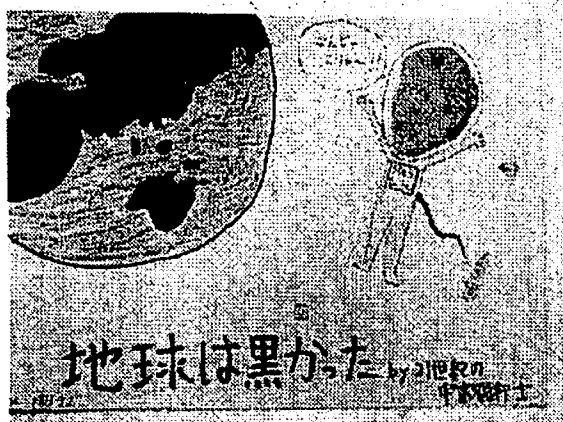
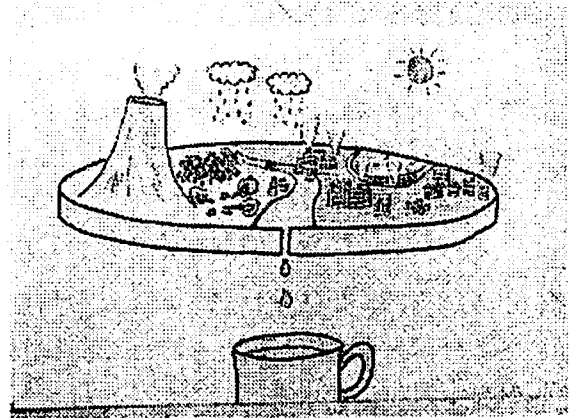
質問2 3学期のごみ問題の講義と提言について

	4	3	2	1
①理解できた……………	34	46	20	1
②興味もてた……………	42	45	10	3

[意見や感想]

- ・いろんな立場から意見を言ってくれて「なるほど」と思った(12人)
- ・リサイクルは無駄だという意見に驚いた。(6人)
- ・リサイクルに興味もてた。(5人)
- ・先生方が工夫なさっていておもしろかった。(3人)
- ・全ての意見に長所や短所があって最良の方法を見つけることは難しいんだな、と思った。
- ・興味は持てたが、リサイクルが無駄、というのはなかなか理解できない。どうするのが一番いいのか真剣に考えねばならない。
- ・少し先生方だけで楽しんでおられたような気がする。生徒にもやらしてくれたらもっとゴミのことにふれることが出来ておもしろい気がする。
- ・「提言」の意味が分からなくて困った。でも一生懸命考えたおかげでゴミ問題に深く関わられたよう

【資料10】



な気がする。

質問3 3学期は、環境学以外の授業でも「ごみ問題」が取り上げられたと思います。このことについて教えてください。

①教科の授業で取り上げられたごみ問題を、環境学と関連してとらえられた

	4	3	2	1
.....	42	41	14	2
②興味をもてた.....	30	43	22	5

[意見や感想]

- ・ゴミはいろんな分野で問題になってるなあ。(19人)
- ・理科、社会、数学と環境学だらけで少し飽きた。(12人)
- ・保健や理科の授業は関連できたが、数学の授業は無理だと思う。(6人)

- ・特に数学（山上先生：4人）と社会（武田先生：2人）の授業が楽しかった。
- ・社会のビデオが良かった。（4人）
- ・保健の授業を聞いて、なかなか国も信用できないと思った
- ・国語でコンビニ弁当、社会でビデオなどを見てゴミのことが少し分かった。特に前者は深く考えることが出来た。教科と関連させるのはいいことだ。

生徒へのアンケート調査の結果を見ると、この取り組みのねらいはほぼ達成できたことが分かる。学校のごみ調査は、生徒達は思ったよりも熱心に取り組んだ。ごみ調査をすることにより、自分達がいかに多くのゴミを排出しているか、ごみの分別の決まりがあるのにそれがいかに守られていないか、そういうことが生徒達は身にしみて分かったと思う。ごみの最終処分場の見学も、その様な施設を見学するのが初めての生徒が多く、熱心に見学して、施設の職員にいろいろ質問をする生徒が目立った。模擬講義は、87%の生徒が興味を持って聞いてくれた。特に「リサイクルは無駄だ」という意見には驚いたようで、環境に関しては多様な考えがあり、どの考えが正しいのか、生徒一人ひとりが答を見つけていかなければならないということがよく分かったと思う。講義の後、生徒から質問が相次いだため、授業時間を延長しなければならなかった。このようなことは普通の授業ではあまりないことで、このことからしても生徒がいかに興味を持ったかが分かる。各教科で取り組んだごみの授業は、全体的には生徒に好評であった。ごみがいろいろなところで問題になっていることがよく分かったと多くの生徒が感想で述べている。最後の提言のポスターは、難しかったという生徒もいたが、多くの生徒が楽しみながら自分の環境についての思いを、自由に伸び伸びと表現していたと思う。ポスターは廊下にはり出して全校の教師、生徒に見てもらったが好評であった。

今後の課題としては、次の2点が挙げられる。その1つは、1, 2学期に生徒が行ったフィールドワークの成果をいかに生かすかということである。今回の取り組みはフィールドワークと直接関係するわけではなかったが、やはりフィールドワークの成果を何らかの形で生かすような取り組みが望まれる。もう1つの課題は、いろいろな教科で行った「環境学」の授業をいかに充実させるかということである。「環境学」だらけで飽きたという生徒もいたが、授業によっては内容が重複したこともあったかもしれない。教科相互の連絡を密にしながら、授業のやり方を工夫し、更に多くの教科で「環境学」の授業を実践していきたいと考えている。

## IV. 講演会について

環境学では、社会での環境問題に直に触れたり、環境に関わって活躍している方の話を聞いたり、見学をしたりする機会をつくっている。今年度の見学会は、ごみ問題の講義とあわせて実施したので、先に触れた。ここでは、11月19日に「宇宙太陽光発電」と題し、京都大学 松本紘氏によって行われた講演会について報告したい。

### 1. 講演要旨

宇宙空間にある太陽光を利用して、「宇宙太陽発電所」をつくる。この夢のようなプロジェクトが実際に行われているという紹介から講演は始まった。

現在の地球が抱えている「人口問題」「資源・エネルギー問題」「環境問題」についての簡単な説明のあと、その根底にあるのは人口爆発であり、この問題には今から本気で取り組まないといけないという指摘があった。その上で、一つの問題提起として、エネルギー問題の一つの解決策として、宇宙

空間に発電所を作ろうということになったということである。

もちろん宇宙空間に発電所をつくるという事は簡単なことではなく、技術的な問題や費用の問題など、解決しなくては行けない問題は多い。その一つ一つの問題を解決していく過程などを丁寧に説明された。例えば、宇宙空間で得た電力をどのように地上へ送るのかといった問題は、電力をマイクロ波によって地上へ送るという技術の開発のために、電池を積んでいない模型飛行機に地面を走るラジコンカーからマイクロ波を送り、飛行を続けさせる実験を紹介された（TV番組でも紹介され、そのVTRなども使いながら）。また、マイクロ波による健康被害のことについても、国の基準などを例にだしながらその安全性について確認された。

非常に難しい話も、VTRやパワーポイントなどを使いながら、とても興味深く話された。「宇宙に発電所をつくるという発想の原点は閉鎖系でダメなら開放系にすればいいという単純な発想からでした」という先生の言葉が印象的であった。講演後の質疑応答も生徒からの質問が相次ぎ、時間を延長して行わなければならないほどであった。クリーンエネルギーの確保が今日の一つの大きな課題であるということが生徒たちにも大きな夢とともに伝わったに違いない。

## 2. 講演後のアンケートのまとめ

講演を聞いて、生徒達が何を感じ、いかに考えたかを知るためにアンケート調査を行った。アンケートの結果を次に示す。

### (1) 講演のわかりやすさと講演に対する興味

次の結果の表の通り5段階で評価させた。

(数字は%)

	すごく	まあまあ	ふつう	あんまり	ぜんぜん
(ア) わかりやすかった?	32	58	6	4	0
(イ) 興味をもてた?	37	57	5	0	1

「すごく」と「まあまあ」を合わせると、肯定的な評価が両方共9割を越えており、この講演は生徒にとってわかりやすく興味もてるものであったといえる。「すごく」という、最高の評価も3割を越えていて、否定的な評価はほとんどなかった。宇宙太陽光発電という夢と希望のある話は、生徒の興味を強く引いたと考えられる。

### (2) 一番印象に残っている内容

これは、文章で答えさせた。やはり、この講演のテーマである「宇宙太陽光発電計画」を挙げた生徒が多かった。宇宙太陽光発電所の巨大さやマイクロ波で電力を送るアイデアの面白さ、エネルギー問題がこの計画で解決できるかもしれないということが生徒の印象に残ったと思われる。

次に多かったのは、「人口爆発」と「エネルギー問題」である。「人口爆発」については、パソコンを使って人口増加の割合を音楽のリズムに例えて説明されたのが生徒には印象深かったようである。「エネルギー問題」については、後40年で石油がなくなるという話に生徒はたいへんショックを受けた。自分たちが大人になったときのことだから、この話を切っ掛けに生徒たちが資源やエネルギーの問題を自分の問題として真剣に考えるようになったことが講演の感想からもうかがえる。

### (3) 講演の感想

これも、文章を自由に書かせた。最も多かった感想は、「宇宙太陽光発電」が素晴らしいと素直に賛辞したもので、短文にまとめると次のようなものである。

- ・電力をマイクロ波にのせて地上に送るとか、巨大な太陽電池を打ち上げるとかのアイデアと研究はすごいと思った。
- ・宇宙に行って生活出来るようになるというのは夢物語でしたが、近い将来実現するそうです。すごく楽しみです。

講演の仕方が上手であったとか講演が環境の勉強に参考になったとかという感想も多かった。

- ・堅苦しい勉強みたいな感じがしなかったし、パソコンを使っていたのも面白かったです。
- ・地球の温暖化や森林伐採、宇宙や地球の未来、人類の未来などとても興味深いことをたくさんおっしゃられたのですごくよく分かったし、参考になりました。

資源の大切さに気付いた次のように感想もあった。

- ・人口爆発や資源の枯渇でこれからの将来、人間は存在することが出来るのかと心配していたけど、今の世の中には宇宙の光を利用しようとしている試みがあり、実際に将来は無限にそれを利用できると聞いて安心した。でも、日本を含めて先進国の資源の利用が多すぎる。私たち一人ひとりがエネルギーの節約をしなければならない。
- ・今まで何も考えずに生きてきたけど、これからはもっと先のことをしっかり考えて生きていかないとだめだと思いました。目の前の自分の利益だけを考えずに行動できる人がもっと増えていけばいいと思います。

「宇宙太陽光発電」の実現について懐疑的な感想も少しあった。

- ・先生があんなに熱心にみんなに宇宙へ行くことをすすめておられる割に、デメリットや問題点が多くはないかとも思った。
- ・大部分の電力を宇宙太陽光発電から得るのは難しいことだと思う。やはり、自分たちが意識して資源の節約について考えていかないと、地球の未来は危ないでしょう。
- ・太陽系を開発するのは賛成ではない。結局、人間は地球でしたことをまた繰り返すだけだから。そして、それは人間のエゴでもあるように思う。

## V. 生徒のアンケート結果

3学期末に実施したアンケートの結果について、一部は先に紹介した。それ以外の結果は以下の通りである。

なお、4～1は、4：そう思う、3：どちらかというと思う、2：どちらかというと思わない、1：そう思わないを表しており、数値は、回答者数を％で表したものである。

I. 次の取り組みについて答えて下さい。

(1) フィールドワーク

	4	3	2	1
①オリエンテーションは十分だった	15	48	28	9
③テーマ選択はうまくいった	24	36	29	12
④積極的に取り組めた	27	42	26	5
⑤うまくやれた	24	48	26	3
⑥チームワークは良かった	16	48	28	9
⑦時間は十分あった	36	36	35	16

フィールドワークについては、概ね肯定的に受けとめられていることがうかがえる。約70%の生徒が積極的に取り組み、うまくやれたという成就感を得ていることは評価できよう。今年度は講義に当

てる時間を減らし、フィールドワークに時間を多くとった結果、72%の生徒が時間が十分であったと考えている。フィールドワークの中で、否定的意見が一番多かったのは、テーマ選択についてであり、41%の生徒がテーマ選択がうまくいかなかったと回答している。

自由記述で書かせた意見や感想には、次のようなものがあった。

◎班の決め方やチームワークに関する意見や感想（多数）

- ・班がまとまっていなくてやりずらかった。
- ・テーマごとに集まって班を決めたかった。
- ・好きな物同士の方が積極性が出る。

◎テーマに関する意見や感想

- ・テーマ（田んぼ）が環境と結びついていない。テーマをもっと考えるべきだった。
- ・テーマが世間の関心から離れたものだったのでデータがとりにくかった。

◎フィールドワークの期間についての意見や感想

- ・期間が長かった。
- ・1学期は、1年間期間があると思ったのでだらけてしまった。最後で少し焦った。
- ・夏休みに計画が進まなかった。

◎実際の活動についての意見や感想

- ・フィールドワークは結構緊張した。質問もどのように聞けばいいのか難しかった。
- ・街頭アンケートや外国の大使館などなかなか出来ない経験が出来て良かった。
- ・発電所に行ったり家の電気について調べたり出来ておもしろかった。
- ・実際に調べてみるとどうやって調べればいいのか迷った。
- ・自分たちで行動するのが楽しかった。

◎レポート作成に関して

- ・資料はインターネットでたくさん集まったがまとめるのが難しかった。
- ・フィールドワークの時みんなとあまり意見交換が出来なかった。

(2) 発表会について

	4	3	2	1
①積極的に取り組めた	25	48	20	6
②発表方法はうまくいった	18	47	25	10
③発表準備の時間は十分あった	8	37	45	9

発表準備の時間は十分でなかったと答えた生徒が54%にのぼっている点、反省すべきだろう。

自由記述で書かせた意見や感想には、次のようなものがあった。

◎チームワークについて

- ・うまく班内での役割が決められず発表会の日にどたばたした（6人）。
- ・他の班は良くまとまっていてびっくりした。（10人）
- ・発表会の時、班長だけがしゃべっていた（2人）。みんなでやるべき。

◎発表方法について

- ・発表で班の人が作ってくれた水車を用いたのは良かった。あとOHPや模造紙もうまくいった。
- ・劇っぽいのが良かった。（2人）
- ・もっと原稿を考えておくべきだった。
- ・パソコンを使い結構わかりやすくまとまった。（2人）

・ビデオを使ったインタビュー方式は良かった。

## II. 環境学全体について答えて下さい。

	4	3	2	1
(1)積極的に取り組めた。	20	60	18	2
(2)興味がもてた。	34	48	16	2
(3)環境学を学んだことによって、日常の生活スタイルは変わりましたか。				
①家庭生活面で変化があらわれた。	16	42	32	9
②学校生活面で変化があらわれた。	15	34	38	12
③読書傾向や学習面で変化があらわれた。	9	22	46	23
④具体的な生活面での変化があれば書きなさい。(例：シャンプーを代えた……)				

### [意見や感想]

#### ◎ごみに関して

- ・ゴミの分別に気を使うようになった。(32人)
- ・ゴミを捨てるとき一考するようになった。(2人)
- ・生ゴミは肥料に。(2人)      ・トレイの回収に協力する。(4人)
- ・物を買ったとき紙袋や包装紙をもらわないようにしている。(2人)
- ・家族にも分別を勧めている。(4人)

#### ◎省エネに関して

- ・電気の節約を意識するようになった。こまめに消すようにした。(8人)
- ・暖房をこまめに消すようにした。      ・TVの主電源を消すようにした。(2人)

#### ◎資源の節約に関して

- ・シャンプーの詰め替えを利用している。(7人)
- ・ペットボトルのリサイクルをしている。(3人)
- ・ティッシュの無駄使いをやめた。(4人)      ・無駄買いをやめた。(2人)

#### ◎意識に関して

- ・ゴミ関係の本、環境関係の本を読むようにした。(3人)
- ・過剰包装に敏感になった。      ・新聞でゴミ関係の記事は読むようになった。(4人)

#### ◎否定的

- ・ない。(22人)

#### ◎その他

- ・お菓子を食えるとき、成分表をチェックしている。(2人)      ・音に敏感になった。
- ・シャンプーは石鹼シャンプーにした。      ・ラーメンの汁を捨てる時魚が頭をよぎる。

(4) 1年の活動を通じて、次のどれが良かったですか。○を2つして下さい。

ア. 班ごとのフィールドワーク	40%	イ. 講演「宇宙太陽光発電」	50%
ウ. 学校のごみ調査	24%	エ. ごみ関係の見学	38%
オ. ごみの講義	9%	カ. ごみの提言作成	9%



(5) 後輩に「環境学とはこんな教科だよ」と説明するなら、どんな説明をしますか。また、どんなアドバイスをしますか。

◎内容に関して

- ・地球の人間の共生を学ぶ時間。学んだところで何も変えられはしないけど、人間のおごりとか、そういうのを見直せる。
- ・環境学はどれだけ自分たちの知識を増やせるかという教科だと思う。自分の持っている知識、行動力、また増えてくる知識が混ぜ合わさって出来ていると思う。
- ・環境に対し総合的にアプローチし、身近な所から宇宙に至るまで様々なことを学べる教科（2人）
- ・すごく日常と密接な教科だと思う。何が正しいとかだけでなく、もっと大きな、そして先の長い範囲で考えないといけない。

◎肯定的意見

- ・自分の行動力や物事を考える力、今まで学校で培った力を最大限に発揮できる教科。
- ・自分の環境に対する気持ちの持ち方を考えさせられる教科。
- ・環境について大勢で意見交換をする教科。
- ・面倒だけどハマル。（3人）
- ・調べれば調べるほどどんどんいろんなことが分かってきて楽しくなる。

◎自主的学習と捉えている意見

- ・「環境問題をどうやって解決するか？」を考え自分なりの答えを出す教科。
- ・環境学は先生に教えてもらう教科ではない。だからよけい難しいけれど、その分おもしろいと思う。
- ・今自分が置かれている状況を知り、それに意見を持ち自分で出来ることを考える教科。（2人）

◎アドバイス

- ・テーマを決めるときは本当に自分のしたいことを選ばないと、あとの活動が難しい。
- ・テーマ選びには気をつけろ（4人）
- ・プリントは全部緩じておくべきだ。
- ・TVのゴミ特集は見るべきだ。 ・インターネットを活用すべき。
- ・インターネットに頼ってはいけない。インターネットにはいろんな人の意見が載っているがそれらを全部鵜呑みにしてはいけない。インターネットで調べればすぐ分かるから、というのは安易な考えだ。自分が調べたいものほど、なかなかインターネットでは見つからない。だからインターネットだけに頼るよりも図書館や街頭インタビュー、関係する省庁への手紙などもっと方法を増やすべきだ。
- ・前半はテーマ選びに気を使え。後半は自分の意見をしっかり述べろ。
- ・夏休みにしっかり調べておけ。夏休みが終わって発表までは短い。夏休みに資料を集め、夏が終わってからは発表の準備、ぐらいの気持ちでいるといい。
- ・早め早めに行動を起こせ。あとからどんどん掘り下げたいことが見つかるからそれらをすぐ行動に移す。みんなでフィールドワークに行くと仲良くなれる。

◎否定的意見

- ・欠点だらけ。今すぐやめてほしい。

①興味ある人とない人の差が激しい。②ない人は何もやらないでいいがその分やる人は疲れる。③知っていることしかしてくれない。④見学増やしてほしい ④一言でいうとおもしろくない。個人的に興味があるのだからそれを引き出すことが出来ない雰囲気。

- ・7限目までであるのはしんどい。(2人)
- ・だらけてしまうとどこまでもだらけてしまう。

(6) 環境学を終えて一句！(俳句または短歌を1句つくってください)

◎ごみ

- ・町のゴミ いつになったら 消えるのか ゴミの問題 君はどう見る
- ・機械では 分別できる 限界が ゴミの管理は 人間がしろ
- ・ゴミのない 世界はいいと いうだけじゃ ゴミは勝手に 減らないんだよ
- ・朝早く ゴミを出してる お母さん ゴミの行方も わからぬままに
- ・これからは ゴミを資源と 呼ぶ時代
- ・無駄買いで あとでくるのは ゴミのつけ
- ・人類の 進歩が築いた ゴミの山 青い地球 心豊かに
- ・僕たちを もっと使って くださいな まだまだゴミには 早すぎます
- ・ゴミと金 どちらが大事 業者さん
- ・明日のゴミ 僕らの中にも 「エゴ」ってゴミ
- ・ごみごみと 混雑している 人の波 ほらまた落ちた 煙草の吸い殻
- ・ゴミだって もう一度使える リサイクル 守っていこう 緑の地球
- ・ゴミ分別 ダイオキシンを 防ぐ道 リサイクルして 地球復活

◎リサイクル

- ・いつまでも 青い地球に すんでいたい だから取り組む リサイクル
- ・空き缶を 捨てずに集める リサイクル 続けていこう 未来のために
- ・リサイクル ゴミニウモレタ ユメノシマ
- ・リサイクル やり方次第で 悪循環
- ・リサイクル 物から物へと 変化する

◎環境破壊・環境保護

- ・田圃でも 環境守れる 無農薬
- ・環境は 一人一人が 守るべき かけがいのない 大切な物
- ・心和む 水田守ろう 日本の美
- ・少しでも 続けることが 環境保全
- ・人間は もっと自然を 見なきゃだめ 花も草木も きっと泣いてる
- ・すすみゆく 環境破壊の その中で 住宅地になった ドングリの森
- ・返してよ 人間だけの 物じゃないんだ

◎未来に向けて

- ・忘れては いけない環境 魔の手はもう すぐ近くにまで きているからね
- ・未来にも 伝えてあげよう 青い星
- ・未来への 大きな一歩 踏み出そう
- ・目指そうよ 地球も心も きれい好き
- ・青い地球 いつになっても そのままで

◎ライフスタイル

- ・コンビニに 頼りすぎて 現代人 大切なのは 意識の改革
- ・産業の 進歩と共に 公害だ 自然と便利 どちらをとるか

- ・お菓子には いろんな危険 詰まってる 知識をつけて 自覚を持とう

#### ◎不安や疑問

- ・どうしよう 四〇年後は 資源ない
- ・環境の 学習終えて ふと思う 僕らの未来は どうなるのやら
- ・環境を 学んだところで 変えられず

#### ◎環境学

- ・知らぬこと いろいろ知った 一年間
- ・環境学 学び終えて 環境人
- ・環境学 やってみて わかったんだ ほんとのところ 地球は危ない
- ・環境学 七限目で なければいいのに
- ・疲れたよ 七限目は ねむたいで
- ・一年で 環境の全て 知れないが そこから興味が 生まれてくるかも

## VI 成果と今後の課題

### 1. フィールドワーク

99年度は、環境学の実施学年が今までの4年から3年に変更になった。98年度までは、3年の奈良学で、フィールドワークの方法を学び、フィールドワークの経験をした後に、環境学を学んでいた。環境学を3年で実施するためには、フィールドワークの方法についても、従来以上に丁寧に指導する必要性が生じた。そのため、フィールドワークのオリエンテーションにも多くの時間を割いた。このことにより、講義のための時間を削ってしまう結果につながったことは否めない。

フィールドワークを実施していく中で感じたことは、今まで以上にインターネットに頼る班が増えたことである。最後のアンケートにもインターネットに関する記述が多く見られたことから、彼らのインターネットに対する関心が高いことがうかがえる。インターネットの利用は悪いことではないが、何よりもまず、自らの足で歩き、目で見えることを大切にしたいと思う。

各班のレポートの終わりには、提言を入れさせている。本報告における各班の取り組みのまとめでは、この提言を中心に紹介した。環境問題について、今後何をしていけばよいかを考える上で、こうした提言は有効と考える。

フィールドワークの発表会では、パワーポイントを利用した発表がいくつかあった。また、劇を演じる班がいくつかあったことも今年の特徴である。全体的に、発表に工夫が見られ、興味深く聞くことができた。しかし、99年度も質疑応答の時間を十分にとる余裕がなかったことは残念である。

### 2. 教科との連携

98年度には、環境学と各教科との連携を深めることを意図し、1学期に環境学の講義テーマに沿った授業を、いろいろな教科で実施してもらうように依頼した。いくつかの教科で協力が得られたことはよかったが、実施時期にかなり幅ができたため、生徒自身が講義の全体像を把握しにくかったと思われる。

今年度は、環境学の時間を使っての講義はほとんどなかった。代わって、3学期に、各教科でごみに関する授業をしてもらうように依頼し、6つの教科で協力が得られた。教科どうしの意見交換や、内容の有機的な連携などの課題は残ったが、こうした取り組みは意義あるものとする。

### 3. 資料の充実

98、99年度と、環境学のための教科書は市販のものを購入させた。しかし、これを使用して授業をするのではなく、資料の一つとして適宜利用するように指示した。図書室にも環境関連図書のコーナーを設けているが、図書の補充は行えなかった。環境関係の本は毎年のように発行されるし、また、データは新しいものが必要となるので、計画的に図書も充実させていく必要がある。

毎年のフィールドワークのレポートは、資料として貸し出しを行っている。99年度は、フィールドワークのオリエンテーションにおいて、今までの取り組みのキーワードを紹介したが、これらの資料はデータベース化を試み、より利用しやすい工夫が望まれる。

### 4. 外に開かれた環境学へ

フィールドワークのレポートにおける提言、ごみ問題についての壁新聞の作成やポスター制作など、環境学からの積極的な提言を行ってきたことはよかったと思う。今後さらに、これらを本校のホームページに掲載し、外部に向けて発信したり、外部の人を招いての発表会を企画するなど、外へ向かっての発信も積極的に行っていきたい。

### 5. 評価の問題

環境学の目標については、担当者間で共通理解を持った上で進めている。しかし、生徒に対してのメッセージがどれほど伝わっているかは疑問も残る。オリエンテーションにおいては、環境学の目標をはっきりと示し、1年間の取り組み後には、生徒各自がどれだけ目標を達成できたかを自己評価できるシステムの導入も検討する必要があると考える。

### 6. 今後の総合学習のあり方

新学習指導要領において、総合的な学習の時間が設定されることとも関連し、本校における総合学習のあり方は、低学年・中学年・高学年それぞれについて、検討が進められている。その中で、環境学担当者をどのようにしていくか、現在のように3クラス同時に進めるのがよいのかどうかの議論も進められている。このことは、環境学の性格付けとも関連するものであり、今後の方向性をしっかり見定め、どんな環境学にするのが望ましいのかを、総合学習の全体像の検討とともに、今一度とらえ直す必要があると考える。

## 1999年度〈世界学〉の取り組み

笠井智代・塩川史・吉田隆

### はじめに

準備期間を十分に設けず、本校では、奈良学、環境学に続く第3番目の総合教科として世界学の初年度が始まり、担当者の試行錯誤と、「総合」をめぐる議論が続くうちに、1年間はあっという間に終わった。本稿は、「考えながら走った」世界学初年度の記録である。

## I 世界学創設

### 1. 創設の背景

世界学開講に向けての、主たるプッシュ要因は、本校で世界に目を向けた実践が広がってきたことにある。1995年、初の海外修学旅行の行き先がシンガポールとなり、現地の高校生と交流を始めたのを皮切りに、1996年にはシンガポールの高校生を受け入れ、1997年にはシンガポール・マレーシア修学旅行が実現した。また1999年にもシンガポールへの修学旅行が決まっていた。また、1996年からは、6カ国の高校生の国際フォーラムであるグローバルクラスルームに参加し、テーマに基づいた学習と意見交換をITを利用して行い、年1度のフォーラムで直接会って意見を交わすことになった。2000年6月には本校がホスト校になり、グローバルクラスルーム2000を開催することも決まっていた。1997年からは、グローバルクラスルーム参加校のひとつであるシェトランドのアンダーソンハイスクールとのホームステイによる交流が始まる。以前から行われていた留学生受け入れ、送り出しも、グローバルクラスルーム参加校間での留学制度が始まったこともあり、特に本校から短期・長期で留学していく生徒数が増えた。このような動きの中で、国際教育の必要性が高まったのである。

中等教育学校への移行（2000年度より）、研究開発学校指定（1999年度から2001年度まで）に伴う総合教科の見直しの中、1990年度より3年生を対象に実践されていた奈良学にも検討が加えられた。当初、教科の寄り合い的性格が強く、より総合的にするための改革がくり返されたが、実践が積み重ねられてきたが、テーマのマンネリ化が深刻になるなどの行き詰まりも見せた。さらに、奈良からの発信が言われる中、世界における奈良を学ぶ視点の重要性が指摘されていた。

奈良学の内容は、環境学や世界学、および各教科にその内容を取り込むことが可能であるとして、総合教科の時間としての奈良学はいったん休止し、各教科に吸収した形で実施されることになった。

### 2. 創設の経緯

校務分掌が改編され、それまでの同和教育、研究調査、情報、図書、国際の各分掌がまとめられた研究部によって、国際教育を主軸とした新しい総合教科の検討が1998年度より始まり、翌1999年度から開講される運びとなった。以下は、その履歴である。

#### 5/13 開発教育についてのレクチャー（研究部会議）

中道教諭が、国連ユニセフハウス開発本部訪問の報告をおこなった。ユニセフの提唱する

「開発のための教育」のアウトラインを学ぶ。資料として、「開発教育のすすめ」（西岡尚也著）より、4-2 国際理解教育から開発教育へ、を読む。

- 6/24 国際教育の必要性と多様なあり方を研修  
「国際学」のイメージ→「奈良学」との関連、参加教科、実施学年を検討。プロジェクトチーム発足を定める（研究部会議）。  
プロジェクトチームにより、「国際学」の具体的な提案作り。
- 7/15 総合教科を見なおし「国際学」開講という研究部からの提案に全教官が合意する（研究会議）→これを受けて、研究部全員で「国際学」の具体的なカリキュラムについて考えることになる。
- 9/30, 10/7 「国際学」カリキュラム検討（研究部会議）
- 11/4 総合科カリキュラム、「国際学」の構造、担当教科について提案をまとめる（研究部会議）
- 11/18 教官会議で議論
- 11/25 「国際学」提案を再検討
- 12/2 「国際学」について研修、より具体的な提案を提示（研究部会議）
- 12/9 教官会議で、次の点を議論
- \*1999年度より開講すること
  - \*3年で環境学を実施する  
担当教科英語科1名（固定）+7教科集団から4名（教科を固定しない）
  - \*担当者の負担軽減措置をとる  
これを受けて、教科会議、教科主任会議で検討する
  - \*担当教科については環境学も含めて検討する
- 12/18 新しい総合教科名を「世界学」と決定  
「国際学」では、近代国民国家を前提としてしまい、グローバルな視点が伝わらない。その他の教科名として「地球学」、「地球市民養成講座」、「地球市民学」、「グローバル教育」などの案も出て、興味深い議論が展開された。  
担当教科について決定 → 英語科 2名、国語科、社会科、数学科 各1名
- 2/24 担当者による初会議を行い、今後の方針を決める
- 3/5 開講1年目の生徒は、環境学を受講しないことになる  
環境学についての学習会を開く。
- 3/8 担当者それぞれがプランを持ち寄り、大まかなテーマ設定と、授業形態について決める  
以後、3/15,3/20,3/24,3/29と4月開講に向けて具体的な授業はこびについて検討が重ねられた。

## II 世界学の構造

研究部で作成し、教官会議で共通理解された世界学の基本的構造は、以下の通りであった。

### 1. 「世界学」の対象（基本的概念）

文化、環境、人権、平和、開発

### 2. 「世界学」の目的

- (1) 広い視野、柔軟な思考をもち、個人として自立した世界市民を育てる。

- (2) そのために必要な知識（思考）・技能（行為）・態度（感情）を育てる。
- ・知識：正確で偏見のない知識
  - ・技能：課題の発見、特定化、調査、批判的思考、分析的理由付け、意思伝達（プレゼンテーション）
  - ・態度：異なる立場から物事を見る能力、創造的思惟（creative imagination）
- (3) 自分の考えを表現し、議論できる力を育てる
- (4) 問題を解決するための複数の方法を考え、最善の方法を選択・実行する力を育てる
- (5) より具体的にいえば、次のような力をつける
- ・学び方を学ぶ力
  - ・グローバル・イシュー（問題）の解決に向けて、議論し行動できる力
  - ・多様な価値観を認め、自分の価値観を持つ力
  - ・自分で選択できる力
  - ・自分の意見をきちんと持ち、それを人に正確に伝える力
  - ・ステレオタイプな発想を避けようと努める力
  - ・自分の偏見を自覚し、それと戦い続ける力

### 3. 「世界学」へのアプローチ

- (1) 文化理解的
- ・人類の多様性を認め、その相互理解の必要を説く
  - ・過去指向的
  - ・文化人類学的な観点で、歴史的条件や地理的条件、文化・価値の相対性を重視
- (2) 問題解決的
- ・地球上の人類が当面している重要な課題を、お互いの協力により解決
  - ・未来指向的
  - ・政治学・経済学・社会学・心理学・行動科学など社会諸科学との学際的な共働
- (3) 学際的 社会科学系だけでなく、自然科学系、芸術系も関係する
- (例1)数学
- ・人類の普遍的活動としての数学
  - ・数学マルチカルチャー（いろいろな文化圏で生まれた数学）
  - ・人口、貿易、食料、不平等、軍拡競争などにおける統計利用
- (例2)理科
- ・科学的な研究が世界の歴史で果たした役割
  - ・先端技術、産業発達における科学的概念の説明
  - ・世界の産業、共通語としての科学(例3)芸術
  - ・いろいろな伝統芸術の鑑賞
  - ・文化の所産としての芸術
  - ・国際問題を様々な手法で描く
- (4) 参加的
- 「教えられないもの」を学ぶために、知識注入型ではなく、参加型の学習を多くする

## 4. 「世界学」の方法

- (1) 講義
- (2) フィールドワーク
- (3) ワークショップ
- (4) ゲスト・講演
- (5) レポート・冊子作成
- (6) プレゼンテーション
- (7) ディベート・議論

## 5. 「世界学」の評価と視点

- (1) 教科的な知識や文化・環境・人権・平和に関する認識をどれくらい修得できたか。
- (2) 修得した知識や認識を体系化して理解し、感性を磨いたか。
- (3) 理解したものや感性を日本語と英語で表現し、互いに議論できるか。
- (4) 自己評価

## Ⅲ 1999年度の取り組みのねらい

Ⅱの世界学の構造であげられているように、世界学の網羅する分野は限りなく広く、アプローチの仕方もさまざまだ。何を、どのように押さえるか、担当者の会議が続いた。担当者のうち、1名は世界学を受講する4年の学級担任、2名は生徒が3年時に奈良学を担当しており、世界学カリキュラムは、常に実際の生徒の反応を思い浮かべながら、検討された。

### 1. 内容

年間テーマを「豊かさとは何か」とした。しかし、生徒には表だって示すわけではなく、各単元を通し、常にこのテーマが見えかくれするように授業を組み立てていくことにした。世界に依存するところの大きいモノの豊かさから内面的豊かさへと発展していく形で、方向性を持たせることになった。整理すると、以下の3点にまとめることができる。

- (1) 物質的豊かさと、画一的な価値観に支えられた我々の暮らし、生き方を見なおし、これからの豊かさの本質とは何かを考える。
- (2) モノと人の移動が盛んな、相互依存する世界の現実を認識することで視野を広げ、自分につながるシステムとして世界をとらえる。
- (3) 異なる価値の多元的な存在に気づき、それをありのままに認め、尊重することによって偏狭さを克服し、心を開いた個人の確立を助ける。

こういった内容をいかに魅力ある授業にするかは、教材にかかっているとして、担当者でおもしろいものを集めていく努力をしようということになった。

### 2. 目標とするスキル

世界について知らなければならないことはあまりにも多くあるが、世界学では、知識よりも、参加し活動することにより、態度にまで及ぶ深い理解をめざすことで担当者の意見がまとまった。例えば、生徒が受けてきた奈良学とは異なり、世界学では、活動のスパンを短くし、プレゼンテーションを行う機会を増やし、しかも様々な形のプレゼンテーションを経験させることにした。



また、生徒の実態を見ていくと、自己中心的な軽い会話は存在しても、立場の違いを越えて意見を戦わせることがない。そこで、とりわけディスカッションをできるだけ組み立てていくことにした。

- (1) 広義のコミュニケーション能力（聴解力、文化的背景を見とる力、表現、伝達）
- (2) 研究・調査能力
- (3) 情報活用能力（さまざまなメディアによる情報の収集、選択、加工、伝達）
- (4) 批判的思考と、論理に基づく建設的な意志決定
- (5) 協力と参加

### 3. 授業形態

- (1) 木曜5、6限の連続授業で実施…フィールドワークを実施する上で、午後の2時間連続授業、週の初めと終わりは避けたいという要望が時間割の上で可能になった。
- (2) 少人数クラス（24～25人×5クラス）…生徒の所属クラス（A～C）から均等に、男女比を考えてクラス分けをした。1学期が終わった段階で、雰囲気を変えるために同様の方法でクラス替えをした。
- (3) 教師のスタンス…英語科（2名）、地歴科、数学科、国語科の5名が常に相談しあって、同歩調で進む。特に教科色を出すことはせず、教師は、教科の専門家としてではなく、一先輩市民として生徒に寄り添う。
- (4) さまざまなアクティビティを取り入れ、対話、参加型の授業形態を多く取り入れる…他教科への還元も可能ではないかと思った。
- (5) 時間の終わりには各自がノートにまとめるという作業をすることにより、授業を個人として振り返り、自ら学んだことを言語化することによって学習を深めさせる。

### 4. 評価

取り組みに対する評価についても、以下のようなことを検討した。

#### 4-1 評価のポイント

- (1) 学習の結果だけではなく、プロセスを重視して評価する。

取り組みの姿勢（知的性格）、探求の方法、協働、個人の進歩の状況

- (2) 自己評価、相互評価を取り入れる。

フィードフォワードのためのふりかえり（reflection）…教師のための自己評価だけではなく、生徒の「次」に向けての評価。

#### 4-2 評価の材料

- (1) ノート
- (2) 学習活動・フィールドワーク、発表、討論
- (3) 自己評価
- (4) 相互評価

#### 4-3 評価の通知

具体的には、学期ごとにA、B、Cの3段階で通知簿に記入する。

## IV 1999年度の取り組み

### 1. 年間計画

4/15	1	貿易ゲーム : 24人を7グループに分け、アメリカ・日本・ブラジル・韓国・ウガンダ・バングラデシュの6グループと世界銀行役をつくり、ゲームを行う。	モノの移動
4/22	2	①貿易ゲームのまとめ ①食材から世界をのぞこう(ミニフィールドワーク)…4人×6班 (牛肉・オレンジ・エビ・ワイン・バナナ・紅茶・カカオ・小麦など)	導入として、世界経済のなかに存在する不平等や南北問題を体験する貿易ゲームを実施。その後「豊かさとは何か」という今年度のテーマに取り組む際、身近にある食品を通して、自分たちの生活が世界システムの一部であること、世界各地に依存したものであることを理解する。
5/6	3	食材ミニFW	
5/13	4	発表	
5/27	5	食糧問題のまとめ・補足 : 出てきた食材の分類(かくされた問題のカテゴリー分け/ランテーション型・開発輸入型・グローバル型) ※VTR「エビの向こうにアジアが見える」 ※VTR「世紀を越えて～頭の牛が世界を変えた」: 南北問題・食糧安保問題・飽食の背後にある飢餓と貧困→貿易ゲームを裏付ける資料	
6/3	6	日本に暮らす外国人の講演 ペルー(Sさん)、タイ(Nさん)、インドネシア(Mさん)、ブラジル(Tさん)	人の移動
6/10	7	日本での異文化体験についてのスキット作り	
6/17	8	スキットの発表(30分: 準備の仕上げ、各班15分: 発表とコメント、質疑応答)	
6/27	9	外国人労働者問題(導入) ・外国人労働者を受け入れるべきか否か(この時点での意見をノートに書く) ・ハワイ、ペルー、合衆国への日系移民 ・ヨーロッパ各国における外国人労働者問題: VTR「ETV 特集/ヨーロッパへの移民の波」→外国人の急増による軋轢、国境の壁を高くする動き ・外国人労働者を受け入れるべきか否か(意見がどう変わったかをノートに書く)	
夏休み	外国人労働者問題に関する新聞切り抜き		
9/9	10	留学、スタディツアー経験者の講演(スウェーデン・カナダ・フィリピン)	
9/16	11	世界の高校生への質問作り(南アフリカ・ドイツ・チェコ・イギリス・スウェーデン・クウェート・ブラジル・インドネシア・タイ・インド・韓国・アメリカ)	モノの移動だけでなく、現代の世界では人の移動が急速にすすみ、それまでの社会を変える大きな流れを生み出していることを理解する。日本の国際化という問題を考える際に、外の世界にだけ目を向けるのではなく、自分たち自身の周りに増えつつある外国人労働者問題を取り上げ、どのような問題が現実起こっているのかを調べ、いかに共生していくのかを模索していく。
9/30	12	外国人労働者問題フィールドワーク① 5班に分かれてテーマを選ぶ	
10/7	13	②	
10/14	14	③	
10/28	15	④	
11/4	16	⑤	
11/18	17	⑥発表準備	
11/25	18	発表	
12/2	19	外国人労働者問題ロールディスカッション ①配役決定	

12/15	20	② 役作り、データ収集	
冬休み			
1/13	20	③ 役作り・データ収集	
1/20	21	④ 役作り・司会の準備	
1/21	22	⑤ ロールディスカッション（公開研究会）	
1/27	23	ロールディスカッション振り返り→世界の高校生のアンケート解説	<p>豊かさとは</p> <p>外国人労働者問題を学ぶなかで、言葉や文化の違いが衝突を生むことがわかったが、ではその違いとは何か、世界各地の人々の考える豊かさとは何かを考える。同世代の高校生の暮らしを浮き彫りにすることで、自分たちの考え方の違いや共通点を見つけ、世界にはさまざまな尺度があることを知り、世界につながる自分自身の生き方を探る。</p>
2/3	24	アンケート国別集計	
2/17	25	アンケート国別集計→項目別集計→アンケート結果をポスターに	
2/24	26	ポスター作り→論文指導→ポスターを見てまわる	
3/2	27	論文準備	
3/7	28	論文（1年間の世界学を通じて自分が感じたこと、考えたこと、学んだこと）	
3/13	29	世界学を振り返り、アンケート	

## 2. 授業内容

### 2-1 貿易ゲーム

4/15（2時間）

24人を7つに分け、アメリカ・日本・ブラジル・韓国・ウガンダ・バングラデシュの6グループと世界銀行役をつくり、ゲームを行う。設定は、下表のとおりである。

グループ	世界銀行	日本	アメリカ	韓国	ブラジル	タンザニア	バングラデシュ
人数	2	2	2	4	4	5	5(6)
準備物	見本図						
お金		500X10	x10	x6	x6	x2	x2
ハサミ		3	3	0	0	0	0
定規		2	2	1	1	0	0
三角定規		1	1	0	0	0	0
分度器		1	1	1	1	0	0
コンパス		1	1	0	0	0	0
鉛筆		2	2	0	0	1	1
B4ざら紙		1	1	8	8	7	7
シール		0	0	5	5	5	5

結果：導入としては成功。各クラスとも大変盛り上がった。ゲームの結果の方は、ルールが徹底されたクラスでは順位の移動はほとんどなかったが、他のグループの道具を奪うなどの違法行為があったクラスでは順位が大きく変動した。

## 生徒の感想

- 僕は失業した。人も資源も多くても、道具が少なければ人が余る。僕だけか？(バングラデシュ)
- シールを奪ったり道具を貸してくれなかったり、先進国は汚い。(タンザニア)
- 先進国はあまりうち(タンザニア)にかまってくれなかったような気がした。なんかさみしいです。  
実際もそんな気がする。日本ってあんまり他の国のことかまってると思う。
- 道具を奪われた。(日本)

## 4 / 22 (1時間)

貿易ゲームのまとめ：紙、道具、シール、人数の意味／働かないのか、働けないのか？

## 2-2. 食材から世界をのぞこう (ミニフィールドワーク)

### 4 / 22 (1時間) プレインストーミング「どんな食べ物が日本に入ってきているのか？」

米・オレンジ・牛肉・トウモロコシ・エビ・イカ・タイ・ウナギ・大豆・コーヒー・ナタデココ・モロヘイヤ・ワイン・紅茶・水・スパイス…

各クラス6グループに分け、食材をひとつずつ選んで調査を開始(大教室で関連書籍を貸し出し、パソコン教室も使用。ただし外には出かけない。)

## 5 / 6 (2時間) ミニフィールドワークつづき

### 5 / 13 (2時間) 発表準備、発表

黒板と模造紙だけを使ったごく簡単な発表。

エビ、ワイン、牛肉、バナナ、紅茶、カカオの4人×6グループ(クラスによって食材は違う)

※全体的に、どこの国からどれくらい輸入されているかなどが発表の中心で、問題点に触れた班は少数にとどまった。時間不足もあるが、それよりもフィールドワーク前の動機付け、問題提起が不十分だったことが原因のようだ。

## 5 / 27 (2時間) ミニフィールドワークのまとめ、補足

(1) あふれる輸入食品、タイは日本の台所？

(2) 食材にかくされた問題点のカテゴリー分け

ファミリーレストランでもらった「おいしさブック」からわかる、われわれの問題

・安全性、品質、形にこだわる消費者

・産地は？

・世界的に見た食糧問題：生産国のタイプ別に、今まで出てきた食材を分類してみよう

A プランテーション型 (バナナ・カカオ・紅茶・コーヒー・砂糖…)

→モノカルチャー、不安定、経済的従属などの諸問題

B 開発輸入型・現地契約型 (エビ・ナタデココ・アロエ・ウナギ…)【VTR「エビの向こうにアジアが見える」を部分的に見る】

→環境破壊、流行に左右されるなどの問題

C グローバル型 (牛肉・トウモロコシ・大豆・小麦・米…)【VTR「豊かさの限界～一頭の牛が食卓を変えた～」を部分的に見る】

→飢餓、食糧安保、環境、人口爆発などの諸問題

## 2-3 日本での異文化体験（講演・スキット）

6/3（2時間）講演

留学生ではなく、日本に働きに来た人の話を聞きたい

まちづくり交流センターに依頼（コーディネータ1名付き添い）

- ・日本のイメージ（来日前、後）
- ・日本での異文化体験
- ・モノの行き着く先としての日本を現地の人はどう見ているか

○Sさん（ペルー）

- ・日系3世。ペルーではどの民族でもつきあいに関係ない。みんなペルー人。
- ・社会福祉士をしていたが、日本に来た直後はトラック工場で働いた。
- ・日本人は人間の表面だけを見ているのでは？

○Tさん（ブラジル）

- ・日系2世。
- ・生まれたときから「国際交流」の国。
- ・日本人の感情表現はわかりにくい（つまらない物ですけど、NOと言わない…）
- ・未だにレディーファーストの習慣が抜けなくて、時々ぶつかってしまう。

○Nさん（タイ）

- ・物価が高いのは日本の会社のせいだ。やりたい放題をして、どこかへ行ってしまふ。タイの会社の50%は日本の会社。
- ・日本のお金で高速道路などを造っている。

○Mさん（インドネシア）

- ・日本について学校で習ったこと…日本人がカリマンタン島の森林を伐採し、割り箸にってしまった。生魚を食べるので、おなかに虫がいる。宗教は、神道と仏教だと習い、「神道って何？」と聞いたら「仏教のようなもの」と先生は答えた。
- ・日本企業に21センチのエビがほしいといわれ、19センチから25センチまでを用意したが、21センチのエビしか買い取ってくれなかった。なぜ？自然の作ったものだから、できるわけがないのに。

6/10（2時間）講演をもとにスキットをつくる（6人×4カ国）

6/17（2時間）スキット発表

〈例〉ブラジルのスキット

男子生徒「テスト全然できなかつた。また落ちちゃうよ」

ナレーター「ブラジルでは年末にテストがあつて、それを落とすと留年してしまいます」

女子生徒「気晴らしにバナナを買いに行こう」（店まで歩く。先生に会う。）

女「あ、先生。今からバナナ買いに行くねん」

先生「そうなん」

ナ「ブラジルでは敬語がありません。学校や職場でも目上の人に敬語を使う必要はないのです」

店員「いらっしゃい！いいバナナが入ってるよ。1ダースたった10円！！」

男「安いねえ。じゃあ5ダース買おう」  
女「パーティーしようよ。じきクリスマスだし」  
男「じゃあバナナ5ダースと肉3kgください」  
店「まいど。バナナ50円、肉1200円で合計1250円ね」  
ナ「ブラジルでは物価が安く、果物はダース単位、肉はkg単位で買います」  
女「あ、1000円しか持ってない。どうしよう」  
店「あなた日本人でしょ。日本人は信用できるから、今度通ったときにでも払ってよ」  
ナ「ブラジルでは日本人は信頼できると思われています」  
男「さっそく家に帰ってパーティーだ。彼氏も連れてこいよ」  
女「わかった」（家の前）  
男「さあ着いた。先にどうぞ」  
ナ「ブラジルではレディーファーストがあります」（パーティーが始まる）  
※エピソードをつないで、それなりの工夫が見られたが、グループによっては、もとの話とかけ離れた内容のものもあった。情報量・質ともうまく伝わらなかったようだ（見ている側はそれなりに楽しんではいたが…）。

## 2-4 留学体験者の話

### 9/9 身近な人（卒業生、上級生、職員）の留学体験談を聞く

ねらい：多価値の存在を知る

○日本人が世界に出かけたときに遭遇する困難、発見を知る…1学期に聞いた日本に住むマイノリティの人々の話と比較する

○世界の同じ世代の高校生は、何を考え、どんな暮らしをしているのか

ねらいとするスキル：積極的に聞き取る・キーワードを考えながら、考えついたことを忘れないよう聞き、話の後にメモにまとめる

### 体験談

岡田志穂さん（スウェーデン、チェコ）神戸市外国語大学3年生

スウェーデンの学校の雰囲気はリラックスしたもので、生徒は、放課後、乗馬や、アイスホッケーなどいろいろな活動に取り組んでいる。男女関係は非常にオープン。

日本については、歴史の教科書中に、2ページの記述があったが、太平洋戦争での日本の侵略について図入りでかなり詳しく述べられているのは意外だった。

チェコは学校の雰囲気が日本に似ていて、授業の初めに起立する。

松井圭子さん（カナダ、オンタリオ州プレスボ）

遅刻、早退、欠席について厳しく、自己管理を迫られる。カナダの子どもは、親の手伝いをよくし、親の権威は絶対的である。カナダ人は、アメリカ人と間違われるのをいやがっており、アメリカの文化を取り入れるだけの日本との違いを実感。

Bilingualには簡単になれるが、Biculturalになれたのは、実際に外国で住んでみたからだ。

中尾さん+増田さん（フィリピン スタディツアー）

危険、汚い、ことも確かにあったが、本当のフィリピンがわかってきた。

農村援助の仕方について、Phirice/PRRMの例を出して説明。

Smoky Valleyには、谷だった所にマニラのゴミが流れ込んできてゴミの山になった。考えられる援助として、日本のODAでゴミ処理場を作ればすむ問題？

大学生との交流で時給10円と聞き、日本との経済格差の実感した。日本に来たい理由がわかった。

考察：

- 身近な人の体験談とあって、生徒は興味を持って聞いていた。特に留学を考えている生徒の多い学年であったためか。
- 自らの体験をいきいきと伝えるのは難しく、もっと映像を用いるなどで伝達方法を工夫するべきだった。
- 大勢で話を聞くという、一方的な情報提供になってしまい、参加型になりきらなかった。少数での取り組みが可能ならば効果的。また、聞いた話の内容などについて、生徒同士で意見交換をするなどの工夫も必要だったか。

## 2-5 高校生への質問

ねらい：同年代の高校生の暮らしぶりや考え方を、興味を持って垣間みることにより、多価値の存在を知る。

方法：

### ○アンケート送付先

本校が取り組んでいる国際交流プログラムGlobal Classroomに参加している5校に加え、教師の個人的なつながり、1学期に講演を依頼した外国人講師の紹介などで、なるべく世界の多くの地域を対象にすることを目標に11カ国を選んだ。

南アフリカ	ケープタウン	Harold Cressy High School
チェコ	ズリン	Gymnasium Zlin
ドイツ	ディープホルツ	Graf Friedrich Schule
スウェーデン	オンゲ	Bobergsskolan
イギリス	シェトランド	Anderson High School
アメリカ	フェニックス	South Medford High
ブラジル	サンパウロ	Centro Educacional Harmonia
インド		Abhinava Vidyalaya English Medium High School
インドネシア	ジャカルタ	Santa Ursula II Senior High School、SMUN 8
韓国	ソウル	Pohang High School
クウェート		Mishref Secondary School

### ○アンケートの内容

アンケートは、各国共通の質問と、その国独自の質問とに分かれる。

生徒の生活が浮き彫りになる質問項目を考えるということで、各国担当で項目を出し合い、代表が集まって検討して共通項目を定めた。

質問事項 【資料1】参照のこと

質問紙 (共通)

Questionnaire(Please answer the questions below in English.)

I am a ( female / male ) student at ( Please write the name of your school ) , and I am ( ) years old.

Questions concerning your country

1. Do you like your country? Yes No  
Why/Why not?

2. Do you think your country plays an important role in the international world? Yes No

Questions concerning your school

1.Please write your general impressions of the teachers at your school

2.Do you like your school? Yes No  
Why/Why not?

3.How do you come to school? (by bus,by train,etc?) by ( )  
How long does it take for you to come to school? ( )minutes

4.What do you usually do after school?

5.What is in fashion among the students at your school?

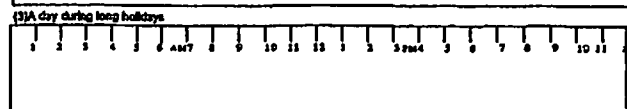
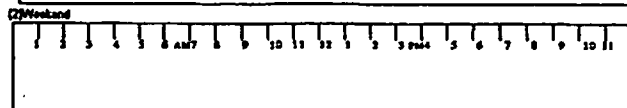
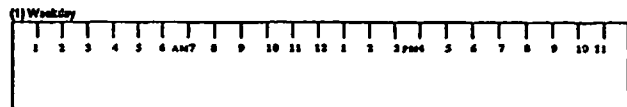
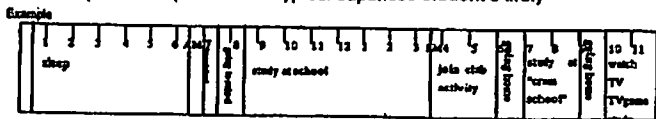
Questions concerning your family

1.Please write up the members of your family.

2.When your family has to decide something important, who takes initiatives?

Questions concerning your everyday life

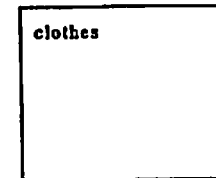
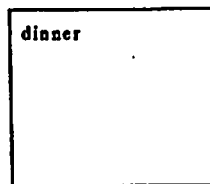
1.Please introduce how do you spend a day (1 weekday, 2 weekend, 3a day during long holidays) following the example below. (This example shows a typical Japanese student's life.)



2.What is your (family) religion?

3.Please introduce what you had for dinner yesterday by drawing its picture.

4.What is your most favorite clothes? Please draw their picture.



5.Are you given an allowance(pocket money) every month? Yes No  
How much is it?

What do you spend it for?

6.Do you have a part-time job? Yes No  
What's the job?  
How many hours a week do you work?

Questions about Japan

1.What is your image of Japan?

2.Do you feel like visiting Japan some day in the future, if it is possible? Yes No

3.Please write down the name of the most famous (as far as you know) Japanese person.

Miscellaneous

1.What type of people are thought to be "cool" in your country?

Thank you very much for your kind cooperation!



## ○送付

本校からの留学生がいる学校についてはその生徒を介して、また、ファックスで原稿を送ったり、アンケート用紙そのものを送ったりして、各校20名から30名を対象に調査を依頼した。

## ○プレゼンテーション

ポスターセッション…得られた知見を分かりやすく、効果的に表記し、掲示する。廊下に一定期間掲示することで、当該学年以外にも伝える。

日程：

9/16 国ごとに分かれ、質問項目作り。共通項目の検討

9月下旬 各学校へ送付

2/3 国別集計

2/17 項目別集計、ポスターにまとめる。

2/24 ポスターを仕上げる。ポスターを見てまわり、評価シート記入。

考察：

- 世界を網羅する形でのアンケート実施に努めたが、それは大変難しいということを実感した。例えば、ITを利用する連絡は早くて便利だが、自ずとthe haves（持てる者）のみに限られてしまう。
- 各国の生徒の肉筆は、時に解説が必要だったりしたが、生の感触が得られ、非常に良かった。また、回答が返送されてきた封筒や切手などにも、生徒は興味を示していた。e-mailなどでは伝わらないものが伝わったように思う。
- 恒常的なやりとりの中での調査でなかったため、興味本位で非常に原初的な質問も多かった。設備や日程の関係で制約はあるが、点のつながりではなく、線のつながりを試みたい。今回初めてコンタクトをとれた学校については、貴重な機会なので、コンタクトをとり続け、途切れることなく何らかの形で交流をしていく可能性を探りたい。
- 調査の標本が少ないが、あまり接することのない地域については、情報不足ゆえに、知り得たことですべてを理解したような錯覚を生みやすい。たまたま調査したその生徒がたまたまそうであったのかもしれないと指導はしたが、ステレオタイプ化は避けられなかった。
- 学校の背景を良く知らないと、特別な事情などが分からない。初めてコンタクトを取る学校についてはもう少し情報を得るべきであった。

生徒の感想：

- 日本の常識＝外国の常識、は成立しないことを知った。驚きだった。
- 文法とかつづりに間違いがある（しかも読みにくい）アンケートを訳してまとめるのは大変だ。すごく字が読みにくくてつらかった。
- 国によってはあまりまじめな解答でなかったので、意味がなかった。
- もっといろいろな階層の人の意見が聞きたかった。
- 何回かその国とやりとりをしたかった。そうすればもっといろいろわかったかもしれない。
- アンケート結果を考察する時間が少なかった。
- 自分と同年代の高校生が考えていることはやっぱり興味があるし面白いと思った。

## 2-6 外国人労働者問題

### A. フィールドワーク

#### a) フィールドワークの概要

事前準備として、夏休み中に、各家庭で取っている新聞にとり上げられた外国人労働者に関わる記事をスクラップさせて、感想などのコメントをつけさせた。それを元に問題点をグループで検討させ、グループのフィールドワークのテーマを決めて、活動することにした。

最終的に、日本における外国人労働者受け入れの是非を論じるころまで調査が深められることを目指し、実際の現場に行って当事者の話を聞いてくることを全員に課した。その上で、レポートを作成し、発表する計画を立てた。その際のレポートは簡単なレジュメに資料をつけることを義務づけ、資料の説明をしながら問題点を浮き彫りにできるように配慮するよう、全員に指示した。

#### レジュメの内容

- ・テーマ設定の理由
- ・調査内容
- ・考察 外国人労働者受け入れの是非についてグループで討論した結果と、日本に住む外国人労働者の住み易さ度（指標）をグラフにして示し考察する。

#### b) テーマと行き先一覧

い組	ろ組	は組
不法滞在・不法就労	雇用条件	外国人のビザ
外国人スポーツ選手	労働条件	日本でスポーツをする外国人の問題
国際結婚	病院・医療問題	日本で働く外国人料理人
子どもと教育問題	外国人労働者の子ども	日本に暮らす外国人労働者の辛さ
医療問題	教育	外国人労働者の雇用
	外国人から見た日本	

に組	ほ組
国際結婚	日本は日系人及び外国人にとって暮らしやすいか
外国人犯罪	外国人の犯罪
外国人労働者の権利	外国人労働者の支援団体について
近所づきあい	ヴィザ制度
外国人労働者の悩み事	英会話学校で働く外国人労働者たち

入国管理局奈良出張所	天理夜間中学校	モンゴル料理店旭鷲
労働基準局	大使館（アンケート）	インド料理店シャンティ
奈良県警（外国人対策室）	外国人教育研究所	その他、日本在住の外国人のみなさん
市役所	奈良保証人バンク	
ハローワーク	奈良日本語センター（NINJA）	
国立奈良病院	奈良ファミリー&フレンド（内田さん、小川さん）	
県立奈良病院	インターワールド	

保健所	ジオス
奈良女子大学	京都パープルサンガ
大安寺小学校	近鉄・阪神球団事務所（アンケート）

### c) フィールドワークの実際

#### c-1 「日本に住む外国人労働者の子どもたち」（女子4人のグループ）

- 10/7 外国人のいそいなところに電話（NOVAなど…）するが成果なし→事務職員のNさんに、知り合いにメキシコ人のTさん一家がいると教えてもらう。
- 10/14 Nさんを通じてTさんに連絡を取る。メキシコ人でなく日系ブラジル人だったので、市立図書館組とインターネット組にわかれてブラジル人労働者について情報収集。
- 10/28 前回にインターネットで発見した武生市ホームページに、e-mailで質問を送る。その他ブラジル人労働者について情報収集しつつ、Tさん一家へのインタビュー内容を考える。
- 10/30（土） 夕方、Nさんの案内でTさん一家のお宅を訪問。インタビューする。
- 11/4 Tさんの娘さんが通う中学校に電話。
- 11/18 発表準備
- 11/25 発表

生徒の考察：私たちの班は外国人労働者の子どもについてだった。子どもたちの通う学校での問題点をくわしく調べたかったが、学校の意見は聞かせてもらえなかった。本当に問題は言葉の壁だけなのだろうか。疑問が残る。

#### c-2 「不法滞在の実態と警察の対応」（女子5人のグループ）

- 10/7 外国人労働者数の調査をし、実態の把握に努める→大使館に聞く（①韓国②中国③フィリピン④タイ）
- 10/14 グループ内での担当を分担する。
- 日本で働くために必要な手続きについて調査→奈良労働基準局／大使館
- 不法就労の実態を調査→奈良保証人バンク
- 警察がどのような取り締まりをしているか→奈良県警
- 10/28 インターネットを通じて情報の収集。
- 11/4 奈良県警本部・外国人組織犯罪対策推進室室長に話を聞く→「国際化社会と警察活動」という冊子を元に説明を聞く。
- 11/18 発表準備→それぞれの分担をまとめて説明するための流れを相談。資料には要点とキーワードのみ載せることに決定。
- 11/25 発表

生徒の考察：フィールドワーク前は外国人労働者の受け入れについては人数制限などの対策を考えて受け入れればよいと考えていたが、FW後は不法就労の外国人に対しては受け入れ反対の立場に変わった。しかし、外国人に頼らなければ成り立たない現実を考えたとき、不法でなければ政策を整えて受け入れる方向で考えなければならぬと思った。

### d) フィールドワークを終えた生徒の感想

- 自分と外国人労働者との接点のなさを痛感した。何をどう調べたらいいか困った。

- 訪問先が決まらなかった。先方から断られることが多かった。
- 話を聞ける外国人は余裕のある人ばかりだった。
- どこまで話を聞いていいのかわからない。本当に困っている人たちは言葉が通じなかった。
- 人権問題にぶつかった。
- インターネットがほとんど役に立たなかった。
- 一回あっただけで本当の気持ちが聞けるわけではないのに、先生が「本当のところはどうなのかを聞け」というので困った。
- 1, 2人だけの話を聞いて、その話を基準と考えると話を進まなかった。一般的基準と個人的意見が入り乱れている意見を基準としたことに疑問あり。
- もう少し先生の介入があっても良い。

## B. ロールディスカッション

### a) ねらい

- ・外国人労働者を巡るさまざまな立場を演じることによって、フィールドワークを通じて得た情報を単なる知識理解にとどめるのではなく、共感やより深い理解に到達する。
- ・社会に多様な立場が存在することを知り、話し合いを通じて互いに理解し合い、合意点を見いだそうとする。
- ・自分の立場をわかりやすく相手に伝える能力、相手の意見を正しく聞き取る能力を養う。

### b) ロールディスカッション授業計画

1999/11/25 フィールドワーク発表

クラスごと、要約レジュメ+資料集、他のクラスのは、要約レジュメのみ配布

12/2 ロールディスカッションの設定と、ロール配当

ロールとしては、フィールドワーク先で出会った人をイメージし、日本人、外国人共に、さまざまな立場を考えた。フィールドワークにより浮き彫りになった問題を網羅する形で、人物像を作った。

12/16 (1時間) ロール作り…冬休み中の資料集めの計画、資料集め開始

フィールドワークで集めた資料を生かすため、クラスだけではなく、他のクラスのフィールドワーク資料も自由に閲覧できるようにし、改めて聞き取りに行く必要がないようにした。

2000/1/13 各ロールで、主張の内容を具体的に考える

ロール作りプリントに記入、司会者にコピーを渡す

1/20 議論内容をつめる、司会者との調整、準備(主張プリントに記入、司会者にコピーを渡す)

1/21 ロールディスカッション、シェアリング、感想をノートに整理

### c) ロールディスカッションの設定

設定例：某民放TV局で、外国人労働者の増加と、今後の受け入れについて深夜の討論番組が行われることになった。(以下、教師が決めたおおまかな設定に合わせて、生徒が調査してそれぞれのロールを作り上げたもの)

①司会(男性45歳)

②コメンテーター(男性58歳)

③ブラジル人労働者(女性43歳)：日系ブラジル人の夫とともに来日。自動車の部品工場で働く。中

学生の娘と小学生の息子の4人家族。今の生活に満足しており、将来も日本に住み続けようと考えているが、子どもの進学や将来に不安を感じている。

- ④中国人留学生（男性21歳）：日本に留学して4年、先端情報技術開発を大学で学び、現在は卒業を前にしてシステムエンジニアとしての就職活動の真っ最中。故郷には7人の家族がいる。恋人が日本人女性ということもあり、日本で就職するのかカナダに渡るので悩んでいる。日本の外国人労働者受け入れ態勢については、専門職の受け入れだけをもっとすすめ、受け入れ制度を整えてほしいと考えている。
- ⑤フィリピン人労働者（男性30歳）：研修生として日本に入国し、仕事がきつく給料も安いいため、逃げ出して不法滞在者となった。現在は野菜農家で働いている。同じ不法滞在のフィリピン人女性との間に3歳の女の子がおり、子どもの将来について悩んでいる。一緒に日本にきた友人は犯罪に手を染め、刑務所に入っている。
- ⑥一般市民（男性58歳）：とにかく受け入れには絶対反対。倒産寸前の商社に勤めており、リストラの危機にさらされる商社マン。妻、中学生の息子、小学生の娘、母の5人家族。
- ⑦零細パネ工場の社長（男性52歳）：経営不振に苦しんでおり、できるだけ経費を削減したい。人手不足がつづくなか、外国人労働者は貴重な人材だが、面倒なことに巻き込まれるのを恐れ、資格外就労の労働者は採用していない。一部の専門職にしか就労資格が与えられないのは問題で、もっと多くの外国人労働者がほしいと考えている。ただ、言葉の壁などで意志の疎通が難しく、外国人労働者と日本人労働者や経営者との間でトラブルが起きることを懸念している。
- ⑧市民団体の代表（男性40歳）：日本に住む外国人の生活を支援する市民団体の代表をしている。定住ビザの申請から医療問題、子どもの教育など日常生活の全てにわたるサポートをめざしてはいるが…。
- ⑨入国管理局の職員（女性28歳）：ビザはちゃんと入管法に基づいて発行しているので、不法入国や不法滞在は厳しく取り締まるべきだと考えている。外国人労働者が増えすぎると懸念している。
- ⑩経済学者（女性50歳）：国際経済研究所所長。外国人労働者の有効な活用なしには日本経済の未来はないと語る。国際的な労働力の移動の原因や実状、日本の現況について客観的に分析する。
- ⑪某県警の警視（女性32歳）：外国人対策室の室長をしているキャリア組。外国人による犯罪の増加で多忙な毎日を送っている。不法入国者、不法滞在者は取り締まるが、不法でなければ警察が関わる問題ではないと考えている。

ディスカッションの結果：

感情的に外国人労働者反対を唱える市民役が口火を切り、その後も警視役や入管職員役の懸念論があいついだ。中国人留学生役やブラジル人労働者役も、自分たちの合法性を主張したため、フィリピン人不法就労者役は反論できず黙り込む。コメンテーターが偏見ではないかと指摘し、市民団体代表役も、日本に居住している以上は彼らの基本的人権は守られるべきであると主張するが、全体としては「やはり外国人労働者の流入には制限が必要」という展開となった。実際にフィールドワークで外国人対策室や入国管理局に行って話を聞いた役の生徒が強気の姿勢であったのに対し、フィリピン人不法就労者役や経済学者役は間接的な情報に基づいてディスカッションしなければならず、どうしても苦しい議論を強いられた。

生徒の感想：

- 本当の自分の意見を言えないのがつらかった。
- 自分ではない他の人になるのは楽しかった。新しい考えが持てた。
- 少し調べたくらいの私が、本当にその人の気持ちを言えたのかどうか…。

- 設定が自分たちの周りにはあまりなさそうなのでいい体験をした。
- もう少し身近な問題にしてみたかった。
- ディスカッションは意見が出てくるまで時間がかかるので一気に長い時間やった方がいいと思う。
- 自分たちで設定を決めたかった。

## 2-7 論文

### 論文作成の手順

目的：一年間かけて学習してきた「世界学」を、自己の問題として位置づける。

課題：「世界学の学習を振り返って、今あなたが考えること」

- 感想ではなく、自分の考え（意見）を根拠とともにまとめる。
- 各自が自分の題材にあった表題をつける。

長さ形式：横書き、指定の用紙2枚程度（用紙は24字×34行＝816字）。

書き方：表題・クラス・出席番号・名前・担当教師名を記入する。1行目から本文を書きはじめ、原稿用紙の使い方に則って書く。

提出：学年末試験の考査時間内に設定する。試験は、50分（90分までの延長を認める）で持ち込み可とする（ノート・参考資料など）。

3/2（木）5・6限は、論文作成のための準備に当てる。論文作成のためのアウトラインをノートに記入しておく。

### アウトライン作成作業の手順

- ① 年間計画を参照しながら、書くための題材を選ぶ。
- ② 主題を考え、自分は何を目標に文章を書くのか、何を主張しようとするのかを文章にする。
- ③ 主題文をみながら、書くべき項目を挙げ構想を練る。
- ④ アウトラインの実際

上位項目、下位項目に簡単な見出しをつけて、節や小節に番号をつける。

例

「エイズをとりまく諸問題」① 注①：表題（自分で考える）

I. はじめに② 注②：「はじめに」の内容

なぜ、その問題を取り上げたのか。具体的にどんな調査や研究を行ってきたかをまとめてもよい。

II. エイズが現代社会に与えた影響

A. エイズとは

1. エイズの基礎知識

- a. 血液製剤③ 注③：下位項目 問題点や背景、現在状況などから小見出しをつける。
- b. 院内感染

2. エイズの症状

B. エイズへの偏見と差別

III. おわりに④ 注④：主題文（自分の主張や今後の展望など）

### アウトライン作成のために

次の1から5の項目について、各自がノートにまとめる。

- 1 年間計画の中で一番興味を持ったことは何か。
- 2 取り上げたいと思った話題の問題点を挙げる（書くことができるか見通しを立てる）。
- 3 問題の背景や状況を挙げる。
- 4 自分の考えを箇条書きにする（根拠を明確にする）。
- 5 主題文を作る（自分の主張を要約する）。

次の6から7の項目を考えて、ノートにアウトラインを書く。

- 6 書くべき項目を絞る（上位項目・下位項目を考える）。
- 7 書くべき順序を考える（番号や符号をつける）。

## 生徒の論文

生徒の書いた論文の中から、2編を原文のまま紹介する。

「豊かさから見る世界、そして日本」 丸山彩子

### 1. はじめに

今年一年間かけて学んだ世界学。何を学んだのか分からずこの論文へと突入している今、年間計画を見て、一つ一つの活動に意味があった事を発見した。

そこで私は「豊かさ」という言葉をキーワードにして、世界学の授業を振り返りつつ、自分の考えを述べたいと思います。一学期の始め、「物の移動」という事で、貿易・食糧問題について考えました。この時は、日本は「豊か」なのだ、と思いました。しかし、私が今使った「豊か」という言葉には、主語がありません。心が豊かなのか物が豊かなのか…。「豊かさ」という言葉は、様々な側面を持っているのではないかと私は考えました。

### 2. 環境の裏に見え隠れする「豊かさ」

現在、環境破壊は世界的な問題となっています。そこで、環境破壊という事から、「豊かさ」について考えてみたいと思います。

マングローブの林の破壊。これは、台湾・インドネシアなど、エビを養殖している地域で起こっている現象です。エビの養殖田を作るためにマングローブの林の木が伐採されます。木が伐採される事によってプランクトンが減り、それを食べていた魚までもが住む場所を無くしてしまいます。この結果、日本を始め、輸入した国は食糧が「豊か」になります。しかし、エビを養殖した国々は、環境において、「貧しく」なってしまいます。これは、人間が自分たちの生活のために、欲望のために引き起こした環境破壊ではないだろうか。

そしてもう一つ、現在私が最も興味を持っている環境問題、それは「ゴミ」についてです。ゴミの増量が問題となり、そこからCO<sub>2</sub>の増加、また最近ではダイオキシンの発生が騒がれています。これは、物の豊かさが作り出した環境破壊だと思えます。物を作り出し、使う、そして捨てる。というサイクルがだんだん早くなっていると思います。それは「物が豊か」になったからです。

ここには二つの例しか挙げられなかったけれど、（物が豊かになる）＝（環境が乏しくなる）という方程式が成り立っているような気がします。

### 3. 発展途上国の子ども

発展途上国では、出生千人あたり64人(1998年)もの乳幼児が亡くなっています。それに比べて先進国では出生千人あたり6人(1998年)です。この背景にも、やはり「豊かさ」があるのではないのでしょうか。

現在私達にとってはほほ治るであろうと思われる病気、もしくは予防接種で防いでいる病気が発展途上国の子供達の命を奪っていきます。その理由として挙げられるのが、生活環境などがあまり良く

ない事、栄養が不足している事、そして薬・技術・人の不足だと思えます。発展途上国の子供達の栄養状況はというと、5歳未満の子供の3人に1人は栄養不良という事です。世界中で取れる穀物は、全ての人が毎日3回食べられる量があります。しかし、そのほとんどが、先進国に住む人と、家畜の飼料となってしまっています。つまり、発展途上国の子供の死亡率が高いというのは、物の貧しさから来ている問題だと思えます。ここでも（ある国の物の豊かさ）＝（ある国の物の貧しさ）という方程式が成り立っています。

では先進国に住む人々にはどうする事もできないのでしょうか。私達は、直接手助けする事はなかなかできる事ではありません。しかし、ユニセフなどという機関を通してならば、いろいろな方法で手助けができると思えます。また、このような現実があるという事を知る事も、一つの手助けに結びつくのではないかと思います。

#### 4. 外国人との交流

現在、日本には多くの外国人がいます。その中の労働者について考えてみたいと思えます。日本に働きに来る外国人にはいろいろな理由があると思えます。その中で発展途上国から来る人々というのは、日本に何らかの「豊かさ」を求めて来るのだと思えます。つまり、自国はお金・物が貧しい、だから日本へ働きに来る。という事です。さて、ここで何が問題視されているかという、日本人の雇用が関係してくるのです。外国人労働者を引き受けたとします。すると、雇用の枠には制限があるので、それだけの日本人が失業者となってしまいます。日本を貧しさからの逃げ道とすると、今度は日本が貧しさへの道を行んでいく事になるのかもしれませんが。つまり（発展途上国の人を引き受ける事による「豊かさ」）＝（日本人の「貧しさ」）であり、（外国人労働者の貧しさ）＝（日本人の貧しさ）とも言えるのではないのでしょうか。

#### 5. おわりに

「豊かさとは何か」 この答えは置かれた立場によっても違ふし、その時の状況によっても違ふと思えます。ただ、ある事が「豊か」になると、他の何か貧しくなっているのではないのでしょうか。日本が「豊かだ」といわれる国である事によって、どこかで誰かが貧しい思いをしているのかもしれませんが。世界が、地球が豊かになる事、そんな事があるのかは分からないけれど、今、それぞれが豊かである物を少しずつ分け合うと、今、貧しい者は少しずつ豊かになるのではないのでしょうか。しかし、人々は心の豊かさだけは忘れてはいけません。「豊かさ」に恵まれている人がその豊かさを貧しい人に少しずつ譲り分ける、それを一時の思い付きではなく、継続的に続けていく事、それこそが本当の心の豊かさではないのでしょうか。自分だけ、自分の国だけの豊かさを追い求めていくのでは「真の心の豊かさ」を持っているとは言えません。難しい事ですが、「真の心の豊かさ」に向かって生きていく事を少しずつ考えていきたいと思えます。

私がこの一年間の世界学で学んだ事、それを一言で表すと、「世界はつながっている」という事だと思えます。当たり前の事ではあるけれど、これを再認識できたと思っています。

### 「内的な国際化」 瀧脇聖士

#### 1. はじめに

僕は日本人の外国（外国人）に対する考え方の中に、外国の国々からの協力がなければ、生きていけないという事実に反して、できれば自分たちの身近な生活の中に外国人を受け入れたくないという考え方があると思えます。

#### 2. 外国からの協力がなければ生きていけないという事実



## A 食材の輸入

外国からの協力がなければ生きていけないという事実の例として、食材の輸入があります。僕たちは一学期に食材についてのフィールドワークをしました。

その中で僕は日本の食材のほとんどがいくらかの割合で外国からの輸入に支えられているということを知りました。中には、ほぼ100%輸入に頼っているという食材すらありました。このことから僕は日本人の生活が外国からの輸入（協力）によって支えられているということを実感しました。そして、現在の日本は、外国の国々の協力なしには、成り立たないということを知りました。

## B 外国人労働者

次に二つ目の例として外国人労働者があります。僕たちは2学期に外国人労働者についてフィールドワークし、3学期にロールディスカッションをして外国人労働者について学習しました。そのロールディスカッションの中で、僕は日本の農村や漁村が若者の都市への移動によって労働不足という深刻な問題を抱えているということを知りました。そしてその都市へ行ってしまった若者達の労働力の穴をアジア諸国からの外国人労働者の力によって支えられていることを初めて知りました。外国からの輸入によって支えられている食材以外の国内で作られている食材でさえ外国人の協力なしには成り立っていないのです。

### 3. 日本人の中にある外国人に対する考え方

#### A 迷惑

僕は3学期に行ったロールディスカッションの中で、日本人の考えの中に、自分たちの身近なところに、外国人労働者が入ってくるといろいろ迷惑だという考え方があるということを感じました。その迷惑だと言われていることのほとんどの原因として文化の違いがあります。文化の違いというのは違う国に住んでいる人々の間には必ずあるものです。これは問題でも何でもなく、ただ日本人が持つ、自分たちの文化以外の他の文化を認めたくないという考え方からきているものだと思います。この問題は日本人が外国の異文化を受け入れ、そして日本の文化というものを外国人労働者に教えてあげればすぐにすむ問題なのです。

#### B 国内での失業率の低下の妨げ

前に挙げた考え方の他に、外国人労働者を受け入れてしまうと国内での失業率が下がらないという考え方がありました。

これについても、この問題のもともとの原因は3Kと言われる仕事をきらい、そして肉体労働をきらって農村や漁村から都市へ移動した自分たち（日本人自身）にあるのです。自分たちが作ってしまった労働力の穴をせっかく外国人によって埋めてもらっているのに、これはあまりに自分勝手な考え方だと思いました。自分たちが原因を作っておいて、それを解決しようとしてくれている人々に迷惑だと言っているのですから。

### 4. おわりに

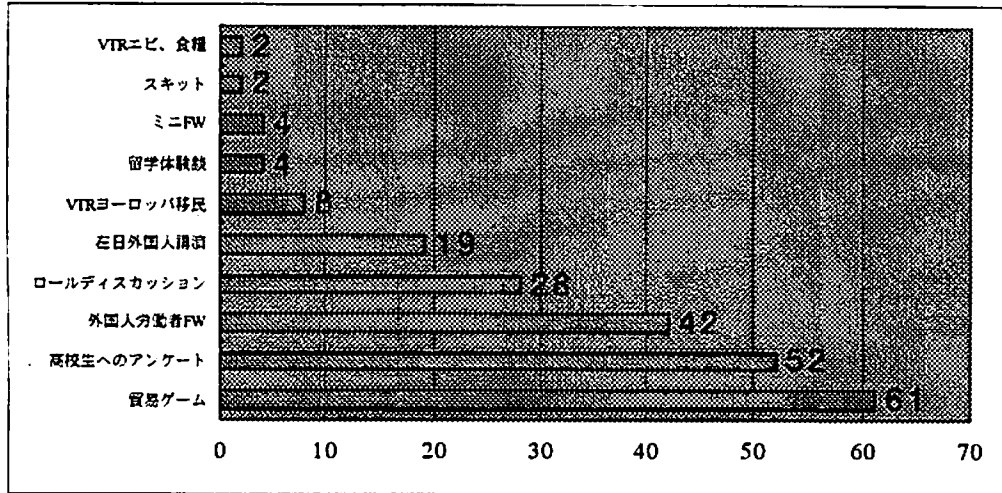
以上のことから僕は日本人の生活が外国人または外国の国々によって支えられていながら自分たちの勝手な考え方からそれを受け入れたくないというあまりにも身勝手な矛盾が生じていると考えます。これから日本は今以上に国際化が進んでいくでしょう。しかし、前に挙げたような異文化を受け入れないというような身勝手な考えを変えていかないと、表面的な国際化を進めることができても、内面的な国際化を進めていくことは絶対にできないと思います。そして、世界を一国一国見るのではなく、地球という大きな視野で見るといふ新しい考え方に変えていかなければいけないと思います。そうしないといつか日本は世界の国々についていけなくなる日を迎えるでしょう。

## V 生徒の目から見た世界学

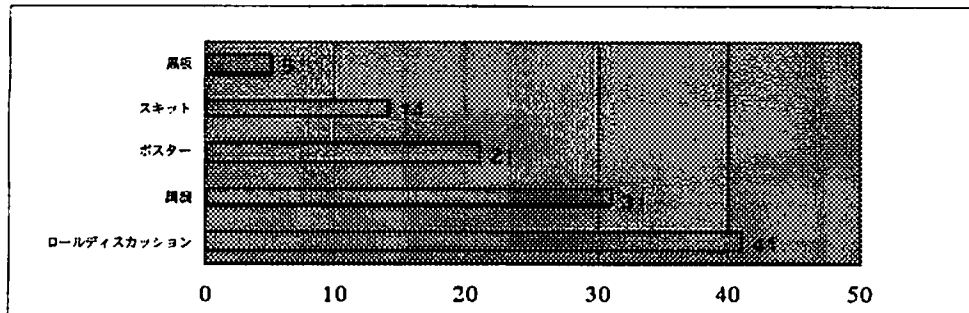
年度の終わりに、学んだことを振り返る目的でアンケートを実施した。

その中で、1年間の学習を通じてよかったと思う単元、効果的なプレゼン方法、世界学を学んで外国人労働者に対する変化が現れたか、世界に対する意識、興味に変化が現れたか、今後世界学で扱うとよいテーマ、考えられる活動、学んだこと、世界学と他教科との違い、豊かさを決める尺度は何か、後輩に世界学を説明するとすればどう表現するか、といった項目についてまとめてみた。

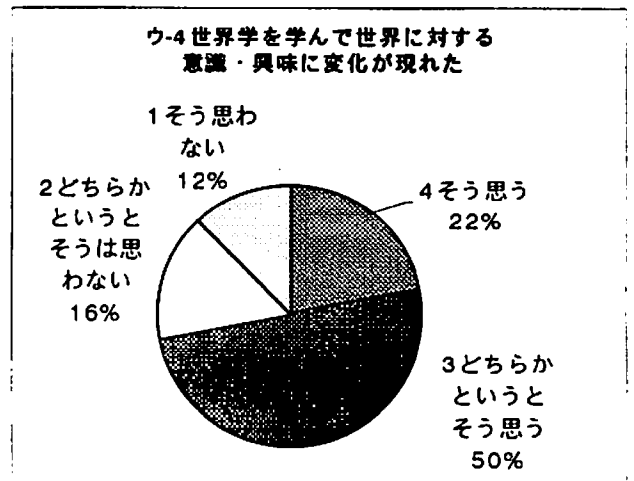
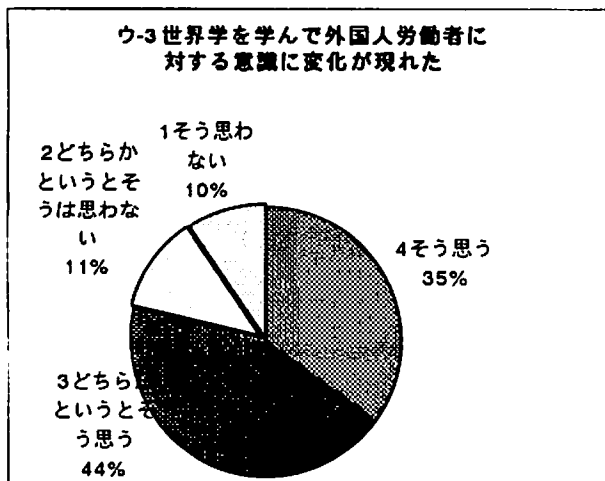
### ○1年間の学習を通じて良かったと思う単元



### ○効果的なプレゼン方法



### ○世界学を学んで



○今後世界学で扱うテーマ

人口問題	12
文化の違い	9
戦争と紛争	6
環境問題	6
外国人労働者	5
経済問題	4
民族問題	4
南北問題	4
貧困	3
世界の同世代の子の現実	3
これからの日本	3
宗教	3
食糧問題	3
日本と世界にまつわる過去のこと	2
高齢化社会	2
海外事情	2
世界的組織(WHOなど)	2
わからない	2
言語	2
日本が世界に対してできる貢献	2
身近な問題にしぼって	2
日本人の外国人に対する意識	2
貿易	2
外国人とのコミュニケーション	2
病気	2

○世界学と他教科の違い

自ら学ぶ	40
調査(FW)をする	14
考えることが必要	12
open ended(結論がでない)	9
自由に(ある程度)できる。	8
視野を広げられる	8
興味関心が必要	6
リラックスしたムード	5
後で役に立つ	5
なにをすればいいかわからない。	5

○考えられる活動

見学	6
外国の高校生とメール交換	4
インターネット	3
実際に外国へ行く(留学)	3
ディスカッション	3
これ以上思いつかない	3
異文化を体験	2
グループディスカッション	2
在日外国人との交流	2

○印象に残ること

ロールディスカッション	20
外国人労働者問題	18
フィールドワークで外国人に	12
貿易ゲーム	10
警察に質問に行ったこと	5
世界の高校生アンケート	4

○学んだこと

世界の多様性	18
世界の中の日本(違いとつな	11
人は平等に扱われていない。	7
世界	5
情報、知識	5

○豊かさの尺度

心、精神、気持ちのゆとり	41
お金(経済的なもの)	28
もの	15
ものと精神のバランス	8
したいことができる環境	5

「後輩に世界学って何?と聞かれたら」

- 学歴社会のさらに次になる俺達の世代に最も必要とされる知識を身につけるための授業だ!但し非常に退屈である。
- それぞれの人にとって考えは違うが、それは、「おもしろいもの」であったり、「退屈なもの」であったり「授業でない授業」だったりもする。僕は「授業でない授業」だと思う。それはそれぞれが学ぶのではなく個人が自分たちで答えを求めて行くから。
- 自分たちが主となって学ぶ教科。だからまじめにやろうがなまけようがそれはいい。けれどもそれは自分の中ではねかえってくる。まじめに一年間やったら、きっとそれは自分に大きな満足感を与えるだろうし、多くの知識が実になっていると思う。
- とくにこれを学ぶといった風には決まっておらず、自由にいろいろなことが学べる。大学入試には必要ないかもしれないけど、社会に出たときにいずれ役に立つかもしれないことを学ぶことができる。

- はっきり言って「何」とは言えないと思う。言葉で表すことのできるようなことと言うよりは、いろいろなことを学んだのではなくて感じたという授業だったような気がする。
- 日本と世界の各国についての違い（例えば生活など）や、日本と世界がどのように関連しているのかを自分たちで調べる教科。
- 建て前は世界のことについて知ろうとする教科。けど、テーマが多すぎて結論も何にも出てこない気がする完成度の低い教科。
- 世界に目を向けることで日本人の閉鎖的なイメージを打ち破るものなんだよ。
- 世界地理の応用でひたすら調べ、世界の状況を知る。また、それについて自分たちの意見を持ち、我々は何をすればいいかを考え、将来の第一歩を踏み出し、世界に貢献する。

## VI 成果、課題

まず、初年度「世界学」に取り組んだ担当者の感想を列記した後に、初年度「世界学」を担当した反省を記し、最後に今後の課題をまとめておきたい。

### 1. 担当者の感想

- 初年度のため1年間の大まかなプランは立てたつもりであったが、内容を欲張りすぎたようで、実際に活動していくと時間不足を感じた。特に1学期はもう少し余裕を持つべきであった。
- 5人の教員が担当したが、担当者の専門性を具体的にどう生かすかという点で、困難を感じた。
- フィールドワークにおいて生徒の主体性を導き出すことが十分にできなかった。外国人労働者問題に関する疑問・興味・関心のなさ、フィールドワークの結果をグループ発表の形にまとめていく段階での十分な時間の確保ができなかった。
- 学習計画やテーマの設定について、もう少し生徒の意見を反映させるような自由度の高いものでも良かったかと思う。指導者側の押さえない内容と、生徒の自主性に任せる内容とのバランスが難しい。
- 総合教科に初めて取り組んで大変だったが、これまでの教科学習ではもてなかった教師と生徒、あるいは生徒間での、人と人としてのコミュニケーションが大きなネットワークをもたらすことに意義があるのではなかろうか。そして、総合教科は、人と人のネットワークなしには成り立たず、そのネットワークを広げていくものだという感を強くした。
- フィールドワークを十分に深めさせるには、教師と生徒の関係において、生徒の興味や関心に寄り添う形での助言ができることだと思った。
- 教室や学校という枠を越えて学習を進めていくとき、その原点には知的好奇心がないと成り立たない。

### 2. 初年度「世界学」の反省

「世界学」という新しい総合教科を、一年間試行錯誤しながら進めてきて、その目指したところをもう一度再確認しながらこれまでの学習を振り返ってみたい。われわれは現在、物質的に豊かな社会で、ともすると画一的な価値観のもとに暮らしているが、その暮らしや生き方そのものを問い直し、相互依存する世界の現実を認識し、異なる価値観を認め合いながら、世界の諸事情に目と心を開いた個人を確立していきたいと考えた。そのためにはこれまでの40人学級では十分な話し合いや個々の考え方をそのものを問い直す活動ができないであろうと考え、少人数（24～25人）編成で、5人の教員が担当する形をとってスタートした。できるだけ参加型の授業で、教員による講義形式はとらないことにした。

少人数クラス編成での授業は、グループを作って指導に当たる場合でも個々に十分な時間をとることができるし、話し合いにも適当な人数である。外部講師に依頼して話を聞くのもアットホームな雰囲気を作り出すことができた。ただし、一度に数人の講師を必要としたり、ビデオ鑑賞に5台のビデオデッキを準備したりと少々手間がかかった。その反面、数人の講師の話をそれぞれが伝え合う必然性が出てきて、そのことによって聞いたことをクラスの仲間に正しく伝える活動を組み込むことができた。このようにして情報活用能力を高めるための機会を多く作り出すことが可能になっていった。

また、授業形態はグループでの活動が中心であったが、毎時間個人のノートにその時間の感想や学んだことを記録させていくことで、活動は集団だが個々の考え方や価値観を問い直させることができた。

授業の内容はもちろんのこと、授業形態についてもまったく新しい取り組みとして始めた「世界学」について、決して順風満帆でここまでやってきたのではなく、様々な問題を抱えながら進めてきた。その問題点は担当者の感想にも見て取れるが、問題点を二つに絞ってまとめておくと、

- ① 生徒の問題意識の開発（動機付け）をどのようにするか。
- ② 「世界学」のねらいを実現させる具体的なテーマの設定をどうするか。

以上2点に絞られる。

#### ① 生徒の問題意識の開発（動機付け）

例えば、「食材から世界をのぞこう」というテーマで具体的に考えてみたい。

実際にこのテーマで使った時間を見ると、

- |        |     |                |
|--------|-----|----------------|
| 4 / 22 | 2時間 | グループ分け・食材選び    |
| 5 / 6  | 2時間 | フィールドワークと発表の準備 |
| 5 / 13 | 2時間 | 準備とフィールドワーク    |
| 5 / 27 | 2時間 | まとめ・補足・ビデオ     |

合計8時間かかったことになる。このとき、指導者側は時間不足であると考えた。

しかし、現時点で振り返ってみると、問題はフィールドワークのための時間不足がその核心ではなく、問題意識の開発にかかる時間が不足していたのではないかと考える。以下にその時の指導者側のねらいと実際の生徒の動きと問題点を列挙して分析してみる。

指導者のねらい

輸入食品を調査することで、その食品のかかえる問題点を見つけさせたいと考えた。

問題点 ①南北問題 ②食糧安保問題 ③飢餓と貧困

実際の生徒の動きと問題点

- ・残留農薬の人体への危険性については指摘できたが、それは自分との関係から出てきた問題であって、モノの移動の本質（日本で禁止されている農薬を外国で使う企業の問題など）へと深めることはできなかった。
- ・輸入食品を調査するための動機付けが十分でなかったため、インターネットでの検索がこちらが用意した書籍の範囲でしか調査が進まなかった。
- ・なかにはスーパーなどへも市場調査にいった者もあったが、その食材の問題がまだ見えていない段階では具体的な調査のしようがなかったかもしれない。

分析1

「なぜ、輸入食品を調査する必要があるのか。」という点が、生徒の中で十分に納得できなかった。

分析2

指導者のねらいとしたことを生徒とともに調査する根拠を生徒・指導者ともに確信しえなかった。

(※指導者のねらいどおりに生徒が活動していくとすると、それは指導者の遠隔操作にすぎず、ねらいの達成を第一義とするのであれば総合的な学習の時間で設定した意味が薄れてしまう。だから、ここで指摘しておかなければいけないことは、指導者のねらいが単に指導者のみにとどまらず、生徒にも目標が確認されている必要があるということである。)

## ② 「世界学」のねらいを実現させる具体的なテーマの設定

外国人労働者のフィールドワークを2学期のテーマとして設定したが、このテーマが適当であったかどうか。目的としていたのは、外国人労働者について知ることでなく、外国人労働者が抱える問題点を知った上で、外国人労働者を必要としている日本社会の問題点や日本に来る外国人の抱える問題点を考えさせ、個々人の考えを明確にさせることに中心があったはずである。生徒にとっては、なぜ外国人労働者について調べなければならないのかについての最初の動機付けが不十分であったのかもしれない。指導者の側には、必然性を持たせるための努力はあったが(例えば、夏休み中の課題として新聞をファイルしておくことや、同年代の子供たちがどのようなことを考えながら生活を送っているのかを調べるための手紙を考えさせたり、夏休みに入る前のビデオ視聴を思い返させることなど)、生徒の興味関心を喚起できたといえる状況ではなかったのかもしれない。また、外国人労働者についてフィールドワークを実施することの困難点があった。まず、訪問できる場所を見つけることが生徒の考えの中から出てくるほど簡単に身近に存在していないということがあった。次に、フィールドワーク先が決まっても、木曜日の5・6時間目にその日を設定することは難しく、正規の時間がフィールドワーク先でのインタビューの内容を考える程度の時間にしか使えず、活動が停滞してしまった。インタビューに行っても、必ずしもその外国人が問題点を初対面の高校生に話をしてくれるとは限らず、日本に対するよい印象を述べるにとどまったことなどがあげられる。

分析1 フィールドワークが十分可能であるかどうかの検討が必要であった。

分析2 生徒の生活実態や現実から考えてテーマを設定する際、できるだけ身近な話題やその時のトピックに絞ってしまうという方法もあった。

以上のとおり二点に絞ってこれまでの取り組みを振り返ってみて、生徒のおかれている現実において他に考えていくことはできないのであって、その現実をどう捉え、そのために何が必要なのかを真摯に問い直していかねばならないと改めて自省している。しかし、これらの課題が見つかったのも、さまざまな予測をしながらも実際に生徒ともに活動して初めてわかってきたことばかりなので、この経験を今後の取り組みに生かしていきたい。

## 3. 今後の課題

### 3-1 授業形態

- (1) 少人数クラスにすることによって主体的な活動が可能になった。今年度は24~25人であったが、可能ならば20人以下が望ましい。
- (2) 一斉講義形式の授業形態をとらない、参加型の活動(貿易ゲームやスキットなど)を多く取り入れることで、生徒の興味・関心を持続させることができ、主体的に問題を深めていくことが可能となる。参加型の活動は、生徒にとって単なる知識理解に止まらず、態度までも変容させる理解となりうる。
- (3) グループ活動が中心となる授業形態では、生徒間の知識量や思考力の相違が相互補完的に高められる利点と、相互依存的に興味・関心が分散低下してしまうという欠点がある。それゆえ、発達段階に応じた授業形態を検討する必要がある。学年進行にしたがい、個人の活動を重視するほうが望ましい。

### 3-2 フィールドワーク

- (1) フィールドワークは、未知の世界を発見する契機となり、新たな人のネットワークを生み出す。直接、人に話を聞くことが「生きる力」をつける意味でも重要な活動であり、生徒にとっても教師にとっても新しい世界を開くことにつながる。
- (2) 生徒の問題意識をどう揺さぶり、その後のフィールドワークに取り組ませるかが重要である。
- (3) テーマの設定には、生徒の生活実態や現実から出発できるようなものを、生徒とともに考える余裕があったほうがよい。
- (4) フィールドワークは基本的に生徒の主体的活動であるが、生徒にとって未知のテーマについてフィールドワークをおこなうような場合は、教師の適切な助言や生徒間の情報交換が重要である。
- (5) 外国人労働者問題は、プライバシーなどに関わるデリケートな問題を含んでいるので、期待した成果が得られないことがある。その事を十分配慮した上で、NGOや地域の人々との出会いを今後につなげる必要がある。
- (6) フィールドワークにかかる費用の面や校外活動の安全性の面を考慮する必要がある。

### 3-3 コミュニケーション

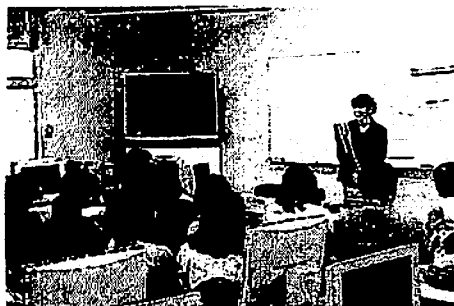
- (1) 在日外国人に直接インタビューすることは、コミュニケーションを阻む言語と文化の違いに気付くことができる活動である。
- (2) グループ発表の成否は、発表の前段階の話し合いがカギとなる。真摯な話し合いができるグループの雰囲気を作ることが重要である。話し合いができるグループの育成は単に総合的な学習の時間だけで育成できるものではない。
- (3) ディスカッションを通してコミュニケーション能力を高める活動を計画していたが、初年度は実施する時間的ゆとりがなかった。今後の実践には是非とも望まれるところである。

### 3-4 教師の役割と総合的な学習のあり方

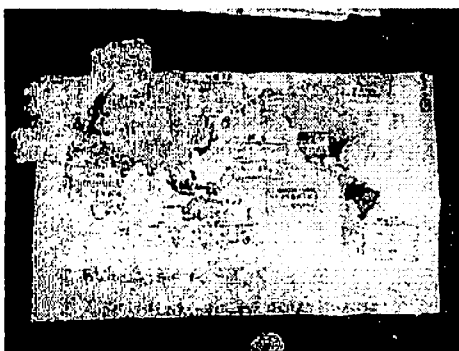
- (1) すでに「総合化」した状態で提示されている「世界学」のような科目設定の仕方を6年一貫教育の中に位置づけることが今後の研究課題である。
- (2) 総合的な学習に関わる教師のスタンスと生徒の問題意識をどう喚起するかという問題は、「総合」の意味を再度問い直す契機になるものと考えられる。
- (3) 総合的な学習の時間を設定する場合、重要なポイントとなるのが、期間集中型か通年型か、あるいは、学年別か無学年制か、などのカリキュラムに関わる時間設定と教師の持ち方等にも影響する問題を含んでいる。

### 3-5 評価について

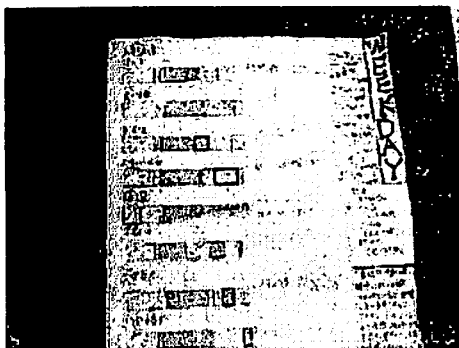
- (1) 初年度「世界学」では、毎時間の活動をノートにまとめさせる形で、学習の振り返りと自己評価につなげ、学期ごとの評価の材料にしたが、指導者の評価の必要性も含めて今後の検討課題である。
- (2) 参加型の授業を主たる活動とする「世界学」にあって、グループと個人やグループ・個人相互の簡便な評価法を創造していくことの必要性を感じた。



モニカさんの話を聞く



アンケートのまとめ(1)



アンケートのまとめ(2)



# Global Classroom 1999 in Cape Town 報告

加藤 勇・塩川 史・中道 貞子

## はじめに

グローバルクラスルーム（以下GC）とは、本校が1996年より参加している高校生の国際交流プログラムである。本稿は南アフリカ共和国のケープタウンで開催された第3回GC参加とそれに向けての取り組みの報告である。

なお、第1回、第2回については、それぞれ本校研究紀要第39、40集に報告されているので参考にされたい。

## I GCプロジェクト

### 1. 概要

従来、国際交流は2校間の文化交流イベントに矮小化されがちであるが、GCは、上記の参加校間で合意されたテーマに沿って各校で学習を進め、インターネットを利用して恒常的な意見交換を行い、その成果を年1回、6月に開催されるフォーラムに持ち寄り、実際に顔を合わせてディスカッションをしようというプログラムである。フォーラムはGC参加校が回り持ちでホストすることになっている。この準備と運営は、早期に現地に赴いた各校1名の生徒コーディネータにより行われるなど、生徒中心の活動である。参加生徒数は各国10名に限られているが、本校では英語科のカリキュラムの中でGCの準備を位置づけ、全体のものにする努力を続けている。また、各校の担当教師（コーディネータ）はe-mailで頻りにコンタクトを取り、プロジェクトのあり方について意見交換している。

さらに、1998年第2回のGCで参加校間で長期・短期の留学制度の発足と教師のリサーチプロジェクトの開始が合意されて、プロジェクトは拡大、発展しつつある。

今回はケープタウンのHarold Cressy High SchoolとWittebome High Schoolが協同でホストした。

### 2. 参加校

GC参加校は以下の通りである。

Anderson High School（スコットランド）・Bobergsskolan（スウェーデン）

Graf Friedrich Schule（ドイツ）・Gymnasium Zlin（チェコ）

Harold Cressy High School・Wittebome High School（南アフリカ）

奈良女子大学文学部附属高等学校（日本）

## II GC 99 in Cape Town に向けて

### 1. 参加校間で行われた協議と準備

第3回GCに向けて、参加校間で行われた協議と準備について、順を追ってまとめてみた。詳細は、

( )内の数字に従い、次項で説明する。

1997年10月 エディンバラで教師のコーディネータ会議がもたれ、1999年はケープタウンで第3回GCを開くことが合意された。

1998年

6月 第2回GC(スウェーデン)中のコーディネータ会議で、第3回の開催国について混乱…(1)

8月 ケープタウンが第3回GCをホストすることを承諾。Harold Cressyの生徒、Kevin JohnsonがGC親善大使として本校に留学。11月まで、他の留学生と共にGCの準備に関わる…(2)

このころ、ケープタウン市内で爆弾テロがあり、安全性についての疑問から参加各校が動揺する。

9月 パナソニックより、ノート型パソコンLet's note10台の寄贈が決定。

10月20日～25日 ケープタウンで教師のコーディネータ会議。杉峰校長が参加…(3)

12月 ケープタウンよりGC Newsletterが届く。その内容は、①テーマについての迫り方、②キャンプについて(活動概要と費用)、③準備の進捗状況、であった。

1999年

1月 GC留学生として初めての本校生徒がシェトランドで生活を始める。

1月22日 GC参加者募集要項発表…(4) 保護者対象説明会…(5)

2月 GC派遣留学生2名がドイツに出発する。

2月15,16日 GC参加者選考…(6)

2月18日 参加者(男子3名、女子7名)決定

以後、各テーマのプレゼンテーションについて話し合いを重ねる。

4月 実施計画書提出、本校よりGC派遣留学生が南アフリカに出発。

4月 GC Newsletter2が届く。

その内容は、①各校でしなければならない準備、②キャンプの日程、③大使館・領事館からのゲストについて、であった。

5年生の吉田沙恵子さんが留学先のシェトランドを発ち、生徒コーディネータとしてケープタウンへ。以後、ケープタウン便りや、現地での準備状況を学校にe-mailで送ってくれる。彼女は、学校が貸与したラップトップのコンピュータを利用して、ホストファミリー宅でインターネットにアクセスしていたため、頻繁な連絡が日本語で可能になった。ホスト校の設備だけでは不可能であった。

4月 安全のためのガイドラインができる。…(8)

5月15日 GC参加者説明会(生徒・保護者)…(9)

具体的な準備が進む。南アフリカの通貨RandをRepublic National Bankの外貨宅配サービスで希望者が購入。

5月18日 ホストファミリー決定、会期中のプログラムが来る。

6月14日 GC参加のため、関西空港より出発。

## 2. 準備の詳細

### (1) 第2回GCでの会議

南アフリカの2校は、どうしても開催は不可能だと主張し始めた。教師数削減がさらに進み、とてもGCを開催できる状態ではなく、いろいろなイベントを実施する経済的余裕がないというものであった。生徒のプレゼンテーションを気にしながら、3日間長々と議論した結果、ホスト校に負担をかけないよう、滞在中必要な経費については受益者負担とすること、現地での移動はGCとして貸し切っ

たバスで行う、ホスト校の教師の負担を軽減するため、生徒のコーディネータが準備に大きく関わる  
こと、教師はホテルに自費で滞在することなどを決め、これらの内容をホスト校がケープタウンに持  
ち帰り、検討して最終的な決定をすることになった。

## (2) GC親善大使Kevin Johnsonの活動について

### ○学校内外でのGCのプレゼンテーション

学校内では、4年生徒にはもちろん、学年PTAに出席し、保護者にもGCとケープタウンについ  
てのプレゼンテーションを行った。学校外では、奈良県企画部長を訪問、また奈良県経済倶楽部では  
約1時間のプレゼンテーションを行ってGC99とGC00に対する理解と支援を求めた。

### ○GC準備の援助

まだ参加者は決まっておらず、GC参加者グループとしての活動はできていなかったが、英語の授  
業に参加し、テーマや南アフリカについての学習をサポートした。

また、研究部国際にあっては、GCプロジェクトについて話し合いを重ね、2000年に本校がホスト  
するGCのプランニングにも良き示唆を与えてくれた。

### ○English Assistance Group

ベルギーからのYFU留学生と共に、English Assistance Groupを結成。映画や歌などを教材に、  
本校生徒の英語のコミュニケーション能力を高めるためのミニ教室を開いた。参加したのは毎回数人  
であったが、その人柄と熱意のおかげでファンも増えた。

### ○草の根の親善大使として

長期にわたり、本校生徒宅2家庭でホームステイをしたが、持ち前の雄弁でホストファミリーと長  
時間ディスカッションを楽しむなど、ホストと良い関係を結んだ。さらに球技大会に出場するなどし  
て、本校生徒の多くにも親しまれた。

## (3) 教師コーディネータ会議

### ○テーマ：若者の失業、偏見、文化としての人権

### ○見学場所、ディスカッションのために使用する施設、教師宿泊所の決定

### ○安全対策：Safety Guidelineを出す。

○GC留学：アプリケーションが留学希望先に渡され、すべての希望者が受け入れられる運びとなっ  
た。本校からは、シェトランド3名、ドイツ3名、南アフリカ1名、スウェーデン1名が留学する  
ことになり、本校へはシェトランド、南アフリカの各1名が短期での留学を希望した。

○ノート型パソコン：松下電器産業から奈良女附属が寄贈を受けたことについて披露され、行き先と  
数が決定。南アフリカ4台、ドイツ1台、スウェーデン1台、シェトランド1台となった。チェコ  
は受け取りを辞退した。

## (4) GC参加者募集要項(2000年1月22日)

### ○日程

### ○費用

### ○選考方法

(5) GC1999について保護者対象説明会（2000年1月22日）

- 挨拶
- GCプロジェクトについて説明
- 第2回GCの報告（VTR）
- 第3回GCの説明
- 第3回GCに向けての取り組みの経過報告
- 安全対策について
- 募集要項説明
- 質疑応答

(6) GC参加者選考

選考方法

- 日本語論文：課題「偏見について」400字詰め原稿用紙5～8枚
- 英語論文：課題…その場で与えて作文する
- 日本語面接
- 英語面接

日程

- 1/11 Newsletter1を生徒に配布
- 1/22 保護者説明会、募集要項発表
- 2/5 日本語論文締め切り、論文の提出を持って応募とみなす
- 2/6～2/15 日本語論文採点
- 2/15 英語論文試験（英語科・研究部国際）
- 2/16 英語面接（英語科・研究部国際）、日本語面接（総務・研究部・担任）
- 2/17 代表者選考（総務・研究部・担任）
- 2/18 代表者通知

(7) 安全のためのガイドライン

- 常にホストファミリーの名前、住所、電話番号のメモを携行する。
- 南アフリカ国内では何時も単独行動はしない。常にホストファミリーの誰かか、Harold CressyまたはWittebomeの生徒か教師と共に行動する。
- いかなる時も現金を所持しない。
- パスポートはホストファミリーの指示により、ファミリー宅で安全に保管する。
- ATMでカードを用いたり、銀行で現金を引き出す必要が生じた場合は、見知らぬ人に話しかけられても礼を失することのない範囲で応じないようにする。
- 公共の交通機関はないものとして行動する。単独で利用しないこと。

(8) GC参加者説明会（2000年5月15日）

- 挨拶
- 説明・・・日程、安全対策、準備物
- 質疑応答

### 3. 1998年度英語 I およびOCBの授業での取り組み

#### (1) GCと英語授業の連携

英語科では1997年の第1回GC以来、4年および5年の英語の授業の中でGCのテーマをトピックとして活用することを決めた。また、4年では、英語 I 4単位のうち2単位とOCB1単位を同一教師が担当することで、授業の運営や教材の扱いかたを弾力的に進めるようにもしている。本年度も原則的にそれと変わらない体制を取った。

#### (2) 連携による相乗効果

英語授業でGCのテーマを扱うメリットは次のようなものである。

- ①批判的思考力の養成
- ②グローバルな視野の獲得
- ③縦わり教科からクロスカリキュラムへ
- ④教師主導から生徒主導へ
- ⑤問題解決的アプローチ
- ⑥知識偏重から自己教育力の育成へ
- ⑦コンピューターリテラシーの獲得
- ⑧プレゼンテーション技法の向上

GCから見た場合のメリットとしては特に次の2点が挙げられる。

- ①GCをみんなのものとする
- ②GCを一過性のイベントにしない

GC年次フォーラムは、物理的な事情から各校10名程度しか参加できない。その10名は本校の代表として、みんなの意見や議論した結果を持っていくのだと捉えることによって、できるだけGCをみんなのものにしようとした。また、授業で扱うことによって、e-mailなどによりパートナースクール間で継続的に意見の交換もできるのである。

#### (3) ディスカッションの重視

4月当初から扱ったトピックについては次ページの表を参照されたい。授業の中では特にディスカッションを積極的に導入し、生徒が主体的に授業に参加、授業を作り上げていくことを期待した。ディスカッションの主なトピックは次のようなものである。

##### ○Learning English: Experience and Expectation

4年の最初に、英語学習についての意識や期待を話し合った。

##### ○What we want to know about South Africa

第3回GC開催国の南アフリカについてbrainstorming, pairworkを行った後でディスカッションを行った。

##### ○Are Human Rights Universal?

Human rightsについてbrainstorming, pair workを行い、その後The Universal Declaration of Human Rightsを学習した上で、人権は普遍的かどうかを話し合った。

##### ○Is the Death Penalty necessary?

まず、死刑制度について賛否を取り、その後アムネスティインターナショナルの文献を読んだ後、ディスカッションを行った。最後にもう一度死刑制度の賛否を取った。

1998年度4年英語I・OCB

	Topics	Materials	Activities
1st	English Language	<i>CROWN1</i> Introductory Lesson B	Questions and answers in English Match the English words with their definitions Write a summary of the lesson in English Write a short essay: "I (don't) enjoy learning English."
	Cultural diversity The Women's Movement The Aborigines	<i>CROWN1</i> Lesson 3	Listen to the tape of the text in order to get the gist and to catch the keywords Questions and answers in English Match the English words with their definitions Write a short essay: A foreign country I want to go
		<i>CROWN1</i> Lesson 1	By Ms Ida
		<i>CROWN1</i> Lesson 2	
Holidays	<b>Assignment:</b> Read a Japanese book about South Africa and write a report in Japanese or English		
2nd	South Africa	Handouts	(With Kevin) Group discussions:school, education, the English Language Learning and the image of South Africa,
		The transcript of the Inauguration speech by Mandela A brief biography of Mandela	(After Kevin left) Memorize some part of the speech and present it
	Employment and Unemployment	Handouts	Read some documents about the reality of the employment in Japan Group Discussion: Part-time jobs for high school students Presentation by Frederik: Employment situation in Europe
3rd	Global Classroom1999	Global Classroom Newsletter 1	Read the Newsletter 1 Questions and answers in English Confirmation of the keywords
	Human Rights	Universal Declaration of Human Rights(un/abridged versions) Newspaper Articles Some documents by Amnesty International	List up the human rights that they think they have Match the shortened articles to the full ones Match the articles to Japanese translations Research t human rights questions Read a newspaper article about Tibet and Chinese crackdown
	Death Penalty	Some documents by Amnesty International Handouts	Take a vote about the death penalty Read the documents by Amnesty International criticizing our still having and using the death penalty Discussion: Are you for or against the death penalty?
	Prejudice Rights of foreign residents in Japan	A newspaper article "Pool bans foreigners" Handouts	Read the newspaper article Discussion about the news story

#### (4) 教材

GCのテーマを取り上げていくためには、検定教科書だけではカバー仕切れない。そこで、次のようなものから教材をさがしたり、作ったりした。

①海外で出版されている英語学習者用のコースブック (P.102【参考文献】参照)

②英字新聞や海外のニュース雑誌

Daily Yomiuri、TIME、NEWSWEEKに掲載された記事から授業で役立つようなものを日頃からスクラップしておき、それぞれのトピックにあった記事を探し出してきて使うようにした。

③WWW上のサイト

WWWを利用することによって、シリアスな話題からポピュラーカルチャーに至るまでオーセンテックな教材、統計的な数値、最新の情報を瞬時に入手することができる上、それを加工して生徒用ハンドアウトなども作ることが大変容易である。ただ、情報の質に関しては十分に吟味することが重要である。

実際に授業で扱った教材をいくつか挙げておく。

Universal Declaration of Independence (unabridged/ abbreviated edition)

Amnesty International New Release

Human Rights V.S. Death Penalty (Amnesty International Report)

Dalai Lama (Amnesty International Report)

Amnesty sees human rights leadership role for Thailand (Daily Yomiuri)

Egypt: Education Plan Gives a Boost to Girls (Daily Yomiuri)

Guideline for Teaching about the Holocaust (<http://www.ushmm.org>)

Pool bans foreigners over 'harassment' (Daily Yomiuri)

Declaration of Independence

#### (5) 夏休みの宿題「南アフリカ」

1999年のGCは、南アフリカで開かれることになっていた。南アフリカは長い間のアパルトヘイト政策がようやく否定され、マンデラ大統領のもとで「虹の国家」建設が進められている国である。負の遺産をまだまだ抱え持ってはいるが、大いなる希望と夢をもって理想の国家建設に邁進している。そこに多くの今日的課題や世界全体が抱え持つ問題の縮図を見ることができるのではないかと考えた。そこで、夏休みの宿題として、日本語で南アフリカについて好きな本を一冊読み、レポートを書くことにした。

#### (6) GC親善大使の授業参加

GCではStudent Ambassadorが選ばれることになっていた。その役割は、参加校を回り、参加校間の連携をより円滑にし、次回のフォーラムへの準備の手助けをするものであった。

先に述べたように、本校には、9月当初～11月初めまで、Student AmbassadorとしてKevin Johnsonが滞在し、平田教諭が担当する4年の英語の授業は彼と協同して進められた。KevinはケープタウンのHarold Cressy High School出身の19歳の青年である。生徒たちはネイティブスピーカーの英語に触れることができた。また、授業外でも個人的に交友を持つものがたくさんでてきた。生徒も、単に英語の運用能力が伸びたというだけにとどまらず、多くのことを学んだと考えられる。

(7) 留学生の授業参加

当時、GCとは別にベルギーからの留学生が年に在籍していた。彼は日本語が話せるので、Kevinと日本人生徒のパイプ役になった。また、Kevinが帰国した後も、GCのテーマの一つである、Unemploymentについて、ヨーロッパにおける失業問題についてプレゼンテーションをした。

留学生のこのような英語授業の参加はたいへん効果的であったし、今後もそうだと考えられる。

【参考文献】

Beglar, David	1993	Contemporary Topics	Longman
Byrne, Donn	1988	Teaching Writing Skill	Longman
Dowling, Peter	2000	Megatrends: Life in the 21st Century	MiniWorld
Frazier, Laurie Leach	1995	Introductory Topics	Longman
Hadfield, Jill	1992	Classroom Dynamics	Oxford University Press
Kikuchui, Mari	1999	News and Views	MacMillan Languagehouse
Littlejohn, Andrew	2000	Worldwide Cambridge	University Press
MaElroy, Jane	1997	Write ahead	MacMillan Languagehouse
McLean, Paul	1996	My Opinions, Your Opinions	MacMillan Languagehouse
McLean, Paul	1997	Listen and Write	MacMillan Languagehouse
McLean, Paul	1993	Talking About Japan	Asahi Press
Nolasco, Rob	1987	Conversation	Oxford University Press
Numrich, Carol	1995	Consider the Issues	Longman
Numrich, Carol	1994	Raise the Issues	Longman
Numrich, Carol	1997	Face the Issues	Longman
Peaty, David	1995	Global Perspective	Kinseido
Stanley, Nancy	1998	Think in English 1	MacMillan Languagehouse
Schinke-Llano, Linda	1996	Time:Reaching for Tomorrow	National Textbook Company
Schinke-Llano, Linda	1997	Time:We the People	National Textbook Company
Swift, Richard	1996	Intensive English for Meetings & Presentations	Macmillan Languagehouse
Ur, Penny	1996	A Course in Language Teaching	Cambridge University Press
Wallwork, Adrian	1999	The Book of Days	Cambridge University Press
Wagner, David	1999	エクセレントマニュアル「ミーティング」マネージメント編	Asahi Press
Wallwork, Adrian	1997	Discussion A-Z	Cambridge University Press
大下邦幸	1996	コミュニケーション能力を高める英語授業	東京書籍
川村正樹	1999	英語力向上のためのスピーチ学習入門	リーベル出版
志村史夫	1996	理科系のための英語プレゼンテーションの技術	The Japan Times
諏訪邦夫	1995	発表の技法	講談社ブルーバックス



#### 4. 1998年度3年の授業での取り組み

3年は、特にGCに関するトピックをカリキュラムに組み込んでいる学年ではないが、Kevinに短時間だが、加藤教諭の授業に参加してもらった。

2時間を作文の準備時間（日本と南アフリカの学校の教育制度の違いが分かるような質問作り）に充て、2時間をKevinに対する質疑応答に充てた。

生徒にとって興味深かったのは、学校にイスラム教徒の生徒がいて、午後からのモスクでの礼拝を保証するために毎週金曜日の午後は授業がなく早く学校から帰るといったことだった。

学校財政の貧弱さ—例えば850人の生徒数に比して教職員数はたったの23人—をKevinは力説していたが、この点も生徒たちは驚いていた。

本校は制服がないが、この点に関する生徒の質問にたいする答えも興味深いものだった。Kevinはいつも制服を着て来たが、「制服は学校に対する誇りを持たせてくれる。悪いことをしようかと思った時でも、『制服を着ているのだから恥ずかしいことはやめよう』という気になる」と回答してくれた。生徒たちは、制服ではなく自由服の方がいいと考えている者が多数なのだが、いかんせん英語の力がなくて、また、年上のKevinが胸を張って壇上から制服の良さを力説するので圧倒されてしまっ、反論らしきことはできずに終わった。

#### 5. 1999年度の5年の授業での取り組み

5年を担当したのは加藤教諭であった。6月14日から出発予定ということもあって、たくさんの取り組みはできなかった。

テーマの一つに偏見の問題があり、参加者たちは男女の性に対する偏見の問題に取り組むことを決め、アンケートを保護者や同級生から取っていた。それで、授業では男女雇用均等法のことや、家事労働に対する男子の考え方がわかる統計資料を英語で読み、その後班毎に分かれて1回討論をした。また、授業ではできなかったが、新聞記事に掲載された男女差別の問題、環境問題、などをできるだけ紹介し、簡単な英語での質疑応答をした。

#### 6. テーマについての準備、発表、討論

南アフリカで行われるプレゼンテーションと討論は、Prejudice, Youth Unemployment, Culture - Reality of Human Rightsの3種類がテーマとして決められていた。したがって、参加者10人がそれぞれのテーマを全員で準備をした。

##### (1) Prejudice

焦点をどこに置くかが問題だった。在日朝鮮人やアイヌ人、外国人労働者に対する人種的偏見、障害者に対する偏見、男女の偏見、部落民に対する偏見、などいろいろと考えられたが、生徒たちは男女の偏見、特に家事労働の男性と女性の仕事分担に決めた。これは生徒にとっては身近に感じられる問題であり、また、日本社会の特徴も浮き彫りにできるのではないかと予想されたためである。

生徒たちは生徒や保護者に「もう一度生まれ変われるとしたら、男に生まれたいですか、女に生まれたいですか」とか「日常生活や社会生活の中で男女の間の偏見を感じられたことはありますか」というアンケートをとって考察した。また、インターネットや本を利用して、女性労働者がどのようになっているか、男女雇用機会均等法が成立してからどのように変わってきたのかを調べた。

発表の内容は、共働きの若夫婦が帰宅後に、男は何もしないでゴロツと横になってテレビを見ているが、女は炊事をし、風呂を沸かしたりしなければならない、というものだった。それを簡単な台詞

付きの紙芝居にし、音楽も添えて、それをパワーポイントを利用して発表した。

## (2) Youth Unemployment

三つのテーマの中で、生徒たちにはこれが一番むずかしかったようだ。

理由の一つは、これが経済問題だったからである。したがって、統計上分かるようなことに要約が絞られてしまった。フリーターの青年や就職できない青年にインタビューなどをして生の声を聞くことができると思ったとは思いますが、忙しくてそこまでする時間的余裕はなかった。いま一つの理由は、パワーポイントの処理である。図表がたくさん出てくるので画像処理が大変だった。

発表の内容は、日本全体としての失業率が欧米に比べて低いこと、それは日本の雇用制度の特徴である終身雇用制と年功序列制から来ていること、最近それが能力主義に変わりつつあること、青年の失業率がやや上昇傾向にあり（約7%）、全体の率（約4.6%）よりも高いこと、学歴による職種、退職年令の違い、青年の中では一つの企業に束縛されることを嫌い傾向が高いこと、というものであった。

## (3) Culture-Reality of Human Rights

授業で習っていたこともあって、生徒たちは死刑制度を選んだ。これは非常に良い選択だった。アムネスティの資料をインターネットで見つかったり、本を読んだりした。また、参加者の中でも討論をしてみた。結局、結論は出なかったが、日本の死刑制度の是非の議論の整理はできた。

次に発表の形式が問題となったが、紙芝居、パワーポイントによる図表提示、とは別の形式の方が良くはないかということになり、ロールプレイに決まった。裁判官、警察官、政治家、学者、評論家、死刑に賛成の人、反対の人、などの役割をみんなが分担し寸劇風にすることにして、練習した。

## 7. 経済的支援の依頼

今回のGC開催にあたって、大きな障壁となったのがお金の問題であった。GC参加校が必要経費を負担すること、ホスト校はチャリティーのためのパーティーを開くなどして工面したようだ。これは、日本で開催するGCに南アフリカの2校が参加する際には、参加希望生徒とその家庭に降りかかる深刻な問題である。実際、ケープタウン滞在中、南アフリカの生徒から日本に行くにはいくらかかるのか、物価は高いのかなど、熱心な質問を受けた。

学校としては、第3回GCに参加する以前から、何とか支援を受けられないか次のような働きかけをした。

○在東京 南アフリカ大使館…1998年4月副校長が訪問、すでに文書などでは知らせていたが、GCプロジェクトの説明をし、理解と協力を求めた。三等書記官Nina Marais氏より今後の可能な南アフリカへの支援方法についてアドバイスを受ける。

○松下電器産業株式会社…1998年8月依頼、9月、承諾を得る 12月、Let's note10台の寄付を受ける。

各学校へは、本校から留学していく生徒などが持参。南アフリカへは、在東京南アフリカ大使館のご好意で南ア航空を使って空輸していただいた。

○在ケープタウン日本領事館・・・6月21日、ケープタウン市庁舎で行われた市長によるレセプションには在南アフリカ共和国日本国大使館在ケープタウン出張駐在官事務所長、参事官兼の三木氏も出席しておられ、日本人生徒とも親しく話をされていたが、その場で可能な経済的支援の方法につ

いて助言をいただいた。

6月25日には、杉峰校長と中道が出張駐在官事務所を訪問し、改めて援助を依頼。大使がケーブタウン滞在中とのことで三木氏から話をしていただいた模様だが、翌日、うまく行かなかった旨連絡があった。

### III GC 99 in Cape Town

#### 1. プログラム

全日程は、次ページの表の通りである。

なお、引率をしたのは、杉峰校長、加藤勇（英語科）、中道貞子（研究部・学年）、塩川史（研究部）であった。

#### 2. プレゼンテーションと討論

##### (1) Prejudice

###### ①本校の発表

紙芝居は、ちょっとしか台詞を画面に書き込んでいなかったにもかかわらず、あちらこちらでクスクスと笑い声が聞こえた。意図する所が伝わったようだった。

家事労働が女性にとって大きな負担になっている問題を取り上げたのは日本だけだった。その点ではおもしろかったし、日本社会の問題をよく理解してもらえただろう。

###### ②他校の発表

イギリス

寸劇をしたり、ビデオによる発表で、生徒や市民の人の声を紹介していた。内容は性差別、障害児・者、人種差別に関するものであった。

チェコ

ビデオでの発表で、生徒や市民の人にインタビューしたことを紹介していた。内容は同性愛者、Roma、ベトナム人、カトリック教徒（かつて共産主義国家だったことから）に対する偏見が主なものであった。

ドイツ

定義をした上で、青年の年配の人に対する偏見の問題を口頭で発表した。

スウェーデン

寸劇をして、バスの乗客がどこの国民かを推測するというものだった。何も話さない乗客が日本人と見なされていた。なるほど、「これが偏見というものか」と思わざるをえなかった。また、Romaについての報告もあった。

南アフリカ

寸劇による人種的差別・社会的地位による差別の紹介だった。

###### ③討論

全体で行われた。司会はWittebomeの先生が担当した。

最初に、司会者が各校の発表の主題を指摘した。

その後、2人ずつに分かれ、出身地の地域の社会的特徴点、その地域から仲間外れされている人たちがいればどんな人たちか、その人たちを仲間入りさせることは可能か、などをめぐって話し合いを

## GC 99 in Cape Town全日程

日次	月日	現地時刻	交通機関	活動
1	6/14	1030 1515 1605 1615	KLM868  KLM104	関西空港発 アムステルダム着 アムステルダム発 ロンドン着 Hotel Langland泊
2	6/15			ロンドン見学
3	6/16	2105	BA59	ロンドン見学 ロンドン発
4	6/17	0945		ケープタウン着 Harold Cressyにて歓迎会
5	6/18	0930 1300	鉄道	Wittebomeにて歓迎会 Ice Breaker Camp (Sea Scout Base--- Sandvlei) グループ作り
6	6/19			Ice Breaker Camp さまざまな活動 (ハイキング、崖登り、バレーボール、カヌー、ヨットなど)
7	6/20			Ice Breaker Camp 午後、ホスト迎え
8	6/21	1000 1130 1400	バス	ケープタウン市長によるレセプション Camps Bay高校へ 「偏見」についてのセッション
9	6/22	0930 午後 夜	バス	「若者の失業」プレゼンとディスカッション タウンシップ見学 (非合法住宅とランガ高校) 教師の会議 (ホテル)
10	6/23	0830 1000 1900	バス	教師の会議 (Harold Cressy) 見学 (ケープポイント) International Evening of Song and Dance (Camps Bay)
11	6/24	0830 1200 2000	バス・船	「人権の文化」プレゼン・Dr.Sedick Issacsレクチャー(Camps Bay) Roben Island見学 教師の会議 (ホテル)
12	6/25	0900 1300 1430		ケープタウン市内徒歩ツアー Human Rights ディスカッション(Harold Cressy) Evaluation/在ケープタウン出張駐在官事務所訪問
13	6/26	0930 1730 2000		テーブルマウンテン 教師の会議 (ホテル) 閉会式・パーティー
14	6/27	1830 2105	BA58	空港集合 ケープタウン発 (スウェーデン以外)
15	6/28	0810 1135 1345 1435	KLM1010  KLM867	ロンドン着 ロンドン発 アムステルダム着 アムステルダム発
16	6/29	0850		関西空港着

した。各地の社会的特徴がいくつか報告された後、偏見を助長しているものは何かということになり、市長、学校、地域社会、報道機関、家庭、政治、などが指摘された。

二番目の討論の主題は、分かりにくい形での身の周りの偏見とはどんなものか、偏見の目で見られた人はどんな感情を抱くことになると思うか、偏見と差別は同じか違うか、というものだった。

人間はどうしても外見で判断しがちになってしまいがちになるので偏見を抱かないようにするには努力を要するという趣旨の意見が多かった。日本代表の生徒が、偏見を抱くのを避けることはむずかしいが、偏見を抱くことは即差別ではない、という趣旨の発言をし、司会の先生から良い指摘だという評価を受けた。

## (2) Youth Unemployment

### ①発表

外国の発表と比べると、綿密であり、グラフ化しているので分かりやすかった。日本の青年の失業の問題点、最近の、<一つの企業に束縛されたくない>という傾向など、よく伝えることができたと思われる。

しかし、パワーポイントの発表を映し出すスクリーンが小さくて見づらかったのが難点だった。

### ②他校の発表

#### スウェーデン

青年の失業率は約8%ということだった。

#### 南アフリカ

人種ごとに大きく異なっていたのが南アフリカの大きな特徴点であり、他国の報告にはなかった点である。失業率が高い順番に並べると、African, Colored, Indian, Whiteの順となる。Africanの場合、男女差も激しく、男で約20%、女では38%にもものぼり、平均して全体では約35%と報告されていた。対照的なのはWhiteで、ここにはアフリカーナーと呼ばれている白人とイギリス系白人が含まれるが、男女とも約5%であった。

#### ドイツ

20歳未満の青年の失業者は10.5%、20歳以上25歳未満の場合は19%だった。東ドイツ地域の失業率は西ドイツ地域の2倍となっていて、ドイツ統一の結果がはっきりとうかがえた。

対策として、外国へ投資している企業が多いので、それを支えている官僚を減らすべきだ、法人税を減らして競争力を高めるべきだ、教育にもっと力を入れるべきだ、とかの提案があって興味深かった。

#### チェコ

共産主義国家だった時代は失業がなかったが、最近になって失業が増えて来て、4%から6%ほどになってきた、ということである。

#### イギリス

最近のShetlandでの青年の失業率は約3%とのことだった。

### ③討論

グループに分かれて行われた。

### (3) Culture-Reality of Human Rights

#### ①発表

当日は、一人ひとりがjudge, policeman, politician, などと書かれた大きなカードを胸に吊して臨んだ。

他国の場合もそうだったが、寸劇風の発表はわかりやすさやユーモラスさなどもあって、好評であった。また、この死刑制度の問題を提起したのは日本だけだったということもあり、人権問題を考察するのに大いに寄与できたと思われる。

#### ②他校の発表

##### 南アフリカ

就職の面接試験で差別が行われていて、組合が激しく抗議している寸劇のビデオが上映された。

##### スウェーデン

世界人権宣言の解説、スウェーデンでの国連の活動を報告していた。

##### チェコ

教育制度が、現在、普通の子のための初等学校・中等学校と、障害児のための学校、成績不振児のための学校とに大きく分かれていて、初等段階で後者に入学した子は前者には移行できない制度になっているのが問題、という報告があった。また、墮胎の問題の報告もあった。

##### ドイツ

ドイツ憲法の解説がOHPで紹介された。盗聴法があること、極右の考え方の普及は禁止されていることなどが興味深かった。

##### イギリス

女性の選挙権、移民、難民、亡命者の問題を取り上げていた。また、Shetlandはアルバニアに逃げたコソボ難民のために資金や物資の援助をしている、ということであった。

#### ③討論

グループに分かれて討論。

### 3. 協議されたこと

教師の会議は、学校、ホテルではほぼ毎日行われた。プロジェクトの基礎が固まり、方向性を確認する時期でもあり、多くのアジェンダがあるのはやむを得ないことである。教師も、つきあいが長くなると立場の違いなどもはっきりしてきて、対立場面も増えてきた。会議の場は、教師にとってまたとない学習の場である。立場の主張の仕方、ネゴシエーションの方法など学んだことが多い。

以下は、協議され合意された内容である。

#### (1) GCの各校での位置づけについての情報交換

- スウェーデンではGCをカリキュラムの中に位置づけ、19名の生徒が受講している。
- 留学生がGCに向けてのミーティングに参加している。
- プロジェクト開始当初は、一部のエリートのためのプロジェクトであると校内で批判も大きかったが、次第に理解されるようになった。全校にアンケートをとったり、授業の中でテーマを扱ったりと、取り組みをできるだけ全体のものにする努力が各校で行われている。
- 初めは教師主導の取り組みだったが、次第に生徒主導の取り組みになった。
- 希望者が多く、選考に苦慮。
- 興味を示すものが女子生徒に多く、男子生徒が少ないのは、各国共通の問題か。

## (2) GC留学について

○各校からの留学生の現況報告

○留学目的をはっきりとさせることが肝要・・アカデミックな目的を持つことが必要であり、GCとの関わりを今以上に持たせることが大切である。

○新しい共通のApplication Formを作成し、生徒に動機などを十分に書かせ、教師の推薦の文章もつけることで合意。

○アプリケーションは1月と6月、6ヶ月以上前に申し出る。

○EUは16歳以下の留学目的の入国を許可しない。

○各校の受け入れ人数と時期

Graf Friedrich・・各校から最大2名、9月～6月、7月or1月～6月

Bobergsskolan・・各校から最大2名、8月～12月、1月～6月、8月～6月

Anderson・・各校から1名、8月～10月・12月、1月～4月、8月～6月（4月～7月はNational Exam)

HC/Wittebome・・最大2名、ホストファミリーがあれば、1月～6月

Gymnasium Zlin・・5名 (to be confirmed)、9月～1月、2月～6月、7月

日本・・最大1名、4月、9月、1月の学期はじめから

## (3) GC2000について

○開催時期：6月7日～21(22)日・・スコットランドはNational Examがあり、日本で受験する生徒もいるかもしれない。

○テーマ：Education, Tradition and Technology, Human Relations

すべてに、過去、現在、未来の視点を入れる。また、事前にテーマについて各校で討議された内容についてe-mailなどで意見交換をし、その結果は奈良女子大学の中にあるGCの公式ホームページに載せ、そこにアクセスすることで情報をシェアする。

○参加人数：生徒・・各国10名ずつ+生徒コーディネータ

教師・・2～3名

○生徒コーディネータ：6週間前日、Learning Schoolのメンバーを兼ねる。

○広島ツアー：ぜひ実施して欲しい。日本が経費の面で苦しければ、Japan Rail Passを買ってくる。

○特に参加者はプレゼンテーションなどで言葉の問題を配慮しよう。

○日本情報がほしい・・本校からの留学生の活用、領事館に依頼、日本から情報を流す。

## (4) Learning Schoolについて

アンダーソンのStewart Hay氏からLearning School Projectの構想について説明があった。

○生徒たちがどのようにlearnしているのか、効果的な学び方は何かなど、高校生の目から調査し、大学がサポートしようとするプロジェクトである。

○参加者はGC各校を調査のフィールドとして用い、順番に訪問。期間中はホームステイ。

○GC留学生やGC親善大使が各校で与えた利益は計り知れなく、それが発想の基になった。小さなGCが開催されているようなものであり、訪問校にとって得るところが大きいと期待する。

○各校のスタッフに依頼するのはホストファミリーをアレンジすることのみで、調査そのものについての新たな仕事はない。

○このことについてはGC校長会議を開催中に開き検討する。

## 4. 記録

以下は、ケープタウン滞在中の教師による記録である。

<17日>

朝、ケープタウンの空港に着くと、スタッフや学生のコーディネータが出迎えていた。空港ではスポンサーの名前の入った横幕を掲げ、その前で参加者がいる風景の写真が撮られた。スポンサーへの配慮だろうか。

バスでHarold Cressy (以下、HC) に着くと、学校の門の前から学校の玄関まで、生徒たちが列を作って出迎えてくれた。やがて玄関が開いて、拍手で迎えられた。中央のホールに生徒たちが集まって、そこでFormal Welcomeが行われた。

ラシーダ校長の挨拶に始まり、評議委員、コーディネータ代表、Wittebome (以下、Witts) 校長イソ氏の挨拶、その後、HC校のコーディネータのエイドリアン氏の挨拶に続いて、彼が各国のコーディネータを指名してそれぞれの簡単な挨拶があった。Welcomeは1時間もかからない簡単なものだった。

昼食は、集会室で。机の上にテーブルクロスをかけ、小さな一輪挿のおかれたテーブルが幾つか並べられ、その周りに椅子が置かれていた。前の壁に沿って、食べ物が並んでいた。フルーツ、サンドイッチ、スコーンなどを中心にしたものだ。これらは親の手作りとのことだった。前に飾られた生け花も教師の妻が2時間ほどをかけてアレンジしたものとのこと、南アフリカの国花であるプロテアやエリカなどがきれいに生けられていた。

食事の前には、特別な挨拶があるわけでもなく、それぞれが好きなものをお皿にとり、好きなところに座って食べた。

1:30~ 各校ごとの打ち合わせが、いくつかの教室に分かれて行われた。日本の打ち合わせでは、吉田さんがGCの日程を説明し、いくつかの確認が行われた。

2:00~ 荷物をバスから下ろし、迎えに来るホームステイ先の親を玄関で待った。2時半は生徒の下校時刻であり、親が迎えに来るのに合わせて生徒たちは、それぞれのホームステイ先にむかった。また、Wittsの生徒の家にホームステイをする子供たちは、バスでWittsに向かい、そこでホストファミリーに迎えられた。

教師はホテルへ。教師のホテルは、HCのすぐ前のホテルである。

7:30~ レセプションにて各国のコーディネータと、HC、Wittsからの教師によるmeeting。話の中心は、Icebreaker Campのこと。どこまで教師がキャンプ場にとどまるかで議論が行われた。ヘイ氏はじめ、南アフリカ以外のスタッフはずっとキャンプ場にいたいと主張した。キャンプの問題は、キャンプに教師は立ち会わすべきでないという南アフリカの先生との意見の食い違いもあるが、なにより、キャンプの内容に関して何も知らされていない不満が大きいように思った。

この日、私たちは、meetingは夕食も兼ねていると思っていたので、食事をとっていなかった。meetingが終わった10時ごろから食事をし、11時ごろ就寝。

<18日>

8時半にHCに迎えのバスがきて、Wittsに向かう。9時半からの予定のFormal Welcome at Witts. が9時40分から始まった。

司会の先生の挨拶に始まり、Wittsの校長挨拶、生徒の歌、HC校長挨拶、生徒会長挨拶、1人の卒業生による楽器演奏(2曲)、Witts.と地域の歴史紹介(これが長くて25分)、その後、もう一度歌。



そして、各国代表の挨拶が、ヘイ氏（スコットランド）、杉峰校長、ニルス氏（スウェーデン）、ジープ氏（ドイツ）、ミレック氏（チェコ）の順に行われる。その中で、各国の教師の紹介もなされた。

11時に終了して、コーヒブレイク。食べ物は生徒の親が持参したとのことであった。いろいろな種類のパイ、缶入りのビスケット、パン、チーズ、バナナ・オレンジ・リンゴなどのフルーツ、ペットボトルに入ったコーラやジュース、暖かいコーヒー、紅茶など。

1時の汽車でキャンプ場へ。

キャンプ場について、Flagbreak and Opening Ceremony。その後、キャンプ場の周りをぐるっとひと回り案内され、ホールで昼食。カレー味のスパイシーないためご飯だけの簡単な昼食である。その後、各国紹介National presentation。

16:20 全部の生徒を6つのグループに分け、荷物をベッドに運ぶ。教師のミーティング。翌日のキャンプの内容の説明がなされる。カヌー、ハイキングなどの予定が説明され、天候の事もあって心配。

その後、スライド映写機の準備がなされ、ドイツの発表が行われる。日本の発表は、スライドをホストファミリーに忘れてきたため、翌日回しとなる。

#### <19日>

教師たちは8時半にホテルを出発。9時にキャンプ場につく。

6つの班を2グループに分け、半分は山へ。半分はキャンプサイトでの活動。

山グループは9時半にバスで出発。加藤がついていく。山での活動は、ハイキングとアブセーリング。ハイキングでは、ガイドが道に迷い、サバイバルツアーとなってしまうトラブルもあった。

キャンプサイトでの活動はバレーボール、カヌーイング、セーリング。カヌーイングは、2人ずつしかできないので、活動をしている時間より待っている時間が長い。

昼食は、パンにハムとチーズをはさんだものか、真っ赤なウインナーをはさんだパン2個の簡単なもの。

教師は4時にキャンプサイトをでないといけなかった。

夜は、Wittsのinformal party。7時半からというが、ずいぶん待たされて始まった。エイドリアン氏の簡単な挨拶があっただけで、後は大きな音で鳴り続ける生演奏と歌の中での食事とおしゃべり、ダンス。準備されているメニューはだいたい同じ。サンドイッチ、ケーキ、フルーツ（たくさんの甘くておいしいフルーツが並んでいる。日本ならこれだけのフルーツをそろえようとするとずいぶん高くつくだろう）、スコーン、フレッシュジュース、たくさんのワイン、コーラなど。これも12時になってやっとお開き。最後の締めくくりの挨拶があるわけでない。何人かの先生の車に便乗して帰る。

参加していたのは、HCとWittsの教師、保護者。

#### <20日>

キャンプ場では、お金を盗られた生徒、上着がなくなった生徒がいることを聞く。全員で部屋の点検、持ち物の点検を行い、全体の雰囲気は暗いものになったようだ。しかし、問題を参加者全体で考え、教師がみんなの意見を言わせて、解決策を話し合っていた。プログラムの最中でありながら、長い中断をしてまで、被害にあった生徒だけの問題にしなかった対処の仕方は、学ぶべきものがあった。活動が再開すると、生徒たちは、また活気を取り戻していったようだ。

全員で海岸へ。冬とは思えないほど暖かで、海に飛び込んで泳いだ生徒も何人かいた。さすがに波

は高い。

#### <21日>

いよいよ本番。9時半からの予定だが、9:50にエイドリアン氏の説明が若干あり、その後、各国の領事が集まり始める。8人がけの円いテーブルを囲んで座っておしゃべりをしながら式が始まるのを待つ。日本の生徒たちは、折り紙を教えている。最前列には、来賓・教師・生徒のコーディネータが座っている。テーブルの上には、コーヒーブレイク用のサンドイッチとお菓子が置かれていた。

10:17 エイドリアン氏の司会でセレモニーの開始

市長代理、HC校長、WITTS校長、チェコ領事、英国領事、ドイツ領事、日本領事挨拶。

10:45 市長到着。

スウェーデン領事こられず、生徒コーディネータが代読。ケビン、ヘイ氏挨拶。市長へのプレゼント→各国へのお返しが市長より渡される。

エイドリアン氏の挨拶でオープニングセレモニーは終わった。

セレモニーが終わると、バスで主会場のCamps Bay高校（以下CB）へ。ここで昼食をとる。HC高校の先生方が、用意された昼食を配って世話をしてくれていた。いためご飯、ミートローフ、ミックスベジタブルのソテー、しばづけ風漬け物にコーラ、紅茶、コーヒー。

午後からは、いよいよ最初のプレゼンテーション“Prejudice”開始。

コーヒーブレイクは紅茶、コーヒーにクッキー、プチケーキ、揚げドーナツなどのお菓子。

コーヒーブレイクをはさんで、この日のディスカッションは全員で。

夜は、珍しく何もなく、ホテルで夕食を食べた後、書類整理やメモの整理をした。

#### <22日>

朝、交通費やロベン島旅行の費用を払う必要があり、銀行に寄りたいので、朝のプレゼンテーションの前に銀行に行く。15万円の両替であり、エイドリアン氏に送ってもらい、校長にもついてきてもらった。銀行の扉は2重になっていて、それぞれのドアは、中から操作され、赤いランプが緑に変わらないと入れないようになっていた。非常に厳重なセキュリティーがなされている。

9時半からの2つ目のプレゼンテーションが予定の時刻を10分ほど過ぎて始まった。

テーマはYouth Unemployment。

その後、6つのグループに分かれる。1人の教師と1人の生徒コーディネータを中心に、前日と同様に準備されたペーパーに沿って、1時間ほどのディスカッション。テーマが難しく、非常に活発な討議がなされるほどではないが、しかし、みんな積極的に発言をしていた。

午後は、大きなスーパーマーケットPack'n Payに立ち寄って昼食。ここがスポンサーになっており、行くと、大きな横幕が張られその前でシェットランドの生徒を中心にヘイ氏が写真を撮っていた。準備された昼食はハンバーガー1つとフライドポテト、缶ジュースというメニューだった。ベジタリアンの生徒は別の皿にのせたものを食べていた。店長の挨拶、ヘイ氏のお礼の言葉があった。

そこをでると、タウンシップツアー。初めにLanga高校を訪問。校長先生の説明を受けた後、学校を見学した。Western Capeで、初めての黒人のための学校。聖歌隊が有名らしい。1500人の生徒に、40人足らずの教師。会場として借りている白人の学校CBとの違いに驚く。

その後、町の中を大きなバス2台で見学。6時にHCに帰る予定が、7時に変更になった。

この日の会議はLearning Schoolについて。ドイツは反対。南アも発言が多い。GC2000について

の話し合いまでは進まず、翌朝、HCで会議を持つことに。

<23日>

8:37~9:30まで HCでGC2000についての会議

会議の参加者は、いつもは南ア以外の教師に加えて、HCのエイドリアン氏とサコテ氏、WittsのF. エイドリアン氏。この日はサコテ氏は都合がつかず不在。議題はGC2000について。

10:00~ バスでHCをでて、市内を抜け、ケープポイントへ。ケープポイントの灯台まであがると、雨が降り出した。それまで天気を持ったのがまだしも。エクスカッションでは、天候は大きな要素だ。

昼食は、ケープポイントでWitts.高校が用意したサンドイッチ（薄いパン4枚でできたツナサンドと卵サンド。紙パックのジュースに、リンゴ、オレンジ各1個）。

6時頃にCB高校に戻る。夕食は、各自とることになっていた。生徒たちはホストファミリーが持たせてくれた巨大ランチボックスの中身をみんなで分け合って食べていた。私たち教師にもお裾分けしてくれた。

7時からの予定のinternational evening of song and danceは、プログラムでは7時半からとなっており、実際に始まったのは7時50分。それまで、各自自由に過ごしている。会議の予定はきわめてタイトなのに、こうした待ち時間はやたら長い。しかし、この自由時間は生徒たちが自由に交流できる時間として必要なものだ。

本校の生徒たちは、上を向いて歩こう、ふるさとの2曲を歌った。Wittsのサマンサが日本語を覚えて、一緒に参加して、中央で歌っていた。

Langa高校の聖歌隊は、圧倒的な迫力で参加者全員を魅了した。

<24日>

この日のプレゼンテーションは8時半に始まることになっており、7時半にHC高校にバスが来ることになっていた。他の行動については時間がルーズな割に、プレゼンテーションだけはきちんと始まる。このバスも、誰が乗っているかを確認することもなく発車した。日本人の生徒が少ないのが気になる。

8時半、プレゼンテーションのはじめのエイドリアン氏の挨拶。このとき、日本の学生は2人まだ来ていなかった。ホストファミリーに送られないと来ることができないのでバスに間に合わなかったのだ。

9:00 Human rightsについてのプレゼンテーションの後、Dr. Sedick Isaacsによるスピーチ。この日のRoben島行きの船は12時にでるので、ディスカッションは翌日に延期となった。

予定の昼食が運ばれてこず、バスで船の乗り場まで向かう。ここで昼食を受け取る。魚とポテトのフライ。とにかく量が多い。これを、船を待つ間に、あるいは、船の中で食べた。

12時過ぎにフェリーでRoben島へ。3時発の船が10分あまり遅れてRoben島を出た。

4時から8時までは、ウオーターフロントで自由時間。8時にホストファミリーが迎えに来ることになっていた。この4時間の自由時間は長すぎる。しかも、いくら安全とはいえ、子どもたちを教師なしで4時間も…というのは、日本人の感覚なのか。

食事の後にミーティング。各国の参加者の選抜方法について、男女比についてなどの話があり、11時過ぎに終わった。

## <25日>

9時にHC高校に集合。9時半から4つのグループに分かれてwalking tour。

12時から、HCで準備した昼食。最初の日と同様の場所にて。

この日のメニューは、チキンカレーライスをメインに、いつもと同じスコーン、いくつかの料理、ケーキ、アイスクリーム、フルーツ、ジュース、コーラ、コーヒー、紅茶などが準備されていた。たくさんの先生方も来ていた。

1時過ぎから、前日のhuman rightsについての討議。生徒コーディネータが読み上げるメンバー表に従って、6つのグループに分かれた。

2時半からは、evaluation。4時から生徒コーディネータを交えてのミーティング。

杉峰校長と中道教諭は、南アへの援助について話をするため、4時に在ケープタウン出張駐在官事務所を訪問した。5時過ぎに事務所をでた。

## <26日>

朝の8時に三木さんより電話。大使に話をしたが、うまくいかなかったという内容。

南アへの援助は別のルートを考える必要があるようだ。

9時半にHC高校発、バスでテーブルマウンテンツアーに出かける。日本の生徒は、体調の優れないT君をのぞいて歩いて登る。塩川も一緒に歩くことになった。

ケーブルを利用すると、テーブルマウンテンの上まで約5分。山の上は、名前の通り、平らなテーブルのようだ。上をゆっくりと散歩しても1時間程度。歩いて登ってきた人たちは2時間ほどかかって到着した。

この日、生徒のランチを見ていると、サンドイッチだけ、ハンバーガーにフライドポテト、お弁当に加えて山ほどおやつを持たしてもらっている者など、待遇はいろいろだ。

下りはケーブルを利用してみんなで山を下りた。1時半頃にバスで学校に向かい、生徒たちはホストの車でいったん家へ帰り、教師たちもホテルへ。

5時半頃から、キャンプのお金のことで話し合う。細かい点までチェックし、議論する。宿泊費や食費については納得できる額だが、キャンプ中のバス代は適切には思えない。

social eveningが8時から始まることになっていたが、行事が行われる場所の情報が十分でなく、行きようがない。結局ホテルに南アの先生が迎えに来てくれたのは8時半だった。それから会場に行き、行事が始まったのは8時45分。司会はF. エイドリアン氏。

生徒コーディネータ、教師コーディネータが壇上へ。

HC高校とWitts校長への挨拶とプレゼント交換。シェットランド、スウェーデン、日本、チェコ、ドイツの順。HC校長、Witts校長挨拶。シェットランドの生徒が壇上へ上がり、ヘイ氏の挨拶。日本は、吉田さんの挨拶→生徒が順にメッセージ→塩川教諭の挨拶。ジェレミーの挨拶。シェットランドから、エイドリアン氏にプレゼント。メインコーディネータとしてのエイドリアン氏の挨拶。これが終わったのは9時30分。

その後、バイキング形式の食事と音楽。食事の内容は、いつもに加えて、ハムなども。音楽の音がとても大きく、話をできる状態ではない。この日は、両高校の先生のほか、ホストファミリーも来ているので、教師たちは11時前に会場をひきあげる。12時頃に終わったようだ。

会計のことで会議がもたれる予定であったが、翌朝に延びる。

<27日>

朝の10時にヘイ氏の部屋に集まってミーティング。南ア側からは、エイドリアン氏・サコテ氏・会計担当の先生が加わる。ヘイ氏の挨拶に始まって、キャンプの会計のことで議論。結局、使った費用を各国の人数で割り、チェコの方は他の4校でそれぞれ1人分を分担することになった。キャンプ場への移動のためのバス代や教師の移動費についても別に支払った。ただし、キャンプ代を支払うためのランドがなくなったので、これについては日本から振り込むことで合意された。

話し合いが終わると、この日は最後の日であり、校長のラシーダさんの家に。カラードの居住区。行くまでにフラットがあり、District 6から追い出された人が住んでいるとのことであった。中流だという説明だったが、日本の家に比べればはるかに広い。お母さんと妹さんがおられて食事の支度をしてくださっていた。野菜のスープ、スパイスのきいた魚料理に、チキン料理、サラダ、ミンチボールとご飯が用意されていた。その後に、キャロットケーキとパンプディング。とてもおいしかった。でも、日本では個人の家でこれだけの人を招くのは大変だ。

4時過ぎにホテルに戻り、5時半にホテルを出発して空港へ。6時集合と言ってあったが、なかなか集まらない。最後の生徒が来たのは7時だった。学校からは、エイドリアン夫妻、バベッタ、ラシーダ、サコテ氏、フランソワとジェイソン、バネッサなどなど。ホストファミリーも来るので、空港はごった返していた。

9時前にケープタウンを発ち、ヒースローへ。ヒースローからアムステルダム経由で関空へ。ヒースローで学校に予定通りに帰るという連絡を入れる。

アムステルダムで飛行機の出発が1時間遅れた。29日、10時過ぎに関空に無事到着。

## IV GC 99 in Cape Town を終えて

### 1. 生徒の感想

帰国後、生徒はフリーに感想をまとめた。以下、内容の観点別に、その一部を紹介する。

テーマについての準備と発表について

- 私はこの半年で本当にいろんなことを経験しました。GC前は、発表の流れがうまくまとまらなくて、メンバーと何度もぶつかりました。でも、あきらめずに何とか完成にこぎ着けて、最終的には高く評価されました。「やったらやっただけの結果が出る」、これを初めて実感しました。
- 行く前はプレゼンについていっぱい調べて、毎日のように討論したりして本当に忙しくて余裕なんて全然ありませんでした。そのいっぱいの大変だったことも、プレゼンで予想をはるかに上回るくらい評価されたり、みんなに会うたびに「よかったよ」と言われたりしたことで、がんばって良かったなと本当に思いました。

人と人とのつながりについて

- 人とかかわり合いがすごく印象に残っています。それは僕が南アフリカでの激しい気候変動で風邪をひいたときのことです。チェコの子で同じホームステイだったマイクルという子は、僕がしんどくなって早く帰ろうとしたとき、ステイ先に電話してくれ、ホームステイの人が来るまで、チェコの子みんな一緒になって待っていてくれました。これはすごくありがたいことで、感謝しました。
- わずかに10日間だったが私の今までに人生で日本語を覚えかけていた幼い日と同じくらい、たくさんのかたの言葉を吸収したように思う。五感をフルに生かして自分の精いっぱいのかたの言葉を吸収できた。例

えばホームステイ。ことばも習慣も違うけどお互い認め合い、同じ屋根の下で家族として楽しい時間を共有させてもらった。そして広がった友達の輪。しゃべるのに不安だった私が、しゃべりたくて仕方がなくなるまでになったのも、彼らのお陰だ。私は幸福者だな、と思った。

- プレゼンテーション、ディスカッション、見学、キャンプ、山登りなど、いろいろなプログラムがありました。みんなでする、これらのプログラムはもちろんです、私はホストファミリーとすごすときが大好きでした。ホストの家に帰って話をするのが毎日楽しみでした。みんな私を本当の家族みたいにかわいがってくれました。いとこの誕生パーティーに連れていってもらったり、日曜日にはみんな教会に行ったり、私が日本食を作りたいと言えば、ランチパーティーをしてくれたりしました。

#### ことばの壁について

- 本番の発表ではうまくできました。しかし、他の国の発表はほとんどといっていいほど分かりませんでした。そういう面ではことばの壁を感じました。
- 英語はやはり大事だな、と改めて感じたこともあります、国際交流で一番大事だと思ったことは、積極性です。私は、英語を母国語とする人たち、または小さい頃から英語を習っている人達と同等に話をするのは難しいことだと思っていました。だからといって、しゃべらないということはしたくないし、もちろんみんなの話に入りたいものです。だから、どうしよう・・・と考える前に、まずしゃべってみようと思っていました。しゃべっていると、不安なんてどこかへ行ってしまいました。とにかくしゃべってみる！というのが良かったみたいでみんないろいろな話をしてくれました。

#### 南アフリカについて

- ホストマザーが「南アフリカは、広いところをぎゅっと一つの国にしたようなものだ。たとえばアジアでは、貧しい国も豊かな国もあるし、文化だって国ごとに全然違う。それを南アフリカでは一つの国で全部見ることができるから、貧富の差などが目立つ・・・」と言っていました。すごく共感できました。自分の目で実際に見た貧富の差は想像を絶するものでした。でもそれは私があまりにも何も知らなかっただけで、この広い地球全体にはいろんな差があるし、さまざまなことで困っている人がいっぱいいるという、いわば当たり前のことを痛感させられました。
- GICに参加して感じることは、大変多かった。文化、国民性、言語にも考えさせられることが多かったが、「人権」に関しては特にそうであったように思う。

「人権」これは今回のテーマの一つであったこともあり、行く以前にさまざまなことを本で読んでいた。また、開催国である南アフリカについても自分なりに知っているつもりであった。しかし、実際と考えていたこととの違いは、想像を絶するものだったのである。僕の頭の中では、「1994年アパルトヘイト政策は撤廃され、人種差別はなくなった。」しかし、現状はそうではなかった。まず、黒人と白人の居住区ははっきり分かれていた。また、黒人の居住区では、屋根もないようなバラック小屋が建ち並び、そこでは多くの裸で裸足の子ども達が走り回り、女の人々は動物の生首をドラム缶で調理しているのが現状といえる。もちろん、電気も水道もない。一方、白人は美しい土地で豪華な家を建て優雅に暮らしているのである。現状は、「1994年アパルトヘイト政策は撤廃されたが、人種差別は根強く残っている。」

日本人の僕はこの現状を、目の当たりにしたとき何を考えて良いのか分からなくなった。いや、もしかしたら何も考えられなかったのかもしれない。今考えると、この時まで僕は、このような現実を近くに感じたことがなかったのかもしれない。確かに、日本には大きな差別につながりやすい民

族、人種の違いがほぼないのである。だから、身近に感じられないのだろう。こう考えると、僕たち日本人は他の国の人よりも「人権」に関する知識、経験が乏しいのは明らかだ。

今後さらに大きくなるであろう国際化の波の中で、僕たちがもっと使える語学力を身につけなければならないのは当然といえる。しかし、それと共に僕たちは、「人権」について、さらに考え、学ばなければならないと思う。

- このGCを通して他の5カ国のさまざまな文化や習慣を見ることができました。中でも、一番心に残っているのは南アフリカの人達と日本人の時間に対する感覚の違いです。30分バスが遅れても、南アフリカの子達は怒らず、いらいらせず、その時間をおしゃべりの時間として楽しんでいました。一緒になってしゃべっていたら、バスが来ました。30分も遅れていたことなんてすっかり忘れていました。日本では考えられないことです。

## 2. 後輩へのアドバイス

学園祭のGC展示の最後に、GCグループは、後輩へのアドバイスを掲示していた。

来年のGCに向けてのアドバイス

- やったらやっただけの成果が出る

4カ月にわたる準備期間では、みんなと意見が合わないことも、流れがうまくつくれないこともしばしば。でもそこであきらめてはいけない。つまったときは、視点を変えてみよう。自分の満足のいく発表できるまで粘ってやろう。

- プレゼンテーションには工夫を

プレゼンテーションでは、ただ、ただ、ただとしゃべっているだけでは、聞いている側は退屈だ。相手に興味を持ってもらえるように工夫しよう。

- 自分の意見を持とう

ディスカッションでは、雰囲気や圧迫されず、自分のできる限りしゃべりまくろう。もちろん、テーマについての幅広い知識、自分の考えを持っていないと発言するのは大変。

- 積極的にしゃべろう

自分から他の国から来た人達にしゃべること。ただ言いたい単語を並べるだけでも、文法が間違っても大丈夫。大切なのはことば以外の表情や身振りだと思う。たくさんの人と友達になろう。

- いろいろなことに興味を持とう

毎日の生活の中で、いろいろなことに興味を持って話題豊富な人になろう。「日本ではどうなの?」と聞かれることが良くあるので、自分の習慣などを見直すのもいい。

- 思いっきり楽しむ!

力を抜いて、まず楽しむ。そのためには、自分の体力を過信しないこと。無理をして体調を崩すと自分だけでなく周りの人に迷惑がかかることになる。

- 2000年は日本が開催地!!!

来年のGCは日本で開催されるので、みんなにチャンスがあるので、積極的に関わって欲しい。そうすれば、必ず何か得られるはず!

## 3. 教師から見た感想

### (1) フォーマルな雰囲気

プログラムは全体的にかなりフォーマルであり、スウェーデンとはかなり異なっていた。文化の違い

いだと思う。また、そのフォーマルさは、教育の場にも現れており、生徒は制服を着用、歓迎会などでの教師の話も、非常に道徳的なにおいがした。

## (2) 手作りのGC

全体として、手作りの味がするGCであった。それぞれの国にそれぞれのやり方があり、必ずしもお金をかけなくてもできるということを学んだことは、GC2000をホストする本校にとっては有意義であった。スポンサーもうまく利用していた。例えば、空港での集合写真はスポンサーの名前入りのバナーの前で行われるなどした。

## (3) 運営組織

○保護者の参加協力によるものが大きい。食事の準備や会場作りはもちろん、ホストファミリー探しも、1家庭がその国全部を担当するなど、かなり責任を持たされていた。

○多数の委員会に分かれていたため、責任も分散し、お互いのリエゾン不足があったようだ。計画は首脳部で総合的に、実務は分担で実施するのがよいと思われた。

委員会：プランニング（生徒コーディネータと連絡）、キャンプ、ファンド、広告（消滅）、市長レセプション、ディスカッション、食事、交通輸送

## (4) 生徒コーディネータの役割

生徒コーディネータはHarold Cressy High Schoolに本拠をおいて活動していたが、当校の教師削減による人手不足で、GC準備についてはかなりの責任を負わされており、過負担であったようだ。過労で本番でダウンするコーディネータが出るなど、不満が噴出していた。

しかし、その活躍ぶりは、現地の新聞に何度も大きく報道されたり、本校の吉田さんはテレビのニュースショーに出演するなど、地元の注目を集めていた。

## 4. 事後の取り組み

### 事後報告

GC参加生徒は、帰国後全校生徒にその報告をした。1学期終業式では、全校生徒に対し、パワーポイントに写真、ビデオを取り込み、効果的なプレゼンテーションを行った。このプレゼンは、附属中学校入試説明会でも行い、多くの参加者に取り組みの様子を知っていただいた。9月の学園祭では、写真や文章の展示とビデオ上映で、GCプロジェクトの紹介と今回のGC、ケープタウンの紹介などを行った。

また、奈良のNGOの集いである、奈良地球市民フォーラム「なら出会いウィーク」で、GCグループが半日のワークショップを組み、発表と参加者との討論をおこなった。南アフリカの状況報告が中心であったが、参加者から、「南アフリカにおけるアパルトヘイトの存在は不幸であったが、白人主導の国であったため、国際社会では注目されていた。アフリカ諸国の中には、早々と独立したため、民主主義は手には入ったが、国際社会からは置いてけぼりを喰い、経済的発展が遅れて国民の中には何のための独立であったのか疑問視する国もある。」というような貴重な意見をいただき、GCグループは考えさせられた。小さなワークショップであったが、GCの存在を伝え、2000年開催に向けて、さらに、グローバル教育のネットワークが広がった。

テーマ「偏見」について、本校は家庭に残る男女差別にテーマを絞って発表した。このことが事前に新聞でとり上げられたことがきっかけとなり、奈良県生活環境部女性政策課作成の、男女共同参画活動事例集（平成12年3月発行）にその内容がとり上げられた。GCグループは、プレゼンテーションに至るまでの熱い議論の様子と、実際のプレゼンテーション、現地での反響などを語った。



## V 成果と課題

GC99を終え、その成果と、今後への課題をまとめてみた。

### 1. 成果

#### ○活発な自主活動

参加生徒は自分なりの意見を主張し、しばしば議論が続き、教師が思わず口を挟むときもあったが、自分たちで課題を明確にし、計画を立て、分担して見事に準備を進めた。

#### ○全体のものに

準備は、学年全体の意見をよく吸い上げて行われ、参加者だけでなくその他の生徒も、さらには保護者も巻き込む形で取り組みがなされた。

アンケートの実施・・・「偏見」(男女の役割分担)：保護者対象

#### ○英語授業で

英語のカリキュラムの中で、よりシステマティックに位置づけることができた。

#### ○留学生の関わり

留学生が関わり、効果的に準備がなされたことは有意義であったが、それと共に、留学生の新たな位置づけができたという点でも意味があった。

#### ○効果的なプレゼンテーション

ドラマにしたり、パワーポイントの紙芝居にしたりと、リサーチした結果を効果的に伝達する方法を良く工夫していた。

#### ○IT利用

事前の交流には利用できなかったが、プレゼンテーションでは多くの学校がパワーポイントを使ったり、インターネットを使ってリサーチしたりと利用の度合いが増えていた。

#### ○GIC2000の大枠が定まった。

テーマやプログラムなど、ほぼ本校の提案が認められた形で具体的な準備を進めることができるようになった。

#### ○日本での開催に向けて

南アフリカでのGICは2000年GICの日本開催に向けて大いに参考になった。

無理をしない素朴なGICを見て、日本は日本のやり方でできるようにやればよいのだという思いを強くした。

また、具体的な運営を観察し、日本開催での課題も具体的になった。

#### ○地域への紹介

男女共同参画活動事例集への掲載、なら出会いウィークでのワークショップ、入試説明会のプレゼンなどで、多くの人々にGICの取り組みを紹介できたことは、2000年開催のためにも役に立った。

#### ○南アフリカの現状

アパルトヘイト廃止以後もなお不平等が残る南アフリカの現状を自らの目で見、また、帰国後それを紹介できた。

GIC期間中、タウンシップツアーで訪れたランガ地区や、車窓から見た非合法住宅もそうだが、プレゼンテーションのために白人が多く通う学校Camps Bayを借りなければならなかったことそのものが、差別の現実であった。

### ○異なる環境に学ぶ

南アフリカの自然環境、異なる価値観を持つ文化に触れる機会が持てた。

生徒たちは、異なるベクトルを持つことで、自らの世界を広げた。高校卒業後の進路を決めるにあたって、少なからず影響を受けたのではないだろうか。

## 2. 課題

### ○事前の意見交流

テーマ決定が遅れたのと、南アフリカのコンピュータ事情から、テーマについての意見交換が事前にならなかったことは残念であった。

### ○GCパートナーの内、経済的に困難な学校、生徒へのサポート体制

世界ならずとも、GC参加校間にも、経済格差が存在することは、良く話題にされた。「持てる国」にしかできない取り組みでは、本当のGlobalにはなりきれない。現在は、各校が小さなファンドを見つけて奔走している状態だが、プロジェクト自体を安定してサポートしてもらえるよう、働きかけなければならない。例えば、ランガ高校の生徒を招待できるようになれば、プロジェクト全体にとって意義深いことであろう。

### ○学校間コミュニケーション

南アフリカの学校と恒常的に密な連絡を取る方法の確立が望まれる。パナソニックのノート型コンピュータで、幾分改善されたようだが、まだまだ不十分である。生徒同士は連絡を取り合っているようだが、学校間の連絡がとりにくい。これがとれるまで、南アフリカへの留学は留保した方がよいと判断するまでに至った。

### ○生徒コーディネータ

今回、南アフリカでの生徒コーディネータの役割は非常に大きいものであった。今回、吉田さんは日本のコーディネータとしてその任務を良く果たしたが、その役割は生徒の活動の域を越えていた。開催校の事情もあるだろうが、コーディネータの役割と、責任について十分に考える必要がある。

## おわりに

GCも3年目を迎え、参加校が援助する形で、GC 99 in Cape Townは成立した。南アフリカの2校は不可能であるからとあきらめてしまわず、また、他の学校も排除することなく、パートナーシップを大切にできたのは、非常に意味のあることだと思う。

実際に引率してケープタウンに行き、初めて、この地で開催することの意義が実感として分かった。世界の縮図といわれる南アフリカ、制度としてのアパルトヘイトはなくなったが、差別の実態は根強く残されていた。しかし、おおらかで楽観的、しかし組織作りなど民主的で不合理を許さない姿勢と、ストレートな表現で議論するエネルギッシュな南アフリカの人々に、アパルトヘイトを乗り越えた国の力強さを見、新しい国作りの様子を追跡、応援していきたいと思った。

当初、基盤が固まらないままとりあえずGC開催という形で始まったGCプロジェクトであるが、次第にその性格づけ、運営方法などが定まってきた。次回日本で開催される第4回は、余分なものはそぎ落として、中味のあるプログラムにしたいと思った。

国際交流は、華々しい打ち上げ花火的なものではなく、継続し、成果を積みあげていくことに意味があると実感した。継続していく中で、学校間に築かれた信頼関係が重要なのだろう。

# Global Classroom 2000 in Nara 報告

研 究 部 ・ 英 語 科

## はじめに

本校が1996年より参加している高校生の国際交流プロジェクト、Global Classroom（グローバルクラスルーム 以下GC）は2000年、第4回を迎え、本校がホストして開催されることになった。本稿では、研究部を中心として行われた各プログラム、英語科を中心として行われたプレゼンテーションとディスカッションの取り組み、それに向けての準備の状況について報告し、GC2000 in Naraを総括したいと思う。

なお、第1回、第2回のGCについては、それぞれ、本校研究紀要第39、40集に、また第3回については本紀要の前項に報告が掲載されている。

## I GCプロジェクトの概要

### 1. GCの概要

従来、国際交流は2校間の文化交流イベントに矮小化されがちであるが、GCは、下記の参加校間で合意されたテーマに沿って各校で学習を進め、インターネットを利用して恒常的な意見交換を行い、その成果を、年1回、6月に開催されるフォーラムに持ち寄り、実際に顔を合わせてディスカッションしようというプログラムである。フォーラムはGC参加校が回り持ちでホストすることになっている。この準備や運営は、早期に現地に赴いた各校1名の生徒コーディネータにより行われるなど、生徒中心の活動である。参加生徒数は各国10名に限られているが、本校では英語科のカリキュラムの中でGCの準備を位置づけ、全体のものにする努力を続けている。また、各校の担当教師（コーディネータ）はe-mailで頻りにコンタクトを取り、プロジェクトのあり方について意見交換している。

### 2. 参加校

GC参加校は以下の通りである。

Anderson High School（スコットランド）

Bobergsskolan（スウェーデン）

Graf Friedrich Schule（ドイツ）

Gymnasium Zlin（チェコ）

Harold Cressy High School, Wittebome High School（南アフリカ）

奈良女子大学文学部附属中等教育学校（日本）

### 3. 第3回GC以降のプロジェクト

毎年一回開かれるGC以外に、上記の学校間ではさまざまなプログラムが展開されてきた。長期・短期の留学（1998年より）、教師のリサーチプログラム（同）、特定学校間のホームステイプログラム

(本校は、Anderson High Schoolとの間で1997年より)である。GC留学では、1999年9月、シェトランド、スウェーデン、ドイツにそれぞれ1名、10月にシェトランドに1名を本校より派遣、2000年3月、シェトランドより1名を受け入れた。

ケープタウンで開かれた第3回GCでは、ドイツが参加を留保したまま、Learning School (以下LS)が新しいプロジェクトとして提案され、1999年9月よりスタートした。

1999年度より始まった総合教科「世界学」で、世界の高校生へのアンケートを実施した。対象となった10カ国の内、GC参加校の全てから協力を得た。

#### 4. LS

このプロジェクトは、奈良女子大学とグラスゴーのStrathclyde大学との共同研究のもと、GC参加校からの代表生徒が6名から8名のチームを組み、10カ月間各校に順々に滞在し、異なる文化の下、異なる教育を経験し、生徒の視点からリサーチしようというものである。今回は、Effective Learningをテーマに、クラス観察、シャドーイング、生涯学習、背景(生徒、学校、地域と文化)という4つの観点からリサーチすることになっていた。1999年8月、Andersonから始まり、Bobergsskolan, Gymnasium Zlin, Harold Cressyと調査を進め、本校には4月初めに来て活動することになった。

メンバーは、生徒調査員がシェトランド3名、スウェーデン、チェコ、南アフリカそして日本が各1名の合わせて7名、リサーチコーディネータとしてシェトランドと日本から各1名が参加した。本校からは、吉田沙恵子さんが、シェトランド留学、南アフリカGCの生徒コーディネータを務めたのに引き続き、LSにも参加した。本校では、1999年4月、今年度のLSへの参加が、また、リサーチの方法については、2000年3月、いずれも教官会議で承認された。

#### 5. GC2000に向けて

数年内にはGCをホストする可能性を含んだ上で、本校は1996年に初めてGCに参加した。その後、1998年4月、スウェーデンでの第2回GCの直前、2000年の第4回GCをホストすることが教官会議で了承された。1999年6月、ケープタウンで開かれた、第3回GC中のスタッフコーディネータ会議で、奈良で開催される第4回GCについて、本校側から組織作りを中心とした準備の進捗状況を紹介したあと、以下の点について大枠が合意された。これは、本校からの具体的な提案がほぼ了承された形である。

- (1) 開催時期は6月7日～22日頃
- (2) 参加者数は、各校生徒10名とコーディネータ、引率教師は2名
- (3) テーマは、Education (教育)、Tradition and Technology (伝統とテクノロジー：本校からの提案はTraditionだけであったが、話し合いの結果Technologyも加えることになった)、Human relations (人と人との関係)とし、すべてのテーマに、過去・現在・未来の視点を入れる。
- (4) テーマについては、スケジュールを組み、テーマについて各校で話し合われたことを本校にフィードバックする。その内容は、ホームページで公開し、事前にシェアしあう。
- (5) 宿泊は、生徒はホームステイ、教師は公共施設に宿泊する。
- (6) フォーラムに先立って、アイスブレイカーキャンプと、広島への1泊フィールドトリップ(交通費参加者負担)を実施する。
- (7) 大きく異なる文化圏での開催なので、参加者の不安を解消するため、日本についての情報を本校

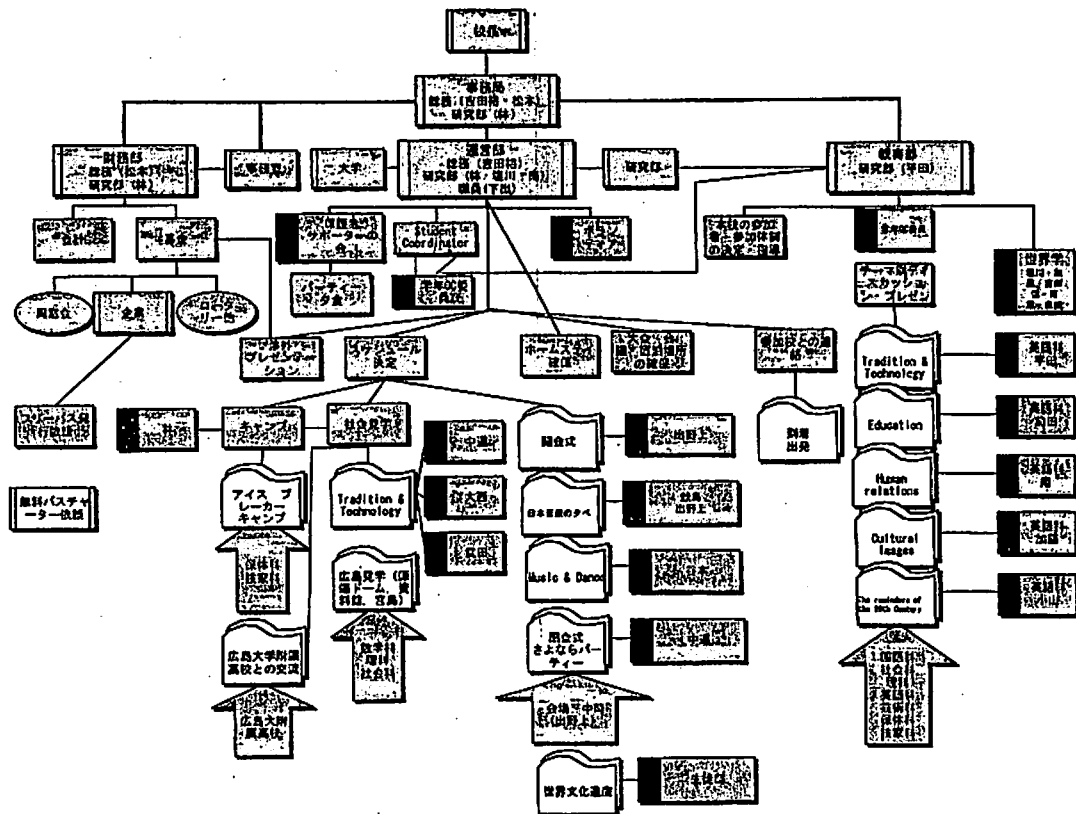
- からできるだけ流す。各校も大使館などを利用して、日本についての予備知識を得る努力をする。
- (8) 日本での開催にあたっては、準備、会期中を通じて、ことばの問題が大きな障害となるだろうから、英語の流暢な話し手としての生徒コーディネータの役割が重要となるだろう。各校は、日本の生徒がよくわかるように、発表を工夫する。
- (9) 生徒コーディネータは6週間前に来日、ドイツ以外はLSのメンバーが兼務する。その他、各校より日本の高い物価についての不安なども出され、情報の提供の必要性を実感した。これを受けて、GC2000に向けての準備が具体的に進むのである。

## 6. 韓国のオブザーバー参加

1999年9月、AndersonのHay氏が、ソウルで開かれたOECDセミナーでGCのプレゼンテーションを行ったところ、ソウルのShin Il High School（信一高校）が強い参加の希望を寄せた。本校としても、ヨーロッパに偏るGC参加校にアジアの隣人が増えるのは歓迎すべきことであると考え、教師コーディネータで相談し、Shin Ilは今回、オブザーバーとして参加することになった。

## II 準備

### 1. 開催にあたって組織された校内体制



事務局（総務・研究部長）のもとに、財務部、運営部と教育部を設けた。財務部は総務、研究部長が、運営部は総務、研究部・国際とGC職員が、教育部は研究部（英語担当）が担当した。GC職員としては、1999年7月より2000年7月まで、下出かおる氏を雇用し、研究部・国際で執務していただいた。

教育部のもとに、英語科の教員が、テーマについてのプレゼンテーション、ディスカッションの指導にあたった。

財務部は、会計と企業、同窓会、保護者等からの寄付を担当した。

運営部は、保護者、卒業生、生徒コーディネータと連絡をとりながら、プレゼンテーション、ディスカッション以外のプログラム運営にあたった。主な仕事内容は、ホームステイ事務、参加校との連絡、開会式・閉会式、アイスブレイカーキャンプ、3つのパーティーを含む催し（日本音楽の夕べ、Music & Dance、さよならパーティー）、広島見学で、研究部で分担して担当した。パーティーについては、保護者有志で結成されたGCサポーターの会が中心となり、食事の提供を中心に保護者の全面的協力を得て実施された。

## 2. 運営部の準備

### 2-1 プログラム作成

プログラム作成にあたって、基本的に留意したのは以下の点である。

- (1) 研究部・国際では、GCを特別な一大行事として扱うのではなく、過去のGCがそうであったように、GC開催中も授業は並行して平常通り行うという基本方針で臨んだ。しかし、英語教育の面からも、グローバル教育の面からも、またとない貴重な機会であるため、開会式のみ全校生が参加し、あとはさまざまなプログラムに希望する生徒が参加できる体制をとることにした。取り組みの中心学年は5年、ディスカッションや見学への参加などで授業を欠く生徒は公欠扱いにすることで了承を得た。
- (2) テーマに関しては、プレゼンテーションとディスカッションで丸1日を使うことにした。プレゼンテーションの時間はできるだけ短縮し、ディスカッションの時間を確保しようとした。
- (3) 暑さに弱いゲストのことも考え、また、過去の経験から交流はプログラムの合間で行われることが多いので、できるだけ緩やかなスケジュールを組むことにつとめた。
- (4) テーマに関する見学は伝統とテクノロジーに関するものとし、開催地奈良ではの見学場所ということで、世界文化遺産の見学は必須にする。また、唯一の被爆国として平和学習としての広島見学は抜かせないということで、ケープタウンでも参加各校の賛成を得ていた。
- (5) プログラムを組む上で、予算の点からも大切なものは食事である。ホストファミリーの負担を少しでも軽くしようということで、見学場所での昼食の提供を依頼し、また、夕方からのパーティーは食事提供を伴うプログラムとした。
- (6) 本校同窓会の柳汀会員を中心に、地域の方々からご協力を得、お話をうかがっている内に新たなヒントをいただいたりした。今回のGCのテーマのとおり、人と人のネットワーク抜きには考えられなかった。感謝の意を表したい。

### 2-2 ホームステイ

過去のGC参加者の中では、ディスカッションやキャンプ、いろいろな催しは確かにインパクトが強いものだが、最も貴重な体験としてホストファミリーとの経験をあげたものが多い。共に生活する中で、基本的なコミュニケーションがあり、やすらぎの場である家庭の一員に加えてもらい、異国での過度の緊張をほぐしてくれる暖かさは、何にも代え難いものなのであろう。

だから、今回日本でGCを開催する際、さまざまなプログラムを支えるものとして、ホームステイは大事にしたかった。また、ぜひ本校生徒宅でゲスト全員をホストできるよう、PTAの集まりなど

で理解と協力を求めた。

ホームステイに関する事務は運営部が担当し、事務は主としてGC職員を中心に行った。

(1) 日程

- 12/1     ホストファミリー募集開始
- 12/14    ホストファミリー応募前説明会
- 1/12     ホストファミリー募集締め切り
- 3/15     ホストファミリー（コーディネータ）集会
- 5/12     ホストファミリー決定
- 5/20     ホストファミリー集会

(2) ホストファミリー募集の条件：ボランティアとして、期間中のスケジュール及び、食事等の生活習慣に柔軟に対応してもらえる家庭であること。交通費、通信費などの負担はなし。

(3) ホストファミリー希望と実際にお願ひした家庭数

多くのゲストを本校生徒の希望家庭からだけでは、とてもまかないきれないと思っていたが、予想外に多くの家庭から希望をいただき関心の強さを実感した。

コーディネータ（長期）：

学年	2		3		4		5		6		合計	
男女別生徒数	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
希望者数	1	0	0	0	0	0	0	3	2	4	3	7
ホスト数	1	0	0	0	0	0	0	2	2	3	3	5

会期中：

学年	2		3		4		5		6		合計	
男女別生徒数	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
希望者数	2	0	0	4	6	9	3	21	4	13	15	47
ホスト数	2	0	0	4	5	7	3	21	4	13	14	45

注：1年生は、ホストファミリー募集時は入学前だったため、ホストファミリーはいない。また、滞在期間が長くなり、2家庭でホストした生徒もいたため、ゲスト数とホストファミリー数は一致しない。

(4) ホストファミリーの決定に関して

ファミリーとゲストから出された希望条件、学校までの距離、学年を考慮してマッチングをおこなった。

参加者決定が遅れた国があり、決まっても、ゲストのプロフィール提出がなかったり、曖昧な記述があったりで、当該国のコーディネータに問い合わせるなどしている内に時間がたち、ホストファミリー決定が遅くなってしまった。

(5) ホストとゲストの事前交流

ゲストは、学校を通じてプロフィールを本校に送付してきた。マッチングが完了したときに、そのコピーをホストファミリーにお渡しした。また、ホストファミリーにも同様のものを記入していただき、来日直前のゲストに送付した。メールなどで前もってコンタクトをとることも可能である

うが、一般的な日本の家庭では難しい点もあろうかと、基本的な情報の交換だけを学校で仲立ちしたことになる。もちろん、来日まで何度もメールの交換をした家庭もあって、実際に会うのが待ち遠しかったようだ。理想的には、マッチングから来日までもう少し時間がある方が望ましかった。

## (6) 説明会

ホストファミリーに関して3つの説明会を実施した。

### ○ホストファミリー応募前説明会 (12/14)

ホスト応募に先立って、疑問と不安を解消するため、GCプログラムとホストファミリーに求められる事柄を説明した。

#### 内容

学校からの説明：GCの概要、学校の準備体制、GC2000の進捗状況、プログラム案

前もって出された質問に答えて：ことば、部屋、食事、生活時間、トラブルへの対応（けが・病気、その他）、費用負担

質疑応答

個別相談

### ○コーディネータのホストファミリー対象説明会 (3/15)

一足先にやってくる、LSのメンバーを兼ねた生徒コーディネータのホストファミリーのための説明会。長期にわたりホストをお願いすることになるが、すでに経験された方であったり、生徒が留学体験者であったりし、ホームステイについての情報交換が主となった。

#### 内容

生徒コーディネータの役割について、LSについて（資料配布）、ホームステイについて（緊急時の対応、電話・交通費についての資料を配布）、ホームステイについての情報交換、質疑応答、電話連絡網の確認

### ○GC参加生徒のホストファミリー対象説明会 (5/20)

#### 内容

1部 全体会・・・挨拶、ホストするにあたっての留意事項、GC期間中の日程説明、ホームステイ体験談（6年 吉田沙恵子）ホストファミリー体験談（GCサポーターの会の保護者より）、質疑応答

2部 分散会・・・ゲストの国別に集まり、研究部とその国の生徒コーディネータが中にはいって、お互いの紹介、それぞれの国の状況、コーディネータ自身の日本での体験、来日するゲストについての詳しい情報などを和気藹々と話し合った。中には、その国のことばで挨拶を練習したり、ゲストの名前の正しい発音をコーディネータから教わったりしたグループもあった。

韓国については、今回はオブザーバー参加で生徒コーディネータがいなかったため、奈良女子大学大学院の韓国人留学生に参加してもらった。

## (7) ホスト宅での緊急時の緊急連絡

下記の、①または②の方法によるものとした。

① ホストファミリーが直接病院へ連れていき、結果を学校（または、引率教師の宿泊所であるセミナーハウスにいる本校教師の携帯電話）に連絡する。

② ホストファミリーが学校（または、セミナーハウス携帯）へ連絡、学校が病院を探し、生徒を病院へ連れていく。

いずれの場合にも、学校医の24時間のサポートが受けられる体制を組んだ。



## 2-3 GCサポーターの会

GC開催にあたっては、広く保護者の支援を受けた。支援を依頼したところ、代表5名が「GCサポーターの会」を発足させ（1月28日）、3度のパーティーの、主として食事の準備をしていただくことになった。4月12日、保護者全体にサポーターとしての協力を要請した。4月28日に第一回のミーティングを開いた。約100名の申し出があった。

パーティーに関しては、3つのグループに分けて、それぞれ詳細に仕事分担を決め、企画力と行動力で、心のこもったさまざまな食べ物を調理室で作っていただいた。その際、ベジタリアンやハラール用の食事にも心配りをされた。プログラムの中味についても、生徒による琴演奏の指導、河内音頭のプロの招聘などにおいて協力していただいた。

ゲストからは、食べ物の内容の素晴らしさに評価が高かった。後かたづけでもサポーターの協力を得、サポーターなしにGCは不可能だと実感した。

組織と、支援内容については以下の通りである。

「GCサポーターの会」組織（敬称略）

・会長高田 副会長宮本

- (1) 日本音楽の夕べ 6月13日 チーフ 河合・高田  
買い出し・調理・セッティング・後かたづけ  
着付け・琴指導・和太鼓
- (2) ダンス&ミュージック 6月15日 チーフ 宮本  
買い出し・調理・セッティング・後かたづけ  
松原光司（河内音頭）の招聘
- (3) 閉会式 6月19日 チーフ 南方・高田  
買い出し・調理・セッティング・後かたづけ

## 2-4 Global Classroom Newsletter

ホスト校からの情報は、GC Newsletterの形で各校に伝えた。

Newsletter 1 1999年10月

プログラム案、テーマについての意見交換の予定、Tradition and Technologyについての詳細、本校準備組織、GC公式ホームページについて、GC参加校の住所一覧

Newsletter 2 1999年12月

Human Relationsについての詳細、Tradition and Technologyのプレゼンテーションについて、準備の進捗状況報告、Local student coordinatorをおくことについて、生徒コーディネータからのメッセージ、参加者プロフィール書式、テーマについてのフィードバックのお願い

Newsletter 3 2000年4月

韓国信一高校のオブザーバー参加について、Educationについての詳細、プログラムについての追加情報、Tradition and Technology見学先、Music and Danceについて、日本滞在中の支出について、テーマについてのフィードバックのお願い

Newsletter 4 2000年5月

来日して準備にあたっている生徒コーディネータが発行

日本情報（お金関係、日本の家庭での生活、気候、公共の交通機関、学校生活）、プレゼンテーションに使える本校の施設について、テーマについてのフィードバックのお願い

## 2-5 詳細なスケジュール表の作成

時刻表で、生徒・引率教師の活動とその場所、担当教師、担当生徒と生徒コーディネータ、本校生徒の動き、GCサポーターの動きなどが分かる詳細なスケジュール表を日毎に作り、全教師が持つとともに、GC会議で確認しあった。

## 2-6 GC冊子

生徒コーディネータが揃うのを待ち、5月初旬、やっとGC冊子が完成し、関係者全員に配布した。内容構成、表紙のデザインなど、生徒コーディネータの手によるものであった。

裏表紙は中村明巳氏による鹿と大仏殿の写真になったが、何か日本の格言を載せようということになり、興味深いディスカッションの結果、A frog in the well doesn't know the ocean. (井の中の蛙、大海を知らず) になった。GCにふさわしいものであったと思う。

以下は、冊子の内容である。

- (1) GC2000概要・・・ホスト校(住所、連絡先)、テーマ、期間、ゲスト数、生徒コーディネータ名
- (2) 毎年のGCの歴史・・・1997年～2001年まで ホスト校、開催期間、テーマ
- (3) 奈良のプロフィール・・・位置、風土、歴史
- (4) 本校のプロフィール・・・教育方針、歴史
- (5) 杉峰校長からのメッセージ
- (6) 本校スタッフコーディネータからのメッセージ
- (7) 各国生徒コーディネータからのメッセージ
- (8) 参加者名簿
- (9) プログラム
- (10) 連絡先電話番号・・・学校、訪問先、スタッフ宅、生徒コーディネータ宅、教師宿舎、緊急、病院、大使館・領事館、交通機関
- (11) 日本語基礎会話・・・挨拶、食事の会話、家庭での会話、買い物での会話
- (12) 地図
- (13) 交通機関図
- (14) 協賛者リストとお礼

## 2-7 旗

GCのロゴを染め抜いたGC旗を新たに作り、また、各国の国旗もそろえた。これらは、今後ホスト校にバトンタッチされていく。

## 2-8 プログラム担当の生徒による準備

5年生のGC委員の内、4名がプログラム担当となり、更に、キャンプ、Music & Danceについては実行委員が組織された。他のプログラムについては4名で分担した。生徒コーディネータが来日してからは彼らと共に活動した。

準備の内容は以下の通りである。

- (1) Japan Informationのビデオレター作り

内容は、学校生活編(登校風景、上靴に履き替える、朝の会、授業風景、昼食時間、クラブ活動)、家庭生活編(和室、食事、風呂、ふとん)などである。

- (2) 各プログラムの説明を本校生に行い、出演依頼と、プログラムへの参加を呼びかけた。
- (3) 担当教師、GCサポーターの会の保護者、出演者との打ち合わせ。
- (4) GC壁新聞、“SMALL WORLD”を作り、各教室に掲示。また、GC開催まで残る日数を表示するカウントダウン日めくりを作り、図書館前に設置した。
- (5) 会場、設備の準備

## 2-9 生徒コーディネータによる準備

ドイツ以外の生徒コーディネータ（本校は吉田沙恵子）はLSのメンバーを兼ねており、4月3日に到着し、LSの活動を行っていた。ドイツのコーディネータは4月29日到着し、単独で研究部・国際の指示のもとで準備をしていたが、LSの活動が終わる5月の第3週より全員が本格的に活動した。シェトランドからの2名、本校へのGC留学生はアシスタントコーディネータとして準備にあたった。生徒コーディネータの準備内容は以下の通りである。

- (1) 各学校との連絡
- (2) GC冊子作り
- (3) GC Newsletter 4の発行
- (4) キャンプ場、見学場所の見学
- (5) 日毎のスケジュール作り、補助冊子作り
- (6) 各プログラム運営のための詳細な計画作りを、担当教師と打ち合わせして行う
- (7) 奈良市長と、奈良県総務部長、教育長、表敬訪問
- (8) 新聞の取材を受ける
- (9) 参加者全員に配るGCパックの準備・・・GC冊子、レターパッド、ボールペン、ステッカー、校章、GCバッジ、補助冊子、Tシャツ、奈良市からの記念品、奈良のパンフ
- (10) 会場、設備の準備

## 2-10 教師のためのプログラム

教師は、ホームステイではなく合同の宿泊所に泊まり、お互いの親睦を深めたり、会議を持てるようにした。場所、費用の点を検討し、国際奈良学セミナーハウスに決定。奈良県より便宜を図っていただき、国際会議扱いとして貸し切りにしていただいた。使用規定は英語になおし、宿泊者に配布した。

教師には、その国の生徒のホスト一覧、教師の詳細なスケジュール表を配布した。

## 3. 教育部の準備

### 3-1 テーマの決定と承認

GCのテーマは、毎年、次年度のホスト校が、GC開催中に開かれる教師による会議の場で提案し、審議・決定される。つまり、GC2000のテーマ案は、1999年6月に南アフリカで開かれるGCまでに、作成して持っていく必要があった。

まず、本校のテーマ案の作成は、次のような過程で進められた。

1999年

- |      |                                    |
|------|------------------------------------|
| 5月3日 | GC準備運営部よりテーマ、活動案を募集                |
| 5月6日 | GC教育部より各教科にテーマを募集（国語科・社会科から提案があった） |

5月10日～13日	4年生(当時)全員に英語の授業の中でテーマを募集
5月12日	GC教育部および事務局で討議
5月19日	研究部で討議
6月2日	研究部およびGC教育部で討議

本校内でテーマを決定する際、特に留意したのは、まず、生徒の声をできるだけ反映させることと、なおかつ、教師全体の声を反映させることであった。GCを一部の生徒や教師の専有物にするべきではないし、本校で開催するGCを成功させるには、それぞれが自分の役割を自覚して協力することが不可欠と考えたからである。テーマの決定に全員が参加することによってそれぞれが a sense of ownership を感じることもできるのである。

4年の生徒には、英語の授業で、まず、授業の中で自分たちがどんなトピックを扱っていききたいか、生徒たちの選んだトピックで英語の授業を進めていくこと、と同時に、それがGC2000のテーマになることを伝えた。具体的には、アンケート形式で3つの候補を自由に挙げさせてそれを集計した。その結果、生徒からは、次のようなテーマ案が出された。

コンピューターを使い能力、銃規制、若者の文化、文化財とテクノロジー、情報処理能力、テクノロジーの発展と環境、科学は贅沢品か?、医療倫理、自宅教育、平和の文化v.s.戦争の文化、いかによく生きるか、学校で何を学ぶべきか、平和教育、セックスとジェンダー、社会福祉、科学とその限界、遺伝子操作、肉体の死と脳死、兵器産業、核エネルギー、次世代に何を残すべきか、老人問題・・・

教師側については各教科にテーマ候補を考えてもらった。それと同時に各教科としてそれぞれのテーマに関してどのようなアプローチが取れるかについても検討してもらった。

それぞれの提案を再び、全員に返してそれをシェアし、研究部、教官会議で検討を重ねることで、最終的に以下の3つのテーマに絞り込まれた。

- (1) 教育
- (2) 伝統とテクノロジー
- (3) 人間関係

各教科からの提案もこの枠組みの中に収まった。ただ、これらの3つのテーマはかなり広い領域をカバーすることも考えられたので、

- (1) 「教育」「テクノロジー」「人間関係」の3つのテーマから21世紀における「豊かさ」とは何か追求する。
- (2) それぞれのテーマについて過去・現在・未来という視点を設ける。

ということも同時に決められた。

以上のテーマは南アフリカで開催されたGCで検討・承認された。

英語の授業では4年～5年の英語I・IIおよびオーラルコミュニケーションの時間で、順次これらの3つのテーマを扱っていった。GCのテーマを英語授業の中で扱うことについては、1997年に英語科で合議の上決定され、第1回GCから続いている。その利点として、GCを一過性の「お祭り」にしない、また、実際に現地に行かないにしろ、本国で自分の意見を言ったり提案をすることによって多くの生徒がGCに間接的に参加することができることなどが挙げられる。

英語授業での取り組みは次ページの表を参照されたい。また英語授業での実践についての詳細は、2000年本校公開研究会で、「1998年度～2001年度4・5年生の英語授業についての省察」として発表されている。

1999年度4年英語I・OCB

	Topics	Materials	Activities
1st	English Language	<i>CROWN1</i> Introductory Lesson B	Questions and answers in English Match the English words with their definitions Write a summary of the lesson in English Write a short essay: "I (don't) enjoy learning English."
	Cultural diversity The Women's Movement The Aborigines	<i>CROWN1</i> Lesson 3 So many people, so many Cultures	Listen to the tape of the text in order to get the gist and to catch the keywords Questions and answers in English Match the English words with their definitions Write a short essay Group discussion : women's rights
	Global classroom Global classroom cultural exchange	Handouts	Suggest the possible themes for Global Classroom 2000 in Nara
Holidays	Assignment Choose one of the three GC themes and write a short essay		
2nd	Global classroom cultural exchange	Newspaper article	To read an newspaper article
	Human rights	<i>Crown 1</i> Lesson 5 A Document for all People Universal Declaration of Human Rights Declaration of Independence English translation of Suiheishasengen Handouts	Brainstorming: human rights Listen to speeches and interviews regarding human rights Read some documents about human rights and compare them Work sheets Discussion: Are human rights universal or not?
3rd	Tradition and technology	<i>Crown 1</i> Lesson 8 Computers Catch Viruses <i>Crown1</i> Lesson 11 The Infinite Variety Handouts	Brainstorming: Tradition and technology Read some articles about tradition and technology Discuss positive aspects and negative aspects of tradition and technology
	Human relations	Handouts	Listen to some English passages about family Read some English passages about family Discussion : an extended family vs a nuclear family

2000年度5年英語II

1st	Education	Newspaper article Report of the Prime Minister's Commission on Japan's Goals Handouts	Brainstorm on "school" Discussion: school subjects Ideal school Discussion: English as the second official language School curriculum
	<i>Crown II</i> Lesson 5 Haiku In English		Global Classroom 2000 in Nara

### 3-2 テーマ決定からGC開催まで

テーマ決定後、それぞれのテーマに関する詳細やプレゼンテーションの際の手順などは本校がGC Newsletterという形で各学校に定期的に連絡し、それぞれが途中でメールによって情報を交換しながら準備を進めていくことになった。

Newsletter 1ではテーマに関して次のことが確認されている。

(1) 3つのテーマを次のような日程で取り上げていくこと。

10月～12月 「伝統とテクノロジー」

1月～3月 「人間関係」

4月～6月 「教育」

(2) メールによって進捗状況を報告すること

(3) イントロダクトリープレゼンテーション「文化紹介」についてのガイドライン

(4) オープニングプレゼンテーション「20世紀の足跡」についてのガイドライン

(5) プレゼンテーション「伝統とテクノロジー」についてのガイドライン

プレゼンテーション「文化紹介」(Cultural Image)では、自らの文化、地域、学校を紹介することを求めた。その際、それぞれの文化の過去と現在を象徴する2つのものを持参してそれを示しながらプレゼンテーションをしてもらうことにした。このプレゼンテーションは全本校生が出席することになっていたもので、できるだけ視覚に訴えたものにしてもらおうと考えたのである。

プレゼンテーション「20世紀の足跡」では、20世紀最後の年である2000年に開かれるGCには、20世紀を振り返る視点が必要であるとの考えから20世紀のいわゆる「10大ニュース」的なものを各校で発表してもらうことを考えた。そのプレゼンテーションをThe 10 most important reminders of the 20th century in the worldと名付け、自文化に限らず広く世界的な視点から選んでもらうことになった。reminderという語を使ったのは、events, people, discoveries, findingなどいろいろな範疇のものを選択肢として想定したからである。この段階では、GCの最終日に、この「20世紀の足跡」に呼応する形で21世紀の10大ニュースを予測するディスカッションを設けようということであったが、日程の都合上行うことはできなかった。

前述したように、各校が最初に扱うテーマは「伝統とテクノロジー」に決められた。テクノロジーというものは得てしてははっきりと分かるかたちで我々の生活に入り込んでくるが、一方伝統というのは、ある時にははっきりとした姿形を纏っていることもある反面、ときとして意識の奥の方に引きこもっているものでもある。伝統は可視・不可視の大きな領域にまたがっている。だからこのテーマはともすれば扱いにくいものとなる。しかし、ディスカッションがあまりに抽象的にならないよう、特に伝統に関しては豊富な例を示してほしい、ということを確認した上で、GC当日にはこのテーマに関して社会見学、プレゼンテーション、ディスカッションを行うことが決められた。また、特にプレゼンテーションは、Tradition in Technology/ Technology in Traditionと名付け、「伝統」と「テクノロジー」の接点に焦点を合わせてほしいと求めた。伝統的価値観と現代的価値観の衝突、伝統の中にテクノロジーがうまく利用されている例、テクノロジーによって置き換わったり、破壊されてしまった伝統など、20世紀の終わりの年、新たなミレニアムのはじまりの年に相応しいプレゼンテーションにしたいと考えたのである。

2000年1月には各学校から、「伝統とテクノロジー」について準備の進捗状況や選んだテーマなどに関してメールで次のように報告があった。

(1) チェコ

古代遺跡の保存と都市開発の両立や遺跡の調査を前提にしたスーパーマーケットの建設について。

(2) ドイツ

家族、人間関係、女性の社会進出、商業主義、食生活などにおける伝統的価値観と現代の価値観との衝突。テクノロジーがコミュニケーション、医療、宇宙進出、地雷の処理などで役立っていること。テクノロジーによって駆逐されつつある伝統的習慣、テクノロジーの風貌を纏っている伝統的行為などについて。

(3) シェトランド

漁業の過去と現在。漁業現場でレーダーや魚群探知機などのテクノロジーがどのように役立っているか。

Newsletter 2には、テーマ「人間関係」についてのガイドラインが載せられた。2000年に開くGCに相応しく、人間関係の過去と現在、その変化に焦点をあてることを求めた。

人間関係が大きく変わったその分水嶺はどこにあるか？どのように人間関係が変わっていくと予測するか？これらの点についてディスカッションをした上で、ドラマ形式で発表することを求めた。

このテーマに関しては、メールで次のように報告があった。

(1) 南アフリカ

黒人の少年と白人の少女が恋に陥る。しかし、人種隔離政策で二人は離ればなれになってしまう。ネルソン・マンデラが大統領に就任し虹の国家建設が始まる。永久に会うことはできないと思っていた少年と少女はふたたびめぐりあって結婚を決心するが、まだ根深く残る人種差別に彼らの親は結婚に反対する・・・

(2) ドイツ

ドイツの場合、人間関係の変化は自国の歴史と深く結びついている。そこで、1933年、1945年、1989年という3つの分水嶺があると考えた。1933年はヒトラーがワイマール共和国の首相になった年であり、この政治的变化は徐々に人間関係を蝕んでいった。1945年はヒトラーの支配が終わり、それまで不信に覆われていた人間関係が変わり始めた。学生運動が起こり、それまでの「権威」が崩れ始めた。1989年は冷戦が終わり、ベルリンの壁が崩れた年である。念願の一つのドイツは達成されたが、東西の格差解消が現在でも問題になっている。

各校から送られてきたディスカッションの結果などは、GC公式サイトに追加掲載され、どの学校もそれを閲覧できるようにされた。

Newsletter 3では3つめのテーマである「教育」についてのガイドラインが掲載された。「個の学び」に関するアンケートが付され、それを送り返すよう求められた。また、学習をもっと効率的にするにはどうすればよいか、「理想の学校」とはいかなるものか、それぞれ話し合っておくことも求められた。

### 3-3 本校の生徒の準備

11月24日にGCに参加したい生徒を4年生から募り、どのディスカッション・プレゼンテーションに参加したいか担当を決めた。これ以降1月にかけて、それぞれのグループで当日のプレゼンテーション・ディスカッションへの準備が順次始まっていった。それぞれのグループの準備については、「V. プレゼンテーションとディスカッション」を参照されたい。

冬休みには、その時点で発行されていたNewsletter 1を読んでGCの全体像を把握した。

3学期の終業式にはそれまでの進捗状況をパワーポイントを使って発表し、他の生徒にもGCについての情報を提供し理解を求めた。

また、5年になってからは、スチューデントコーディネーターやシェトランドからの留学生の協力や援助を得て準備が進められた。日本人同士で準備をしているときよりも格段にGCに対する意識が高まり、コミュニケーション能力もついてきた。

また、情報を公開し共有することが大変重要であることを、このGCの取り組みを通じて教師も生徒も感じたと思う。

#### 4. 財務部の準備

GC2000開催に際して、官公庁、同窓会「柳汀会」、本校保護者、奈良県内の企業等に物心両面にわたり、たいへんお世話になった。その概略を記してお礼としたい。(敬称略)

##### (1) 来賓

開会式	奈良県企画部次長	露木伸宏
	奈良女子大学副学長	久米健次
	奈良女子大学文学部長	佐藤宗諄
	奈良女子大学事務局長	森永良水
	奈良女子大学文学部附属中・高校同窓会長	安田泰介
	保護者サポーターの会代表	高田宏子
閉会式	奈良市国際交流室長	辰巳 裕
	奈良女子大学副学長	久米健次
	奈良女子大学文学部長	佐藤宗諄
	奈良女子大学事務局長	森永良水
	奈良女子大学文学部附属中・高校同窓会	安田泰介
	保護者サポーターの会代表	高田宏子

##### (2) 寄付と支援

平成11年1月から、本校の国際交流基金募金会が、パンフレットを作成して、個人1口1000円、法人1口10,000円の募金活動を行った。同窓会、保護者の個人的なご寄付もいただいた(基金をご寄付いただいた個人・企業の名前は省略させていただきます)。

- ① 柳汀会会員 約3,000,000円
- ② 保護者 約2,000,000円
- ③ 佐保会 約1,000,000円
- ④ 個人・企業 約2,000,000円

奈良県、奈良市、生駒市、奈良県教育委員会、奈良県奈良公園管理事務所、広島県教育委員会、広島大学附属高校OB有志、奈良市観光協会、アーサー・アンダーセン、スポーツ館ミツハン、ノブレス、ユアーズヨシダ、帯解寺、近畿日本鉄道、東大寺、奈交フーズ、奈良県経済倶楽部、奈良交通、西浦クリニック、共同精版印刷KK、宝山寺福祉事業団、三笠コココーラ、新日本輸送株式会社、奈良佐川急便株式会社、ケイエス企画、家具のふじた、渡邊総合企画、ガーデンプラザ、たんぼぼ子どもの家、ベーカリーショップみなみ、藏田医院、尾田組、イカリトンボ、豊澤酒造、福寿園、墨運堂、天使の合唱団



(3) 官公庁

奈良県・奈良市・生駒市の後援を得る。

① 奈良県

- ・国際セミナーハウスー各参加校教師の宿泊 6月9日～6月20日
- ・若草山・鹿寄せ特別見学の許可
- ・開会式の挨拶・企画室次長 露木伸宏氏
- ・生徒コーディネータによる県教育長・企画室への表敬訪問

② 奈良市

- ・生徒コーディネータによる市長の表敬訪問
- ・記念品の提供 ・閉会式の挨拶

③ 生駒市

- ・アイスブレーカーキャンプ 6月11・12日 キャンプ場・宿泊ふれあいセンター

(4) 協力企業

① 見学

伝統とテクノロジー

- (イ) 見学・食事ー福寿園・墨運堂・豊沢酒造
- (ウ) 見学ーSHARP・ATR・NAIST・東大寺

② パーティー・食料

コココーラ・奈交フーズ・ユアーズヨシダ・みなみ・菊一文殊四郎包永

③ 現物提供

- ・共同精版印刷（便箋300冊）
- ・ミツハシ（Tシャツ200枚）
- ・奈良交通（バスカード30枚）
- ・松下電器産業（コンピュータ10台）
- ・スミヤマ（集合写真100枚）
- ・南アフリカ航空（コンピュータの搬送）

(5) 大使館等の後援

南アフリカ共和国大使館・チェコ共和国大使館・スウェーデン大使館・ドイツ連邦共和国総領事館

(6) 広島県、広島大学附属高等学校

① 広島県教育委員会・広島県県会議員 宇田 伸

付添い海外教官の宿泊・バス借り上げ代金の負担

見学（宮島、原爆資料館、オタフクソース）の手配と経費の負担

② 広島大学附属高等学校

交流授業・ホームステイ

(7) 保護者

前出、2-3を参照のこと

なお、以上で述べた全ての準備日程は、次ページの表の通りである。

Global Classroom 2000 スケジュール

1999年			2000年																						
9月	活動	10月	活動	11月	活動	12月	活動	1月	活動	2月	活動	3月	活動	4月	活動	5月	活動	6月	活動						
1	水		1	金		1	水	1	土		1	火	1	水	野火発行 British Council訪問	1	土	1	月	廣田宗雄訪問	1	木			
2	木		2	土		2	木	2	日		2	水	2	木	2	日	火	2	金	2	金	ATRF見			
3	金		3	日		3	金	3	月		3	木	3	金	3	月	水	3	土	3	土				
4	土		4	月		4	土	4	火		4	金	4	土	4	火	木	4	日	4	日				
5	日		5	火		5	日	5	水		5	土	5	日	5	水	金	5	月	5	月				
6	月		6	水		6	月	6	木		6	日	6	月	6	木	土	6	火	6	火				
7	火		7	木		7	火	7	金		7	月	7	火	7	火	日	7	水	7	水				
8	水		8	金		8	水	8	土		8	日	8	水	8	土	月	8	木	8	木				
9	木	テーマに沿った学習開始	9	土		9	木	9	日		9	月	9	火	9	日	火	9	金	9	金				
10	金	各国のテーマに沿った学習の慣習交換開始	10	日		10	金	10	月		10	水	10	木	10	金	月	10	土	10	土	10	土	各園より発表	
11	土		11	月		11	土	11	火		11	金	11	土	11	土	火	11	日	11	日	11	日	キャンプ	
12	日		12	火		12	日	12	水		12	木	12	金	12	日	水	12	土	12	土	12	土	キャンプ	
13	月	財務部、運営部、教育部 合同GC会議	13	水		13	月	13	木		13	日	13	月	13	月	土	13	日	13	日	13	日	13	火
14	火	ホームステイの手引き作成開始	14	木		14	火	14	金		14	月	14	火	14	火	日	14	月	14	月	14	月	14	水
15	水		15	金	Newsletter1送付	15	水	15	土		15	日	15	水	15	水	月	15	火	15	火	15	火	15	木
16	木	見学の決定と打ち合わせ開始	16	土		16	木	16	日		16	月	16	火	16	木	火	16	日	16	日	16	日	16	金
17	金		17	日		17	金	17	月		17	水	17	木	17	金	水	17	土	17	土	17	土	17	日
18	土		18	月		18	土	18	火	GC会議	18	金	18	土	18	土	日	18	月	18	月	18	月	18	日
19	日		19	火		19	日	19	水		19	木	19	金	19	日	月	19	火	19	火	19	火	19	日
20	月		20	水		20	月	20	木		20	日	20	月	20	月	土	20	火	20	火	20	火	20	日
21	火		21	木		21	火	21	金		21	月	21	火	21	火	日	21	月	21	月	21	月	21	日
22	水		22	金		22	水	22	土		22	日	22	水	22	水	月	22	火	22	火	22	火	22	日
23	木		23	土		23	木	23	日		23	月	23	火	23	木	火	23	日	23	日	23	日	23	日
24	金	PTA評議員会で開始説明	24	日		24	金	24	月		24	水	24	木	24	金	月	24	火	24	火	24	火	24	日
25	土		25	月		25	土	25	火		25	日	25	月	25	土	火	25	月	25	月	25	月	25	日
26	日		26	火		26	日	26	水		26	木	26	金	26	日	月	26	火	26	火	26	火	26	日
27	月		27	水		27	月	27	木		27	日	27	月	27	月	土	27	火	27	火	27	火	27	日
28	火		28	木		28	火	28	金	サポーターの会	28	月	28	火	28	火	月	28	火	28	火	28	火	28	日
29	水		29	金		29	水	29	土		29	日	29	月	29	土	火	29	月	29	月	29	月	29	日
30	木		30	土		30	木	30	日		30	月	30	火	30	日	月	30	火	30	火	30	火	30	日
			31	日		31	金	31	月		31	火	31	日	31	金	月	31	火	31	火	31	火	31	日

### Ⅲ 活動日程

#### 1. 参加者

第4回GCに参加したゲストは、以下の通りである。

外国からのゲスト

		シェトランド	ドイツ	南アフリカ	スウェーデン	チェコ	韓国	合計
生徒	男	9	2	1	1	3	5	21
	女	4	10	10	7	6	0	37
教師	男	1	2	1	1	1	1	7
	女	1	1	3	1	0	0	6
	合計	15	15	15	10	10	6	71

注：スウェーデンの生徒1名は、体調不良のため、教師1名と中途帰国した。

#### 2. GC全日程

ゲストが来日してから、帰国までの全日程は、p.138の通りである。

### Ⅳ 各プログラムについて

#### 1. アイスブレイカーキャンプ

GC参加者が後のプログラムを円滑に実施できるように、2000年6月11日(日)、6月12日(月)の1泊2日で、生駒山麓公園のふれあいセンターで、ゲームや野外活動を行った。

##### 1-1 準備

4月5日(水) AndersonのHay氏と生徒1人および研究部と本校生徒のキャンプ担当GC委員の生徒3人で生駒山麓公園の野外活動センターとふれあいセンターに行き、打ち合わせをする。野外活動センターでの施設の使用、ふれあいセンターでの宿泊施設、食事の予約をする。

6月6日(火) 再度野外活動センターとふれあいセンターに仮予約申請書の提出と打ち合わせに行く。キャンプファイヤーの用具、バーベキューの用具の借用予約をする。ふれあいセンターでは、宿泊と食事の打ち合わせをする。

6月7日(水)～9日(金)

生徒コーディネータ2人とGC委員3人および卒業生1人による打ち合わせを学校で放課後に何度ももつ。内容は、プログラム、宿泊、オリエンテーリング、キャンプファイヤー、バーベキューなど。

11日の昼弁当の予約を「べんとう屋」に入れる。

6月10日(土) 卒業生とともに、バーベキューのための食料品の買い出しに行く。コーディネータと担当GC委員、引率教師1名は、準備のために前泊する。

## GC 2000 in Nara全日程

日次	月日	主な内容	活動
1	6/9 (金)	到着	12:05 チェコ奈良 着
2	6/10 (土)	到着	10:05 南アフリカ奈良着 14:05 ドイツ、韓国奈良着 18:05 スウェーデン、シエトランド奈良着
3	6/11 (日)	キャンプ	11:15 生駒山麓公園 こもれびホールで開会式 オリエンテーション 12:00 昼食(弁当) 13:45 宝さがしオリエンティング(グループ別) 18:00 夕食(ふれあいセンター食堂) 19:00 キャンプファイアー
4	6/12 (月)	キャンプ	8:00 朝食 9:00 スポーツ、ゲーム 12:00 バーベキュー 14:00 Friendship Time 15:30 閉会式 17:00 学校着
5	6/13 (火)	開会式 20世紀の足跡 日本音楽の夕べ	8:35 登校 9:00 開会式 9:45 Cultural Images 11:30 全体写真 12:00 昼食(サンドウィッチ、パン) 13:30 20世紀の足跡(プレゼン) 16:00 日本音楽の夕べ ~18:00
6	6/14 (水)	「伝統とテクノロジー」見学	8:30 登校 9:00 3つのコースに分かれバスで出発 それぞれの場所で昼食 墨運堂(製墨)→ATR、福寿園(製茶)→NAIST、豊澤酒造(日本酒)→ SHARP 17:00 学校着
7	6/15 (木)	「伝統とテクノロジー」プレゼンとディスカッション	8:30 登校 9:00 Tradition & Technologyプレゼンテーション 12:00 昼食(ホストの弁当) 13:00 ディスカッション 16:00 Music & Dance ~19:00
8	6/16 (金)	「教育」ワークショップとディスカッション	8:30 登校 9:00 Learning School報告 10:00 ワークショップ 11:30 若草山へ(バス) 12:00 昼食(サンドウィッチ、ジュース) 13:30 短いプレゼン、ディスカッション 18:00 校長レセプション(教師)
9	6/17 (土)	世界文化遺産見学	8:30 鹿よせ(飛火野) 9:30 東大寺大仏殿拝観 12:00~ グループで奈良見学 18:00 同窓会有志レセプション(教師)
10	6/18 (日)	フリー	ホストとの一日 13:00 Learning Schoolプレゼンテーション(奈良女子大学)
11	6/19 (月)	「人と人との関係」プレゼンとディスカッション	8:30 登校 9:00 Human Relationsプレゼンテーション 12:00 昼食(ホストの弁当) 13:00 ディスカッション 16:00 閉会式 さよならパーティ ~19:00
12	6/20 (火)	広島ツアー	7:45 出発 10:47 広島着 昼食(広島西飛行場) 宮島、原爆資料館見学 17:00 ホストファミリー宅へ
13	6/21 (水)	広島ツアー	8:20 広島大学附属高校へ登校 1時間目の授業に参加 11:00 2グループに分かれて行動オタフクソース見学・市内観光(広島城、原爆ドーム) 14:22 広島発 17:30 JR奈良着 解散
14	6/22 (木)	帰国	8:00 チェコ、南アフリカ出発 10:00 韓国出発 17:00 シエトランド出発
15	6/23 (金)	帰国	6:00 スウェーデン出発 7:00 ドイツ出発 21:30 生徒コーディネータ出発

なお、引率教師は、全て国際奈良学セミナーハウスに宿泊し、本校教諭1名が、交代で宿泊した。

## 1-2 活動日程

第1日目 6月11日(日)

- 11:30 開会式(こもれび館)  
生駒市教育委員長挨拶、コーディネータ挨拶
- 12:00 昼食(弁当)
- 14:00 オリエンテーリング
- 17:00 夕食(ふれあいセンター)
- 18:00 ファイヤーの準備
- 19:00 キャンプファイヤー
- 22:00 消灯

第2日目 6月12日(月)

- 7:30 起床
- 8:00 朝食(ふれあいセンター)
- 9:00 フリータイム
- 11:00 バーベキュー準備
- 12:00 バーベキュー
- 14:00 フレンドシップタイム(こもれび館)
- 15:00 解散

## 1-3 当日の様子

キャンプファイヤーが大いに盛り上がった。これはガールスカウトに参加している卒業生のリーダーシップによるところが大きい。参加者全員とても楽しそうであった。バーベキューもみんな協力して作業し食事していたが、味が口に合わない者もあって、食料がかなり残った。本校の生徒もよく動いていた。

フリータイムやこもれび館での最後のフレンドシップタイムでは、それぞれで語り合い、落ち着いた雰囲気の中、忙しい日程の中にゆとりのある光景が見られた。

## 1-4 感想

参加者のGC本番前の友好のための催しとしては、成功だったと思われる。コーディネータたちが準備と当日においてずいぶん活躍した。また、彼らは数多くの雑用も厭わなかった。しかし、男女混合の宿泊を要求したり、施設のルールに対する不満などがあり、参加者と日本の慣習とのずれも感じられた。

## 2. 開会式

6月13日(火) 9:00~9:30 本校新体育館にて開会式が行われた。

### 2-1 準備

6月1日(木)、7日(水) 開会式前日の清掃、会場準備、開会式の内容について、コーディネータとの打ち合わせを行った。

## 6月12日(月) 開会式前日の準備

6限終了後、新体育館全面にシートを敷き、パイプ椅子を並べて会場作りを行った。その後、プロジェクター・放送機器準備、旗などの飾り付けをして準備を終えた。椅子の不足分は、13日朝の会后、2年生は教室の椅子をもって入場、1年生がその椅子に座ることにした。

## 2-2 プログラム

### 6月13日(火) 9:00~9:30 開会式

全校生徒が参加する中、来賓を迎え、開会式を行った。

司会進行 吉田沙恵子

- (1) 学校長挨拶および来賓紹介
  - (2) 来賓挨拶 露木伸宏氏、久米健次氏、佐藤宗諄氏より
  - (3) 生徒会長 綱本英朗挨拶
  - (4) 教師コーディネータ、生徒コーディネータ壇上へ 自己紹介、挨拶
- 休憩の後、Cultural Imageへとプログラムが移った。

## 2-3 当日の様子および感想

6月初めに非常に暑い日が続き、新体育館の暑さが懸念された。急遽会場を大学講堂に移すことなどが検討されたが、結局、よい場所を設定できず、当初の予定通り、新体育館を会場とした。クーラーの設置についても検討されたが、予算的に無理であったため、10台あまりの大型扇風機を設置することとなった。

幸い、当日は心配されたほどの暑さでなく、大型扇風機で凌げるほどの気温だった。壇上中央には、学校長と来賓が、下手には司会者が着席した。また、フロアの最前列に各国の引率教師と生徒たち、サイド前方に生徒コーディネータが着席した。1年生から6年生までの本校生徒全員が順次着席、本校教官もサイドの椅子に着席した。

壇上には大きな演台を置かず、装飾も大きな花束が1つ置かれただけの簡単なもので、式の中での挨拶もそれぞれ短く、30分ほどで開会式は終わった。式に続いて各国のCultural Imageの発表が控えていたので、時間的にも適当なものと感じた。

## 3. 日本音楽の夕べ

6月13日(火) 午後4:00~6:00 本校新体育館にて、日本音楽の夕べが行われた。

### 3-1 準備

6月1日(木) 「日本音楽の夕べ」で用意する夕食についてGCサポーターの会(保護者)と打合わせ(出演者と担当生徒との打ち合わせは随時行った)。

### 3-2 プログラム

#### (1) GCサポーターの会による夕食の準備

9:00~15:00 調理教室にて夕食の準備にあたる。食事の内容は以下の通りである。

マカロニサラダ、グリーンサラダ、わらび餅、フルーツポンチ、スイカ、パウンドケーキ、白身魚のフライ、豚カツ、鶏の唐揚げ、フライドポテト、焼き鳥、焼き野菜、フランクフルト、オープンサ

ソド、巻き寿司、いなり寿司、サラダ巻き、たきこみ御飯、ピラフ、ビーフカレー、ベジタブルカレー、ミートソーススパゲッティ

ベジタリアンやハラールに留意した食事も用意された。

15:30 会場の配膳にとりかかる。

16:00 会場にて給仕を行う。

18:30~20:00 清掃

## (2) 「日本音楽の夕べ」について

司会進行 吉田沙恵子

プログラム

- ① はじめに
- ② 歓談
- ③ 琴 西川美術・見目ツル・中辻恵実子（1年生）、石川恵理・辻香里・伊藤真貴・粕谷智美・佐藤麻紀子・吉村美央（4年生） 伊庭三代子（指導者）  
曲目：「鷹」「ひらいた、ひらいた」
- ④ アンサンブル 5年生 山本万理・吉松聖菜（バイオリン） 板橋亜弥（ピアノ）  
曲目：「春の海」「ソナタ（ヘンデル）」
- ⑤ アンサンブル 相愛大学・岡野弥生（本校OG）ほか  
曲目：「星に願いを」「世界の名曲メドレー」「ミヨーの『組曲』より」
- ⑥ 和太鼓 アゴラ和太鼓（本校保護者 水野恵理子ほか）  
曲目：「アゴラ囃し」「荒波」「竹取物語」「三宅太鼓」
- ⑦ コーラス 天使の合唱 艸香梨恵（本校OG）ほか  
曲目：「ゆりかごのうた」「椰子の実」「ロリポップ」「ふしぎなポケット」「かえるのうた」「しゃぼんだま」「We are the World」

開会初日ということであったが、生徒同士がうちとける格好の場となった。はじめはとまどいがちであったが、すぐにうちとけて楽しく歓談していたようだった。GCサポーターの会の多大なる尽力や出演者の演奏によって、文化的差異をこえた一体感を会場に与えていた。このことは「日本音楽の夕べ」の成功をしめすものではないだろうか。

### 3-3 感想

近年、グローバル化の進展により、地球は一つの村になるといわれている。一方で、グローバル化は世界に同じ消費経済や共通の文化をもたらしている。しかし、他方でグローバル化は世界の断片化を進めている。地域主義や小さな民族主義に回帰する動きが激しくなっている。文化の画一性が進むからこそ、それに反発する動きが広がるのだ。このような矛盾した世界を生きるのであれば、どのようにして新しい文化の多様性をつくるかという問題に取り組まざるをえない。これは近い将来生徒たちが直面する問題である。文化の多様性は前提であり、これを否定することはできない。しかし、それ以上に大切なのは、そのような多様性を乗り越えて、共同のプロジェクトに向けてさまざまな人びとが参加し、世界をつくりあげていくことであろう。「日本音楽の夕べ」は、単なる歓迎パーティーにとどまることなく、新しい文化の多様性を考える格好の場となったと思われる。

## 4. 「伝統とテクノロジー」見学

6月14日(水) 9:00~17:00

テーマ、Tradition & Technologyのディスカッションを前に、3つのコース（墨運堂→ATR、福寿園→NAIST、豊澤酒造→SHARP）に分かれ、午前中は伝統産業、午後は先端産業の見学に出かけた。

### 4-1 墨運堂→ATRグループ

#### (1) 準備

ATR下見・・・1999年8月2日（見学依頼）、12月6日（見学予定の研究室見学）、4月18日（最終的な見学場所の打ち合わせ）、6月2日（生徒コーディネータと共に下見）ATRの概要を英文資料にする。

墨運堂下見・・・3月7日、5月26日（生徒コーディネータと共に下見、見学ルートの確認、日程作成、食事内容） 墨運堂の歴史、墨製造のプロセスを英文資料にする。参加者の名前を漢字表記し、墨運堂にファックス、書道のお手本を書いておいていただく。

#### (2) 当日

8:45 学校集合

9:00 バスで出発

9:30 薬師寺駐車場にてバスを降り、徒歩で墨運堂へ。途中道に迷うハプニングも。

9:50 墨作りのビデオを見る。墨作りの説明、型入れ作業見学

10:20 2班に分かれ、頑固一徹長屋見学と、永楽庵で書道体験をする。参加者は、手本にしたがい、自身の名前を書く。書き順を知らないのでは、文字としてではなく形として認識しているのがおもしろい。自分の書いた文字をおみやげにしようという生徒も現れ、友人の名前の手本を書いてもらい、一生懸命書道に取り組んでいた。

12:00 心月亭にて昼食 見た目もきれいなお弁当に、一同感動。小さな籠に盛られた天麩羅や、飾り葉、一見して原材料が分からない手のかかった食材など、一つ一つが未知の文化そのものであり、あちこちで話題になっていた。

13:00 バスでATRに向かう。

14:05 音声翻訳通信研究所見学

イギリスのニック・キャンベル研究員により、音声同時翻訳装置の開発状況について実際のものを見ながら説明を受ける。

14:35 知能映像研究所見学

オーストリアの研究員、クリスタ・ソムラ氏により、Life Spaceのデモンストレーションを受ける。参加者も新しい生命を、コンピュータの画面上に作り出してみていた。

15:00 知能映像研究所見学

インタラクティブダンスを楽しむ。音楽に合わせて踊ると、その動きからコンピュータが感情を読みとり、背景の映像を変えていくというもので、シェトランドとスウェーデンの生徒が積極的に参加していた。

15:25 人間情報通信研究所山田玲子研究室

科学的英語上達法、ということで、日本人が得意でないLとRの発音を良くするソフトの紹介があった。シェトランドの生徒と、日本の生徒が、LとRの聞き取りテストを受けたが、結果に大きな差が



現れて驚いた。

16:00 ATRを出発して学校へ。

### (3) 感想

午前と午後のあまりのコントラストに、参加者一同、眩暈すら憶えるほどであった。先端産業の中に活かされた伝統の力、伝統産業を支える先端技術といった点がもう少し強調されていると、翌日の討論の直接的な材料になったかもしれない。とはいえ、見学をしたことで、参加者は伝統産業と先端技術について共通のイメージを抱くことができ、有意義であった。

## 4-2 福寿園→NAISTグループ

### (1) 準備

福寿園CHA研究センター及び奈良先端科学技術大学院大学（以下NAIST）への見学について、5月、コーディネータらと共に見学場所の下見に赴いた。どちらも関西文化学術研究都市内に位置している。

当日の見学コースに従って、まず福寿園CHA研究センターを訪問した。福寿園は創業200年をこえるお茶のメーカーであるが、その「伝統」を守りつつ、技術革新だけでなく、お茶をめぐる文化や生活スタイルの研究や提案をたゆまず行っている。その中でCHA研究センターは、「21世紀のティーライフの創造をめざし、多角的なお茶の研究、試作実験」を行っている所である。まさに、「伝統とテクノロジー」という我々のテーマにふさわしい見学場所だと言える。まず、当日のコースの下見を行った。また、センター内に設けられたお茶室でお抹茶をお菓子と共にいただいた。当日はお茶の師匠が直々にお茶を点ててくださるということで、お茶をいただくときの作法について、コーディネータが当日他の参加者に説明できるよう打ち合わせをした。また、参加者が和菓子を食べられるかどうか相談した。昼食も同センター内で提供してくださることになり、その打ち合わせを行った。また、福寿園を紹介するビデオを観て、それを1本借りて帰った。コーディネータはそのビデオを観て、当日の解説を作成した。

次にNAISTを訪れた。そこでは、当日の見学コースに従って、生物および情報科学についての実験室を見学した。生物の研究室では遺伝子の組み換えについての研究が行われている。情報科学ではロボット開発などが行われている。英文のディレクトリをいただいた。

### (2) 当日

まず、福寿園CHAセンターを訪れた。はじめに、福寿園社長の福井正憲氏より歓迎の辞をいただいた。福井氏は自らも日頃から積極的に国際交流に貢献されており、そのおかげで我々の訪問も快く引き受けてくださったのだ。次に、茶室に通され抹茶をいただくことになった。当日はお茶の師匠が直々に来てくださっていた。まず、師匠から簡単にお茶のいただき方を伺った。いきなり、日本の伝統文化に入り込むこととなり、最初は何が始まることかとみんな緊張の面もちであったが、コーディネータらが適切な説明とお手本を示して、次第に和やかな雰囲気になった。お菓子も最初はみんな食べられるかどうか心配していたがおおむね好評だったようだ。長時間の正座は苦しかったようだが、正座している姿やお茶を飲んでいるポーズを写真で取り合っていた。

お茶をいただいた後、実験用の茶畑を見学した。日本各地からありとあらゆる茶の木の品種が集められており、一見同じように見える茶にもこんなに多くの品種があることに一堂おどろいたようだった。その後、茶の製造過程を再現したコースを見学した。同じ茶の葉から、その作り方によって味も香りも違ういろいろな種類の茶に仕上がることにみんな興味を示した。その後、センター内で昼食を

いただいた。昼食時には世界各国の茶も同時に出していただいた。

次にNAISTを訪れた。NAISTでは2つのグループに分かれてコース見学を行った。まず、物質創成科学研究科の環境適応物質学の研究室を訪れた。温暖化、オゾンホール、酸性雨など地球環境の破壊が危惧されているが、環境問題やエネルギー問題を解決するような環境触媒についての研究がされている。具体的には太陽光発電などの研究についての説明を受けた。太陽光発電はクリーンで環境を破壊しない未来の電力供給源だが、今の性能ではシェアはまだたいへん低いようだ。しかし、環境問題にはみんな興味を持っているのか活発な質疑応答が行われた。次に情報科学研究科のロボテックスの研究室を訪問した。まずサッカーロボットが実際にサッカーを行っているのを見学した。一口に「サッカー」といっても、そこにはマルチエージェントによる協調、戦略の獲得、実時間視覚処理、センサー情報融合といった様々な技術が組み入れられているようだ。次に、コンピュータービジョンを実際に体験した。暗い小さな部屋に通されると、そこが、3Dスクリーンになっている。いきなり、アメリカンフットボールのフィールドが現れ、本当にその場にいるような臨場感あふれる映像が流れた。医療現場などにも応用されているとの説明を受けて、その利用範囲の広さにおどろいた様子であった。

その次にバイオサイエンス研究科に行き、遺伝子研究を行うための植物栽培温室や研究室を見学した後、遺伝子研究の現状について説明を受けた。その後、建物の周りの芝生にみんな車座に座り質疑応答が行われた。現在の日本の研究レベルなどのについても質問がなされた。

### (3) 感想

福寿園では見学の時から当日のことを考えて下見を行っていたので、コーディネータを中心にお茶の作法や説明などまずまず順調に進んだ。NAISTでも研究者は全て英語で対応していただいたので、特に混乱はなかった。

NAISTでは日本の研究の最先端の一部をかいま見ることができた。特に今現在進んでいる研究についてその現場で、研究者の口から直接聞くことができ、たいへん印象に残ったことと思う。福寿園でのお茶室体験とは極めて対照的であり、現在の日本社会を知ってもらうという点からもたいへん示唆のあるものであったと考える。

福寿園では、お茶という極めて日常的なものの中にも様々な文化の違いを発見することができた。伝統とテクノロジーのための見学場所としてだけでなく、GCという国際交流、異文化理解プロジェクトにとってもたいへん相応しい選択だったと思う。

## 4-3 豊澤酒造→SHARPグループ

### (1) 準備

4月17日(月) 打ち合わせ

5月30日(火) 下見(コーディネータとともに)

豊澤酒造 工場内見学。別の会社(梅の宿)の杜氏Philip Harper氏に当日来ていただけるように交渉。弁当等の打ち合わせ。

帯解寺 昼食会場として使わせていただくための打ち合わせ

SHARP 歴史ホール、技術ホールを見学し、当日のコース・手順についての打ち合わせ

資料準備

豊澤酒造でもらった「酒造りの過程」のハンドアウトの英訳版作成

「酒造り」のビデオのナレーションの英訳

## 帯解寺の説明書の英文版

### (2) 当日

9:00 大教室に集合し、酒造りのビデオを見る。

10:00 豊澤酒造へ。酒造りの季節ではないので、実際に製造の過程を見ることはできないが、工場内を案内していただき説明を受ける。豊澤酒造は奈良では最大の、機械化していない酒造会社である。杜氏をいかした昔ながらの酒造りを今も追求し続けておられる。杜氏のPhilip Harper氏が詳しく説明して下さったおかげで、酒造りの精神にまで触れるお話を聞くことができた。参加者からも熱心に質問が飛び、ワインやウィスキーとの違いなどもお話しいただいた。お土産に全員に清酒の小瓶を頂く。(教員で話し合いの結果、日本出発時に配ることとする。)

11:00 帯解寺へ。安産祈願の寺として、全国的に有名な帯解寺を、昼食会場に使わせていただいた。まず、参加者全員にご祈禱いただき、寺の由来等について説明を受ける。弁当の後、住職に来ていただき、和やかな中で話がはずんだ。中でも現在の皇后陛下に腹帯を献上した、というお話から、「腹帯」に質問が集中した。日本以外の国では見られない風習らしく、珍しかった様である。

13:00 SHARPへ。まずはIC事業部へ。全く埃の入り込めない環境の中での作業をガラス越しに見学。続いて歴史ホールへ。SHARP創設時からの製品の展示で、電気製品の発達の段階を見ることが出来る。日本第一号のテレビや電子レンジから最新のMDプレーヤーまで、詳しい説明を受けながら、参加者は熱心に見入っていた。

次に技術ホールへ。次世代テクノロジーの展示のひとつひとつに歓声があがる。壁掛のようなテレビ、シート状のコンピュータ、人間の頭脳を持つかのようなコンピュータ、テレビもビデオも電話もステレオも何もかも一台でこなしてしまう機械等、テクノロジーの限りない可能性を見せ付けられ、圧倒されていた。

16:00 帰校

### (3) 感想

午前梅の宿のPhilip Harperさん、午後はSHARPの見学担当主任のすばらしい英語での説明のおかげで、参加者は言葉の障壁を感じることなく見学を楽しむことができた。日本の伝統産業と最先端技術の両方を一日の間に経験することで、その二つに通じる日本の精神的なところも感じてもらったようだ。

時間的にも無理のない行程で、参加者全員が満足できるプログラムであったと思われる。

## 5. Music & Dance

6月15日(木) 16:00~19:00 本校新体育館にて

### 5-1 準備

GCサポーターの会には、パーティーのための食事準備と共に、浴衣の着付けもしていただいた。

準備段階で、研究部・国際一担当教師一担当生徒一担当生徒コーディネーターサポーターの会の間で意志疎通を欠いたため、混乱した場面もあった。

### 5-2 プログラム

15:00 授業終わり(45分6限授業)、浴衣着付け

16:00 スタート イントロ

- 16:15 各国プログラム（シェトランド、南アフリカ、ドイツ、スウェーデン、チェコ、韓国の順）  
17:15 休憩  
18:10 日本のプログラム  
19:00 終わり

料理：生野菜スティック、フランクフルト、おにぎり、クラッカー、トウモロコシ、冷たいコンソメ、綿菓子、パウンドケーキ、のみもの、フィッシュバーガー、鶏の唐揚げ、ミートローフ、フライドポテト、オープンサンド、ピザ、フルーツポンチ、たこ焼き、やきそば、わらび餅、コロケ  
日本の出し物では、鉄砲節河内音頭、宗家元鉄砲光三郎門下、松原光司さんに音頭をとってもらった。生徒の多くが浴衣を着て踊り、ゲストも見よう見まねでステップを踏んで、大きな踊りの輪ができた。

各国の出し物の中には、オブザーバー参加の韓国のものもあった。また、南アフリカの学生と、本校の昨年度南アフリカGC参加者による飛び入りの歌もあった。

### 5-3 当日の様子と感想

- 当日は7限授業の日であったが、準備などの関係もあるので、45分授業とした。
- 各国の出し物に参加者は興味深く見入り、飛び入りや一緒に踊るなど、学年を問わず交流を深めることができた。
- 保護者の方々の活躍により、多種多様な料理を参加者全員が堪能できた。
- 片づけの開始が7時過ぎになり、結局9時半頃までかかった。

## 6. 生徒会主催奈良見学

6月17日(土) 8:30~17:00

学年を越えて出来るだけ多くの生徒が参加できるよう、第4土曜と振り替え、この日は授業なしとした。

8:30 鹿よせ

飛火野に集合して鹿の愛護協会のご好意による鹿よせを楽しむ。

あいにくの雨で鹿の数はやや少な目だった。それでも、春日の森から駆けてくる鹿の群の光景を目にして一同喜んでいた。

参加者：ゲスト70名、本校生徒57名（1年 20名、4年 18名、5年 19名）

11:00 東大寺大仏殿へ

回廊にて、雨に煙る大仏殿を見ながら、橋本大仏殿主任と森本副主任によるお話をうかがう。仏教と他の宗教の違い、また、華嚴宗独特の教えを約1時間にわたり説明される。

その後、2グループに分かれ、大仏拝観。台座の上まで上がって拝ませていただく。

拝観後、10グループに分かれ、それぞれの予定にしたがって奈良散策。

教師は、セミナーハウスでLSについてのミーティング。

17:00 生徒は近鉄奈良駅に戻り、解散。

18:00 教師は、同窓会有志によるレセプションに参加

## 7. 閉会式、さよならパーティー

6月19日(月) 16:00~19:00 本校新体育館にて

## 7-1 準備

主として、さよならパーティーについての準備のための打ち合わせを行った。

5月15日(月) サポーターの会との打ち合わせ

保護者が作るメニューについて分担を決め、ケータリングの内容について検討がなされた。

5月23日(火) 奈交フーズと、当日の段取りなどについて打ち合わせを行った。

その後、何度かサポーターの会との打ち合わせを行った。また、さよならパーティーの食事については、サポーターの会の方による準備が着々と進められた。

一方、さよならパーティーの内容については、生徒コーディネータとの話し合いを何度か行った。彼らの意見を入れながら、会場設定をどのようにするかを決めていった。また、初めは18時に終了予定であったパーティーの終了時刻も19時となった。

19日の会場準備は、13:00頃から新体育館のシート敷きから始まった。その後、中央に4つの机をあわせたテーブルを10カ所に設置、まわりに250脚の椅子を並べた。テーブル上にテーブルクロスを広げたり、小さな花で装飾したりする準備がサポーターの会によって行われた。

## 7-2 プログラム

閉会式 16:00~17:00

司会進行 吉田沙恵子

### (1) 学校長挨拶 来賓紹介

来賓：奈良市（奈良県・奈良市を代表して）・大学・同窓会・保護者サポーターの会代表及び、LSから、マクベス氏とホープ・ジョンストン氏

### (2) 各学校のファイナルメッセージとギフト交換（奈良市と学校）

順序：チェコ、ドイツ、スウェーデン、南アフリカ、スコットランド、韓国

### (3) 日本のファイナルメッセージ、その後、GCの旗を日本からドイツへ

### (4) ドイツによる2001年のGCについての紹介

その後、さよならパーティーへとプログラムが進められた。

さよならパーティー 17:00~19:00

閉会式後、奈交フーズ及びサポーターの会による食事の準備が整えられ、さよならパーティーが始まった。パーティーは、それぞれが、おしゃべりをしながら楽しいひとときを過ごす会となった。

この日、準備されたメニューは以下のようなものであった。ベジタリアン用、ハラール用に別メニューの献立も準備された。

\*サポーターの会メニュー 焼きそば、おにぎり、おでん、フランスパン、フルーツ

\*ジュース 1.5リットルペットボトル 70本（三笠コココーラが冷やしてくれた）

\*奈交フーズケータリング

メニュー：蟹風味サラダパリ風・帆立貝柱ソテー・華きぬた巻・海老団子衣揚げ・子持ちイカのマリネ・牛肉のポワレ・若鶏からあげ・ハム入りキッシュパルケット詰・二色鴨テリーヌ・パインカスラー添え・寿司・サンドイッチ

## 7-3 当日の様子と感想

開会式が全員参加で行われたのに対し、閉会式の参加者は、主として、GC参加者及びホストファ

ミリーを引き受けた生徒とその家族であった。壇上は、開会式と同様、大きな演台は準備せず、中央に学校長と来賓が着席、下手に司会者が着席した。装飾も大きな花束が準備されただけの簡素なものであった。フロア中央には、すでにさよならパーティーのためのテーブルが並んでいるので、椅子はテーブルを囲む位置に「コの字」型に並べられ、約250人が参加して行われた。

各学校のファイナルメッセージは、それぞれ特徴のあるもので、南アフリカは全員が制服姿でフォーマルな雰囲気、対照的に、スウェーデンはラップのリズムでメッセージを軽快に伝えていた。セレモニーの最後に、GCの旗が、今年の生徒コーディネータから来年の開催国であるドイツの生徒コーディネータに引き継がれ、GC2000の幕は閉じた。

さよならパーティーは、それぞれがおしゃべりを楽しむ形で、和やかな雰囲気の中で行われた。この日もたくさんの食物が準備され、お母さんたちの心づくしのもてなしがなされた。参加者は、短い時間で、最後の思い出を作っていた。

## 8. 広島見学

### 8-1 いきさつ

GC2000のテーマにはなかったが、本校がGCをホストすることに決まった当時から、唯一の被爆国として、平和学習をプログラムの中に盛り込みたいと、研究部で話し合われた。

具体的には、広島見学の案が出て、広島大学附属高等学校の協力を得て交流活動を行うと共に、生徒宅にホームステイ、原爆資料館の見学が企画された。企画に当たっては、GC職員である下出さんのご兄弟、宇田伸氏の援助を得て有意義なプログラムとなった。

この小旅行での交流は、ホームステイも含めて広島大学附属高等学校に任せ、本校生徒は参加しなかった。

### 8-2 日程

- 6/20 (火) 8:00 JR奈良出発 新大阪発のぞみ3号で広島へ 10:47 広島着  
11:30 広島西飛行場着 昼食 12:30 広島西飛行場発 宮島へ (バス)  
16:30 原爆資料館着 原爆資料館の見学  
17:00 解散 18:00 教育事情懇談会 (教師)
- 6/21 (水) 8:20 広島大学附属高等学校集合 8:40 クラス単位で交流会  
10:00 広島大学附属高等学校発 オタフクソース/市内観光(原爆ドーム、広島城など)  
11:30 昼食 (オタフクソース/広島西飛行場)  
14:22 広島発ひかり126号で大阪へ 17:30 JR奈良着

### 8-3 感想

GCプログラムの最後に組まれた広島ツアーであったため、ゲストは、残り少なくなった滞在をホストファミリーとすごしたかったようであった。また、前日閉会式とさよならパーティーを実施して疲れている翌日、早朝の出発で参加者はかなり疲労している様子だった。

それでも、生徒たちが原爆資料館で涙を浮かべながら各展示を食い入るように見、集合時間を過ぎても最後のコーナーから動こうとしなかった様子を見て、無理でもプログラムに組んで良かったと思った。

広島大学附属高等学校では、各クラスに数名が行き、あらかじめ生徒たちが考えたプログラムにし

たがって交流を行っていた。非常にシンプルな取り組みだったが、クラスの生徒全員が参加できており、本校でのGCに欠けていたものではなかったかと思われた。

わずか1日のホームステイであったが、別れ際の様子などを見ていると質の濃い交流ができた様子が見て取れた。

## V プレゼンテーションとディスカッション

### 1. プレゼンテーション「Cultural Images」

#### 1-1 準備

このテーマは各国とも過去・現在・未来という観点から報告するという事になっていた。

本校でこの発表を担当した生徒は3人だった。

生徒たちは、先ず、何を取り上げたらよいかといろいろと悩んだ。例えば、歌舞伎のようなこととか、祭りのことなども考えてみた。しかし、外国にあまり知られていないものよりはよく知られているものの方がいいのではないか、テーマに発展性、多面性がある方がいいのではないか、ということになり、「コメ」ということになった。

構成をどうするかは一番の悩みだった。結局決まったのは、導入として米を原料とする商品を見せたり、酒を見てもらうことにする。その後、パワーポイントを使って、統計上の図表や田植えの様子を写すことにした。

内容に関しては、米の生産過程の過去と現在の移り変わり、米の主食としての好みの程度を調べるアンケートの発表、米を利用したさまざまな食べ物の写真の紹介、米の自由化問題、パン食の急激な増加に伴う米の需要の減少、減反のこと、などに言及することにした。

パワーポイントの使い方にも生徒たちは苦労した。特に、ビデオの取り込みがなかなかうまくいかず、発表の瀬戸際までコンピューターに詳しい先生の手を借りて、ようやく形を整えることができた。英文の添削と発音については、英語科の教師2名で指導した。生徒たちはよく頑張ってまとめていた。

#### 1-2 本校のプレゼンテーション

発表当日、生徒たちは、特に緊張しているという様子も見せず、堂々と元気よく発表できた。お菓子や酒などの現物を見せたり、自ら作成したビデオを上映したり、スピーチができた点も工夫や努力の跡がうかがえて良かった。

#### 1-3 他校のプレゼンテーション

##### (1) シェトランド

写真による過去の燃料（peatと呼ばれる泥炭）と現在の燃料oilの話が印象的であった。

##### (2) スウェーデン

写真やスキットをまじえながら、旗、地図、学校、朝食の内容、踊り、狩猟のこと、木の果たしている役割の紹介が行われた。

##### (3) 南アフリカ

ビデオでのケープタウンの歴史、自然の風景、強制移動を余儀なくされたDistrict 6、マンデラ氏の投獄されていたRobben Islandと釈放、大統領への就任、などの紹介があった。

#### (4) ドイツ

写真による学校のある町の有名な建物、ドイツの生んだ歴史的に有名な人物、ゲーテ、バッハ、シューラー、ゴシック建築、などの紹介がおこなわれた。

#### (5) チェコ

写真による簡単なチェコの国の歴史の紹介、有名な作家、ROBOT (=someone who works) がチェコ語起源という話、映画、ビール、などが紹介された。

#### (6) 韓国

最初にキムチの紹介があり、味見をしに1年生の男子が勇敢にも壇上に上り、拍手喝采をあげた。その後、ハングル語の話、祭礼で使われるドラや仮面、学校の紹介があった。非常に大規模校かつ伝統校で、読売巨人のチョン・ソン・ミンはこの学校の卒業生だという紹介もあった。

### 1-4 まとめ・感想

全体として、日本以外の学校の発表の内容は、学校のある都市の様子や、風景の紹介・学校紹介、また、観光用のビデオを利用しての産業や文化の紹介が多かった。したがって、GCの参加校の背景がわかりやすくなっていた。本校の発表は、主催校だということもあり、日本の文化を米で象徴させ、しかも、自分たち独自で制作した内容になっていた。

## 2. プレゼンテーション「20世紀の足跡」

GC初日の6月13日は、午前中に開会式が行われたあと、午後からは「20世紀の足跡」というテーマのもとつき、各国がプレゼンテーションを行った。本校からは3名の生徒がこのプレゼンテーションを担当した。

### 2-1 準備

まず本校の担当生徒たちが決めたことは、20世紀の重要人物を選ぶことによって、「20世紀の足跡」というテーマを語ろうということであった。そこで、「あなたが思う“20世紀の人”は誰か？」を調べるために、全校生徒にアンケート調査を行った。アンケートは、リストアップした58の人物名のなかから“20世紀の人”を5つ選んで書いてもらう方法をとった。上位5人は以下の通りである。

1位 アインシュタイン

2位 ヒトラー

3位 マザー・テレサ

4位 マイケル・ジョーダン

5位 ビートルズ

プレゼンテーションでは以上の5人の人物について、詳しく扱うことを決め、彼らの業績や評価などについて、文献、インターネット等で調査した。しかし、「ただアンケート結果を報告し、5人のライフヒストリーを読みあげる」だけのプレゼンテーションはしたくない、という担当生徒たちの思いは強かった。そこで、なぜ、このような結果が出たのか、この結果を見て何を感じたか、という点について、担当生徒・教師ともに意見を述べ合い、それも発表内容に加えて行くことにした。その際の議論の中心は、やはり、ヒトラーという負のイメージを背負った人物が上位にランクされていたことだったので、その点については、ヒトラーについての発表部分だけでなく、序論や結論でも触れることにした。



## 2-2 本校のプレゼンテーション

ただ原稿を読み上げるだけのプレゼンテーションから脱するために、発表形態を工夫することも必要であった。そこで、上位5人の映像を流しながらプレゼンテーションを行うことにした。担当生徒らは、学内のさまざまな先生方に協力をしていただき、またテレビ局に問い合わせるなどして、映像収集に奔走した。また、集めた十何時間分ものテープを手分けして確認し、使える映像を探し、それを自分らのプレゼンテーションの長さに合わせて編集するという作業には、多くの時間が必要であった。

そのかいあって、当日の本校の発表は、退屈せず興味をもって最後まで聞いた、と他校の生徒が何人も声をかけてくれたので、担当生徒たちは喜びと満足感を感じていたようである。発表順番を一番手に設定され、本校の生徒たちは多少緊張していたようであるが、冷静な態度ではぼりハーサルどおりの時間配分で発表を終える事ができた。

## 2-3 他校のプレゼンテーション

以下では、各国のプレゼンテーションがどのようなトピックを取り上げたかを中心に述べてい。本校のプレゼンテーションで扱った、アインシュタイン、マザー・テレサ、ヒトラーという3人から想起される、戦争、平和といったトピックは、どの国のプレゼンテーションにおいてもさげられないものであったようである。

### (1) スウェーデン

「避妊具の開発」、「世界大戦」といった具体的な話題と並列して、「民主主義」、「女性解放」、「技術」など概念的な話題も取り上げられていた。

### (2) 南アフリカ

個別には南アフリカの歴史的な背景を扱いながら、より大きな課題として、世界全体において人種、そしてそこからおこる争いの構図を捉えようとする試みがされていた。

### (3) チェコ

ビートルズ、アインシュタインといった、本校のプレゼンテーションでも扱った人物について、一人一人をよりくわしく説明がされていた。

### (4) ドイツ

「月面着陸」、「エイズの流布」に加えて、やはり「ヒトラーの独裁」「ベルリンの壁崩壊」といった話題を20世紀の足跡として取り上げていた。

### (5) シェトランド

1. 科学技術、2. 社会科学、3. 権力関係という3つの大きなテーマについて、さらに個別な話題を取り上げ発表がされた。

## 2-4 感想と評価

担当生徒らは、発表原稿、資料の作成に実に熱心に取り組んでいた。しかし、反省点の一つとして、発表内容の精選に時間が費やされ、英語の発音練習などスピーチ練習に十分な時間を取れなかったことが挙げられる。仕上げた原稿を読みこむ時間まで考え、余裕をもって取り組むことができれば、彼女らの当日の不安も少しは解消されたであろう。

### 3. プレゼンテーション&ディスカッション Tradition & Technology

#### 3-1 準備

##### ◆トピックの決定

1月には、最初のテーマである「伝統とテクノロジー」について、各校の準備段階での議論や進捗状況を集約し、ホームページに掲載しなければならない。そこで「伝統とテクノロジー」のグループが他のグループに先立ち、1999年12月初旬から活動を開始することになった。

まず、本校のプレゼンテーションで何を取り上げるから議論を始めた。Newsletterをよく読んで上でトピック選びが始まった。

最初にいわゆるブレインストーミングセッションを持ち、伝統的な事物と現代的なそれとを対にした形で、いろんな候補を生徒どうしで出し合った。

そろばんと電卓、人力車と車、習字とパソコン、洗濯板と洗濯機、楽器、習慣や伝統、日本人の心性・・・

GCのホームページには、その時点で話し合ったことを掲載した。その項目は、次の6つである。

1. Clothes: kimono and western clothes
2. Housing: Japanese style and Western style
3. Transportation: Jinrikisha and automobiles
4. Children's play: traditional ones and TV games
5. Communication: handwritten letters and e-mails
6. Foods

最終的に、彼らは「食文化」を取り上げることにした。その理由は、生活に密接した身近なテーマであったことと日本文化の紹介にもなると考えたからである。

次に「食文化」の下位トピックとして、「米」「大豆」「魚」を設け、それぞれが分担をして資料収集に取りかかった。資料収集には、図書館の蔵書や親などからの聞き取り調査、インターネットなどによる検索などの方法が採られた。資料収集は春休みも継続して続けられた。

##### ◆プレゼンテーションへの準備

2000年3月には、「より効果的なプレゼンテーションを行うにはどうすればよいか」が、考え始められた。そこで、パワーポイントを使って行うこと、また、実際に、日本食の試食も同時に行うことなどが決められた。

特に試食をしてもらうようにしたのは、Newsletterで、できるだけvisual aidsを使うように促されていること、また、「味」を完全に、ことばで、しかも英語で伝えることは少し難しいと判断した結果である。

2000年3月の終業式では全校生徒に対して、進捗状況をパワーポイントによって使って表した。この際は日本語であったが、プレゼンテーションの予行演習ともなった。また、全校生にもGCをより詳しく紹介することにもなり好評であった。

5月に入ると英訳作業が始まった。

6月に入ると、生徒コーディネータの意見やアドバイスをもらいながら、プレゼンテーションの練習が始まった。英語表現や発音に関してもいろいろと本番に臨んだ。

#### 3-2 本校のプレゼンテーション

プレゼンテーションの本番では、日本食の試食として、豆腐入りのみそ汁、めざし、ごはんを食べ

てもらった。発表はパワーポイントで行われた。本校のプレゼンテーションの要旨は以下の通りである。

日本の食文化を伝統と現在の視点から考察

箸の使い方や決まり事を紹介

米の日本食文化の中で占める重要性について考察

米の炊き方の過去と現在の対比

魚の保存法として干物を紹介

日本の伝統食品として豆腐を紹介

豆腐にも最新のテクノロジーとして遺伝子組み替え大豆が使われていることを紹介

遺伝子組み替え技術の安全性／危険性について考察

### 3-3 他校のプレゼンテーション

#### (1) シェトランド

パワーポイントを使ったプレゼンテーションで、漁業やニット製品、輸送などの分野でいかにテクノロジーが有効に使われているか、また、かつてはピートを燃料としていたが、石油が発見されて以来、石油と石油産業に頼っている。しかし、石油がなくなるのは時間の問題なので、風力や波の力による発電も考えていかなければならないなどが述べられた。

#### (2) スウェーデン

スウェーデンの伝統的な夏至のお祭りの踊りを実際に披露。クリスマスの過ごし方を紹介した後、テレビ文化やテクノロジーによっていかに変容または破壊されたかを寸劇によって紹介した。

#### (3) ドイツ

寸劇仕立ての発表であった。現代に絶望した若者のモノローグを中心に展開しながら、伝統的なライフスタイルと現代のライフスタイルを浮かび上がらせた。産業化・工業化や核家族などの問題に焦点があたられた。

#### (4) 南アフリカ

家族関係や共同体が伝統とテクノロジーの狭間で、問題に直面して変化していくか宗教、性、婚前交渉、医療などに焦点をあてて、寸劇で発表した。

#### (5) チェコ

ビデオによるプレゼンテーションで、現代生活を大きくインパクトを与えたものの1つとして自動車産業が取りあげられた。

### 3-4 ディスカッション

参加者をそれぞれのグループに全ての学校の生徒が含まれるよう、6つのグループに分け、教師がchairpersonを務めた。書記とディスカッションの後で行われる全体のセッションの場で口頭による報告をする生徒をグループから二名を選んだ。

ディスカッションを運営していくのに際して、次のようなトピックについて話し合われた。

伝統が失われつつあると感じるかどうか

伝統は大切かどうか

どうして伝統が大切なのか

テクノロジーによる受けていない伝統

テクノロジーに依存している伝統  
テクノロジーの発展は伝統にどんな影響を与えているか  
伝統とテクノロジーのどちらに価値を求めるか  
テクノロジーの発展が個人の生活にどのような影響を与えるか  
伝統とテクノロジーは共存しけるか  
テクノロジーの進歩を驚異と感ずるか

もちろん、グループのメンバーや議長によって重点が違い、様々な議論が行われたようだ。あるグループでは、前日に見学に行った場所に対する報告を行った後、まず、携帯電話の普及について話し合われた。国によって携帯電話の普及率が違うようだ。スウェーデンや日本、韓国では携帯電話は若者の間でかなり普及している。携帯電話によって新たな人間関係が築かれるだろうことが話し合われた。

また、伝統は確かにテクノロジーの進歩によって後退していているところもあるが、伝統とテクノロジーはお互いに共存していくのがよいという意見が大方だった。また伝統の維持には家庭や共同体が大変重要だとの意見が出された。

### 3-5 感想と評価

本校の担当生徒は、準備の段階から何回もディスカッションを重ねたこと、生徒コーディネータに英語などをチェックしてもらった過程で実際に英語を使わなければならなかったことなどから、英語でのコミュニケーション能力が伸びていくことを、発表当日前から実感しつつあったようだ。

3つのディスカッションのうちでは、この「伝統とテクノロジー」のディスカッションがもっとも本校の生徒が参加できたものだと考えられる。その理由として、プレゼンテーションは各校工夫を凝らしており、分かりやすかったこと、また、ディスカッションに先立ち、見学などを行ったりして情報が共有されていたことなどが挙げられる。

## 4. プレゼンテーション&ディスカッションEducation

### 4-1 準備

Educationは基本的にLSのメンバーが中心となって、ディスカッション等のプログラムを行った。日程は午前と午後とで内容が大きく異なるため順をおって説明したい。まず午前はLSのメンバーが行った約半年にわたるGC参加校の教育に関する実態調査の報告であった。これについてはLSのメンバー達が独自に調査資料をまとめ、研究成果を発表したため特にGC参加生徒の準備は必要ではなかった。午後からはLSが行った調査をもとに、GC参加各国の典型的と思われる授業形態を体験する模擬授業が行われ、その後体験した授業をもとにグループにわかれてのディスカッションが行われた(それぞれの具体的な内容については以下の項参照)。

Educationをトピックに選んだ本校担当生とは、GCでのディスカッションに対応できる背景知識をさらに学んでおく必要があった。したがって、日本をはじめ、GCに参加している諸外国の教育に関する制度や現状・問題等についてインターネットを利用してできるだけ多くの情報収集を行った。集められた全ての情報資料をメンバー各個人に配布し、諸外国教育事情の把握の徹底をはかった。同じように、日本における教育関連のホームページを閲覧し、そこから当日のディスカッションのための資料を作成した。

#### 4-2 LSメンバーによるプレゼンテーションと模擬授業

午前に行われたLSメンバーによるプレゼンテーションについては、内容が彼ら独自の調査研究報告であり、ここでは詳細には触れない。その後LSの調査をもとにGC参加国における典型的と思われる授業形態を意識した模擬授業が行われ、LSメンバー達が教師役となり、GC参加者は生徒役として6つ（GC参加の6カ国）の授業形態を各10分から15分ずつ体験した。6つの授業形態の内容については以下のとおりである。

- (1) 教師が教科書を読み、黒板に板書し、生徒はノートに書き写す形。
- (2) 定められたトピックについてディスカッションし、話し合った結果をまとめる形。生徒は机と椅子を使用するのではなく、ソファに腰をかけ音楽を聴きながらディスカッションをしていく。
- (3) 教師が生徒に質問を次々となげかけ、授業を進める形。生徒の反応や答えによって授業が変わっていく。
- (4) テストの様なプリントを配布し、その問題を個人で解き、教師がサポートする形。
- (5) 生徒は一定の時間を与えられ、その間にプレゼンテーションの準備をし、授業の最後に生徒がプレゼンテーションを個人で行う形。
- (6) 生徒が定められたトピックについて、グループでパソコンや図書資料等を用いて調べ、プレゼンテーションを行う形。

以上のように、様々な種類の授業を体験することで、本校をはじめとするGC参加者達にとって、普段受けている授業との違いを認識するとともに、授業に対する興味・関心を持たせることができたのではないだろうか。参加者達を見ていると、(2)の授業形態が最も理想的な授業だという反応が多かったようである。

#### 4-3 GC参加生徒によるディスカッションとレポートバック

参加者達は模擬授業を体験した後、各グループに分かれて各国の教育をテーマにディスカッションを行った。LSのメンバー達によって司会・進行が行われたこともあり、他のトピックにおけるディスカッションとは違い、比較的和やかな雰囲気の中参加者による議論が始まった。

議論した内容はグループによって違いはあるものの、各グループとも「生徒から見た理想の学校像」という統一したテーマに従って議論が進行していった。この統一テーマの背景には、「教育の中心は学校にあり、学校の事が理解できれば、理想の教育（学校）ができあがるのではないか」といった考えに基づいている。これを念頭に置き、参加者の母国の特徴的な公教育制度や出身校の様子（カリキュラム、学校設備、時間割や休み時間など）、そしてテーマである理想の学校などが話題の中心となった。その中でも特に本校からの参加生徒は事前に準備した資料をもとに日本の教育制度を説明し、本校の特徴などを議論の中で報告した。

限られた時間ではあったが、各グループ内ではそれぞれの国や個人の特徴ある、そして有意義な意見が随所に見られた。そんな中、参加者達にとっては「(果てしない)理想の学校像」に対する統一見解が少しでも持てたのではないだろうか。

なお、当日の様子はNHKの『おはよう日本』の中で取り上げられ、プレゼンテーションやディスカッションをしている様子や、日本人生徒のインタビューなどが放映された。

#### 4-4 感想と評価

準備段階から本番にいたるまでの一連の過程をその内容とともに述べてきたが、全体的な感想とし

ては、Educationに費やした1日はほとんどLSのメンバー達でコーディネートされていたこともあり、事前に参加生徒（特に本校の参加生徒）にどのような形態でディスカッションをし、またどのようなプレゼンテーションが要求されているのかほとんど情報が入っていなかった。事前にきっちりと準備をしていないとプレゼンテーションやディスカッションについていくことが比較的困難な本校の生徒達にとっては、当日まで大きな不安に駆られていた事は事実である。しかしながら、ディスカッションにおいて発言が決して多かったわけではないが、日本の教育制度や本校の特徴といった自分達の持っている情報を伝え、そして参加各国の情報も得ることが少なからずできたのではないだろうか。来年度ドイツで行われる予定のGC2001においてもEducationがテーマの1つとして挙げられており、引き続き生徒達による更なる議論を期待したい。いい刺激を受けたようである。

## 5. プレゼンテーション&ディスカッション「Human Relations」

20世紀から21世紀になるに従って変わっていくのは科学技術やテクノロジーだけではない。人間関係こそが変わって行っているのではないか？ このような観点からそれぞれの文化における人間関係の変化をドラマ形式で発表することになった。

### 5-1 準備

2月～ブレインストーミングを行い、様々な人間関係に関する意見、アイデアを交換する。

3月～メンバーが各自選んだトピックに関してリサーチをする。

Domestic Violence、父親について、離婚と子供、昔と今の家族の変化、等

4月～家庭内の人間関係について討論を深め、本校の扱うトピックを「父親」に絞り込む。

5月～意見をまとめて、ドラマ作りを始める。日本の高度成長期を境に過去、現在、未来の日本の家庭を表現する。

6月～ドラマの仕上げ、ディスカッションの準備。

### 5-2 本校のプレゼンテーション

「人間関係」の中でも、「家庭」、特に「父親」の存在に焦点をあてて、日本社会の抱える問題を表現しようとした。

第一幕「高度成長期前の日本の家庭」父親が仕事から戻ると、家族全員が出迎え、全員で食卓につく。

食卓では家族のその日の過ごし方など、会話が弾む。父親は家庭の中心であり、家族員の生活全般にわたって注意を払い責任を持つ。

第二幕「現在」（高度成長期後）家族の結びつきが希薄になり、父親の威厳がなくなりつつある。

第三幕「望ましくない未来」家族の和がまったくなくなっている状態。子供たちは塾通いや友人との交際で家に居着かない。親への尊敬の念も全くない。夫婦の間の会話もほとんどない。テレビで、増え続ける少年犯罪のニュースを見ながら、ひとり夕食を取る父親は日本社会の行く末を憂い、昔夢見た理想の家族を思いだして途方に暮れる。

第四幕「望ましい未来」ライフスタイルが変化し、家族員一人一人が日々を忙しく過ごす中でもできるだけ家族の対話を大切にし、家族の和を大切に生活する。

### 5-3 他校のプレゼンテーション

#### (1) ドイツ

ベルリンの壁崩壊以前と以後の様子を、東西ドイツ時代離れ離れになっていた一家族の食卓を舞台に表現した。

#### (2) 南アフリカ

人種隔離政策が行われていた時代とその後を、White Onlyの海岸を歩く白人の男子と黒人の女子をめぐる表現した。投票権を得た後もいまだ残る問題と、未来への希望を訴えた。

#### (3) スウェーデン

e-mailで知り合ったスウェーデン男性と中国人女性が結婚したという実話をコミカルにビデオにまとめた。

#### (4) チェコ

革命後の人々の生活についてのアンケート結果をOHPで示し、国民が共産主義時代から民主主義時代への変化の中で感じていることを報告した後、劇が始まった。

「チェコスロバキア時代」共産党員でなければよい職に就けず大学進学の間も阻まれる。

「新政府のもとで」全ての人に就職、進学の道が開かれた。が、経済的な面でまだまだ問題は残っている。

「未来」コンピューター、パーソナル・ステレオ等、便利な機器があふれ、家事は全てロボットがまかなう。人と人とのつながりが希薄になるのでは、という将来への危惧を表した。

#### (5) シェトランド 社会における女性の地位について。

「過去」女性は子どもの世話と家事に従事し、何の決定権も持たない。

「女性の台頭」第一次、第二次世界大戦をきっかけに女性が社会に進出する。投票権を得るまでの長い道程と男性と同等の権利を得るまで。しかし、まだ問題は残っている。

「未来」女性と男性の立場が逆転？

### 5-4 ディスカッション

午後のディスカッションでは6つのグループに分かれて、次の6つのトピックについて議論した。

- (1) 家族（伝統的な家族と新しい家族のあり方、しつけ、異人種で構成される家族、ゲイの親、養子縁組、等）
- (2) パートナーシップ（人種、性別、性、経済状況、礼儀、求愛、等）
- (3) 国家（EU、UN等の機関、愛国主義、君主制、国際化と国家主義、市民権、外国人嫌い、等）
- (4) 友人関係（年齢、性別、派閥、性、敵、友情の定義、興味深い側面、等）
- (5) 女性と男性（家庭、支配関係、パートナーシップ、友人関係、同性の性、宗教、等）
- (6) 宗教（抑圧、支配関係、宗教間の関係、布教、宗教団体の援助、等）

各グループとも、熱のこもった議論になり、時間の経つのを忘れて話し合った。

### 5-5 感想と評価

午前中の劇は、各国の特徴が表れていて興味深いものとなった。日本グループは声量の無さが悔やまれた。

午後のディスカッションでは、難しいトピックであるにも関わらず、各グループとも活発な討論が展開された。本校の生徒は積極的に参加しようという意欲が見られたが、日頃平和な社会の中で、何

の危機感も持たずに生きている生徒たちにとっては、「宗教」や「国家の在り方」等の議論になるとお手上げ状態で、ほとんど話に入れなかったり、意見を求められても満足のいく答えができずにもどかしい思いをした者が少なくなかった。他国の生徒たちの思想、精神的態度に、よい刺激を受けたようである。

## 6. その後の取り組み

### 6-1 学園祭

9月23日、24日に行われた学園祭で、GCについての教室発表を行った。各プログラム担当別に、GCまでの準備から当日の発表や行事、そしてその感想などを、写真と共に展示した。この教室発表は毎年行っているものである。全校生、保護者また本校の教職員にもGCの全体像を知ってもらいやすい機会になっていると思う。特に次年度のGCへ参加していくことになる4年生には興味深かったのではないだろうか。

### 6-2 公開研究会

11月24日に公開研究会が開催された。午前の部はGCに焦点を当て、生徒と教師がそれぞれの立場からその成果と課題を発表した。

GCで実際に行ったプレゼンテーションのうち、「伝統とテクノロジー」「人間関係」が再現された。また、その後続いて、生徒によるパネルディスカッションが行われ、GCに参加して学んだこと、経験したことなどが話し合われた。

またこれらは、4年生の教室に光ファイバーを使って同時中継された。

このような事後の取り組みは、GCを単に一過性のお祭りにしない、一部の生徒や教師のものにしない、各学年で学んだことを継承していくなどの点で大変有意義なものであったと思う。

## VI 評価

### 1. 参加者による評価

ゲストに対し、広島へ向かう新幹線の車中、Evaluation Sheetを配布して、記入してもらった。結果は、次ページの表の通りである。

### 2. 本校生徒による評価

GC閉会直後、5年生でGCに参加した生徒にアンケート形式で評価を行わせた。次の項目に自由に文章で答えるようアンケート用紙を作成した。

- (1) それぞれのプログラムについて
- (2) GCに至るまでの準備期間
- (3) GC期間中で改善すべき点
- (4) GCに参加したことがこれからどのように役に立つと思いますか？
- (5) GCに参加する後輩にアドバイスをするとしたら？

(1)から(4)のそれぞれの項目について生徒がどのような感想を持ち、評価を下しているか、生徒の意見を簡単に概観した後、それに対する担当教師の感想を付しておきたい。

生徒の感想や表現はそれぞれが自分のことばで書かれており、全てそのまま掲載したいのだが、



ゲスト(生徒・教師)のEvaluation  
57名分の回答を集計

	positive	回答数	negative	回答数
プレゼン、ディスカッションについて	興味深い、素晴らしい	33	プレゼンが長たらしい	7
	プレゼンは全てよかった、興味深かった	9	discussionの時間が十分でなかった	6
	楽しめた	8	理解しにくい発言があった	3
	準備が十分されていた	6	発言は、もっとゆっくり、大きく、正確な発音でして欲しい	2
	プレゼン、ディスカッションとも知識を得られた	5	discussionのfeedbackは意味がない、改善すべき	2
	テーマの選択がよかった	5	discussionの中には一方的なものがあった	2
	異なった観点からの議論は非常によかった	4	プレゼンが全く意味のない国があった	2
	他国の高校生との意見交換が有意義だった	4	discussionで、宗教が話題になった時は楽しめなかった	2
	ディスカッションは高レベルだった	4	その他	15
	その他	25		
	キャンプ、フィールドトリップ、パーティーについて	全て非常に楽しかった	28	全てのeventが早く終わるすぎ
キャンプが、非常に面白かった、楽しかった		19	パーティー全てが短すぎる	7
全てうまくまとめられていた (well organized)		11	Ice Breaker Camp をもっと長く	6
全て素晴らしいかった		7	さよならパーティーが短すぎた	3
Music & Dance が楽しかった、よかった		6	もっとパーティーがあったらよかった	2
全て準備が十分されていた(well prepared)		5	プレゼン(パーティーで)の後に食事を出すべき	2
Evening of Japanese Music がよかった		5	新体が非常に暑かった	2
フィールドトリップが興味深かった、卓越だった		5	その他	9
多くの友達と知り合えた		5		
その他		18		
ホストについて		感じがいい、素晴らしい	40	言葉の問題で意思疎通が難しかった
	快くもてなしてくれた	20	何もかもしすぎ	3
	親切	18	その他	4
	何でもしてくれた	7		
	問題なし	6		
	大好き、別れるのが寂しい	6		
	助けてくれた(悩みの相談)、手伝ってくれた	6		
	一緒に楽しめた	5		
	今後も連絡を取り合いたい、また会いたい	4		
	その他	17		
	奈良について	いい街、素晴らしい、美しい	36	奈良をあまり見て回れなかった
奈良の人々が素晴らしい		10	せわしい	3
新旧共存する街		8	大都会過ぎる	3
美しい、興味深い寺社が多い		6	道に迷いそう	3
歴史的名所が多い		5	奈良散策(World heritage tour)の日の天候は残念	2
清潔		5	人が多い	2
刺激的		4	その他	8
大きい街		4		
日本の生活について	異なった文化、生活様式に触れることができた	21	非常にせかせかしている	9
	素晴らしい体験だった	18	食べ物が旨手	4
	刺激的	7	人が非常に多い	2
	日本人は親切	5	物価が高い	2
	楽しかった	4	奇妙	2
	興味深い	4	威厳な国民性	2
	印象的だった	4	堅苦しい	2
	その他	26	その他	26
グローバルの中で、あなたにとって最も意味があったと思われるもの	Ice Breaker Camp	13	無回答(教師)	1
	全て	12		
	Discussions	9		
	異なった国々からの多くの人と出会えたこと	7		
	プレゼン	4		
	Learning Schoolのプレゼン	4		
グローバルクラスルーム2000奈良大会において改題されるべきものがあつたとすれば何か	なかった	13	夜、もっと遅くまでしてほしかった	10
	わからない	2	学校外での活動がもっとあればよかった	5
			ディスカッションをもっと長くした方が良かった	3
			もっと自由時間が欲しかった	3
			パーティーをもっと長くして欲しかった	2
			GCの開催時期を梅雨以外の時期にして欲しい	2
			広島日程をもっと早い時期にして欲しかった	2
			言葉の問題で、ホストとの意思疎通が難しかった	2
			1グループの人数が少なすぎる	2
			その他	29
グローバルクラスルーム2000奈良大会において気にかかった事	特になし	26	気候が問題(雨が多い、温度が高い)	5
	人間なのだから、反省すべきことがあって当然	1	モスリム用の食べ物が徹底していなかった	3
			期間が短すぎた	3
			ハラールフードしか食べられないので、困った	2
			パーティーが短すぎた	2
			学校外での活動がなかった	2
グローバルに関わった事が、将来どのような形で生かされると思いますか			その他	17
	新しい人との出会い、友情を育める	23		
	違った視点で物事を見つめられるようになる	18		
	他国についての知識が深まる、異文化に接する	15		
	自信がつく	9		
	大きな経験	8		
	他人に対して、心を大きく開き、寛容になれると思う	4		
	英語が上達する	4		
この経験を生活に生かせる	4			
その他	29			

内容面で重複している箇所が多々ありスペースの問題もあるので、生徒の意見を歪曲しない限りにおいて要約、編集した。

(1) それぞれのプログラムについて

- ・自分たちのプレゼンテーションの準備で忙しかった。
- ・いろいろな違った文化的背景をもった高校生の意見を聞いたり、議論したりした経験はたいへん有意義であった。
- ・キャンプなどを通じても友だちになることができた。

(2) GCに至るまでの準備期間

- ・事前の準備がなかなか思うように進まなかった。
- ・コーディネータとのコミュニケーションは最初はうまくいかなかったが、回を重ねる内にうまくいくようになった。
- ・どのようにしていいのかわからなくて、GCについてのしくみの説明がなされていなくて説明したりするのが大変だった。
- ・自分の意見を主張できた。

(3) GC期間中で改善すべき点

- ・一日の計画がすこし詰め込み過ぎた。気候のことを考えるともっとゆったりした計画の方がよかったのではないかな？
- ・もっと早くから外国人に話しかけるべきだった。最初は躊躇してなかなか話し出せなかった。
- ・GCに関する情報が徹底していなかった。
- ・もっと学校全体で参加したらよかったと思う。5年生でももっと参加できなかったか？参加している者とそうでないものの差がありすぎ。
- ・海外からの参加者の日程などの急な変更が相次いだ。

(4) GCに参加したことがこれからどのように役に立つと思いますか？

- ・決して上手でない英語だったが相手に分かってもらった。英語を話すことへのコンプレックスが解消した。英語によって多くの外国人と話せることがわかったので英語に対する取り組みが変わった。もっともっと英語が上達すれば言いたいことも言えるし、いろいろな考え方を知ることができる。英語の勉強をもっと頑張ろうと思うようになった。
- ・自分の文化のことをもう一度振り返る機会を得た。日本人だけの考えに囚われず広い視野で物事を考えられるようになった。今まで正しいと信じていたものに疑問を感じたりするようになった。
- ・自分の考えをちゃんと持とうと思った。また同時にいろいろな意見を聴いて価値観が変わっていろんなことを認めあえるようになった。
- ・様々な文化や国の「今」に触れることができ、視野も広がった。私は「将来、留学したい」と思った。国際関係の仕事もいいなと思った。
- ・大きな自信を得られた。国際交流に役立つとか英語が上達した、とかいうことではなく、いろいろな人の人生の一部を見て自分の将来を深く考えるようになった。人生の選択の幅が広がった

以上が主な生徒の感想と評価である。生徒たちは最初、自分たちの英語力で対応できるのかどうか大変不安だったようだ。しかし、GCを体験してみて、伝えたいこと、伝えなければならないことがあれば、「結構通じる」という感想を持った生徒が多かった。もちろん、どの生徒も、英語の運用能力、とくにリスニング能力はまだまだ不足していると痛感したのだが、GCでの体験は、彼らにとっ

てdiscouragementではなく、encouragement, motivatorとして大きく働いた。もっと英語の勉強を頑張ろうと思ったものが多くいたことでそれが分かる。

しかし、単に英語学習についてのみ影響があったのではない。さまざまな意見や考え方に触れ、視野が広がったという生徒が大半であった。その視線は世界全体に注がれると同時に、自文化に対しても向けられた。自分たちの文化を考えるよい機会となった。また、個としての自分を考える契機ともなったようで、何人かの生徒は自分の将来設計に影響を与えたと明言している。

大きな問題点の一つは情報の管理である。さまざまな部署で情報が混乱したり、情報を持っている者とそうでない者の格差から行き違いが起きたりした。このようなプロジェクトを企画・運営していくためには、情報をスムーズに流通させることが必要である。昨今「情報」が一つのキーワードになっている観があるが、大文字の「情報」を声高に叫びながら、一方では共同体内部での日々の情報伝達に支障をきたしているという状況はよく見られるのではないか。足下から考えていきたいものである。

### 3. ホストファミリーによる評価

ホストファミリーによる評価は、次の表の通りである。

ホストファミリーアンケート結果  
42名分の回答

	positive	回答数	negative	回答数
ゲスト生の態度	息思の疎通（理解しようとする意欲）が見られた	14	日本に対する興味・好奇心がない	7
	異文化を紹介してくれた	10	日本の気候にバテ気味	6
	日本への興味、好奇心がある	7	気持ちのずれ、心が通じない	4
	明るい	3	帰宅時間が遅い	3
	性格がよい	3	Global Classroomへの目的意識の欠如	3
	礼儀正しい	2	英語が通じない	3
	自立心がある	2	依存心が大きい	2
	その他	5	ホストを軽んじている	2
			ホームシック、精神的不安定	2
			自己中心的	2
Global Classroom	子供がGCを通じて勉強意欲を持った	4	スケジュールが過密	4
	親が日本の高校生を見つめ直すことができた	1	次回は梅雨時以外に設定を	2
	ホストがパーティーに参加できてよかった	1	広島日程への不満	2
			Eventが多すぎる、普段着でのつきあいがよいのでは	2
			その他	3
ホストへの影響	貴重な体験、有意義だった	22	ホスト生の疲れ・勉強への影響	3
	子供の英会話力が上達した	8	経済的に負担	2
	言葉の壁を越えてお互いが理解できた	7	ホストが世話のできない日はどうすべきか	2
	楽しかった	6	その他	12
	ゲスト生と別れるのが残念・寂しかった	6		
	子供が率先してゲストの面倒をみてくれた	5		
	家族の英会話力がアップした	4		
	その他	7		
食事	日本食への興味・トライ	6	偏食が多い	4
	何でもO.K.	4	少食	3
	回数が少なく、楽	2	その他	3
学校の対応	準備等、苦勞にねぎらい、感謝	19	ホストとゲストの事前の情報交換は早めにすべき	2
	その他	2	スケジュールが不明瞭（帰宅時間、集合場所など）	2
			その他	11
ラーニングスクール			ラーニングスクールへの疑問	3
			その他	2

## 4. 本校教師による評価

### (1) プログラム内容について

全体的には、おおむね充実していたことに満足だが、ややハードなスケジュールに対して、マイナスの評価。全校参加の開会式のあり方には評価が分かれた。空調設備と低学年生徒のために日本語の補助が必要だったという声もあった。

### (2) 運営の仕方について

保護者のサポートに対し、高い評価と謝意を表すものが多かった。核となる本校生徒の自主的活動に対する物足りなさ、生徒・生徒コーディネーター→国際→研究部→全職員という指示系統が機能せず情報が錯綜したことへの指摘、運営組織を明確にし、役割分担が適切に行われた上で、学校ぐるみで取り組むことの必要性を述べる声が目立った。

### (3) GC全般について

多くの生徒がかかわれたのは良かったが、ディスカッションの様子を見学する、クラスにゲストを呼ぶなどの形で、更に一般生徒に参加の機会を与えることの必要性をあげたものがあった。授業などのために教師がプログラムに参加できなかったことに対する不満、参加していない生徒の関心の薄さを懸念する声も聞かれた。

### (4) 今後のGCのあり方について

一般生徒と参加生徒との距離の大きさを案じる声がある一方で、クラブ組織にして活動する案も出された。負担と影響が大きすぎるので学校の体力を心配する声もあったが、多くは、本校教育のコアとして適切な方法を模索しながらの継続を望んでいた。英語と他教科との取り組みで総合学習としてカリキュラムに位置づける提案もあった。生徒の自主活動により、学校全体に目に見える形で還元する必要性を望む声が目立った。

## VII GC 2000 in Nara を振り返って

### 1. 感想

#### ○充実したプログラム

プログラム（ディスカッションとその他の活動）、コーディネーター中心の運営方法など、過去のGCが持っていた問題点を解決し、理想として描いていたようなGCがほぼ実現したのではないと思う。

#### ○生徒全体への還元

開会式のみ全校生徒が参加し、あとは、5年生の希望者がプレゼンテーションやディスカッションに、その他の学年でも希望者は見学やパーティーなどのプログラムに参加できる体制であった。

一般生徒への還元という点では、否が応でも参加させる機会がもっとあるにこしたことはないが、実際の運営方法やプログラムの内容を考えれば、今回のような形でしかなかったかと思う。また、テーマについて調査研究した内容を、実際顔を合わせて話し合うという、GC本来の目的からしても、今回程度で仕方がなかつたらう。プレゼンテーションが全校生とを対象に行われるということに関してすら、ゲスト達にとって非常に緊張を強いられることになった。まして、ディスカッションを観察されては、本来の目的を達成するのは難しかったらう。一言で、「学校全体の取り組み」と言われるが、具体的にどうするのかはかなり難しいことだと思ふ。

## ○積み重ねの国際交流

過去3年間の、短期のホームステイによる受け入れの経験が役に立った。ホームステイ、交流プログラムは実際に行うことによってノウハウは積み重ねられる。また、生徒達にもごく自然に受け入れられていたように思う。多くの外国からのゲストが、違和感なく受け入れられているのを見たとき、グローバル教育の定着を感じた。

## ○生徒のプレゼン技術

参加生徒によるプレゼンテーションは、年々コンピュータ利用のものが多くなっているが、今回は特に分かりやすく工夫されていたように思う。それは、各校が、開催が日本であるということも意識していたということもあるが、GCも4回目を迎え、過去の経験が各校で生かされているからではないかと思った。

## ○ことばの問題

GCプログラムの準備、運営については、GC職員の雇用や、生徒コーディネータの働きでずいぶんことばの問題はカバーできたように思う。しかし、それでもなお、意思の疎通の困難とそれから生じる誤解がかなりあったのではないか。例えば、プレゼンテーションやディスカッションで、発表者はかなり気をつけて英語を話してくれていたが、日本人や韓国人の生徒には理解できない面も多くあり、参加の度合いが小さかった面もあった。また、生徒コーディネータと研究部・国際も含めた本校教師との間ですら、お互いの多忙も手伝って、ミスコミュニケーションがあった。ホストファミリーとゲストの間でも、言いたいことがあってうまく伝わらない不安から、働きかけをやめてしまったり、お互いにわだかまりが生じた場合もあったように思う。その他、日本は安全ではありながら、ことばの面からゲストが単独で外出できないなどの制約があり、おそらく社交的なゲスト生は窮屈に感じたのではないかと思う。

## ○異なる文化と文化、価値と価値のぶつかり

○Evaluationに見られるパーティーの終了時刻が早いこと、夜の外出ができないことなどに対する不満は、日本と外国の生活習慣、高校生に期待される生活スタイルが異なり、理解してもらえなかったことから来るものだろう。

また、ホストファミリーがゲストに期待することと、彼らが希望することとが違い、また、特に日本人には「遠慮」が存在し、お互いに深いところで理解しきれなかったところで、しっくりいかなかったこともでてきたのではないか。

先に述べた参加体制についても、異なる考え方の存在を実感した。良いプログラムだから、全ての生徒に学校側が与えるという姿勢は、これまでのGCでは見られなかったものであり、特に日本に強いものではないか。プレゼンテーションを全校生徒の前ですることについては、教師のコーディネータも不可解だったようだ。それは、GCに限らず、例えばSchool Tripのあり方と修学旅行のあり方の違いにも見られるものなのであろう。生徒が自ら考え、主体的に選んでいくという面は、日本の教育にもっとあって良いのではないだろうか。

ハラールについては、予備知識を得て、できる限りの配慮をしたつもりであったが、南アフリカの引率の先生からは、「はっきりハラールと分かるように表示して欲しい」「ハラールを食べる者が、弁当をもらうのが遅くなったりするなどの惨めな思いをしなくても済むようもっと配慮して欲しい」などと指摘を受けた。勉強になった。

## ○保護者の関心と強力な支援

ホストファミリーや、サポーターの会など、保護者の支援抜きにはGCは成立しなかった。心から

感謝したい。しかし、ともすれば生徒自身の関心よりも保護者の関心が勝り、肝心の生徒の影が薄い場合もあったように思う。

## 2. 成果

### 2-1 生徒にとっての成果

#### ○開会式参加

理解できないプレゼンテーションを聞かなければならない経験は、苦痛ではあったろうが、同時に新鮮でもあったはずだ。この「わからなさ」体験が、英語学習や、他の面に活かされることを望む。

#### ○英語のコミュニケーション体験

日本に居ながらにして、英語での実際のコミュニケーションの場を体験し、自信がついたり、将来に対する学習目標ができたりしたのではないか。

#### ○プレゼンテーション、ディスカッションで

自分の意見を持つことと、伝えることの重要性を認識し、他国の生徒の意見を聞き視野が広がったと思う。

#### ○自文化の再認識と発信

ホストとして、或いは、いろいろなプログラムに参加するにあたり、日本文化を発信する良いチャンスであった。ゲストの疑問を解決し、好奇心を満たすためには何をどう説明するか苦勞しただろうが、意味のあることであったと思う。研究部・国際としても、プログラムを組む際、ミニマムエッセンシャルズとして何を選ぶかを考えたのは非常におもしろいことであった。

#### ○将来の進路計画に影響

G C 終了直後、5年生の生徒から、新たに2名のG C 留学希望者がでた。申し合わせによる締め切りはとうに過ぎていたが、幸い、受け入れが決まった。また、4年生からも留学に関する問い合わせが相次いだ。具体的に行動に表さなくともいろいろな意味で影響を受け、将来の進路計画に関わるものもあったのではないだろうか。

### 2-2 学校としての成果

#### ○保護者の支援

学校行事で、これほど多くの保護者の支援を得たものはかつてなかったと思う。この経験が今後、いろいろな面で活かされることが期待される。

#### ○国際交流プログラムの推進

本校の目ざす「世界に開かれた学校」のための、国際交流プログラムが一步前進した。交流事業のノウハウの積み上げとなり、今後の取り組みにも生かされるだろう。

#### ○英語科としての課題と目標が明らかになった

4、5年の英語授業の中でG C のテーマを扱っていく内容重視の指導の方向を続けていく。しかし、教材の選び方、授業の進め方などで、生徒の実態に応じた具体的な方法においてはさらに研究が必要だ。

## 3. 反省

#### ○生徒の主体的な活動に対する支援不足

学園祭のように、生徒中心に動くプログラムであったはずが、そうなりきれなかったところでい

いろいろな問題が生じていた。生徒が核となって、生徒コーディネータ、担当教師、保護者とうまく連絡を取り合えば、かなりうまくいったのではないかと。生徒を動かし切れなかったところを反省している。プログラムの計画、準備には外部との、かなり以前からの交渉が必要で、学校の方で決めてしまうことが必要だったため、その段階で生徒を置き去りにしてしまったのではないかと思う。

#### ○組織運営

上記の理由と、国際が多くの仕事を抱えこんでしまい、各プログラム担当への引継のタイミングが遅かったことで指揮系統がすっきりしなかった。生徒、生徒コーディネータ、保護者、担当教師、国際、総務の間での分担協力の統率がとりきれなかったと思う。

#### ○全体のプログラム、一日のスケジュール

ゆとりは心がけたつもりであったが、充実を考えるあまり、全体のプログラム、各日のスケジュールともにやや過密気味であった。外国からのゲストであるという点、気候の点、ホストファミリーとの時間を確保するという点からも、欲張らずもう少し余裕のあるプログラムでも良かった。

#### ○ホストファミリーへの対応

特に長期のホストについて、連絡をより密にとり実態をもっと把握しておく必要があった。ゲストもホストも経験があることで安心しきっていたこと、多忙で余裕がなかったことが原因だ。ホストファミリー担当は、数を増やして対応にあたると良かった。

参加生徒は、いわゆる「日本への留学生」ではなく、必ずしも日本に興味を持っている生徒ばかりではないことを事前に説明しておくべきであった。

#### ○授業参加の機会を

Educationのテーマで、世界学やその他の授業にゲストを呼び、日本の教育を体験する機会を持つと当初は考えていたが、LSの発表や若草山での昼食のために時間がなくなり、かなわなかったのは残念であった。

#### ○機器

コンピュータ、プロジェクタなどが、プレゼンテーションでうまく作動しなかったことがしばしばあり、進行に支障をきたした。担当が熟知しておくことと、情報担当との打ち合わせが必要であった。

## 4. 今後への課題

#### ○全体の取り組みへの方向

GCをクラブのように参加者だけの活動にする声も聞かれたが、英語科のカリキュラムの中に位置づけ、テーマに関する学習を進めることで、あくまでも全体の取り組みにしていく方向を追求したい。ただし、その方法については、生徒の実態を見ながら、教科で検討を続けていきたい。

#### ○生徒の英語でのコミュニケーション能力の向上

英語を聞き、話す授業により、生徒のコミュニケーション能力はかなり向上してきているように思われる。しかし、世界レベルではまだまだ課題が多い。

#### ○情報の共有と徹底

一つのプログラムを可能にするのは、情報の徹底的な共有をベースにした共通理解であろう。これは、学校間、学校、生徒、保護者、今回はゲストも含めて、それぞれの間で必要である。そのための方法と組織作りを考えなければならない。

#### ○地域への還元

今回、柳汀会員を中心に、地域の協力を得て、さまざまなプログラムが可能になった。その過程で、

国立の学校として地域から切り離された印象を指摘された方もあった。今回支援を受けたGCの成果の地域への還元を初め、地域と良い相互関係を結ぶ方法を考えるときにあるのではないか。

#### ○文部省からの支援

学校の大きなプロジェクトとして、GC開催にあたっては特に、また、毎年のGC参加に対しても国の予算という形で支援が欲しい。校務の傍ら、寄付集めに奔走するプロジェクトでは無理がある。

## おわりに

2000年6月、我々の学びの場として、日々の生活を送っている学校が、世界の高校生の「教室」(Classroom)となった。GCプロジェクトに参加して6年目、GCをホストすることにより、参加校間により強いパートナーシップを築くことができた。また、本校としても、限られた人数の参加者だけでなく、教師も生徒も広くGCを自ら体験する機会を得、幾分かは「世界」に触れることができたのではないか。

いろいろな形で、「世界」に触れることが可能な時代である。インターネットの世界でも、「世界」を感じることはできる。しかし、人と人が実際に顔を合わせて、時と場を共有することほど強いインパクトを与えるものはない。GCは、このITの時代にあって、人と人との出会いの場、語らいの場としての「教室」を提供していかなばならないと思う。

多くの人のネットワークにより、GC 2000 in Naraは可能になった。しかし、こういったプロジェクトをさらりと実現させてしまえる学校としての体力作りは、まだまだ今後の課題である。継続してGCに参加する中で、その方法を模索していきたいと思う。



## 人権・同和教育HR「戦争と人権」の実践

林 良 樹・河 合 士 郎  
荒 木 孝 子・金 沢 節 子

### I. はじめに

1999年度は本校が奈良県北部Aブロックにおける同和教育公開ホームルームの担当校となっており、11月5日（金）に、4年（高校1年）から6年（高校3年）の9クラスがHRを公開した。テーマは各学年によって異なり、4年は「ホームルームと教科の連携をめざした人権・同教育のこころみ」、5年は「アジアの中の日本」、6年は「戦争と人権」である。当時6年の担任であったわたしたちが「戦争と人権」というテーマで行ったHRの準備と実際について報告する。

同和教育HRのテーマは年度のはじめに各学年ごとに担任で決めているが、この学年の4年でのテーマは「コリアン問題」で、このテーマに決まったのは修学旅行の行き先を決定する過程で、韓国修学旅行が候補として上がったことがきっかけである。実際の修学旅行先は僅差の投票結果で北海道に決定したが、このとき対立候補であった韓国についてHRで学習することにしたのである。

5年のテーマは「国際社会における人権」であった。本校のグローバルクラスルーム行事に10人の5年の生徒が参加したこと、また、学年の中に留学経験者が数人いたことから、人権問題を国際交流の中で考えてみた。

4年の「コリアン問題」の場合は、講演を学年全体で聴いて、そのほかの時間は3クラスの担任がそれぞれ、ビデオ、資料などを選び、最後に議論をさせたが、5年の「国際社会における人権」では、講演、ビデオなどで学年全体の学習とし、その後、男女4人ずつ計8人のグループをつくり、学習したことをもとに寸劇を創作し、みんなの前で演じるということにした。

4、5年は1クラス40人で3クラスであったが、6年では学年を4つに分けて1講座約30人で4講座を設け、担当者も1名増やして4人とした。年度のはじめに担当者4人でテーマの相談をしたが、高校最後の学年であり、生徒の将来ということが頭にあったので、これからのかれらにとって何が重大なことを考えた。各クラスの特徴や担任の関心をそれぞれに出しあって、結局、「戦争」をテーマとすることにした。世界的には紛争が激化し、日本でも「新ガイドライン法案」や「国家・国旗法案」が通過する時期であったこととも関係がある。

学年全体のテーマを「戦争と人権」として、さらに絞ったテーマは各講座の担当者が自分の専門や関心や重要と思うことなどから決めることとした。その方が担任が自信をもって扱えると考えたからである。その結果、「戦争と科学技術者」、「太平洋戦争の歴史的再認識—太平洋戦争からわれわれが学ぶべきこと—」、「北アイルランドの内紛—テロリズム—」、「民族紛争や世界各地で起こる戦争を手がかりに『戦争と人権』を考える」の4つのテーマで展開することとなった。

また、HRの方法であるが、担当者が全体に講義するのではなく、学習したことをもとにして、何らかの形で自分たちの考えを発表する形を当初から考えており、ディスカッション、パネルディスカッション、ディベートなど討論の形式を各講座ごとに模索することとした。実際には、その方法について、生徒たちと相談して決めている。

## II. 講座A「戦争と科学技術者」

(林 良 樹)

### 1. 趣旨

6年は4講座あり、講座Aと講座Bが理系、講座Cと講座Dが文系である。理系の生徒はすべて2科目の理科を選択しているが、全員が化学を選択している。理科のもうひとつの選択科目については、講座Aの生徒数29人のうち、物理選択者が13人、生物選択者が16人である。したがって、この講座の生徒は将来、何らかのかたちで科学技術関係の仕事につくと思われる。

しかし、最近ではオーム真理教の事件や関西大震災、薬害エイズなどの問題がとくに話題となっているように、現代社会においては、科学技術はさまざまな問題をかかえおり、単に目先の仕事をするだけでなく、社会において科学技術はどうあるべきか、科学者・技術者はどうあるべきかをひとりひとりが長い時間をかけて考えていかなければならない。そして、社会における科学技術という問題は高校教育の中でも積極的に取り上げていかなければならないし、実際、理科や総合教科でもとりあげられることがある。

わたしは担当教科が物理であるが、毎年6年の最後に、「科学技術と社会」という問題を物理の授業の中で扱っていて、具体的な事例として、「原爆の製造」、「放射線汚染」などをテーマとして生徒たちに考えさせている。同じような問題を同和・人権のホームルームの中でも取り上げてみたいと以前から考えていた。社会における科学技術というテーマでは大きすぎるので、さらに絞りこまなければならないが、学年全体のテーマが戦争と人権であることから、クラスでとりあげるテーマを「戦争と科学技術」ではなく、「戦争と科学技術者」とした。この中で、科学技術は戦争とどう関わりをもち、科学技術者は戦争に関連してどのように考え行動したかを考えていくことによって、科学と社会のあり方を考察させようとした。

「戦争と科学技術者」は大きなテーマであるので、具体的なイメージがなければ抽象的な議論で終わってしまう。そこでいくつかの事例をとりあげ、これを詳しく学習することによって、現実的な判断力が身につくのではないかと考えた。

その事例として、物理選択者は「原爆製造」、生物選択者は「731細菌戦部隊」を取りあげ、科学技術が社会の中でもつ人権上の諸問題をさまざまな角度から考えさせることとした。適切な事例はほかにももっとありそうに思うが、「原爆」と「731人体実験」だけを取りあげたのは、ほかの例についてわたし自身がよく知らず、資料のもちあわせがあまりないからである。「ナチの人体実験」も考えたのであるが、資料不足のほかに、事例の中に日本人によるものを入れたかったということがある。

ただし、この2つの事例の中で、「原爆」の方は物理の教科でもしばしば扱うので比較的やりやすいが、「人体実験」については知らないことやわからないことが多く、わたし自身が生徒とともに学習したといえる。

### 2. 経過

#### 2-1 HRの時間

人権教育についてのHRの時間は、公開HRも加えて全部で9時間である。HRは毎週水曜日の6限であるが、6/14の場合のように、授業をHRに使った場合もある。次にHRの各時間の内容を簡単に説明する。

- (1) 1時間目(6/14 月) 趣旨説明、ビデオによる学習  
今年度の人権HRの趣旨を説明し、講座Aのテーマに関する解説をする。731部隊に関する学習として、収録しておいた日本テレビビデオ「驚き桃の木20世紀・石井四郎部隊」をクラス全員で見る。
- (2) 2時間目(6/16 水) ビデオによる学習  
原爆製造と科学者について学習するために、収録しておいたNHKビデオ「アインシュタインロマン⑤核爆弾と科学者」をクラス全員で見る。
- (3) 3時間目(6/23 水) まとめと生徒の感想  
2本のビデオをみたところで、戦争における科学者の考えと行動についてまとめをし、さらに生徒全員から2本のビデオについての意見をきく。
- (4) 4時間目(7/7 水) ビデオによる学習  
物理選択者と生物選択者に分け、前者はビデオ「原爆の製造」を、後者はビデオ「細菌戦部隊731は生きている」を見る。
- (5) 5時間目(10/6 水) 資料学習、  
班ごとの相談資料『現代の科学と科学者を考える』を全員で読み、その後班ごとに分かれ、細部の課題や役割分担を決める。
- (6) 6時間目(10/13 水) ビデオ学習  
物理選択者はビデオドラマ「オッペンハイマー」を、生物選択者はビデオドラマ「黒い太陽・731」を見る。また、このときにほかの資料を配布する。
- (7) 7時間目(10/27 水) 班ごとの議論、資料学習  
班ごとに分かれ、パネラーが発表する意見について話し合う。
- (8) 8時間目(11/5 金) 同和教育公開HR。  
4人のパネラーが発表し、その後パネラーを含めた全部の生徒たちによる議論をする。司会はHR委員がつとめる。
- (9) 9時間目(11/10 水) まとめと反省  
公開HRのときに時間の関係で発表できなかった意見を生徒から出してもらう。最後に担任が、「戦争と科学技術者」の一連のHRのまとめをする。

## 2-2 HRの準備と運営について

### (1) HRのあり方

テーマが決まり、その後どのように人権HRを展開していくかということであるが、担任からの一方的な話とならないようにするために、夏休み前に、このHRの方法についてアンケートをとって生徒の意見をきいた。アンケートできいた項目は、次のとおりである。

- ① 今まで学習したこと以外に、どのようなことに関心があるか。
- ② 10月のHRの取りくみについて、どのようなことを希望するか。
- ③ 昨年度は寸劇という方法で自分たちの考えを表したが、今回はどのような方法がよいか。
- ④ 公開HR当日はどのようにするのがよいか。

①について、さまざまなことが書かれていたが、科学者や医者がどのような意識をもって、あるいはどのようなきっかけで戦争とかかわっていったかを知りたいと書く生徒が何人かいた。③については、ディスカッションやディベートをあげる生徒がほとんどであったが、おとなしいクラスなので、公開HR当日にみんなが発言するかどうか心配している者もあった。また、受験前なので、HRの時

間以外に調べものなどで時間をとることがあまりないようという要望が多かった。HRの組み方を生徒に相談したことは、HRをスムーズに運営する点で非常に良かった。

## (2) 班活動

生徒たちの意を汲んで、結局公開HR当日は、パネルディスカッションを行うことにした。パネリストは4人くらいがよいと考え、班は物理選択者、生物選択者をそれぞれ2つに分けて4つの班とし、ひとつの班約7人の中から班長とパネリストをひとりずつ決めることにした。さらにパネリストが意見をつくりやすいように、班で学習、議論をさせ、テーマを考えさせたところ、次のような題目を提出した。

- ① 班 「原爆と科学者の功罪」
- ② 班 「原爆と科学者のおかれた状況」
- ③ 班 「731人体実験と医学者の心理」
- ④ 班 「731部隊の研究の実態」

## (3) 資料と記録

このような学習では必ず資料が必要であるし、その資料は自分たちで調べて手に入れるのが一番よい。しかし、彼らは時間がないので、資料は担任の方で用意することにし、参考文献、ビデオ、インターネットによる資料を与えた。そのかわりに、HRの時間には集中して取りくむことを約束させた。また、資料を印刷したものをメモ用紙とともに綴じてパンフレットをつくらせ、班ごとの議論、ビデオや資料による学習、公開研究会での発言など、あらゆるものをこのパンフレットに記録させた。

# 3. 公開研究会

## 3-1 パネルディスカッションの司会

公開研究会当日、4人のパネリストと2人の司会者が教室の前にすわり、その他の生徒たちと向かい合わせの形をとった。

司会はHR委員（男女ひとりずつ）にさせ、次のような注意をした。

- ① 最初、パネラーを紹介する前に、本日議論する趣旨を簡単に述べること。
- ② パネラーの持ち時間は3分であるが、話たりないように感じる者があれば、また、パネラーの言うことにわかりにくいところがあれば司会者の方から質問して補足させるとよい。また、意見が出ないときに、司会者からパネラーに質問してもよい。
- ③ できるだけ、議論が単発で出るより、からみ合いながら、批判しあいながら出るようにすること。パネラー以外の生徒からの意見を促すこと。
- ④ 時間に気をつけること。ただし、はじめの計画どおりに区切る必要はない。臨機応変に対応する。もし、議論が盛り上がったなら、2・3分程度なら、時間オーバーしてもかまわない。
- ⑤ 最後の2・3分で、司会者からのまとめ、すなわち、「戦争と科学技術者」というテーマにそくして、出た議論をまとめること。つまり、意見を出させながら、まとめのことばを考えていくこと。いろいろな議論がまとめやすい場合もあるかもしれないが、いろいろなことがただただ出ただけでまとめにくいときもあるが、そのときは出たものをそれぞれまとめて言えばよい。

## 3-2 議論

はじめに、4人のパネリストが自分たちの主張を3分から5分間ずつ述べ、次にほかの生徒の意見や疑問が発表された。全体に生徒たちは固くなっているという印象であったが、次々に発言がなされた。

## 4. まとめ

おとなしいクラスなので、ディスカッションのときに意見が出るかどうか、心配であった。単なるディスカッションではなく、パネルディスカッションとしたのは、はじめにパネリストたちによる発表があった方が、刺激されて自分の意見を言いやすいただろうと考えたからであるが、結果からいうと発言はかなり出てきて成功だったと思う。パネリストたちの発表要旨はあらかじめきいていたが、当日の一般の生徒の発言はまったく予想がつかなかった。何を発言するのかが楽しみでもあり、不安でもあった。

「戦争と科学技術者」という大きなテーマ自身がそうかもしれないが、原爆にしる人体実験にしる残虐なものを扱うので、深刻な問題と向き合うことになり、生徒にとっては大変重い気持ちになったはずである。しかし、意外とポイントをはずすことなく、問題を見据えていることが、討論をきいていてわかった。

生徒たちの議論で興味深かったのは、アメリカの原爆投下と日本の人体実験を比較している考察していることである。概して、日本人行為の残虐さに対して否定的で、アメリカ人の残虐さに対しては寛大であるように感じられた。また、アメリカの原爆投下を戦争終結のためにしようがなかったと考える者がかなりいたのが意外であった。

資料として文書も多く使ったが、ビデオ教材も戦争のイメージをつかむのに役立った。原爆より人体実験の方が残虐だと考えるのはビデオのせいもあるかもしれない。

戦争という状況が人間性をゆがめるとか、状況に押し流されないためには科学者として、しっかりした信念が必要であるとか、好奇心や研究への傾倒が間違った道へ進む可能性があるとかの貴重な発言が多く出されて、有意義なHRであったと思う。

## 5. 資料

### 5-1 公開HR指導案

#### 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	備考
導 入	はじめに パネラーと司会者	・本日の議論の趣旨を担任が説明する。	2分
		・パネラーと司会者は教壇の上に席をとり、司会者が4人のパネラーとテーマを紹介する。	3分
展 開	パネラーの発言① 「原爆と科学者の功罪」	・原爆製造に関心が集中して、その被害にまで考えなかったことなど。	4分
	パネラーの発言② 「原爆と科学者のおかれた状況」	・原爆製造の動機や投下の事情、軍の圧力や科学者の運動など。	4分
	パネラーの発言③ 「731人体実験と医学者の心理」	・731部隊の中で、特に石井隊長に彼の考えと心のうちを推測し、科学者のあるべき姿を考える。	4分
	パネラーの発言④ 「731部隊の研究の実態」	・細菌兵器をつくったり、人体実験をした恐るべき実態を明らかにする。	4分
	全体の議論	・パネラーの発言をもとに、そのひとつひとつについて、全体から意見や感想を言いつけあう。司会者は発言をうながす。	2.2分
ま と め	司会者のまとめ	・パネラーの発言やそれを受けた議論を整理し、科学者のあり方についてまとめる。	4分
	おわりに	・全体のまとめを担任が話す。	3分

## 5-2 公開HRにおけるパネルディスカッションの要旨

はじめに、4人のパネリストが、それぞれの班を代表して意見を述べた。その要旨は次のとおりである。

### ①班 「原爆と科学者の功罪」

原爆をつくった科学者たちは、今までだれもつくったことのないものをつくりたいという好奇心や科学者のプライドから原爆をつくった。しかし、そのために科学の進歩があったことも確かだ。ドイツが降伏し、原爆が必要なくなったときに、原爆を使わないように運動した科学者もいた。ロートブラットなどのように科学者として冷静な判断をする人もいた。ひとつのことだけしか考えられないようなことであってはならない。科学者らしい冷静な判断が必要だ。

### ②班 「原爆と科学者のおかれた状況」

原爆の父とよばれたオッペンハイマーを中心にして考えていった。当時のアメリカはドイツの脅威のために原爆を開発した。また、日本への投下はソ連に対する脅威からであった。オッペンハイマーは水爆開発には反対し、失脚した。原爆は虐殺というイメージがあるが、原爆投下によって戦争の終結に貢献したといえる。アメリカだけが悪いという考えは正しくない。

### ③班 「731部隊の人体実験と医学者の心理」

731部隊の細菌兵器の開発や人体実験を知って、大きな衝撃を受けた。科学者たちは最初は抵抗があつたかもしれないが、戦争という環境の中で自分たちの行為を正当化した。また、自分たちのやりたかった実験をやっていた。人体実験もまっとうなことと考えた。満州という日本の監視の行き届かないところで、医学者としては絶対してはいけないことである。戦争は人間をゆがめるものである。

### ④班 「731部隊の研究の実態」

彼らは医学のためにも人体実験を行った。731部隊は最高の医学者をかかえており、そのデータは貴重なものである。731部隊は彼らの能力が存分に発揮される場といえる。この点ではオーム真理教と似たものがある。731部隊の残虐性は、そのほかに、中国人・朝鮮人に対する差別意識からきている。彼らを「マルタ」とよんでいたことからわかる。

戦争中と科学者としては、自分の研究が戦争に加担したとしても反省しなければならない。

#### その他の生徒の意見の要旨。

- ・ぼくたちは原爆製造にかかわった科学者を調べたが、自分たちのしたことに対する罪を感じた人がいたということを知ったが、731部隊の医学者にはそのような罪の意識はあったのか。
- ・少しは罪の意識はあったかもしれないが、そのようなことでは戦争に勝てないと思って考えないようにしたのではないか。
- ・731部隊の幹部人はみどり十字に入って同じようなことをしていて、彼らは責任なんて感じてなかったと思う。
- ・医者は人の病気を治すものなのに、反対の人体実験をしているが、これは戦争だけが原因とってよいのか。
- ・オーム真理教によるサリン事件の例からもわかるように、戦争だけがこのようなことを引き起こすわけではないと思う。
- ・731の細菌兵器は戦況不利な状況が生み出したものだ。
- ・戦争はたくさん殺すということが目的だから、当時としては自然だった。
- ・自然かもしれないが、捕虜を殺すのは自然ではない。
- ・殺すことが戦争の目的だから、しかたがない。

- ・こうして話しているけれど、実際に大量殺人にむきあったらどうするか。捕虜は人間ではなく「マルタ」としてあつかうのでなれば残虐行為はできない。ひとりの人間であることがむつかしく、国家や軍隊の圧力が大きい。
- ・単に戦争だから殺すということだけでなく、原爆の場合であれば、アジアを共産主義化から防ぐという意識がアメリカにあったと思う。
- ・戦争は平和のためという目的で行われる場合もある。
- ・アインシュタイン書簡にあるように、ひとりの人間であることができないようなことが国家によって強制されるような場合に戦争に向かうということがあると思う。
- ・ドイツの原爆開発がたいしたものではないとわかったとき、アメリカの科学者はどのような態度だったのか。
- ・原爆の開発は不必要とする者と次の時代のイニシャティブをとるために開発しようとする者と2つに分かれた。
- ・あまり考えなしに原爆だけができていってしまったというところがあると思う。
- ・原爆が悪だというならば、原爆以外にどうすればよかったのか。
- ・そういう問題ではなく、原爆投下したときは、日本はもう降伏寸前だったのだ。
- ・司会者のまとめ。自分の能力を発揮できる場所、自分の好奇心を満たすために原爆をつくった。広島にはウラン爆弾を、長崎にはプルトラム爆弾を落としたことは実験にほかならない。自分たちの研究欲のために原爆投下している。ぼくたちは科学者としてのこころがまえをしっかりと持っていなければならない。そういう意志を持っているのでなければ科学者、医学者になってはいけない。

### 5-3 生徒の感想文

#### A (男子：物理選択者)

今までも人権学習をやってきたけれど、このHRでは本当に私たちにとって将来に大きくかわってくる話だし、科学者は人類に安全・文明・幸福・発展を与えるために存在するという意志をずっともっていかなければいけないと思いました。

まず資料を読んで思ったことは原爆製造における軍と科学者の違いです。両方ともナチス・ドイツに対する意識において同じ立場にありましたが、原爆の危険性、無差別破壊行為のおそろしさを知ってからは軍と科学者は意見が異なったが、軍の権力で科学者につくらせたと思われまます。

ディスカッションではさらに奥の深い意見をきき、いろいろ考えさせられました。731部隊の話で思ったのは、医学者が自らの研究に対する探究心という欲望を人間としてやってはいけない方向へと導いてしまったように思います。

#### B (女子：物理選択者)

科学者は戦争になると国家という名目で巨大なプロジェクトを行える。これによって科学者は国家にうまく利用され、最後には非常に恐ろしい殺人兵器をつくってしまい、気がついたときには遅かったということになる。今からみれば、もっとしっかり自分の意見を持って行動しなきゃだめじゃないかと思われそうだが、当時戦争のさなかに彼らと同じ状況にいた場合、本当に原爆製造をやめることができるだろうか。めったにない巨大な研究・原爆開発から手をひこうと思うだろうか。

科学技術はそもそも人々の生活に役立てるために考え出されたものであって、決して殺人のために用いるべきものではない。それなのに科学技術が人間に大きな被害を与えるようになってしまって、非常に複雑な気持ちである。

### C (男子：生物選択者)

戦争では多くの科学技術者が集められ、強力な兵器を開発する技術が生み出される。しかし、これが違った方法で利用されると我々の生活を向上させるようになる。つまり戦争のおかげで今の生活水準があるということだ。しかし、このような理由で戦争が肯定されてよいだろうか。

現代においても過去の反省はほとんどないままに核開発が行われている。やがて戦争になるとそれらが使われることになるかもしれない。しかし、今の技術は昔とまったく異質のものと考えべきで、技術を戦争で利用すれば大変なことになると予想される。

これからの科学技術者は自分の行っていることに対して正しい判断ができる能力を必要とされることも確かだが、いったん戦争になれば戦争に協力せざるをえなくなることは間違いなく、そうすれば、科学技術者はまた新たな技術を開発してしまうだろう。何よりもまず、戦争を防ぐことが重要である。

### D (女子：生物選択者)

科学技術者である前にひとりの人間であることに着目して私はこの問題について考えてみた。731部隊の大量虐殺の背景には何があったのか。これを出発点とするとどんどん疑惑の輪が広がっていった。何故、石井のもとにいた科学者でありまた軍人でもある彼らはあんなに残虐な行動に協力し、捕虜を「マルタ」とよんで非人間的な生体実験を行ったのか。良心のとがめはあったらうし、最初は嫌であったに違いない。しかし、人間の順応性には恐ろしいものがあり、その殺りくに慣れて、むしろ自分たちの興味本位のままに実験を行った者もいた。

けれど、本当にそのような人達ばかりだったのか。私はただ単にこの731部隊だけが悪いとはいえないと思っている。それは戦争という状況下において、護身のために行われたことも多く、自分の生命を守るためには仕方がないことだったからだ。強制的に実験をやらせる強大な権力の前では人間の良心はちっぽけで姿を表さなくなってしまう。

私が思うに、人間が人間性を貫き通すことができるのは、本人に危険がないとき、つまり護身の必要がないときのみであると考えられる。アインシュタインの述べていたことからこのことがうかがわれる。

人間が人間らしく生きるというのは非常に難しいことであり、今私たちが抱えている最も大きな問題ではないだろうか。非人間性は戦争中だけでなく、日常生活でも顔をのぞかせている。自分は違うといいきれるか。戦争中だからといって何でも許されるか。これは一概に答えられないし、簡単に答えることは許されない。

## 5-4 参考資料

### (1) 生徒が学習した資料とビデオ

- (1) 池内了『科学の考え方・学び方』(岩波ジュニア新書)より「現代の科学と科学者を考える」
- (2) インターネットで調べた資料①「人骨問題とは、隠された医学史」
- (3) インターネットで調べた資料②「『731部隊』の跡地を訪れて」(自由の森学園・矢納和幸)
- (4) インターネットで調べた資料③「黒い太陽731」(『映画(ビデオ)の紹介・評論』)
- (5) インターネットで調べた資料④「『プルトニウム人体実験；マンハッタン計画』の書評」(杉森みどり)
- (6) インターネットで調べた資料⑤「ナチス政権下の医学的人体実験」(和田貴美子)
- (7) 常石敬一『七三一部隊』(講談社現代新書)より「序章 半世紀後」



- (8) インターネットで調べた資料⑥「原爆投下までの経緯」
- (9) インターネットで調べた資料⑦「京都、広島に原爆を投下せよ…マンハッタン計画について」
- (10) 神奈川県高教組『原子力読本』より「原爆関係年表」
- (11) シラード『シラードの証言』（みすず書房）より「大統領へのアインシュタインの手紙」
- (12) ファインマン『ご冗談でしょう？ファインマンさん』（岩波書店）より「最初の原爆実験」
- (13) K. スミス編『危険と希望』（みすず書房）より「フランク報告要約」
- (14) ネーサン、ノーデン編『アインシュタイン平和書簡』よりアインシュタインの手紙
- (15) ロートブラット『なぜ私はマンハッタン計画を離脱したか』（「世界」1990.9）
- (16) ビデオ「驚き桃の木20世紀・石井四郎部隊」
- (17) ビデオ「細菌戦部隊731は生きている」
- (18) ビデオ「黒い太陽731」第1部
- (19) ビデオ「アインシュタインロマン⑤核爆弾と科学者」（NHK）
- (20) ビデオ「原子爆弾の製造」
- (21) ビデオ「オッペンハイマー」
- (2) 「731細菌線部隊」に関する参考文献
  - (1) 森村誠一『悪魔の飽食』（角川文庫）
  - (2) 森村誠一『続・悪魔の飽食』（角川文庫）
  - (3) 森村誠一『悪魔の飽食第3部』（角川文庫）
  - (4) 常石敬一『七三一部隊』（講談社現代新書）
  - (5) 常石敬一『医学者たちの組織犯罪』（朝日文庫）
  - (6) 常石敬一『消えた細菌戦部隊』（ちくま文庫）
  - (7) 韓暁『七三一部隊の犯罪』（三一新書）
  - (8) 郡司陽子『真相・石井細菌戦部隊』（徳間書店）
- (3) 「原爆製造」に関する参考文献
  - (1) R. ローズ『原子爆弾の誕生』（啓学出版）
  - (2) シラード『シラードの証言』（みすず書房）
  - (3) 中沢志保『オッペンハイマー』（中公新書）
  - (4) 藤永茂『ロバート・オッペンハイマー』（朝日新聞社）
  - (5) P. グッドチャイルド『ヒロシマを壊滅させた男オッペンハイマー』（白水社）
  - (6) J. ウィルソン『われらの時代に起こったこと』（岩波書店）
  - (7) 山崎正勝、日野川静枝『原爆はこうして開発された』（青木書店）
  - (8) 高橋智子、日野川静枝『科学者の現代史』（青木書店）
- (4) 「科学と現代社会」に関する資料
  - (1) 常石敬一「科学／技術と戦争」（岩波講座・『科学／技術と人間』）
  - (2) 佐藤文隆『科学と幸福』（岩波書店）
  - (3) 池内了『科学の考え方・学び方』（岩波ジュニア新書）
  - (4) 村上陽一郎『科学者とは何か』（新潮選書）
  - (5) 高木仁三郎『核時代を生きる』（講談社現代新書）
  - (6) 岩波書店編『科学技術の開発と新しい社会』（岩波書店）

### Ⅲ. 講座B「太平洋戦争の歴史的な再認識」 —太平洋戦争からわれわれが学ぶべきこと—

(河合士郎)

#### 1. 趣旨

米・英のイラク空爆、北朝鮮問題、ガイドライン法案、NATOとユーゴ等々、メディアを賑わせる記事を見るかぎり、世界をめぐる情勢は年々かえって緊迫化の方向が感じられ、20世紀末の国際社会は激動しているといえよう。

この時期に戦争の問題をとりあげて、生徒たちが一度ゆっくりと考察する機会を作ることは、時事的にもタイムリーで年齢にもふさわしいように思う。ただし9条の戦争放棄を根本にしていることはもとより、戦後50年を過ぎて日本では平和が全くの日常となっており、生徒はおろか教師自身戦争を知らない。今は戦争世代も鬼籍に入りつつある。だいいち戦争がよくないなどということは人権感覚的にも当り前の話といえる。そういう意味で現代の日本人がこの問題を扱うことには、意外と年々難しさが増しているのかもしれない。ところが一方今も世界のどこかで実際に戦争が起き続けているのだ。グローバル化の進行する地球市民として、6年ともなれば、戦争に関して爾来重層的な捉え方を求めることが可能だし、必要なことでもある。扱う主題は学級別に考えることになったが、生徒の希望を聞くのではなく、担任の裁量でそれぞれ選んだ。

ただ、私としては前回5年のHR事後意見交換のときに多く出た意見として、あまり非日常であったり、実感のない事象に関して大風呂敷を広げても意識の深まる学習ができない、というものが多かったことに今回は注意した(本学年では4年でコリアンを、5年では国際社会と人権をテーマに取り組んできた)。

戦争について考えるというとき、体験がないとはいえやはり高校生にとってもっとも身近なのは、遠く離れた異国の民族紛争や人種問題ではなく、先の太平洋戦争にちがいない。前述のとおり、ゆくゆくは世界視野で各地の戦争について考察できるようになりたいが、卑近なところから問題認識を積み始めることを、卒業後も国際理解を広げていくためのささやかな端緒と考えたい。今回は地歴公民科の立場からではなく、人権学習的な視点から、現代日本の一市民として太平洋戦争を見つめ直してみることにする。本クラスは理科系生徒から構成されており、地歴科の選択状況は日本史19名、世界史2名、地理8名である。もともとなる知識にもかなりの個人差があると思われるが、中学までの歴史の授業やマスメディア、身近な人々からの伝聞などによってもある程度漠然とできているであろう、先の戦争に関する各人の認識を、今回の連続したHRのとりくみで少しでも深め、戦後につながっている問題を解決していくにはどうしたらよいか、疑問や意見を出しあいながら考えてみたい。

また、本校では3、4年での総合学習の時間をはじめとし、生徒には学年・学級活動のあらゆる機会を捕えて「ものごとの取り組み方・学び方」の主体的態度を醸成してきている。これが高校最後の人権学習となることから、今まで蓄積してきた研究手法や発表・議論の力が発揮できる機会を、なるべく作ることに留意した。はじめは教師主導で確認事項や資料紹介を中心に進めるものの、次第に意見交換を導入し、途中からは取り組みの方法自体についてもHR委員を中心として提案を出し合わせ、時間のほとんどを生徒が主役の場に変えてゆく。

## 2. 経過

### 1 学期

まず、視聴覚教材や歴史の教科書によって簡単に太平洋戦争の概略をつかむことから始めた。また、98年6月に上梓された小林よしのり氏の漫画“戦争論”を読む。この書は50万部を突破して現在も一定の層に支持されているが、反論も多い。ただ、従軍慰安婦問題・南京大虐殺に関するジャーナリズムの一種反日ともとれるキャンペーンを疑問視することから始めて、史実を丹念に資料から拾って研究しなおすという作業により、独自の判断に基づいて日本の近現代史を捉え直そうという試みをしている、そのような努力を知ることは、自ら考えることがいかに大切であるか、ということを実感するきっかけになると考えた。また、表現媒体が漫画であることから「入りやすさ」のわりには、手軽に多く情報量が得られることも考慮している。

#### 1 時間目（6/16） 於：大教室

昭和史のビデオを観る（NHK Special：太平洋戦争“後編”）。

ビデオが75分と長時間であったため、詳しく主旨説明や解説はできていない。

#### 2 時間目（6/23） 於：HR教室（以下は同じ）

本年度人権学習の基本的な流れ、主旨を説明。

“戦争論”（幻冬舎刊）を配る。本当は第1時と第2時の間に各自読むようにしたかったのだが、本の差配がおそくなったため、やっとちょうどこの日に配れることになった。が、短時間でもみんなと一緒に読む機会がくれたことはよかったのかもしれない。

次回HRまでに、読んでおくようにいう。

漫画の読後にこの書の問題点や感想などを出しあって、太平洋戦争についてどういう面を詳しく知りたいか、興味を引き出す。専門家の代表的な著作や歴史的な資料集もまずは公平な立場から自分の頭で考えるよすがとしてできるだけ紹介したい。引き続いてグループに分かれ、関心のあつるテーマをそれぞれ取り出して、個別に学習し発表会をもつ方向づけを決定する。複雑な歴史のものごとを調べる際には、情報ソースの選び方が難しい、ということも、身を持って体験してほしい。

#### 3 時間目（6/30） 太平洋戦争の概略説明と意見交換。

高校教科書「日本史」と「世界史」の太平洋戦争に関する記述を全員に配布。

“戦争論”で提起されている問題に関しても討論。

今後の取り組みの方法について、生徒の意見を聞く。

教室の中央を向けて、議論ができる形に机を配置する。

教科書のコピーを黙読させたあと、順に教師が指名して感想を聞く。

地理選択者はやはり把握があいまい。世界史選択者は、日本史選択者よりももともと視野の広い意見を持っているようだ。

あとは“戦争論”の読後感・HRの進め方なども交えて、自由に意見を言ってもらおう。

#### 4 時間目（7/7） 引き続き意見を聞く。

班ごとに調べたいテーマについて発表する形態でよいことになった。

この回からはHR委員がすすめる。

グループわけ（抽選でよいことになった）。6班、テーマ・班長・研究計画。

どのようなテーマを設定して調べたいか班に分かれて話し合い。

文献・視聴覚資料提供のアドバイス。発表順の抽選。

## 2 学期

夏休み前に班やテーマを決めておいたのは、個別に取り組める時間を充分に取っておく目的もあったのだが、受験を控えた学年のことでもあり、実際に発表のHRが近づくまでは念頭になかった生徒も多かった一方、継続的に情報収集を心がけていた者もごく少数いた。夏は8/15を中心に終戦の季節でもある。そういう意味では、この夏休みにたびたびHRに対する意識が戻る機会も多かったと思われる。2学期に入ると自分たちの発表前には予想以上の勤勉な取り組みと班の結束が見られ、資料の作成にも余念なく、よい意味で競い合うような発表会となった。

### 5 時間目 (10/6) グループ発表 1 (2 班ずつ)

社会科蔵書・学校または地域の図書館・インターネットなどで発表準備。

質疑・意見交換

### 6 時間目 (10/13) グループ発表 2

### 7 時間目 (10/27) グループ発表 3

最後に学級討論会をし意見交換を経て認識を深めたのち、一連のとりくみを総括する。全員参加型の公開HRにしようという気運はクラス内で一致していたが、具体的な進行について決まっていなかったため、今までの実践からつながるような実施計画を生徒たちで話し合った。その結果、戦後いまだに未解決の問題として今後もいちばん影響が残ることは、戦争責任・贖罪問題であろうということで、複数の候補中このテーマに関して討論に取り上げることが決定された。

### 8 時間目 (10/29) 3 回の発表会をふまえて、公開HRのテーマ・運営方法を定める。

HR委員がすすめる。

第1時から第7時までの各HR内容についての感想や意見のアンケートも実施した。

### 9, 10 時間目 (11/5) 準備, 公開HR, 討論会

### 11 時間目 (11/10) まとめ。

今回の人権学習で学んだこと。

どういった意識改革があったか。

## 3. 公開研究会

### 3-1 当日の状況

「太平洋戦争での責任について、日本はこれからも謝罪をし続けていくべきか」という問題提起に対し、それぞれ自分の現在の立場を持って登校した。謝罪するべき・終わらせるべき・わからないの3つの立場が考えられる。午後の公開HRの前に午前中1時間HRをとって、生徒に自由に準備をさせた。グループに別れて、今までのレジュメや資料を参考に大まかな意見をまとめる。特に、わからないという立場のグループは、論点を集約してHR委員にわたす。HR委員はこれを模造紙に大きく簡単に書き、これを午後の議論の出発点として扱った。

「わからない」というグループからの、討論前に話し合っただけの疑問点

#### (1) そもそも謝罪とは何か？

どういう謝罪をすればいいのか (手段・中身)。口頭で謝るのか、お金で謝るのか。

国に対してか、個人に対してか。裁判のようにはっきりと、誰が誰に。

具体的にどの内容に対しての謝罪か。

(2) 戦争は双方に原因があるはずなのに、どうして一方が謝らなければならないのか？

侵略したから？

欧米諸国の植民地支配も侵略に値するのではないのか（特に謝罪していない）。

日本が敗戦国だから（敗：独・伊、勝：米・英・仏・露）？

(3) いつまで続けるのか

50年経過しても？当事者は減ってゆく。

公開研究会の事前に作成した指導案は後掲資料のとおりであるが、午後は予想以上に意見がどんどん出て、活発な討論会となった。人数の内訳は、欠席4名・司会（HR委員）2名・「すべき」5名・「終わらせるべき」11名・「わからない」7名である。担任は全く机間巡視をせず、終始主に議論のメモを取っていたこと、HR委員は模造紙に書き込みをしないで、意見のキーコメントはチョークで黒板に書いたこと、など細部に案との相違もあるが、もっとも異なる点は、議論が続きすぎてまとめに相当する時間が取れず、途中で終わる結果になったことである。意見は多くの生徒から常に自発的に出続け、「わからない」グループはどちらかというあまり口を挟む機会なく、「すべき」「終わらせるべき」グループの論争となった。少なくとも今後どう展開させるかについて、HR委員でも担任からでも要所で議論の整理がもっとなされるべきだった、という反省は残る。

### 3-2 公開HRの続き。まとめのHR

一連の今回の取り組みを総括するHRをとった。司会（HR委員）がまずは当日と同じように机を3箇所にかためさせ、言い足りなかった意見を発表させることにする。しかし、日が経って不思議なことに議論は沈静化していたので、主に前回発表がなかった生徒に対してHR委員が指名する進行となった。いろいろな見方があることからこのような二律背反の立場が生じる問題は現実社会に多く、だからといって結局は両論併記的な結論に落ちるのでは悪しき相対主義とも言える。責任を持って自分の意見を定めることの難しさも体験できたのではなからうか。謝罪問題にしばらく自由に感想を述べ合って、担任も久しぶりに司会に加わり、最後は全員で落ち着いて今回の取り組みを振り返った。

## 4. まとめ

### 4-1 全体的な感想

各時間の取り組みに対する生徒の意見や感想は公開研究会以前にまとめて、自分たち自身で参考にできるようにした（資料別掲）。

視聴覚教材はインパクトがあり、考察の動機づけとしてもひととおりの歴史把握の確認材料としても好評であった。漫画に関しては、思考の熟しない低学年で与えるとすればある意味一面的でいわゆる常識破りの内容とも思えたが、最高学年になった彼らには懐疑的精神をかえてそこから抽出できるはずである、という自信が私にはあった。感想を聞くと期待通り、たいへんおもしろく興味を持って読めたという者が多かったわりには、冷静に距離を持って見ており、むしろ自分自身の歴史観を構築する手法や論証性を学んだという感じだ。この本を読ませた後で教科書の複写を資料にHRを持ったので、意見交換では彼らのかかなりの批判力を感じるようになった。

2学期からは特に6年としては時期的にきつかったが、逆に6年だからこそ生徒主体に進めるだけの技量を期待することができた。また、余裕がないからこそその緊張感もあったように思う。公開HR開催が一つの目標となったゆえに、今回のようなシリーズの形で、長期的に計画性をもってとりくめ

る機会もできた。生徒の感想も、ある程度の充実感があったとか、思考を深めるきっかけが持てたなど、肯定的なものが多く、ひとりひとりが少しずつでも太平洋戦争の一面に触れて、認識を新たにすることができたように感じる。

情報収集にはインターネットも利用され、発表会に際しては意欲的にパンフレットづくりがなされたが、デジタルに落とせるワープロ打ちの原稿は不思議なことにほとんどなかった。資料を別掲するが、概ねいずれの班も分担して手書きしており、むしろデータソースを慎重に選びじっくり書くことで咀嚼し、自分の発表に備えている印象がある。また、最近ではあらゆる書類がデジタル化されているからか逆に手書きがユニークで、読みたい興味が生じる感覚を持った。

公開研究会を頂点として討論には前向きの姿勢が感じられ、彼らの成長を頼もしく思ったが、やはり短時間の取り組みでこのテーマは難しかった、というのが正直なところである。前述のとおり、問題点の指摘や立場の列挙に留まるのなら、戦争はなければよいに決まっているのだから、複雑な理屈は必要なくなってしまう。ところが徐々に世界的和平が進行していくにせよ、政治的な国家論や民族意識はユートピア的グローバリズムの中に決して溶解しえない。卒業後、さらに世界の各地域の事情も学び、理解を深めてもらいたいと思う。

#### 4-2 良かった点

- ・テーマを学年で独自に設定できたこと。
- ・クラス単位で自由に取り組みさせてもらったこと。ある意味学級内の精神的結束が高められた。30人学級ならではのHR運営のやりやすさもある。一人一人がより参画しやすい。
- ・高学年（6年）ならではの、自覚的な問題意識がともなったこと。
- ・長期的にとりくめたこと（問題意識の継続）。
- ・緊張感があったこと（公開につながるものだから）。

#### 4-3 反省すべき点

- ・せっかく意識が高まり時間も長くとれたのに、受験を控えた時期だけにHRの時間の前後だけの瞬発的な考察になったこと。
- ・生徒主体なのはよかったとはいえ、指導者としての技量不足から適切な助言をしてやりにくかったこと。HRで扱うようなテーマというどうしても専門外のことになるので本当はこちらも相当な勉強が必要だが、なかなか充分にできていなかった。

#### 4-4 今後の課題

今回は生徒も指導者も時間的余裕がなかった。が、上記のとおり6年だからこそ大人の取り組みも可能だ。どのように取り組ませればもっとも効果的で実のある学習になるのか、運営の方法や時間のとり方などをさらに研究する必要があると思った。

テーマによっては、学年があがっても何年か継続して扱うという方法もある。しかし、いろいろなテーマについて広く浅く取り組むのがよいのか、少ないテーマを深く掘り下げるのがよいのか、の選択はどちらが理想的なのかまだよくわからない。

#### 4-5 その他

この学年を3年間うけもって、やはり今回の人権HRがテーマ的にも難しかったが、その分おもし

ろかったり、考えさせられたり、自分の勉強の必要性を痛感したりした。自分の学級のみならず、ほかのクラスも生徒が主体的に相当がんばって取り組んでいたように思うし、資料もかなりの量になったので、種々の記録はできるだけ残してほかの学年での実践や指導者の研修に生かしていただけたら、学年の取り組みとしては幸いに思う。いろいろとご意見もいただきたい。

## 5. 資料

### 5-1 テーマ学習（調べ学習）発表会 梗概（書記生徒のメモから）

グループ発表の班わけ

研究テーマ	班	順	班長				
アジア地域での太平洋戦争の影響	A	1	鈴木	玉井	倉橋	久保	岡崎
ジャーナリズムの問題	B	1	中沢	北村	山口	井上よ	巽
太平洋戦争の功罪	C	2	奥田	池内	乾	北川	森田
戦時下の国民性	D	2	松川	井上も	山中	近藤	
太平洋戦争に至る原因	E	3	笠井	藤堂	林	高松	南方
南京大虐殺の真相	F	3	大宮	石川	井田	岩崎	前田

#### 参考文献

- ・日本人の戦争観 吉田裕 ・子供たちの太平洋戦争 山中恒（岩波新書）
- ・南京の真実 ジョン・ラーベ ・南京虐殺の徹底検証 東中野修道
- ・朝日新聞の戦争責任 太田出版 ・総合資料日本史 令文社
- ・高校教科書新日本史B（第11章－2 太平洋戦争とその惨禍）三省堂
- ・高校教科書詳解世界史B（第5編第3章－4 第二次世界大戦）三省堂
- ・昭和の50年（新書日本史8）井上清（講談社現代新書）・太平洋戦争 家永三郎

ほか、複数の資料やインターネット検索・過去の新聞記事によりグループ発表が行われた。

#### 第1回発表（10/6）

##### ◎ジャーナリズムの問題（B班）

- ・戦時下の新聞には日本の都合のよいことだけが書かれているというイメージがあるが、実際はどうであったのか。具体的な記事を紹介（おもに朝日新聞）。
- ・有名な標語「撃ちてしまむ」、戦意高揚の記事。
- ・「かわいそうな象」、上野動物園の猛獣を餓死させる記事。
- ・「アツ島玉砕」、初めて玉砕ということばを使用、死を贅える報道。
- ・一億特攻、一人一殺の精神を強調する記事。
- ・B29への迎撃についての誇張記事、敗戦をぎりぎりまで認めようとしない記事。

- ・戦時中の風俗（衣・食のくふう）
- ・新聞社の立場、新聞紙法の圧力、軍による記事指導。
- ・軍に反発する少数の新聞記事の存在。
- ・多くの新聞が、国民を意識的に戦争に巻き込む力を持ったことは事実である。

#### ◎大東亜共栄圏の実態（A班）

- ・特に朝鮮について、日本は満州事変以降占領の意欲を強く持っており、アメとムチを使い分けた巧みな侵略を進めている。差別や武力支配の実態例。
- ・満州国での日本軍の無差別横暴的な支配のようす。
- ・アジアの国々は欧米帝国主義と日本帝国主義の、侵略の交替過程で、反日・抗日闘争を通して独立達成の努力を開始したといえる。
- ・日本の軍事支配が欧米の支配を一時切断し旧支配者の力を弱めたのは事実だが、アジア諸民族を解放したとまで評価するのは、異論のあるところだ。

#### 第2回発表（10/13）

#### ◎戦争責任のゆがみ（C班）

- ・現在の日本人の、太平洋戦争に対する考え方を紹介（統計）
- ・日米で、米では日本に、日本では両者に責任の所在を感じている人が多い。
- ・侵略戦争と認める世論は多いが、被害者意識も強い。
- ・若い層ほど、戦争についての意識が薄れていっている。
- ・アジア不在の、一方的な東京裁判に対する不信感
- ・ダブルスタンダードの成立と、中曽根内閣以降のその動揺（歴史的経過）
- ・9条の支持率が非常に高いことと、軍事忠誠心の無さが日本国民の特徴
- ・まちがった平和感覚（湾岸戦争で各国民が懸念したことのパーセンテージで、日本では、石油欠乏による国民生活への影響と答えた者が大多数だった）
- ・戦後賠償、戦後補償の一覧
- ・細川、羽田、村山首相にいたる、「侵略行為」、「侵略戦争」ということばを用いての謝意表明の流れ
- ・太平洋戦争観、戦争責任感が、戦後史の環境下でどのように形成されていったか。
- ・このようなHRを通じて、戦争が起きたいきさつなどをもっと学ぶべきだ。

#### ◎子供たちの戦争（D班）

- ・小学生の学んでいた科目とその内容紹介。体錬科、校長訓話
- ・戦時中の受験、人物考査的な口頭試問
- ・新聞、ラジオに親しみ日頃から政治について関心を持つことが必要であった。
- ・意見が抑制され、既成の皇国思想を植えつけられていた実態。
- ・当時の小学生の作文を引用。12歳としてはたいへんきちんとしている。正しい敬語。教師による内容の大幅な恣意的添削。
- ・疎開先から両親への手紙にもチェックが入って書き直しをさせられ、言論の自由が奪われていた。
- ・食生活の窮乏、国家による統制、闇屋の存在（高額）と庶民の買だし、価格表（資料）



### 第3回発表（10/27）

#### ◎南京大虐殺事件の真相と背景（F班）

- ・日本の宿敵は本来ソ連であったが、盧溝橋事件以降中国との関係は悪化、上海から南京に追撃が行われることになる。南京攻略の経過と、報道されている残虐行為の説明。
- ・南京入城時、市民は安全区にほとんど避難していたが、市街戦を予想していた日本人が、挙動不審の中国人に対して容赦なく発砲、刺殺したのは事実であろう。また、揚子江対岸へ撤退しようとしたおびたしい中国兵士に対し、逃亡阻止に武力行使を命じられていた城門守備の中国軍36師団が発砲、のちに外国人記者たちがこのときの死体の山を見て、日本人による虐殺と誤解した。
- ・南京では安堵感も手伝い、気の緩みから日本兵による略奪、放火、傷害、暴行などもあった。休暇制度がなく、兵の精神的不安定も原因。また、中国を国家として見ず、軽く考えていた。
- ・生存者の証言、元日本兵の証言集。日本兵の残虐行為が語られている。現在日本側が認めている犠牲者数は、134,300人とされている。
- ・一方、大虐殺否定説の根拠は、真悪性のある写真が存在せず客観的な証拠がないこと、市民の人数と虐殺者数の矛盾などをはじめとしており、南京市民の安全を脅かした便衣兵の存在や、中国軍の清室空屋作戦など、犠牲者増加に中国側が自ら荷担していた可能性も高いと見る。
- ・侵略か進出か、大虐殺があったかなかったか、という議論は終わっていないが、犠牲者数を問題にするのではなく、歴史的背景を正しく知ることから、よりよい国際関係を作っていきたい。

#### ◎太平洋戦争の原因（E班）

- ・関東大震災と度重なる3つの恐慌に次ぐ「世界恐慌」、金解禁の失敗により、株価・物価が大暴落した。アメリカは輸入を削減し、日本企業は倒産、失業者が増加、労働争議など、社会不安へ。
- ・政府は「中国侵略」に早期の解決を求め、満州・中国を日本の生命線とした。’31柳条湖事件、’37盧溝橋事件。日本は国際連盟を脱退し国際的に孤立、独・伊と三国軍事同盟を結び、米英と対立深まる。
- ・アメリカなど列強の対日経済封鎖。必要な軍需産業用の資材輸入に打撃。’40日米通商航海条約破棄。アメリカは最大の貿易相手国であった。石油などの重要資源の供給地を求め、南方に武力進出、太平洋戦争へ。
- ・金融恐慌が食い止められなかったこと、5.15事件、2.26事件の無処罰（軍部の台頭）、満州国承認、国際連盟脱退が軍部だけの支持でなく国全体の意思になっていたこと、A B C D包囲陣、対日石油禁輸と経済封鎖、などが、それぞれ大太平洋戦争の原因と考えられる。直接的な原因はハル・ノートで、米は日本に対して受け入れがたい条件を出すことにより、戦争をしかけさせたともいえる。

### 5-2 第7時までのHR感想集計（係による）

#### (1) NHK特集 太平洋戦争（VTR）

- ・興味深く、おもしろかった。・戦争の概略が判った。・自分もまだまだ知識がないことを知った。今までは戦争の内容をちょっと知っているだけだった。・戦争のありのままの姿が見られてよかった。・資料として活用できる。・少し堅苦しくて難しかった。・衝撃的だった。驚いた。・少しえぐかった。怖かった。・太平洋戦争の実態がよく判った。・映像で見て初めて悲惨さが判った。・漫画にはない現実味があった。・生々しい映画だったけど、現実を見ることは大切だと思う。・映像を残すことは大事なことだと思った。・頭の中での戦争と実際とは異なっている。

## (2) 小林よしのり 戦争論 (漫画)

・ある特定の人意見を知ってただ流されるのではなく、多くの様々な意見を見て、その上で自分の意見を見出すべき。・戦争に対する見方ががらっと変わった。戦争に対して新しい考え方ができた。・戦争について考えるということを経験された。戦争をしている人の気持ちを考えていなかったと思った。・過激だが新鮮な意見で、いろいろ考えるにはおもしろい材料となった。・普通ではない方向からの内容で刺激的だけど、なんとも言えない。・戦争がよいわけではない。・右翼的な考え方で、そういう人の意見としてはおもしろかった。・自国の過去の過ちは認めるべきだ。・一つの意見として受け止め、ディスカッションするのなら資料程度に扱うべきだ。・考え方や視点が全く違う2組を作って、この本の内容に対して賛成とか反対とかいう議論をするのもいい。・違った角度から戦争を考えられた。・自分の意見をおしつけすぎ。・反省は必要だが、死んでいった兵に対する敬意は忘れてはいけない。・意見に少し偏りがみられるが、正しいことも言っている。賛否両論あって普通だし、もっといろいろな情報があればいいと思う。

## (3) 教科書での太平洋戦争の扱い (意見交換)

・真実が知りたくなった。・みんなの意見を聞いたことはよかったけれど、慣れていなかったのもう一度くらいちゃんとやってもよかった。・教科書も一つの考え方であって否定はできないと思うが正しいとも思えない。・教科書はそのまま使わないほうがよい。検閲が入っている。・出版社によっていろいろ違うので、比較してもおもしろい。・班活動した後のほうがよかった。・日本がすべてを背負いこんでいるような記述だ。・大ざっぱで一面的。アジアからの視点がない。・載っていることはうわべだけだ。・教科書では戦争が実際どんなものか理解できない。・日本史と世界史では大きく意見が異なっている。・話し合いなら事前にもう少し考えておいたほうがよい。・個々の意見が続くだけで発展性がなかった。・マスメディアのいい加減さが判った。・日本の悪事を重点的に書いているような気もするし、情報量が少ない。

## (4) グループ発表 (班活動)

・細かい情報を知ることができた。・当たり前な内容で、うすい。・せっかくだからみんなの調べたことでディベートしたい。・マスコミはすごい力を持っている。・この時代の子供たちがかわいそうだと思った。僕の考える子供らしさと明らかに違った姿を持つ子供がその時代にはいた。・5年でやりたかった。もっとできた。・自分で調べたりすると、やっぱりよく判るようになる。でも、結局ちゃんとした事実は判らないままのことも多い。・かたい話ばかりだった。緊張した。・公開HRもこのような形でよい。・知識が増えたことはよかった。・もっと時間をかけられたはず。・戦争に対する全体の意識は向上したに違いない。・いい機会だった。・あまり他の班のことは覚えていない。・庶民レベルの戦争を知る必要性を感じた。・理解度にはかなり個人差がある。・日本史の勉強に役立った。・どの班もよく調べられていてよかった。・それなりによく解ったが、時間がなくて大変だった。

### 5-3 公開HR指導案

主題 太平洋戦争での責任について、

日本はこれからも謝罪をし続けていくべきか

目標 各班での研究や発表から学んだ、先の戦争に対するいろいろな観点・側面をふまえて、現在の自分の立場(考え方)を持ちより、討論会をして認識を深める。

展開

	活動	留意点	備考
導入 (5分)	HR委員が司会・挨拶、本時の論題を説明する。 前もって自分の考え方で3つのグループに分かれて机を集めてすわっている。 (謝罪すべき・終わらせるべき・わからない)	今までのすべての班の発表資料を各自持ってきて参考にするようにいう。担任も発表の記録とアンケート集計(いずれも生徒がまとめたもの)を配布するが、ハンドアウトを読みすぎて議論が停滞しないよう注意する。	黒板には模造紙に、わからないグループがどういうところがわからないのかを書いている。それを見ながら2つのグループは意見をまとめる。 3つのグループでは、それぞれまとめ役を決めている。
展開 (35分)	討論 まずわからない(意見を迷っている)立場の人がひとりずつ疑問の点を述べる。その点について3つのグループからいろいろと意見を出しあう。考えにつまったら、グループ内で討論する。	今までの学習発表の成果が生きるように、また論拠をはっきりさせるために配布物を適宜利用させるようにする。 担任は机間巡視程度にとどめるようにし、口だししない。	用意された模造紙に、HR委員は問題点や意見を書きたしていき、議論の流れがわかるようにし、討論が順調に流れるように差配する。 各グループでは記録係がメモをとっておき、次回のHRにそなえる。
まとめ (10分)	討論が終わったら、HR委員は各グループで感想をまとめさせる。グループを変わろうと思った人がどの程度いるのか聞く。 終わりの挨拶・まとめ	時間が許せば、意見が変わった理由について、もう一度討論の対象としてよい。	本時は各人がいろいろな感想を持つにとどめ、結論を急がない。次回のHRで今回一連の人権HR全体を振り返って総括できるように考えておく。

生徒用ハンドアウト

- ・各班の作成した手書きの発表資料
- ・7時間目までのHR感想集計(資料5-2.)
- ・グループ発表骨子記録(資料5-1.)

5-4 公開HRでの発言録から(抜粋)

司会者(井上も・北川) 「わからない」グループから、謝罪とは何か、その基準は、謝ることの意味、といった点について疑問が出されています。

森田 謝罪はすべきだと思う。50%は侵略戦争であることをまず認識することこそ、謝ることの意味だ。

乾 もう謝罪すべきではないと思う。いまは平和だからこそ「謝罪・戦争責任」の話が持ち出される。

南方 では、認めなくてもいいの。

倉橋 そんなことはなくて、そういう意味ではないけど、謝罪はもういい。

大宮 具体的な話がよくわからない。

奥田 認めることはお金に関わってくる話で、認めているならお金を払うべきだ。特に被侵略国が発展途上国なら、そうでないと結局解決につながらない。相手国に自信を回復させることも大切だ。

森田 一般的な人々が、もっと戦争や国家についての意識を持たないといけない。

久保 「国家の戦略として謝る」には反対。

倉橋 その通りで、政治的謝罪には疑問を感じる。

森田 そうではなくて、世界が円滑に動いていくための謝罪と認識できないか。それでは、謝罪しなくていいという理由は？

近藤 謝罪はこれまでもけっこうしてきた。今後は世界経済上の理由からの謝罪ならやめるべきだ。

奥田 敗戦したのに日本が賠償金を払わずにすんだこととの、ひきかえの謝罪だ。

乾 韓国や台湾は、日本がお金持ちだという意識があって、それでお金を請求するのではないのか。

鈴木 日本は今まで完全にきっちり謝罪したとはいえ、南京の虐殺が本当はなかったという説さえ出てきているくらいで、日本人全体に本当の認識はまだ定着していないと思う。

岡崎 「心から」ということになると、実体験がない者には不可能だ。

乾 占領下でGHQにより国体改革が行われており、日本人にもう戦争したいという意識はない。

石川 戦争は謝罪によって解決するのか。なぜ日本だけ謝ることが問題になるのか。伊・独については、もう終わっている話なの。

森田 日本が謝っても別にかまわない。

近藤 日本が戦争放棄なのに対して、アメリカは戦争体制ではないのか。他の国にしても、まず核を捨てることから始めるほうが大切なことだろう。

岡崎 謝るなら、双方が謝るべきだ。

近藤 謝る時代はもう終わり。戦争をなくすために、非核などもっと方法をこそ考えなければならぬ。

笠井 謝罪と賠償金とはひきかえじゃなくて、別の話だ。

森田 「悪いことを認める」ことはするべきだと思う。

前田 お金をいまさら払うのは、なんかおかしい。

森田 戦勝国は、謝らないものだ。

笠井 謝罪の形がおかしいと思う。なぜお金なのか？

前田 感覚として、もうこれ以上の謝罪は必要ない、と思うだけ。

久保 いつまでもきりがいい気がする。

当日は議論がかなり沸騰して、発言したかったのにできなかった者も多かった。次の回に、当日の反省も含め、言い足りなかった意見を拾った。

南方 態度の問題か、お金の問題か、の2つの話に分かれていた。

井上よ 謝罪とは認めること、という話なら、それ以上議論にならない。

北村 日本はお金は払っているし、言われたら払う。でも態度が悪いことが問題。

山中 国民みんなは、謝罪の気持ちや関心を持っていて、きっかけがあれば示せる。

池内 一般のひとの意識をしっかりと変えることが大切。

藤堂 機会があったら考えるわけだから、国民の意識がもっと高まるように、政府ももっていった方がいい。

林 今回は結論を急ぎすぎた。歴史的検証がもっと必要で、できればそのあとに議論をするべきであった。

岩崎 でもディベート的に議論したことはよかった。この経験を今後はどう生かしていくか。

また最後に、公開HR当日の欠席者からも感想を聞いた。

中沢 謝罪とは何か、まだよくわからない。韓国から連れて来られた人の悲惨な話はわかるが、じゃあ、個人に対する謝罪なのか、国に対する謝罪なのか。「国から」が本当にいいのかもよくわからない。

高松 過去に他国を侵略したのなら、責任として、相手を納得させるように努めなければならない。そのためには、今回のように勉強がまず大切。時代の流れや政府のせいにならないで、個人も関心を持つべきである。戦争が起こらないためには、他国の解決にも手を貸してあげるくらいの気持ちが必要だ。

山口 結局謝罪については、戦争の勝敗状況によって矛先が変わるんだろうと思う。

井田 いずれにしてもいろいろ調べたり話を聞くことにより、今回戦争の惨禍について、あらためてよくわかった。

5-5 発表会資料例

◎ 変化の中の戦争責任問題

(1993年8月23日、細川護国首相の就任後最初の所信表明演説  
「過去の我が国の侵略行為や植民地支配などが多くの人に知られ、苦しめ悲しめを与えたことに、改めて深い反省と、十分な気持を述べます」

→ 戦前から1970年代を経て、日本政府が戦争責任や植民地統治の責任をとりはなすことを認める方向に向かっていた。

1994年5月20日 羽田孜首相 予算委員会演説にて、  
「侵略的に行われたという認識の共有……」  
→ 「侵略戦争」と「侵略行為」、という言葉によって論争が起つ(しまう)。

この後の村山首相も含めて、「侵略戦争」とは認めず、大規模な被害を及ぼした行為は反省し、謝罪する……という「非暴力としての侵略戦争論」になっていく。

ここで言いたいのは、細川をはじめとして羽田、村山、小沢などの政治家が、このように謝罪を承る不承不承には、やはり政治的メリットがある。アジア地域で日本が積極的なリーダーシップをとるためには戦争責任問題が政治的に必ず障害になってくれば、だからこんな型で謝罪を示してアジア諸国の世論に効果的にアピールしているということだ。本当に大事なのは、戦争の侵略性や加害性を認める方向での政策転換におおむね、日本人自身の意識改革をいかにやるかという問題である。

◎ 世論の変化が意図するもの

国民の意識としては、やはりかつての戦争を侵略戦争であると明確に認識している人が多数派を形成している。でも、明らかに若い世代にはわかっていなくても、戦争中の価値観や感情にとらわれていない分だけ自由な発想が可能なようになるは必ずしもいえず、むしろ、無関心層が多くなってきている。世論の変化が意味しているのは、戦争責任や戦後処理の問題をめぐる厳しい対日批判が存在していることを自覚して、これに現実的に対応しようとする人々が増えているという事実であって、またそのことはそのままだ日本人の歴史観や歴史意識の深まりを意味していないともいえる。

《まとめ》 戦争責任問題をめぐる政治レベルでの転換と国民意識の変化の持つ意図として、前者は現実の政治的必要性に従って進むような形で政策転換が中曽根内閣以降、はっきりと現れてきたと理解できる。後者については、上述のとおりである。こうした転換と感情は概ね的々バランスの上であり、17対日批判から理性的なアプローチに変化が分らないのである。そうした最良の事態を回避するために、今求められていることは、それらの戦争観や戦争責任感が単に歴史のどのような環境の下で、どんな土壌で醸成されてきたのかという問題を冷静にとらえ直そうとする姿勢である。



## IV. 講座C 北アイルランドーテロリズムー

(荒木孝子)

### 1. 趣旨

これからの世界に生きてゆくためには、世界的視野に立って、バランスのとれた国際感覚をもつ必要がある。そのためにも、21世紀の課題である民族間、宗派・信条の違いによって起こる紛争を理解しようとするのは大切である。何よりも人権の一番の侵害は、戦争であり、人命を奪うことである。その意味で、突如無差別に、あるいは報復措置として人命を奪うテロ行為を今回のHR活動で取りあげた。日本とは地球の反対側にある北アイルランド紛争に焦点を当て、アイルランドの歴史的背景、1998年の平和協定、その後の動き等について学習しながら、なぜ同じ民族が、宗教が違うというだけでこれほど憎み合わねばならないのか、解決の道は探れないのか、南に住む一般的な人々はどう考えているのか、等を追究することを目標とした。もしもこの北アイルランドの紛争が平和的話し合いの中に完全に解決するならば、世界中で内紛に苦しんでいる人たちに一つのモデルを示すことができるのではないかと考えるからである。

この学年は5年の英語の時間に、アイルランドの作家、リーアム・オフラハティ作『狙撃兵“The Sniper”』というアイルランドの独立戦争後の内紛に係わる短編を読んだことも付け加えておきたい。意見発表の手段として、ディベートを選んだ。

### 2. 経過

#### 2-1 情報と知識を身につける

- (1) 1時間目(6/6水) 趣旨を説明し、簡単なアイルランドの歴史を学ぶ。さらにディベートについての基礎知識を与える。(プリント配布)
- (2) 2時間目(6/23水) ビデオを観る。  
「英語についての九章：第八章言葉をめぐる闘争」・・・NHKがBBC放送より編集したビデオ「オレンジ・オーダーの行進」・・・NHKニュース
- (3) 3時間目(6/30水) NHKビデオ「引き裂かれた恋人達」を観る。
- (4) 4時間目(7/7水) NHKビデオ「家族の肖像」を観る。
- (5) 5時間目(7/12月) 講演「アイルランド共和国から見た北アイルランド」  
講師：奈良シルクロード博記念国際交流財団勤務 ショーン・ギリス氏
- (6) 7/7(水)、7/8(木)、7/12(月)  
夏休み前に北アイルランドに関する映画の上映会をする。  
“Nothing Personal”, “Michael Collins”, “In the Name of the Father”

#### 2-2 情報を自ら読み、意見を文章で述べる

##### (1) 夏休み中

英語で書かれた北アイルランド紛争についての新聞・雑誌などの記事を読んで、それについて感じたこと、考えたことを確認する・・・夏休み中の宿題

(The Newsweek, The Daily Yomiuri, The Independent, The Washington Post, The Irish Timesなど担当教師が今までに集めていた資料から読む。)

## (2) 6時間目 (10/6水) 夏休み宿題の総仕上げ

夏休みの宿題が英語であったために、語句についての疑問などが残っていたので、それを解決する。

### 2-3 ディベートによって意見を発表する

#### (1) 7時間目 (10/13水) 模擬ディベート

テーマ「英国は北アイルランドから即時撤退すべきである」是か非か

#### (2) 8時間目 (10/27水) 夏休みの宿題の冊子を読む

夏休みの宿題の冊子ができあがったので、クラス全員がどういう記事を読み、どういう意見を持っているかを、確認する。公開授業に備えて、ディベートの情報を集める

#### (3) 公開授業 9時間目 (11/5金) 公開授業

北アイルランド紛争に関するディベート

テーマ「北アイルランドは独立すべきである」是か非か

#### (4) 10時間目 (11/10水) まとめの話し合い

反省、感想発表など

## 3. 公開研究会

### 3-1 ディベートのテーマを決めるまで

北アイルランド紛争については、ある程度の知識を得たが、ディベートするにはテーマ設定が難しく、クラス全員にテーマについてのアンケートを取り、それを同和・人権HR推進委員会がまとめた。推進委員は推薦入試で合格した生徒を中心に、希望者を募った。最終的に、テーマは「北アイルランドは独立すべきである：是か非か」に決定した。模擬ディベートをしたあとで、ディベーターの希望を取ったら、男子生徒と女子生徒がそれぞれ自発的に希望した。ディベーターとそのブレイクになる同和・人権HR推進委員が賛成側と反対側に分かれて、様々な場面を設定して、参考書を読み、意見を戦わせ、理論を組み立てた。

### 3-2 公開HRのディベートの流れ

公開HRは、ディベートにより今まで学んできたことを確認し、さらに焦点を絞って意見を交換し、考えを深めるという目的があった。司会を行う生徒が本日のディベートの留意点をクラス全員に知らせ、ディベート用に机を並べ換えた。

司会者の指示に従って、ディベートを行う生徒4人が様々な角度から論争を展開した。判定者である残りの生徒達は、ディベートを聞きながら判定を判定用紙に書き込むと同時に、感想も書き込んだ。質問の時間には、積極的にディベーターに質問して、論拠を確認した。

ディベートは大体30分で終わったので、司会者は判定用紙を集め、集計して、勝敗を宣言した。

時間が少し余ったので、同和・人権HR推進委員会が作成したクイズ形式のサマリーを渡し、それに書き込んで終わった。

## 4. まとめ

(1) 生徒たちの間では、自分たちとはあまり馴染みのない北アイルランドについてなぜ学ばなければならないのか、なぜディベートをするのか、について最初の間は疑問が大きかった。ビデオや映画



は熱心に観ていたが、日本とはあまり関係のない国について興味を抱かせることはかなり難しかった。

しかし、ショーン・ギリス氏の講演を聴くあたりから、少しずつ関心が深まった。良質のビデオと映画が手許にあったために、夏休みにも興味ある生徒には貸し出した。ビデオと映画は生徒に動機づけをするのに役立った。

- (2) 実際に英語で新聞記事などを読んで、現実に行っていることに対して衝撃を受けている生徒が何人かいた。ビデオや映画という媒介を通す時と違って、新聞記事を読むことは現実味が強く、英語を日本語に訳すという苦労もともなって、遠い国北アイルランドの紛争がある程度身近に、切実なものとなった。受験生である生徒各人の努力と担任の苦労は大きかったが、英語の学力増進になるとも考え、全員が異なった記事を扱ったのもよかったと思われる。冊子が出来上がってから、他の生徒の訳したものを一生懸命に読んでいた。その記事に対して、どういう風に関心を感じ、考えているかも、関心があったようである。
- (3) これからの国際社会に生き抜いていく日本人として、自らの立場をはっきり表明し、相手を説得する討論の技術に巧みになる必要があると考え、ディベートを自己表現の手段として選んだ。しかし、今まであまり討論になれていない生徒達にとって最初の模擬ディベートは、なかなか進捗が難しかった。しかし、この模擬ディベートで、北アイルランド紛争とディベートに興味を持ち、公開HRのディベートに立候補する生徒が数名いた。意見を論理的に展開して、相手を説得することの大事さに気付いてくれたことは、このHRの成果であった。
- (4) このHRを率先して企画したのは、同和・人権HR推進委員会である。ディベートについては全て彼らが調べ、立案した。ディベートの進め方、判定カード、感想などのプリントも委員達が自主的に考えて、進行していった。彼らがブレーンとなって、公開HRの準備をした。参考書もたくさん読んでクラスに紹介したり、インターネットで検索もしていた。担任が英語の時間に作っていたサマリーに模して、この人権HRのまとめを作ったのには、驚いてしまった。委員会がしっかりしていたために、ディベートもスムーズに進み、ディベーターがしっかりした背景知識を持ち、クラスの発言も多く、公開HRは成功した。

クラスのほとんど全員が、この人権HRを通して「違いを尊重することの大切さ」を学んでくれたと確信している。

## 5. 資料

### 5-1 講演会・夏休みの課題など

- (1) 英語の時間：アイルランド共和国出身のショーン・ギリス氏の講演

題目：「南から見た北」

内容：アイルランドの簡単な歴史と現在。EU参加後現在は、先端技術産業などで、経済的に成功している。若者の移民が減った。「北」は遠い存在であり、早くテロなどをやめて、平和を求めて欲しい。和平交渉の条件であった、領土としての「北」を手放すことは、今では特に問題も感じないし、解決策になるなら、むしろそれを望む。

- (2) 夏休み前の午前中時間割の午後：アイルランド関係の映画会

○Nothing Personal—ユニオニスト側のテロ活動。テロを行うのは「個人的恨みではない」という大義名分の下にカトリックの虐殺を行う。

○Michael Collins—アイルランドが独立する際のIRAの指揮官マイケル・コリンズの一生。英国で

上映禁止になった問題作。アイルランド初代大統領デ・ヴァレラの描き方について波紋を投げかけた。北アイルランド紛争の原因を誘発した南北分割に関する調印を英国側と結んだ人物。ニール・ジョーダンの制作、演出。

○In the Name of the Father—IRAのテロリストと間違えられて投獄された父と息子。英国政府がテロリストに対する見せしめのために冤罪で長い獄中生活を強いられた事実に基づく映画。D・D・ルイスとエマ・トムプソンによる熱演の話題作。

○その他 Devilなど部分的にIRA関係の映画は多い。

### (3) 夏休みの宿題

○北アイルランドに関する英字新聞の記事を読み、訳し（要約し）、感想を一言書く。10月に冊子にした。

○「アイルランド民族運動の歴史」を読む。

### (4) 9月の宿題

○NHK人間講座 「1998ノーベル賞・21世紀への英知・平和賞」を読む。またはビデオを見る。

## 5-2 参考文献など

### <アイルランド関係>

○映画 “Nothing Personal” “Michael Collins” “In the Name of the Father” “Devil”

○ビデオ NHKスペシャル「引き裂かれた恋人達」「家族の肖像⑥密告」

NHK海外ドキュメンタリー「英語についての九章：第八章言葉をめぐる闘争」

NHK人間講座「1998ノーベル賞・21世紀への英知・平和賞」

○参考書 「アイルランド紛争」(明石書店・世界差別問題叢書10)

「物語アイルランドの歴史」(中公新書)

「アイルランド」(岩波文庫)

「アイルランドの風土と歴史」(論創社)

「アイルランド民族運動の歴史」(三省堂選書67絶版)

「アイルランド史 民族と階級上・下」(論創社)

「アイルランド史」(八潮出版社)

「IRA」(彩流社)

「イギリス史」(山川書店)

「岩波講座・世界歴史18 工業化と国民形成」(岩波書店)

NHK人間講座「1998ノーベル賞・21世紀への英知・平和賞」(日本放送出版協会)

○小説 「リヴィエラを撃て」(新潮社)

○インターネットからの検索及び新聞記事

この件に関してThe Irish Timesに様々な特集がある。

The Daily Yomiuri, The Japan Timesからも記事を多く引用した。

The Daily Yomiuriと提携しているThe Independent, The Washington Postからも記事を引用した。

### <ディベート関係>

○参考書 「英語ディベート実践マニュアル」(バベル・プレス)

「英語討論の基本と実際」(三修社)

“Getting Started in Debate” (National Textbook Company)

○ビデオ 教室ディベート入門 (バンドイ・ミュージックエンタテインメント)

5-3 公開研究会指導案

本時の計画

主題 北アイルランド紛争に関するディベート

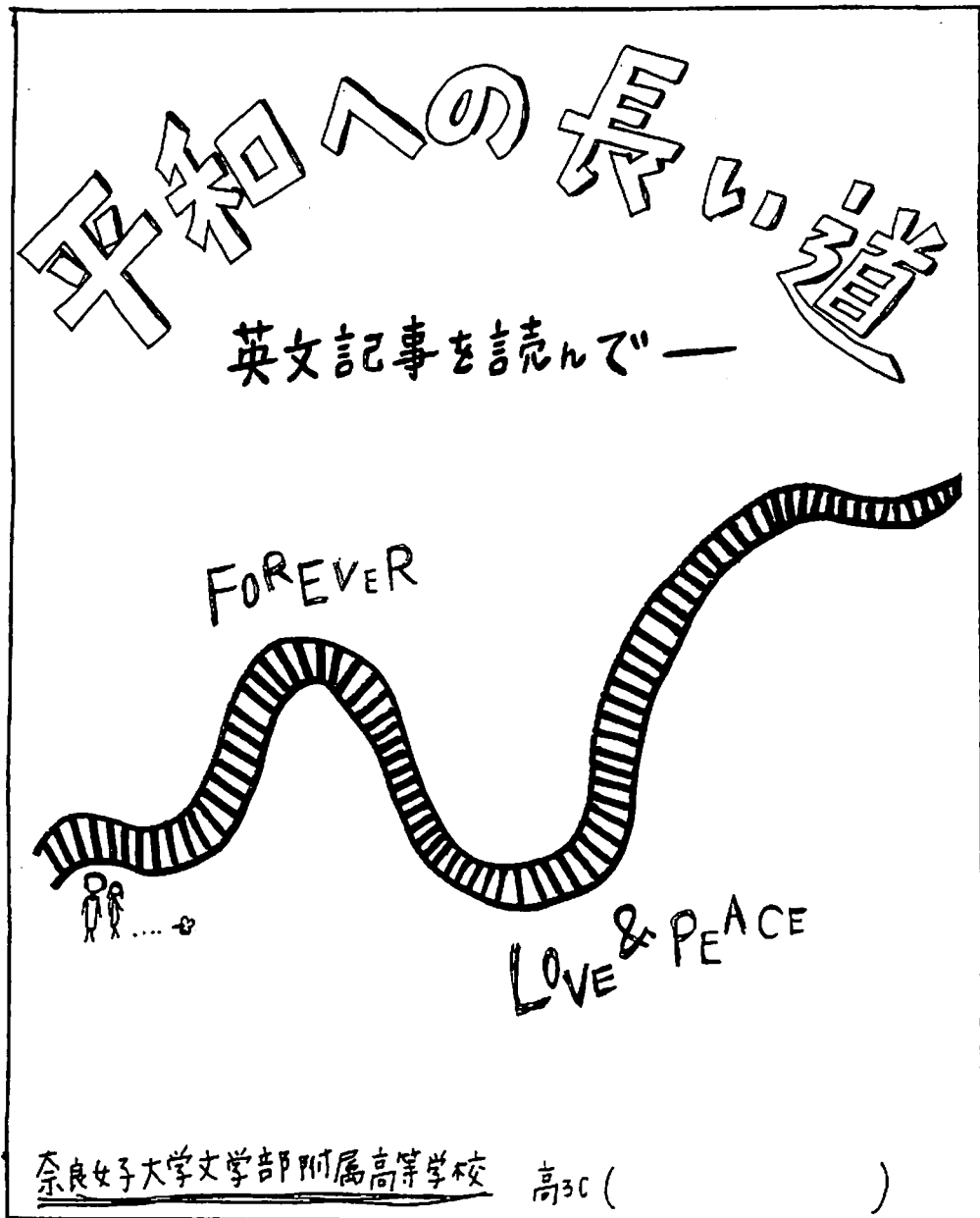
「北アイルランドは独立すべきである」是か非か

目標 ディベートにより、今まで学んできたことを確認し、さらに焦点を絞って考える。

本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	備考
導入	今日の授業の留意点を説明 ディベート用に机の並べ替え 司会者・ディベーター席に着く 10分	ディベートを行うものだけでなく、全員が参加し、意見を持ち、発表できるように説明する。	
展開	ディベート 肯定側立論 3分 否定側立論 3分 作戦タイム 2分 否定側質問 1分 肯定側質問 1分 作戦タイム 2分 肯定側応答 1分 否定側応答 1分 判定側からの質問と応答 4分 作戦タイム 5分 (判定者カード記入) 否定側結論 3分 肯定側結論 3分 感想を集める	司会者とディベートを行う学生が様々な観点から、論争を展開する。 判定者は、それを聞きながら判定用紙に記入すると共に、ディベートについての感想と、これまでの人権教育の感想を考える。  質問の時間には質問してディベーターの根拠を確認するように指導する。  司会者は判定用紙を集め、勝敗について判定用紙から計算し、勝敗を宣言する。  その後感想の用紙を集める。	立論の資料配付  判定用紙配布
まとめ	サマリーに書き込む 10分	司会者は、サマリーについて質問する。	サマリー配布

5-4 生徒の翻訳及び感想文例  
表紙



April 20, 1998 The Newsweek  
A Clean Shot at Peace  
平和を目指して見事な発射

川口 友佳織

真夜中の（和平合意への）締め切りが過ぎた。ユニオニスト（イギリス連合王国統一派）は過去にナショナリスト（アイルランド帰属派）に譲歩しすぎていると、イアン・ペイズリーは言ったが、ストーモント城での円卓会議が17時間後に終わったとき、その批判は孤立していた。大きな圧力下で各政党は歴史上重要な合意をしたのだ。30年前に紛争が始まって以来、初めての広い基盤を持つ平和だ。意見を出し合い、話し合いをしていた各党は決して逃げなかった。アイルランド首相のバーティ・アハーンは「勝利主義の入り込む余地はない」と述べた。英首相トニー・ブレアは、合意について「歴

史の重荷がついに我々の肩から持ち上げられ始めた。平和の中で子供達を育てる機会」であり、「それは北アイルランドの人々が今まで求めてきた全てのことであり」と言った。和平会議の議長であり、元アメリカ上院議員のジョージ・ミッチェルはその合意をととても喜んだ。彼はペイズリーを除く殆どの人から中立政策に対し、高い評価を得ていた。「北アイルランドは素晴らしい人たちの住む土地であり、今回の活動が、新しく生まれた私の子供に望むのと同じ生活をこの土地の人たち、特に子供達に与えることを望む」と彼は述べた。

人々の反応は、安心と感謝の気持ちであって、幸福感ではなかった。なぜなら、隣り合うカトリックとプロテスタントを分ける高い「平和の壁」や射撃、爆撃、落書きがあるからだ。69ページの合意に混乱することはなくても、一晩でプロテスタントの大部分であるユニオニストとカトリックの大部分であるナショナリストとの間の永久的な平和は難しい。だが彼らは前方へ踏み出すステップを知った。ベルファスト市長のアーバン・マジネスは、合意が「大切な躍進であり、闘争と暴力の政策から包括的な和解へと移行しつつある」と述べた。

もしそうなら、それはジョン・ヒュームのおかげだ。彼は現在の平和へのプロセスにおいて、最初の英雄であり、ノーベル平和賞に推奨される人として褒め称えられた。61歳のヒュームは最大で最も穏健な社会民主党（SDLP）の党首である。80年代後半IRAの政治組織であるシン・フェイン党の党首であるアダムズと秘かに交渉を始めていた。英国とアイルランドの政府に助けられながら、シン・フェインを武装解除から真の論争へと引き込むことと実行可能な政治的選択を迫ることへと導いた。

70年代初期から平和への努力は5回失敗してきた。6回目は合意まで辿り着き、英国のサンニングデールで調印されたが、政党の支持が短命だったために失敗した。クィーンズ大学での3月の世論調査では、1998年5月の国民投票における賛成票の獲得は、各政党の支持が必須条件であることが判明した。そのためブレア政権での北アイルランド担当相、モウ・モウラン女史は各政党とシン・フェインを含む準軍事組織を平和交渉のテーブルにつくように最大限の努力をしてきた。

シン・フェインのジェリー・アダムズは49歳で、生まれながらの政治家である。シン・フェインの最終目標である「アイルランド統合」には全く達しない合意を納得させる技術が彼には必要だ。合意が署名された後、アダムズはそれがナショナリストに未来についての希望を与えると書いたが、一息つくときだとも言っている。昨年ウェストミンスター議員に選ばれたが、彼は議員になることを拒否している。彼はシン・フェインの人気を押し上げ、党は現在北アイルランドのカトリック共同体の支持率40%を獲得している。一方ヒュームのSDLPは最近の選挙においてシン・フェインに票を取られ、年輩方の居心地のいい中産階級のナショナリストの政党になっている。若者はシン・フェインに傾いている。

妥協案に対してアダムズが乗り気であることは、より急進的なナショナリストの怒りを招いた。昨年ベルファストのフォールズ通りに沿って描かれた「ジェリー・アダムズ」を名指した醜い落書きには、北アイルランドの6州を英国に与えた1921年の分割を取り決めたために、暗殺された早期のシン・フェインの党首について言及し、「マイケル・コリンズを思い出せ」というものもあった。

話し合いでは、アダムズとユニオニストの間には激しい敵意があった。あるときアダムズは最大政党であるアルスター・ユニオニスト党（UUP）のケン・マジネスと話したが、マジネスは「くそったれの殺人集団と話し合う気はない」と言ったと記者団に語った。これはある意味で個人的な感情ではない。デビッド・トリンプルの率いるUUPはアダムズやシン・フェインの交渉団とはミッチェルのような第三者の仲介なしには、直接話し合わないという方針を和平会議の間維持した。

トリンプルの党は、多数がプロテスタントであるアルスターで最大の選挙民を代表するので、和平

会議では彼は最重要人物であった。SDLPのジョー・ヘンドロンは「トリンブルの重要性は協調してもし過ぎることはない」と言った。もしトリンブルが反対すれば、合意は失敗する。また彼は「トリンブルは、明らかな反対者イアン・ペイズリーのみならず、自分自身の党内からの圧力にも負けやすい」とも述べた。トリンブルのファンは彼を、南アフリカの歴史で、被圧制の少数民族に政治的な力を持たせた改革派の主導者フレドリック・ウィリアム・クラークの北アイルランド版と見なす。彼を中傷する人たちは、アルスターが将来アイルランド共和国との統一へむかって坂道を滑り落ちさせている仕掛け人だと信じている。トリンブルは54歳で、新しい北アイルランド議会の12閣僚の指導者と見なされているが、73年のサンニングデール協定を無効にさせる原因となったプロテスタントのストライキを組織するのを手伝ったこともあった。

今回のストーモントでの協定は、30年前よりはギヴ・アンド・テイク型の交渉であるとトリンブルは主張する。開会される予定である北アイルランド議会――サンニングデール以来英国の直轄下にあったのだが――では、今多数党のユニオニストが主たる政治勢力を占めることになる。しかし、ストーモントでユニオニストは二つの現実と直面しなければならなかった。一つは、ナショナリストの共同体が1973年よりも力を付けてきたこと。もう一つは、英国、アイルランド、米国の政府の役割は、トリンブルの政治的選択の自由に制限を加えるということだ。

交渉の最終日の夜、トリンブルは反対者を抑制するために熱心に戦った。合意後、彼は自分の党に再確認する必要があった。自らユニオニストの強化に立ち上がった。翌日彼の党は、2対1で合意を支持する投票をした。だが反対者は、合意のあら探しをしようとするので、各政党は、紛争に疲れた大衆に合意を納得させるために奔走しなければならないだろう。ビル・クリントンはこれを支持して、5月に北アイルランドを訪問し、遊説してまわる予定である。

もし北アイルランドの準軍事組織が平静にしているならば、賛成の売り込み活動は楽だろう。話し合いの参加団体は、2年以内に武装解除を成し遂げるために、この協定が影響力を及ぼし、少なくとも今年の6月から武装解除を始める努力をすることになる。彼らがどれ程影響できるかは見所だ。停戦は恐らく昨年の夏から続いて平和な状態であるが、テロリストの活動は続く。そのペースは話し合いの締め切りが近づくにつれて拍車がかかり、1月から12回以上の死亡件数があった。紛争の始まり以来、宗派の戦いで3400人が北アイルランドで命を落としたという事実から見れば、進歩のように見えるかも知れないが、反対派は慎重に暴力のエスカレーションを計画していること、夏のユニオニストの行進が近づいてきていることを考え合わせると、戦いの拡大に繋がる可能性もある。

より長い目で見れば、このストーモントでの合意は、敵意と怨恨に満ちた辛い歴史を棚上げしておくために、これからの日々を試されていくことになるだろう。

紛争を終わらせるための計画の要点

【基本的人権】北アイルランドに議会行政府を新設し、ロンドンの議会の役割の多くを引き受ける。12の閣僚と108人の代表は権力の分割を保障する。

【ダブリンの発言権】北アイルランド行政府とアイルランド政府による南北閣僚評議会を新設する。

【南北統一に対する意思表示】北アイルランド、スコットランド、ウェールズのそれぞれの地方行政府に、英国またはアイルランド両国の政府が参加した評議会を設置する。

【領地に関する法律】アイルランド共和国の憲法前文を改正し、北アイルランドの主権に関する部分を削除する。北アイルランドの人々は、自分自身の将来は自分達の手で決定する。

【警備問題】警備問題は終始話し合いの難航した部分である。結論は延期された。アルスター警察をどうするかも問題である。武装解除は努力目標にとどまり、2年間で準軍事組織の囚人を解放するこ

とになる。

### 【わたしの一言】

この合意のあと、8月に28人が亡くなるオマーの爆破事件が起こったのだと思うと、本当に悲しくなる。平和を望む人が増えているのに、それを訴え、行動するには命の危険を伴うのだ。合意に納得し、次の段階に前進するには、自分からバリアを一つずつ取り除き、最も基本的なところに持っていくと見つかる唯一の共通項「平和」を常に主体とすることが大切だと思う。今や北アイルランド以外で、この紛争を快く見る者はいないだろう。想像以上に固いしがらみが、この地に根付いているようだが、私は悪化はしないと信じ、平和を願う人々の力は永遠だと思う。

October 8, 1996 The Independent  
Twenty-five Years of Ireland's Dr No  
アイルランドのドクター・ノーの25年間

齊藤信吾

今月民主統一党(The Democratic Unionist Party)の誕生25周年記念祭が行われた。民主統一党の創始者であるイアン・ペイズリー氏は、1940年代に牧師に任命されてから1950年代は激しい宗教論争を行い、1960年代以降は、街頭で民衆をアジる煽動的政治家としてきわだった。そのような中で「1960年代以来アルスターはIRAとバチカンに脅かされている。しかし、アルスターに住むプロテスタントはイギリス政府をも信用していないので、自分たちで伝統を守っていかなければならない」とペイズリー氏は主張し続けている。

年齢が彼のペースを少し緩めているかもしれないが、イギリス議会の議員としての26年間、ヨーロッパ議会での17年間は、「旅は心を広げる」という諺に対して、彼はそのよい反証となっている。

彼はプロテスタントだが、決して政教一致的な考えを持つ政治家ではなく、あくまで原理主義に基づく政治家である。彼の信仰心は厚く、誠実で、聴衆を驚かせたり、楽しませる神の教えの解き方によって、彼はいわばプロテスタントのヴィンセント・プライスとして崇められるのである。

宗教におけるのと同じく政治においても、彼は妥協を知らない。北アイルランドのプロテスタント以外の人、彼にとってはナショナリストでもリパブリカンでもなく、主にカトリックなのである。政治活動においても、宗教家としての自分を優先させるのである。イギリスがプロテスタント国でなくなれば、彼のイギリスに対する忠誠心もなくなるのである。このように妥協をがんとして受け付けないため、イギリスの政治家たちは、彼と交渉する困難さを嘆いている。

彼はプロテスタントに偏執を与えて、プロテスタントとカトリックの間の緊張を誇張し、一層状況を悪化させていると、ある一人の元牧師が批判した。ペイズリーの党は、アルスターでは常に第二党であることは、ペイズリーの苦悩とするところである。アルスター統一党(UUP)が常に第一党であるからである。しかし、二党間のギャップは一般に考えられているほど大きくはない。今年の選挙では、トリンブルのUUPが46%をとり、ペイズリーのDUPが36%を占めた。その他の統一党が7%をとった。ペイズリーに投票した人たちは、必ずしも彼の属する福音派教会の信者ではなくて、妥協に反対する勢力なのである。言い換えれば、彼は周辺的な現象ではなく、全てのユニオニストの4割は彼の信奉者なのである。ナショナリストとの妥協を試みるユニオニストの指導者は、ペイズリーからの猛烈な反撃を覚悟しなくてはならない。

ペイズリーが舞台上にいる限り、ユニオニストとナショナリストとの調和はできにくいと言っているだろう。これは彼の原理主義的宗教家としての勝利であり、誇りとするところである。

## 【わたしの一言】

今までアイルランド紛争に関するビデオを何本か観て、北アイルランドの現状がどれほど悲惨であるかを知った。そして今回の夏休みの課題は、アイルランド紛争をイギリス側から見た意見が述べられていて興味深かった。この紛争がなかなか終わらないのは、アイルランドのシン・フェイン党を後ろ盾にしたIRAによる相次ぐテロ事件のためだけでなく、ナショナリストとユニオニストとの対立によって、イギリス寄りである党が問題を解決することを拒んでいる要素があることがわかった。僕の意見としては、二者の間で和解が成立することにはこしたことはないし、爆弾テロを行って互いに相手を脅かすだけでは、問題の解決は難しいだろうということである。また、この対立はプロテスタントとカトリックの対立でもあるが、宗教の名の下に、争いが行われているこの紛争は、戦争を好まない純粋な信者にとってはとても悲しいことであると思う。武力で訴えようとする強固な少数派のために、平和を望む多数の人たちが無視されてしまうのは、戦争が起こったときによくあることだと思う。そのような多数派の人たちのためにも（いや、現在ではこのような平和を望む人たちは大多数へと数の上でも変化してきているのだから）、早く紛争をなくし、問題解決へと進むべきであると思った。

## 5-5. 生徒の作ったサマリー

### <北アイルランド紛争・和平合意への道（サマリー）>

あとの選択肢から適切なものを選んで、（ ）のなかに記号で書いてください。但し、選択肢は何回使ってもよい。

#### 15Cまでのアイルランド

アイルランド島は、（ ① ）の西に位置するヨーロッパの最北西の島である。島全体のおよそ5分の4が（ ② ）、残りがイギリス領の北アイルランドだ。今のアイルランド人の祖先は（ ③ ）人である。

5Cにキリスト教が導入された。アイルランド人たちのこの強い（ ④ ）への信仰が、後の北アイルランド紛争につながる。

#### イギリスによる支配

16Cと17Cにはアイルランド島のほぼ全体が（ ⑤ ）の支配下におかれ、グレートブリテン島からやって来た（ ⑥ ）の（ ⑤ ）人と（ ④ ）の（ ⑦ ）人が同化せずに対立し、北アイルランド紛争の原型が作られた。

1798年、アイルランドの（ ⑧ ）が武器を持って反乱を起こしたが、（ ⑤ ）に鎮圧された。これをきっかけにイギリスによる直接統治への動きが強まり、アイルランド議会も廃止された。

1840年代の（ ⑨ ）飢饉は100万人以上の島人を餓死、病死させたばかりでなく、数百万人をアメリカをはじめとする海外に移住させることになった。そうした移住者のうち（ ⑩ ）へ渡ったアイルランド人の子孫たちが、北アイルランド紛争で、（ ⑪ ）を支援することになる。

#### アイルランド問題とは

北アイルランドにおける、（ ⑥ ）（多数派、裕福）と（ ④ ）（少数派、貧しい）との政治的抗争。カトリック国である（ ② ）への帰属をめぐる闘争が絶えず、IRA (Irish Republican Army) の行うテロ及びユニオニストの過激派のテロで60年代後半から3000人以上が死亡。150万人の人口に対し、3万人以上の警察および兵が警備に当たっている。

現在の問題は、IRAの凶悪なテロ(英・アイルランド間の敵対心は薄れている)である。（ ⑫ ）はイギリスの圧政に抵抗するために準軍事組織として設立された。イギリスの圧政はひとつには北の



( ⑥ ) を守るためのものである。

イギリスによるアイルランドの搾取、弾圧の歴史はあるが、現状としては、イギリスとアイルランド共和国の世論は、和平のために近寄りつつある。しかし、北アイルランドでは、富裕なプロテスタントが、現状維持のために全島統一に反対している。

#### □ 20世紀・アイルランドの独立まで

1900年 非暴力主義の ( ⑬ ) が結成され、アイルランドの国民議会を結成することを目指した。

1917年 共和国の設立を目指す ( ⑬ ) が再結成された。

1918年 ( ⑬ ) は独立を宣言。その後も独立を許さない ( ⑤ ) との間で激しい抗争が続く。

1921年 アイルランド26州がアイルランド自由国として独立。( ④ ) 教徒が圧倒的に多い。残りの北部 ( ⑭ ) 州はイギリスの支配下に残った。北部は ( ⑥ ) が多く、( ④ ) は、少数派。しかし、北部にも独立したアイルランド共和国成立を主張する勢力も多くいた。

#### □ 和平会議について

1996年、前アメリカ合衆国上院議員 ( ⑮ ) を議長として、ベルファストのストーモント城で、シン・フェイン党抜きで和平のための円卓会議が始まった。

イギリスでトニー・ブレアの労働党内閣の発足により、行き詰まっていた和平への道が活気づき、( ⑫ ) が再び停戦を宣言し、( ⑬ ) 党首ジェリー・アダムズが円卓会議に参加する。ユニオニスとナショナリストの過激派の強硬な態度に苦戦しながらも、穏健派のアルスター統一党の ( ⑯ ) と社会民主労働党の ( ⑰ ) の絶え間のない努力と、イギリス首相トニー・ブレア、アイルランド首相バーティ・アハーン、合衆国大統領ビル・クリントンやその他の北アイルランドの政治家達の努力によって、1998年4月 ( ⑱ ) の合意に至った。その後アイルランド共和国と北アイルランドでの ( ⑲ ) により、両国民の圧倒的多数によってこの合意は賛成票を投じられた。

( ⑱ ) の合意に基づき、新しい自治を行う議会のための選挙は行われたが、( ⑫ ) の武装解除が問題になって、内閣は発足していない。( ⑯ ) が党内の反対にあって態度を硬化させているためと思われる。

#### □ 将来への希望 ( 私たちの願い )

一日も早く、完全な平和のために話し合いによる解決が望まれる。過去の絆を捨てることは難しいことと思うが、話し合いによって、和平合意案が通過したのであるから、これからも話し合いによって、30年に及ぶ長い紛争解決をして、( ⑳ ) で解決できるものはないのだということを、一つのモデルとなって世界に示して欲しい。

#### 選択肢

(ア)プロテスタント (イ)カトリック (ウ)アイルランド共和国 (エ)イギリス (オ)IRA

(カ)シン・フェイン党 (キ)グレートブリテン島 (ク)ケルト (ケ)ジョン・ヒューム

(コ)デビッド・トリンブル (カ)独立派 (シ)分離独立派 (ス)ジャガイモ (セ)アメリカ (ソ)武力

(タ)話し合い (チ)アイルランド (ツ)6 (テ)26 (ト)ジョージ・ミッチェル (ナ)聖金曜日 (ニ)国民投票

## 5-6 生徒の作ったディベートの進行手順

### <ディベートの進め方>

司会者：「これから『北アイルランドは独立すべきである』というテーマについてディベートを始めます。肯定側の立論からお願いします。時間は3分です」

肯定側：「私達は『北アイルランドは独立すべきである』というテーマについて肯定の立場から立論

をします。肯定側のメンバーは（ ）と（ ）です。私は『北アイルランドは独立すべきである』と考える根拠を（ ）つあげます。(根拠を一つずつ挙げ、その理由を述べる) 以上で肯定側の立論を終わります。」

司会者：「ありがとうございました。続いて否定側の立論をお願いします。時間は同じく3分です。」

否定側：「私達は『北アイルランドは独立すべきである』というテーマについて否定の立場から立論します。否定側のメンバーは（ ）と（ ）です。私達が『北アイルランドは独立すべきでない』と考える根拠を（ ）つあげます。(根拠を一つずつあげ、その理由を述べる) 以上で否定側の立論を終わります。」

司会者：「質問の用意をするための作戦タイムを2分間取ります。」

司会者：「作戦タイム終了です。否定側から肯定側に対する質問をお願いします。時間は1分です。」

否定側：「肯定側の立論であった・・・という根拠の・・・という部分について質問します。(以下質問内容を述べる)」

司会者：「続いて肯定側から否定側に対する質問をお願いします。時間は1分です。」

肯定側：「否定側の立論であった・・・という根拠の・・・という部分について質問します。」

司会者：「今の質問に対する応答を用意するための作戦タイムを2分とります。また、両者応答後、判定役の皆さんからの質問も受け付けますので、判定役の皆さんは質問の準備をしておいて下さい。」

司会者：「作戦タイム終了です。では肯定側の応答をお願いします。時間は1分です。」

肯定側：「先ほどの否定側からの・・・という質問について答えます。(答える)」

司会者：「続いて否定側の応答をお願いします。時間は1分です。」

否定側：「先ほどの否定側からの・・・という質問について答えます。(答える)」

司会者：「では判定役の皆さんから質問をお願いします。時間は応答を含んで4分です。(判定役からの質問を受け、答える)」

司会者：「これで質疑応答を終わります。ここで作戦タイムを5分取ります。判定役の皆さんはカードに記入をしていって下さい。」

司会者：「時間です。否定側の結論から発表して下さい。時間は、3分です。」

否定側：「(結論を述べる)」

司会者：「肯定側の結論を発表して下さい。時間は3分です。」

司会者：「これでディベートを終わります。後ろの人から判定カードを記入後、切り離して集めて下さい。(どちらが勝ったかを発表する)」

司会者：「感想を集めます。これは次のホームルームで発表します。」

司会者：「机を元に戻して下さい。これからサマリーをします。」

## ディベート判定カード

\*発表内容の優劣によって判定

\*発言者への個人的な感情を交えない

判定カード	肯定側	否定側
1) 立論の根拠はしっかりしているか		
2) 質問は相手の弱点をついているか		
3) 質問への応答は適切か		
4) 発言に説得力はあるか		
5) 話し方・態度・時間の使い方は適切か		
6) 全体をふまえた結論になっているか		

どちらが勝ちですか。○をつけてください。

肯定側

否定側

## V. 講座D「世界各地で起こっている民族紛争や戦争を手がかりに人権を考える」

—人権を破滅させる戦争を防ぐことは可能か—

(金 沢 節 子)

### 1. 趣旨

#### 1-1 日常の拡大

「現代人は想像力と思考力の縮みがある」と警告されているが、それを打ち破るために、自分の非日常の世界を日常の中に組み入れていく作業が必要である。この同和・人権HR授業では、卒業を目前に控えている6年が、自分の進路を選ぶ時に、同時代に生きる多くの人々の深い喜びや苦悩と自己のあり方との関連を織り合わせることができる思考の鍛錬を目指した。

#### 1-2 同時代への共鳴—戦争をとおして—

20世紀は民族紛争の時代と言われている。今も、世界の各地で民族紛争や戦争が起こり、たくさんの命と生活が無惨に奪われ、そこに現代を生きる人間の深い悲しみがある。民族紛争は21世紀も続いていく。一方、日本人は、戦後50年間、「平和」の中で生きてきたと思っている。しかし、世界が一つの舞台となった今、世界の紛争や戦争は「遠い国の出来事」「他人事」ではなく、私たちの存在の一部であり、戦争の中を生きているという認識と行動が必要なのではないか。

誰もが「命と生活を奪う戦争が人間にとって最大の悪である」という事実を知りながら、戦争は依然として、なくなる。私たちはこの矛盾を解決できるのか。もしできるならどのように解決できるものなのか。それは私たちが避けてはいけない21世紀での課題である。この課題に取り組むことによって日常の拡大化を図る。

#### 1-3 伝え合う力

この学年を中・高6年間「国語」を担当した総括のひとつとして「伝え合う力を高める」ことにも取り組んだ。今回の「戦争と人間」というテーマを題材にして、次の4点も目標にし、生徒の中で自己の考えが熟成されるように、取り組みの随所に「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の

作業を織り交ぜていくことを心がけた。

- (1) 生徒が自分の考えを明確に持つ。
- (2) 自分の考えを的確に表現する能力を身につける。
- (3) 他人の意見から自分との共通点や相違点を聞き分け、自分の考えを深める。
- (4) 自分の考えを文章にする。

以上の趣旨から指導計画を作り、この同和・人権HR授業を進めた。今回の同和・人権HRをきっかけに卒業後もずっと、「戦争と人権」について考え、実践することを期待している。

## 2. 経過

この授業はHRと国語の授業時間を用いて行った。1学期の問題提起は教師が行い、2学期からは6人の生徒による同和・人権HR推進委員会を発足させて、彼らがHRの企画・実行にあたった。

### 2-1 「戦争」についての知識と情報を、映像を通じて得る

- (1) 1時間目（6/16）「戦争と人権」をテーマにすることについて趣旨説明。

ノーベル平和賞を受賞した「国境なき医師団」に参加している日本人医師貫戸朋子さんの言葉「私たちは平和を求める以上、私たち一人ひとりがその努力をしなければならない。」を手がかりに「今、受験を目の前に控えたみんなは何ができるか？」という問いかけから始めた。VTR「20世紀の映像」「コソボの歴史と構図」（NHKスペシャル）を観る。

- (2) 2時間目（6/23）VTR「失われたとき～サラエボ戦下の子供たち」（NHKスペシャル）
- (3) 3時間目（7/7）VTR「なぜ隣人を殺したか～ルワンダ虐殺と扇動ラジオ放送」（NHKスペシャル）を観る。

### 2-2 他者の意見を第三者に伝える

- (1) 4時間目（7/7）新聞記事「在日はいま」「自爆テロがなかった・イスラエル」「人種差別『英社会』に溝」「女学生・コソボ」を読む。（20分）

《他者の意見を伝える》（30分）

任意の2人ペアで今までのVTR・新聞記事や世界情勢について意見交換。次に3組のペアが集まって6人グループを作り、2人ペアのときに聞いた相手の意見を他の5人に紹介。一巡した後、自分の意見を補足説明する。6人の中で最も共感を得た意見をクラス全員に発表。

### 2-3 小論文を書く

- (1) 5時間目（7/8）小論文の書き方指導。次回「戦争と人権」をテーマにして400字の小論文を書くことを提示。
- (2) 6時間目（7/12）「戦争と人権」をテーマにして小論文（400字）を書く。

生徒の小論文をワープロでうって、冊子にする。生徒全員が、9月以降のHRでどのようなことを考えたいか、各人の意見を書く。

### 2-4 HR推進委員会発足

〔9月末〕同和・人権HR推進委員会発足。

進学内定予定者6人によって自主的にHR推進委員会を発足し、今後の進め方を話し合う。担任か

らは「小論文をどう利用する？」ということの問題提議。委員会では「自分の小論文に対するみんなの意見を聞きたい」「それぞれの小論文に意見を書き込んでもらおう」「小論文を1枚読んで自分の意見を書くのにどれくらいの時間がかかるだろうか？」など活発な討論の結果、紙上討論、それに基づいた討論会を行うことを決定する。

## 2-5 討論会

### (1) 7・8時間目 (10/6)

\*紙上討論100分《資料5-1紙上討論のルール参照》

クラス全員の小論文(1人分を一枚、ワープロにうったもの、無記名)をクラス全員で黙読し、各人がそれぞれにコメントを書く。(机を内むきに四角に並べる。3分間で一枚読み、批判・同感・疑問など線を引いて自分の意見を自由に書く。3分経過後隣に渡す。それを30回繰り返す。)全員書き込みが終了後、小論文の執筆者にコピーを返却する。実物は、全体討論(公開授業)のとき廊下に掲示した。《資料5-6紙上討論廊下掲示・板書写真・5-7小論文の紙上討論サンプル参照》

### (2) 9時間目 (10/13)

\*少人数討論と知識の確認

HR推進委員会が今までの知識を再確認するために、「コソボ紛争」に関するレジメを作成し、説明する。(10分) VTR「わがいとしのコソボ」(20分に編集)を観て、4人に分かれて討論。(10分)それぞれのグループで話し合われたことを代表者が発表する。(10分)

### (3) 10時間目 (10/27)

\*予備討論

HR推進委員会は紙上討論でのコメントの多かった48問題点を抽出し、それを8つのテーマ(下記3-1参照)に絞り、さらにその中から1つとして「戦争によって得られるものはあるか」を全員討論のテーマとして選んだ。

討論は、テーマについて生徒は3つ(得られるものはある・ない・保留)に分かれて座り、論議を展開した。司会進行はHR推進委員会が行う。討論中に意見が変われば席を移動することを可能とした。残り7つのテーマの中から公開授業のテーマを1つ選ぶ。

### (4) 11時間目 (11/5) 公開授業\*全員討論(下記3. 公開授業参照)

### (5) 12時間目 (11/10) まとめ・「自分が考える人権とは」・感想発表など

《資料5-4自分が考える人権とは・5-5生徒の感想参照》

## 3. 公開研究会-平成11年11月5日-

### 3-1 テーマの決定

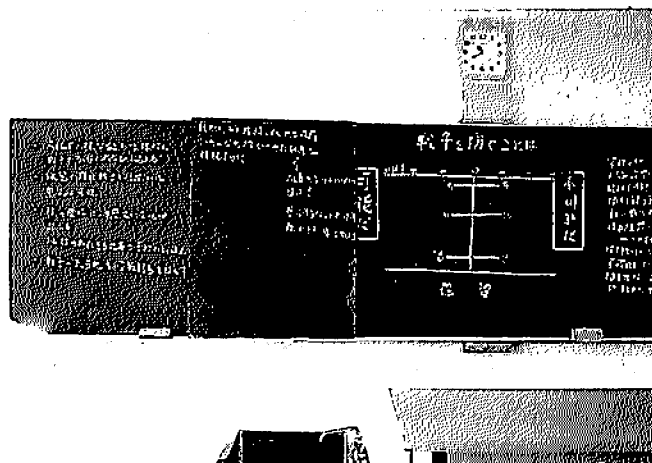
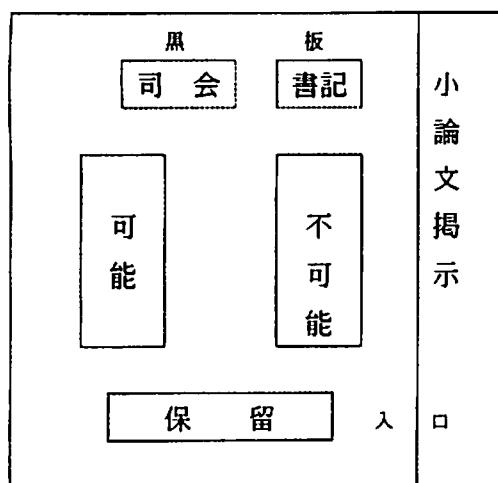
HR推進委員会は10/27の予備討論を踏まえ、次の8つのテーマの中から公開授業のテーマとして、討論したいという意見が最も多かった「戦争を防ぐことは可能だ。」に決定した。

- ① 戦争を子供たちに伝えていくべきだ。
- ② 防衛戦争は正当化されるか。
- ③ わかりあう(解決する)ために教育は重要だ。
- ④ 核を持つことは必要だ。
- ⑤ 戦争を防ぐことは可能だ。(公開授業)

- ⑥ 日本が第3者となり、援助などを積極的にするべきだ。
- ⑦ 戦争を「肯定も否定もしない」という意見はいいのか。
- ⑧ 戦争によって得られるものはあるか。(予備討論)

### 3-2 公開研究会「戦争を防ぐことは可能だ」について討論《資料5-2、5-3参照》

下記の配置で生徒は着席



公開授業（クラス全員討論）板書

### 3-3 討論の流れ

- (1) テーマ「戦争を防ぐことは可能だ」について賛否をとる。結果、可能5名・不可能9名・保留9名となり、図のように着席し討論を開始した。
  - ・保留「戦争を防ぐことは可能と思う人は、今も昔も戦争はあるが、どのようにしてそれを防ぐことが可能だと思うのですか。」の質問から始まった。
  - ・可能「戦争は文化や人種の相互理解がないから起こる。理解する方法を探ることから始まる。」
  - ・不可能「戦争の原因は、理解していないという理由だけでなく、利害関係もからんでくる。」討論は活発化し、移動が始まる。
  - ・可能「人間はできるだけ戦争を避けようと思っているので、相手への干渉ではなく、理解していくことが大切である。」という意見で移動が起こる。
- (2) 20分後、可能6名・不可能10名・保留7名となる。
 

ここから、話が「核」を持つことの是非に移行。「戦争を防ぐことは可能だ」のテーマから話題が少しそれる。

  - ・可能「全世界が核を持ったら、それは平和な状態とはいえない。もっと強いものを作っていこうという意識はよくない。」という意見に続き、「平和とはどこの国も対等な国際関係から生まれる。理解を築くとお互いを認め合う対等な意識が生まれる。」という意見から、可能、不可能、保留の意見移動が起こり、討論は「戦争が起こっている事実」へ向かった。
- (3) 司会者「戦争は無くせると言っても戦争は起こっている。その矛盾をどうしたら解決できるか。」と問いかける。
  - ・可能「争っている場所では、きちんとした情報がなく、物事を多方面から見るとともに教育が必要だ。」という意見には拍手が起こる。「戦争をしたくないという社会を作ることが大切。そうい

う積極性を育てることが必要。」という意見などが続き、最終的には「可能」が増え、「保留」が減った。

(4) 40分後、可能8名・不可能9名・保留6名となる。

最後に司会者が「自分にとっての人権とは？」をみんなに投げかけ、一人の生徒が「人権とは広すぎてまとまらない。でも、その人という人間を保っていられる権利かと思う。」と答え、次回全員で「自分が考える人権とは」《資料5-4参照》を発表し合うことを提示して終える。

## 4. まとめ

- (1) 生徒は「映像」を真剣に観ていた。自分の知らない世界や事実を知り、自己の無知を知ることは、自己の日常を拡大するための重要なモチベーションである。その中で、何をどう考えるかの問題意識も芽生えていった。良質でより新しい情報を提供することは、教師の最初の仕事である。
- (2) 生徒の感想にも「日常生活でこのテーマについてふと考えることがあった」など、日常を拡大する試みという所期の目的は達成された。遠い国で起こっている戦争に対して、私たちは何もできないと悲観するのではなく、生徒の「考えることからスタートだ」という言葉に表れているように想像し、考える努力をするように導入していくことが、日常の拡大には大切である。
- (3) 次に、自分の考えを表現するためには、確かな知識と豊かな想像力が必要であることを生徒は実感したようだ。単に「小論文を書く」という作業だけでなく、自分の考えをより明確にするため、クラス全員が他の生徒の「小論文」を読み批評を書き込む、「他の生徒の批評を読む」という紙上討論を行ったことは、生徒たちが、「戦争と人間」という難しいテーマに食いつくてゆく大きな手立てとなった。また、紙上討論は生徒自身が自主的に企画した、公開HR授業として成功させる起爆剤となった。たくさん書き込まれた自分の小論文を見たときの生徒の表情は、生き生きしていた。
- (4) 自分の考えを書く段階から、「自分の考えを話す、他人の考えを聞く」への飛躍は、2人ペアから少数、そして全員討論へと段階が進むにつれて、自然と活発になっていった。「発言」する前に「他人の話聞く」ことの重要性が認識される。今回の授業で、生徒たちがここまで到達できたことは、国語の授業としても、HR活動としても高度なものとなったと思う。
- (5) この授業の原動力となったのは、同和・人権HR推進委員会である。紙上討論の書き込みやすい活字の大きさや用紙、討論会のルールや時間など、授業の方法や計画は、委員会での話し合いの中から生まれた。教師は常に委員会に参加したが、公開授業が近くなると自主的に運営し始めた。公開授業前日は遅くまで教室内の配置や掲示などに工夫を凝らし、討論の手順の確認に余念がなかった。その熱意がクラスにも伝わり、ほとんど全員の生徒が発言し、活発な討論が行われた。
- (6) 今回のHR活動によって、教師がいないときでも、自主的に委員会をひらいて運営計画をたてるなど、HRは自分たちで運営するという意識が確立された。公開HRを終えて、6年一貫のHR活動の完成を強く感じた。

## 5. 資料

### 5-1 紙上討論のルールー当日(10/6)HR推進委員会が黒板に書いたルール説明

今日の2時間のHR…みんなの書いた小論文を読んで線を引く

(1) 意図

- ① みんなの書いたものを全員が一度は目を通すため

② 線を引くことによって、みんなが自分の考えに対してどう思っているかを知るため

(2) 方法

- ① 小論文を読んで、良いと思うところ、共感できるところに線を引く。できればコメントを書く。
- ② 納得できないところには？を書き、線を引く。できればコメントも書く。
- ③ 時間が余ればそのまま待つ。
- ④ 合図があると左の人に紙をまわし、右の人から受け取る。
- ⑤ この作業を1枚3分間でしてもらい、これを続ける。

(3) 注意事項

- ① 良いところを書くのを主にして下さい。
- ② 3分たって書けなくても「待った」なしで、途中でいいので次の人にまわして下さい。
- ③ 意見が重なっていたら「正」の字を書いて下さい。
- ④ 昼の会には各自に書き込まれた小論文のコピーをお返しします。
- ⑤ 今後の資料にするので、なくさないようにして下さい。

5-2 全体討論 (11/5 公開研究会) - 推進委員会決定事項

(1) 準備

- ① 机を外に運び、HRをイスだけにして、テープ（可能・不可能・保留の枠）をはる。
- ② 廊下にコンパネを並べ、書き込みされた小論文を掲示。紙上討論の説明も書いて掲示。
- ③ 教室を掃除し、黒板をきれいにする。
- ④ クラス全員が8つのテーマに対して書いたアンケートを冊子にして置く。
- ⑤ 当日の昼の会にテーマを発表。

(2) ルール

- ① テーマについて可能・不可能・保留に分かれてもらう。
- ② 討論開始。まず保留の人に意見を聞く。
- ③ 20分ごとに人数を数える。黒板に人数推移をグラフに表す。
- ④ 良い意見と思えば拍手する。
- ⑤ 他の人の意見を聞いて心が変わったら、随时イスを持って動いてよい。
- ⑥ 参観の先生方にも、教室に入るとき可能・不可能・保留に分かれてもらい、みんなの座っている後ろに立ってもらう。ただし、意見は言えない。
- ⑦ 意見は手を挙げて言う。立たなくてよい。
- ⑧ 発言はすべて黒板に書く。

(3) タイムテーブル

- ① はじめに（最初の5分間）
  - ・司会者はじめの言葉。
  - ・担任からHRを始めるにあたっての言葉。
  - ・可能・不可能・保留にイスを持って移動、人数を数える。
- ② 討論（40分）
  - ・20分ごとに人数を数える。
  - ・司会者が臨機応変にすすめる。



③おわりに（最後の5分間）

- ・司会者のまとめ・小論文冊子を配布

5-3 「戦争と人権」公開授業指導案

主題…「戦争を防ぐことは可能だ」についてクラス全員で討論する。

目標…テーマについて深く想像して、自分の考えを伝えるとともに、相手の意見を聞きながら自己の考えを深め考察する。

展開

	学習活動	指導上の留意点	備考
導入 (5分)	本時のテーマと討論の方法について説明する。 司会 諸注意 テーマ「戦争を防ぐことは可能だ」 可能・不可能・保留に分かれる 人数確認	戦争と自分の生き方との関連を想像しながら、考察を深めるように示唆する。	教室は椅子だけにする
展開 (40分)	討論開始 保留者の意見を聞く それをきっかけに賛成・反対者が司会の進行に従って討論  20分毎に人数を確認	討論中、意見が変わった場合、席を随時移動しても良い。 納得できる意見には拍手。 参観の先生方にも先生の考えに従って可能・不可能・保留に分かれて立っていただく。(但し発言できない) 教師は討論の推移を見ながら、円滑に運ぶように司会者に協力する。	意見は黒板に板書される
まとめ (5分)	司会者がまとめる 小論文の冊子を配布		

同和・人権HR推進委員会の役割…司会・司会補佐・記録・板書

(石橋・岩田・艸香・土井・前川・森田)

5-4 自分が考える人権とは

- (1) 人権とは他人によってどうこうされるべきではない。「個」としてだれも他人からはおかされてはいけないものだと思う。ひとりひとりが「自分」でいられることが人権である。人権がどんなものなのか、まだよく分かっていないと思うけど、こんなふうに考えることならできる。やっぱり、「考える」ことからすべては始まる。
- (2) 人にはそれぞれの価値観がある。他人と共感し合える場合もあれば、個人独自で共感を得ることのできない場合もある。人には違いがあって当然であり、「違い」を「違い」として受けとめられる人間にならなくてはならない。これがお互いの人権を尊重することだと思う。「人権」は自分という存在が誰からも否定されない権利である。
- (3) 僕が討論のなかで自然に感じたのは、「人権はその人の人格というものをいかに安定させること

ができるか、またそういう環境を与えられる権利である」ということです。これは僕の中でいかに貴重であるかは今でも思いますが、永遠のものではありません。また考える機会、討論する機会があればどんどん深化していくでしょう。「戦争と人権」のHRは一通過点でしかありません。一人一人がああ時間の中で感じとった「人権」というものを大切に、これからも考えていくべきだと思います。

- (4) 一人ひとりが「生きている」という実感ができるような「生きていてよかった、幸せだ」と思えるような日々を守るものだと思う。どちらかが幸福だと、もう一方が不幸というのはよくあることだが、それ以前の生きる権利として守られるべきであるもの、自分たち=全員で守っていかねばならないものである。

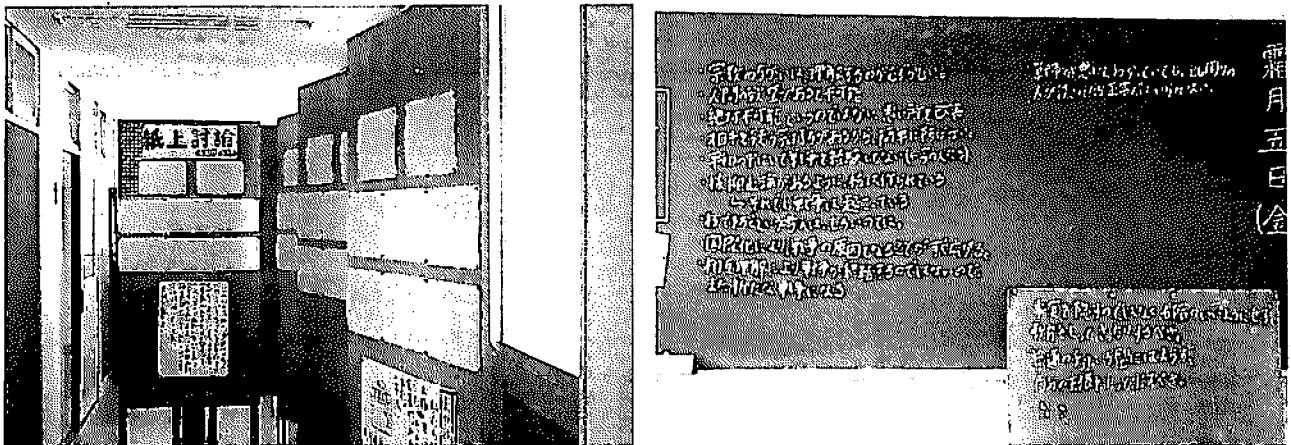
## 5-5 生徒の感想

- (1) 民族紛争のビデオを観たことは、私にとってはすごいプラスというか、全然知らなかったことを知って、いろいろ考える良い機会だった。それまでニュースとかでやっても他人事としてしかとらえてなくてかわいそうで終わってしまっていた。しかし、ビデオを観てあまりの悲惨さにかわいそうとか言っている場合じゃないと思ったし、新聞も読むようになったし、進路にも影響を受けた。「戦争と人権」というテーマを聞いたとき「重すぎる」とか「実感が無い」とか消極的な考え方しかできなかつたけど「重すぎる」し「実感が無い」からこそすごい真剣に考えないとダメなことだとわかった。コソボ問題でも18才の女の子にはどうでもいいことかもしれない。でもそれじゃあダメだと思う。少しでも「考える」べきだと思う。すべては「考える」ことからスタートだと思った。
- (2) ふだん考えたりみんなで話す機会がない「戦争」というテーマに触れることができ、とても有意義であった。討論でも、白熱した論議を戦わせることができ、大きな成功をおさめたと思う。6年間の人権学習で一番良かったと思う。
- (3) 戦争の悲惨なビデオを観ることなどを通して今まで以上に戦争を起こしてはいけないという思いが強まった。今までは自分とは関係ないところで展開されているものとして認識しがちだったが、一人の人間として、本当に戦争というものに対してしっかりとした反対の意思表示をする必要性を感じた。HRでみんなが真剣に意見を交わしあった時、私たちがこんな風にお互いに自分の意見を主張し合える関係を崩さなければ、平和な未来を作っていけると確信できたような気がする。結局のところ、充分に話せる、聞ける環境を私たちは求め続けるべきなのだろう。
- (4) 僕は正直このHRを軽く考えていました。しかしいざしてみると「戦争と人権」について考えることが学校生活以外でも出てくるようになりました。またこのHRでの一番の収穫は他人の意見に触れることができたことです。日常生活の中でこんなかたい話題がでてくることも、人の意見をこんなにかみしめることができたのもそうあるものではありません。このHRが成功したのは紙上討論があったからだと思います。紙上討論はすべての時間のベースになっていました。やはり、物事は自分だけで考えるのではなく、人の意見を聞いて多方面からの考察がいかに重要かがよくわかりました。
- (5) 今まで小学校の時から何度もテーマに出された「戦争」「人権」は、今回のHRで一番深くよく考えることができた。考えるからには何よりそのことをよく知ることが大切だということを実感した。小論文を書いてみんなで批評を書きあうことも、グループになって話し合うことも全体で可能・不可能・保留に分かれた形も一人ひとりがよく考えていたと思う。発言も活発に行われていて、それによって自分の意見と比較し、検討し、新たな出口を見いだすことができた。「戦争と人権」に

についてはもちろん、その他多くのことについての考える力、人に自分の意見を伝える力などがついたように思う。

- (6) 今、このHRをする前の自分の考えと今の考え方を比べると違ったところが多い。どこがどう変わったとかは、はっきりとわからないが、何時間ものHRの中で自分が他の人の意見に納得したり、そういう考えもあるのかと発見したり、あるいはそれは少し違うんじゃないかと思ったり、ということが多々あった。自分の意見が多少なりとも影響を受け、変わっていったところもあった。それは毎回微妙に変化していき、それが積み重なって大きな変化になっている。これからもみんなの意見を聞く場があればまた影響を受けるだろう。このHRを通して、自分が考えもしなかったことにも出会い成長したと思う。このテーマ以外のことについても、もっと他人の意見を聞いてみたいという気がしている。
- (7) 日本ではもう戦争なんか起こらないだろう、と日常では他人事のように思っていたけれど、HRという時間でそういうテーマが与えられ、久しぶりに世界中の人々の問題として真剣に考えた気がします。今、こういうことをHRでやってると親に話したら、結果はもちろん出ず、両親とも少しずつ意見が違って、D組のHRでみんなの意見を読んだり聞いたりしても考え方がさまざままでこういう考え方もあるのかと勉強になりました。

#### 5-6 公開授業研究会にて、紙上討論廊下掲示、板書写真



5-7 紙上討論サンプル

①

① 「人の優しさと戦争」

歴史は戦争の繰り返しである。人は過去を  
繰り返して歩んでいる。戦争が何の解決にもな  
らないこと。それがまたその悲劇を知りなが  
ら、なぜ殺しあわなければならないのか  
人には感情がある。他人を思いやる優しさが  
あり、他人を傷める情しがある。それら  
は大量殺戮の天秤の上であり、気づかぬ間に  
殺傷。両側がそのバランスをいとも簡単にく  
ずしてしまふ。そして、元に戻りにくい、  
そんな弱さが生む戦争には恐ろしくなる程  
に人を殺傷する力がある。命の弱さを知って  
いる人が平気で大量殺人をしてしまふ。多分  
の死が当然のごとく認められる現場で、人は  
もはや、ある一人の死を悲しむことはない  
人が殺し合う理由を知った時、よと忘れら  
れていた何かに気づく。人には情しにまさ  
るべき優しさが残っていることである。戦  
争を繰り返すようになった時、人は冷静にな  
ればよい。情しと優しさが解決してくる。

「人の優しさと戦争」  
歴史は戦争の繰り返しである。人は過去を  
繰り返して歩んでいる。戦争が何の解決にもな  
らないこと。それがまたその悲劇を知りなが  
ら、なぜ殺しあわなければならないのか  
人には感情がある。他人を思いやる優しさが  
あり、他人を傷める情しがある。それら  
は大量殺戮の天秤の上であり、気づかぬ間に  
殺傷。両側がそのバランスをいとも簡単にく  
ずしてしまふ。そして、元に戻りにくい、  
そんな弱さが生む戦争には恐ろしくなる程  
に人を殺傷する力がある。命の弱さを知って  
いる人が平気で大量殺人をしてしまふ。多分  
の死が当然のごとく認められる現場で、人は  
もはや、ある一人の死を悲しむことはない  
人が殺し合う理由を知った時、よと忘れら  
れていた何かに気づく。人には情しにまさ  
るべき優しさが残っていることである。戦  
争を繰り返すようになった時、人は冷静にな  
ればよい。情しと優しさが解決してくる。

②

② 「人の優しさと戦争」

人の心に情しと悲しみを残す。戦争。戦  
争をして「何かが解決した」というのか。人が  
傷つけ合い、心が切り刻まれ、そんなことで  
なされた解決は意味あるものなのだろうか。  
ルワンダの民族戦争下では、人は人でない  
ように感じ、隣人を憎み、争いに加わらな  
い人は迫害される。そして二つの民族が混じ  
りあっていた家族は親族どうして殺しあい、  
誰には大きな傷を心におった。  
どれだけの人がこのように心の傷を背負っ  
て生きているのだろうか。そしてどれだけ  
人の情しと悲しみがこの世の中に残されて  
いることだろうか。こんな世の中は残っている  
戦争は残酷だ。周りがしている事。そうい  
って惨劇は繰り返される。人が人を傷つけ、  
心を傷つける。これは人間としておかしいこ  
とではないのか？人間らしい生き方ではな  
い。互いに助け合う人間らしさをとりもどせ  
い。互いに助け合う方法があるはずだ。  
「人の優しさと戦争」  
人の心に情しと悲しみを残す。戦争。戦  
争をして「何かが解決した」というのか。人が  
傷つけ合い、心が切り刻まれ、そんなことで  
なされた解決は意味あるものなのだろうか。  
ルワンダの民族戦争下では、人は人でない  
ように感じ、隣人を憎み、争いに加わらな  
い人は迫害される。そして二つの民族が混じ  
りあっていた家族は親族どうして殺しあい、  
誰には大きな傷を心におった。  
どれだけの人がこのように心の傷を背負っ  
て生きているのだろうか。そしてどれだけ  
人の情しと悲しみがこの世の中に残されて  
いることだろうか。こんな世の中は残っている  
戦争は残酷だ。周りがしている事。そうい  
って惨劇は繰り返される。人が人を傷つけ、  
心を傷つける。これは人間としておかしいこ  
とではないのか？人間らしい生き方ではな  
い。互いに助け合う人間らしさをとりもどせ  
い。互いに助け合う方法があるはずだ。

## VI. おわりに

生徒たちは、この「戦争と人権」という課題をどのように受けとめたであろうか。クラス独自のテーマはクラス内で相談して決めるのではなく、担任が最初に決定したので、クラスによっては反発もあったが、しだいにみんなの意識が戦争や紛争をクラス全体で考えていくという流れになっていった。また、学習するにつれて、事の重大さに気づいていくという変化が見られた。ふだんは、戦争について皆で考えるということがなかったのが、よい機会であったといえる。卒業した後も、HRで学習したことを継続して勉強しているという報告もある。

高校3年間の人権学習として、常に日本の中だけでなく、日本の周囲に目を向けるようにこころがけていたが、6年のこのHRはその集大成になるものといえる。「違いを尊重する」ということの大切さを皆で理解していくことができる程度できたと思う。今回の戦争についてのテーマは、重要ではあるが難しく、4年や5年では扱えず、やはり6年でしか取り上げられなかったと思われる。また、単に戦争というだけでは漠然としているが、クラスによってテーマを絞り込み、さらに、グループによって学習する事項をそれぞれに掘り下げたので、具体的な形で考察することができたのではないか。自分自身で取りくんだ以外の事項についても、発表を聞くことによって学習することができ、いろいろな各度から考察できたと思われる。他のクラスのテーマについても関心のある生徒はビデオをいっしょに見たりすることがあった。

HRを公開するという前提があったために、いつもよりHRの時間を多く費やした。いままでは、2学期に4、5時間取る程度であったが、1学期から人権教育のHRを始めた。それでも時間不足から授業時間をHRのためにさいて行ったりもしたので、いつもの2、3倍の時間が確保され、充実したものとなった。また、公開であったために、生徒たちがいつもより積極的になったということも考えられる。そして、一講座の生徒数が30人であるということも、取りくみやすい要因になった。

公開HRが行われたのが6年の秋で、生徒たちが受験に追われる時期であったが、HRの時間にゆとりがあったことと、自分たちで調べることについても担任が資料やビデオの調達などについて協力したので、あまり無理がなく、あせっている感じはなかった。しかし、調べ学習にしても、本来は生徒自身によって行われるのがもっとよかったであろう。

学習した後に自分たちの考えを発表する方法については各クラスによって違いがあるけれども、その形がパネルディスカッションであろうとディベートであろうと、いずれのクラスの場合も生徒による自主的な発言があった。また、どのクラスも発表の司会は生徒たちによって行われ、何をどのように議論するかについても、生徒による委員会が決めたクラスもある。

生徒の将来を考えて何が最も大切かというところから、「戦争と人権」というテーマを設定したが、わたしたちにこれを取り扱う力量があったかどうかは問題となるところである。しかし、生徒の進路指導をしたり、調査書・推薦書を書いたりしながら、わたしたちもこのHRを機会にかなり勉強したといえる。それが十分なものであったとはいえないが、不十分ながらも実行してよかったと思っている。

## 3年生における国語表現指導

国語科 金 沢 節 子

### 1. 3年生における「表現指導」授業の目的

#### 1-1. 語彙の選択能力と論理的思考を高め、表現力の向上をはかる

本校国語科では、6年一貫教育の2-2-2制に対応して、中学年にあたる3・4年では、「考える」「読みの深化」「作文力の向上」を目標としている。これは、5・6年での目標である「思索の深化」「自己の創造・進路選択」への素地を育成し、本校の教育目標である「自由で自立した人格」「社会的責任の自覚」の実現に寄与するものと考え。しかし、これらの目標を達成するためには、中学年が抱える問題、つまり中学校と高等学校の段差を解消する必要がある。中高6年一貫教育を行ってきた本校でも、「4年で急に内容が難しくなった」「3年の国語と4年の国語Ⅰでは教科書の内容の差が大きすぎる」という3年から4年にかけてのハードルの幅と高さに苦悩する声を、生徒からよく聞く。これは数年来3・4年を担当する教師自身も教科書を手にしなが、同じ思いを持っている。このハードルをクリアするにはどうしたらよいか。それがこの「表現指導」授業の動機である。そこで、3年で、「自分の考えをまとめ、論理的に意見を表現する能力」の基本を確実に学習することによって、高く・幅のあるハードルを乗り越えようと試みた。つまり、「表現指導」を系統的に行う中で、語彙の選択能力、思考を論理的にまとめる能力を育成し、表現能力を養成する授業を試みた。

#### 1-2. 「敬語」の実践的修得による自己表現能力の育成

中学年では、「多様な自主学習を取り入れる」ことの一つとして、総合教科「環境学」「世界学」が配当されている。特に3年では、フィールドワークで校外の人々と接するため、そのコミュニケーションの手段として、「敬語」を身につけることは不可欠な条件である。社会的にも若者の言葉の乱れが懸念され、国語の教師としてもその改善に尽くしたいと願っている。しかし、文法学習は生徒たちにとって理解が難しく、また「おもしろくない」「興味がわからない」という苦手意識も強い。そこで、3年の「ことばのきまり」にある「敬語」を表現指導の中に取りこみ、手紙を書くことや敬語を用いたロールプレイによって、敬語学習をより「楽しく」「実践的に」身につけ、自己表現能力を高めようとする授業を試みた。

#### 1-3. 情報収集能力の育成から、正確でわかりやすい文章表現能力の育成

新学習指導要領に、「目的や意図に応じて文章を読み、広い範囲から情報を集め、効果的に活用する能力を身につけさせる（中学2・3年）」という目標がある。そこで、さまざまな情報を集めて、それをわかりやすく論理的な「新聞記事」として他者に伝えるという授業を試みた。番組欄やスポーツ欄しか「新聞」を読まない生徒が多いなか、この取り組みによって、生徒がいろいろな新聞記事に接し、情報源としての新聞を再認識すること、また情報から記事を書くための聞き取り調査をし、再び自分の考えを他人に伝える能力を高めることを目指した。題材として、総合教科で「環境学」に取り組んでいることもあり「環境」に関係するものを選んだ。これは、「環境学」の全教科的取り組み

の一環でもある。

## 2. 「表現指導」授業の構成と時間

### 2-1. 「敬語」を用いて、相手に、自分の意志を伝える（4時間）

- ① 敬語の使い方の講義
- ② 敬語を用いて手紙を書く
- ③ 敬語を用いてロールプレイ

### 2-2. 「小論文」で自分の考えを表現する（9時間）

- ① 起承転結の授業
- ② 起承転結で学校紹介・読書紹介
- ③ テーマに基づいた小論文
- ④ 小説「藪の中」を読み、映画「羅生門」鑑賞
- ⑤ 「藪の中」についての小論文

### 2-3. 情報を集め「新聞記事」を書き、事実と自分の考えを伝える（4時間）

- ① 8コマ漫画「弁子ちゃんの生涯」（新聞記事）
- ② 新聞記事の主題・見出しを考える
- ③ 主題の調査・取材
- ④ 新聞記事を書く

## 3 「表現指導」授業の展開

### 3-1. 「敬語」を用いて、相手に、自分の意志を伝える

#### (1) 授業展開の概要

- ① 敬語の働きや尊敬語、謙譲語、丁寧語を理解する。（1時間）
- ② 手紙の書き方を学び、小学校の先生へ学園祭への招待状を書く。（1時間）
- ③ 人物・場面を設定して敬語を用いた会話の創作劇（ロールプレイ）を作る。（1時間）
- ④ クラス全体で、発表会を行う。（1時間）

#### (2) 敬語の指導

生徒が日常よく用いる動詞（「言う」「聞く」「見る」など）を例にして、尊敬語・謙譲語・丁寧語の働きを理解することを目標にする。敬意の対象によって、次のような使い方をすることを理解させる。

○尊敬語（動作をしている人に対する敬意）・謙譲語（動作の相手に対する敬意）・丁寧語（聞いてい  
る人に対する敬意）を使い分けること。

○尊敬・謙譲を表す動詞にいい変わるもの、接頭語をつけるもの、補助動詞・助動詞のつくもの。

《例》言うー尊敬語…「おっしゃる」謙譲語…「申す」丁寧語…「言います」

見るー尊敬語…「御覧になる」謙譲語…「拝見する」丁寧語…「見ます」

その他ー尊敬語「お～になる」「～なさる」助動詞「～れる・られる」

謙譲語「お～する」「～いたす」

丁寧語「～です」

### (3) 小学校の先生へ「学園祭に招待する手紙」を書く

敬語を、体系的に理解できたうえで、それを実際に自分の語彙として使うための実践として、目上の相手を想定して、「手紙」を書くことに取り組んだ。この敬語指導が本校の最大のイベントである学園祭を目前に控えた9月だったので、「小学校時代の先生へ学園祭に招待する手紙を書く」ことを題材とした。指導上、次のことを留意した。

- ・手紙の約束事（季節の挨拶など）をきちんと守る。
- ・正しい敬語を用い、相手のことを思いやる。
- ・「自分の近況」を相手に伝えることで自分を表現する。

実際に先生へ手紙を出したという生徒もいた。2人の生徒の手紙を紹介する。《資料4-1》

\*①②ともに手紙の約束事は守られているが、敬語を完全に使えるようになることは難しいようだ。特に謙譲語がうまく使いきれない。しかし、①は、バレーボール部で負傷したが、それ以外は元気で、劇では裏方でがんばっていること、②は、劇と演奏に出演し、夏休みの毎日におよぶ練習などが書かれている。両者とも本人ではないと書けない内容を含み、「自分」がよく表現されている手紙である。

### (4) ロールプレイ

敬語を実践的に使うために、敬語を実際に用いる人物と場面を想定し、それを発表するロールプレイに取り組んだ。人物設定・脚本は次のように設定した。

- ① 会話を2人が交互に3回ずつ話す場面を作る。(各クラス20組)
- ② 尊敬語・謙譲語・丁寧語をそれぞれ1回以上用いる。
- ③ 内容は生徒の自由な発想にまかせる。
- ④ 内容は原稿用紙1枚にまとめる。

\*教師は生徒の作業中に場面設定に矛盾はないか、敬語が正しく用いられているかなど、相談、助言を行った。人物設定《資料4-2》・脚本《資料4-3》

発表会は各クラス別に次のように行った。

- ① 全20組はみんなの前で演じる。
- ② セリフはすべて暗記する。
- ③ 聞く側は、各組から聞き取った敬語・脚本の構成・敬語の使い方・発表の仕方などを確認プリントに記入する。
- ④ 発表会終了後、自分たちの発表についての感想も書く。

\*発表作品は、敬語が完全に正しく用いられてはいなかったが、間違った使い方には見ている側が指摘した。いずれの作品も独創性があり多種多様なものが登場した。その中で「信長と秀吉」など時代設定の問題、「飼い主と犬」など現実と離れた人物設定などが出てきた。現実的な会話にならないと変更を求めたが、他とは違うものを作りたいという生徒の気持ちは強く、認めることになった。

### (5) 成果と評価

- ① 最初の「敬語の働きや尊敬語・謙譲語・丁寧語の理解」の授業では、きちんと理解できていなかった生徒が、手紙を書く作業やロールプレイを通じて敬語を实际用いることによって、理解が深まっていく場面を何度も見ることができた。これは参加型授業の有効性を表している。
- ② 敬語授業終了後、「環境学で多くの会社にアンケート調査を依頼するときに役に立った」という生徒もいて、授業で学習したことが実践できた。
- ③ 発表会では緊張感を保ちながらも随所に笑いもあり、「楽しかった」「他のクラスのも見たかっ



た」などの感想もあり、苦手な文法を楽しく学べた。

- ④ 敬語を正しく身につけることの難しさもあった。敬語を多用することで敬意を十分に表していると理解する生徒、また敬語を用いることで先生への距離感が生じると敬遠する生徒もいた。敬意を表すことは、敬語の多少ではなく、場面に応じて適切な敬語を用いることであると指導したが、このことにもっと配慮すべきであった。また、手紙の一つ一つの文を丁寧に点検を行う必要性を痛感した。それはロールプレイでも同様である。
- ⑤ 今後は、先人の手紙など良い見本を例示することや、人物設定や脚本の敬語の使い方などにもっと時間をかけた細かい指導が必要であると感じた。人物設定をいくつか絞る、場面を特定するなど教師が十分に指導できる範囲の設定が必要であった。
- ⑥ 生徒に、ロールプレイを見ながら、聞き取った敬語をプリントに記入するという忙しい作業を課した。そのため、同級生の寸劇をゆったりした気持ちで見ることができないようであった。聞く側に課す課題も、違った工夫を考えるべきであった。
- ⑦ 中学校新学習指導要領が「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に目標がおかれ、この敬語を用いた表現指導は、手紙が「書くこと」、ロールプレイが「話すこと・聞くこと」に合致するのではないかと思う。

### 3-2. 「小論文」で自分の考えを表現する

#### (1) 授業展開の概要

- ① 「起承転結」の解説、起承転結を4行文で書く（1時間）
- ② 「起承転結」の4コマ漫画を解説する（1時間）
- ③ テーマを選んで小論文を400字で書く（1時間）
- ④ 同級生の小論文を読む（1時間）
- ⑤ 読書紹介を400字で書く（夏休み課題）
- ⑥ 小説「藪の中」を読む（1時間）
- ⑦ 映画「羅生門」を鑑賞する（2時間）
- ⑧ 小説「藪の中」映画「羅生門」について小論文を400字で書く（1時間）
- ⑨ 同級生の小論文を読む（1時間）

#### (2) 「起承転結」の構成を説明する。

- ① 「起承転結」で構成された文章は、自分の考えを論理的にわかりやすく的確に伝えることができる。
- ② 代表的な例である「京都五条の糸屋の娘／姉は十六妹は十五／諸国大名は弓矢で殺す／糸屋の娘は目で殺す」を用いる。主題（糸屋の娘は魅力的で美しい）を的確に表現するには、具体例である承（姉は十六妹は十五）・転（諸国大名は弓矢で殺す）がポイントになることを説明する。
- ③ 「起承転結」では、「転」の部分が最も難しく、承・承と続く「起承承結」もあり得る。  
「京都五条の…」を「起承承結」に変えた後半の「承結」を生徒に考えさせる。  
生徒作として「糸屋小町で商売繁盛／器量よしの看板娘」「瞳きらきらダイヤモンド／町でも評判美人姉妹」など、多様で興味深いものが多数生まれた。

#### (3) 4行文の「起承転結」「起承承結」を書く。

- ① 最初、「京都五条の…」を見本として、四行文の「起承転結」「起承承結」で学校の紹介文を書く。来年度本校を受検する小学校6年生を想定。主題は「私たちの学校」とした。《資料4-4》

- ② 主題を自由にして、四行の「起承転結」文を書く。
- ③ 自分の作品が「起承転結」「起承承結」のどちらであるかを明記させて、構成を意識付けすることに留意した。
- (4) 「起承転結」「起承承結」の四コマ漫画を説明する。
- ① 生徒に身近な素材として四コマ漫画を取り上げた。四コマ漫画は「起承転結」「起承承結」の好例で、的確で、分かりやすく表現されていることを理解する。
- ② 新聞から四コマ漫画を選び、1コマずつ2行、計8行の説明文をつける。《資料4-5》
- ③ 四コマ漫画は漫画や言葉が簡略化されているので、状況を言葉で相手にわかりやすく伝えることは難しく、語彙力の訓練にもなる。
- ④ 四コマ漫画にも「起承転結」「起承承結」があることの発見は、生徒にとって新しいものの見方との出会いとなる。
- (5) 400字の小論文を書く
- ① 「起承転結」「起承承結」の構成で、本格的な400字の小論文を書く。
- ② 3つのテーマ「私に影響を与えた本」「自分にとって大切なもの」「心に残っている言葉」から1つ選び、「起承転結」「起承承結」の構成をもった400字の小論文を書く。テーマは前もって提示し、下書き用紙も配布しておく。《資料4-6》
- (6) 「読書紹介」を書く
- ① 夏休みに、「起承転結」の構成で400字の「読書紹介」を課題とする。《資料4-7》
- ② それを冊子にまとめ、秋以降3月まで、授業のはじめ10分間に同級生の読書紹介を読む。
- ③ 毎回読むページを指示し、紹介されている本をできるだけ生徒に見せた。教師の解説も行う。
- (7) 小説「藪の中」を読み、映画「羅生門」を観る
- ① 3年の国語の目標である「考える」「読みの深化」「作文力の向上」の総決算として、
- ・文章を深く読むこと
  - ・視覚教材からも考えの深化がはかれるもの
  - ・内容を理解するうえで多面的な思考・見方が必要とされるもの
- を教材化することを考えた。短編で内容も深い示唆に富み、視覚教材があるものとして、この学年は1年から「トロッコ」「蜘蛛の糸」「杜子春」で芥川龍之介に慣れ親しんでいることから、黒沢明監督の「羅生門」として映画化された「藪の中」を選んだ。
- ② 3年でのこの取り組みは、4年における教科書定番の「羅生門」の読みの深化にもつながると考えた。
- ③ 小説「藪の中」の読解では、細部にこだわらず、木こり・旅法師・放免・媼・多襄丸・女・死霊の言い分の齟齬に注目した。特に、事件の当事者である多襄丸・女・死霊の3人の言い分の違いを表にまとめた。
- ④ 小説「藪の中」を読み終えて、映画「羅生門」を2時間観る。
- ⑤ 小説と映画から自分が考えたことを400字の小論文に書く。
- ここでも、「起承転結」「起承承結」の構成をもった小論文であることを条件とした。
- (8) 生徒作品について
- 資料にあげた生徒の小論文を紹介する。《資料4-8》
- 多数の生徒が「みんなうそばかり」と人間不信を嘆く言葉が多かった中で、①は「起」で「真実は一つかもしれない。だが、事実は決して一つに限らない」と鋭く指摘し、多面的な視点を提示

した。②の言葉「あの坊主も、僕達も光の届かない藪の中で必死にもがいているんだ。光探して、明日を夢見て。」は、15才の少年の切実な思いが感じられ、多くの生徒たちに強い印象を与えていた。③は、「藪の中」の出来事を日常起こっていることに置き換え、特に「犬」の例は絶妙で、説得力があった。④の「YESとNOの間にはたくさんの段階がある。」という感性、⑤の決然とした結論「私は自己中心的なところも、優しさも、一人の人間として受け入れていくべきだと思います。」には、多少なりとも驚いたという同級生たちの声も聞いた。

⑥の「真実は、人間の口から語られるものではないと絶望するのではない。その状態をいかに良くしていくかということが大切だと思う。私は、人間を信じて生きていきたい。」という言葉は、教師である私もはっとさせられた言葉である。⑦の闇についての独自の考察など、教師の想像を越えた生徒の「考える」「読みの深化」「表現力の向上」の実践を実感した。

#### (9) 自己評価

- ① 「起承転結」を軸にした表現指導は、400字の小論文を書くことで言葉を選び、的確に自己の考えを表現する訓練となるだけでなく、多様なものの見方の訓練になることが分かった。
- ② 生徒の小論文は力作が多く、一連の授業を終えた感想にも、「一生懸命考えた」という言葉がほとんどの生徒に見られ、友人の小論文に対して畏敬の念を感じる生徒も多かった。生徒たちは、小論文を「書く」「読む」ということで、新たな自己認識と他者の再発見を体験していた。
- ③ 小説「藪の中」で殺人事件をめぐる登場人物の証言が全く違うことを読み、生徒に考える契機を与えた。「映画」によって時代の隔たりをこえて自己の生き方の問題として考えた。
- ④ 映像は「読みの深化」「考える」ことを支援する力は大きく、映画を観ながら、小説の行間をうめる作業が生徒の中で行われていた。今後も、国語の授業で「映画」を積極的に取り入れていきたい。
- ⑤ 芥川の比較的読みやすい小説から、謎の多い小説に取り組むことになり、芥川龍之介について、生徒の興味が多様になった。3学期は芥川をもっと読みたいという生徒の要望に応じて「鼻」を読んだ。
- ⑥ この120枚の小論文を評価するにあたって、膨大な時間を費やした。一人一人の小論文が生徒の顔を見ただけで思い浮かべられるぐらい読み、コメントをつけた。私自身も生徒から学ぶものが多く、生徒のうちに秘められた力の大きさを感じた。
- ⑦ このような「読み」から「映像」、そして「書く」という授業を、今後も取り組んでいきたい。そのためには、現代の文章から生徒にとってよりよい教材を発掘することを心がけていきたい。これは私の今後の課題でもある。

### 3-3. 情報を集め「新聞記事」を書き、事実と自分の考えを伝える

#### (1) 表現指導に「環境学」を織り込む－新聞記事への取り組み

- ① 本校では、3年に総合学習「環境学」が配置されている。今年度は「環境学」の新たな取り組みとして、「環境」に関する授業を全教科で行うことになった。
- ② 国語科では、環境問題を「自分で情報収集すること」「自分の考えを論理的に表現すること」という系統的な表現指導として授業の展開を試みた。
- ③ 「新聞記事」は重要な情報源であり、論理的で分かりやすい文章としても参考にできる。そこで生徒が日常的に新聞記事に親しみ、最終的に「環境に関する新聞記事を書く」ことを目標に、国語の表現指導と環境学のドッキングを試みた。

- ④ 朝日新聞に「コンビニ弁当悲しい命の旅」という記事が載った。その記事は「コンビニ弁当は賞味期限が切れたら、すぐに工場に運ばれ、中身は箱やラップなどと別にされて『コンポスト』という機械に入れられ、肥料になるというリサイクルシステムがあるが、作り過ぎや食べ残しをしないでほしい」という内容に、「コンビニ弁当弁子ちゃんの生涯」を描いた8コマ漫画が添えられていた。
- ⑤ その漫画は、大変分かりやすく、リサイクルシステムと現代社会の問題点を端的に描いている。しかし、このリサイクルシステムや社会を自分がどう考え、またどこに視点をおいて考えるかは、生徒一人一人によって違ってくる。そこで、この漫画を手がかりに環境問題について、自分で情報を収集し、自分の考えを論理的に新聞記事として書く力をつけようと試みた。
- (2) 授業展開の概要
- ① 2000年1月の朝日新聞に載った8コマ漫画「弁子ちゃんの生涯」の各コマに、一人称（弁子ちゃん）の文と説明文をつける。（2時間）
- ② 「弁子ちゃんの生涯」の記事を読み、生徒（記者の立場で）がさらに伝えたいことを新聞記事として書く。そのために情報を取材する方法を考える。（1時間）
- ③ 記事の「見出し」を考える。（1時間）
- ④ 調査及び新聞記事を書く。（自宅学習）
- (3) 8コマ漫画「弁子ちゃんの生涯」の各コマに一人称（弁子ちゃん）の文と説明文をつける。
- ① 8コマ漫画「弁子ちゃんの生涯」を自分なりに理解するために、各1コマについて、一人称（弁子ちゃんの目を通して）の文で表現する。《資料4-9》
- ② この8コマ漫画を客観的に見る視点を養うために、各1コマに説明文をつける。  
《資料4-10》
- ③ 最終的に、8コマ漫画「コンビニ弁当弁子ちゃんの生涯」に関して、600字の新聞記事を書くことを生徒に提示する。
- ④ 「弁子ちゃんの生涯」の漫画は、現在の社会のリサイクルの持つ矛盾を象徴的に描いている。各コマを二通り（一人称の文と説明文）で表現することで、その内容理解を深めることを試みた。弁子ちゃんの目という視点から第三者の視点に変わることによって、ものを複眼で見る訓練を試みた。
- ⑤ 1コマ1コマの絵を、生徒は自分の考えと語彙と想像力を駆使して、簡潔に表現しようと試みていた。特に、生徒は6コマ目の工場がどんなものか分からず、最後のコマの「芽」の絵が何を意味するかを考えることが容易ではなかったようである。
- (4) 情報を集める方法を考える
- ① 自分が8コマ漫画「弁子ちゃんの生涯」に添える記事を書く新聞記者だったらという仮定のもと、「記者として問題に思ったこと」を列挙する。そのため、前時に授業内容を提示し、参考文献など必要なものは持参してくるよう伝えておく。
- ② 列挙した「問題点」に基づいて、「記者として伝えたいこと」を記事にするための情報を集める方法を考える。取材方法は、聞き取り調査、書物、新聞、インターネットなどを行う。特に、インターネットは、検索した情報を鵜呑みにする生徒も多く、その情報の裏付けを調査する必要性を認識させる。
- (5) 記事の「見出し」を考える
- ① 新聞記事もコラムから社説まで、多様である。ただ事実だけを記した記事も多い。そこで、生

徒が自分が書いた記事を掲載する欄として、朝日新聞の「記者ノート」を提示した。「記者ノート」は、自分で情報収集したものに対する自分の考えを述べた文章である。名前と顔写真を掲載することで個人としての記者の責任を明確にしたものであり、生徒の参考となる記事である。

- ② 新聞記事の見出しは記事の内容を端的に表現したものである。見出しを考えることは、自分の書いた文章を、短い言葉や文にまとめ上げるという凝縮された表現力を培う。また、語彙の選択力向上にも役立つ。
- ③ しかし、最近の中高生は新聞を読むことも少なく、まして優れた見出しに注目することもない。そこで、まず新聞記事に親しみ、新聞記事の「見出し」の重要性を考えるため、1週間新聞を読み、最も自分を引きつけた新聞の見出しを記事とともに切り抜いてきて、合評会を行った。切り抜いた記事は、すべてノートに貼り、日付と選んだ理由を書くことを指示する。
- ④ 合評会終了後、教師が選んだ見出しをふせた三つの「記者ノート」を生徒に読ませて、生徒たちに記事にふさわしい見出しを考えさせた。生徒全員が自分の見出しを板書し、記事に最もふさわしい見出しを選んだ。それと、その記事を書いた記者自身がつけた見出しと比較して、合評した。

#### (6) 調査から新聞記事へ（自宅学習）

- ① 取材したことをメモしたり、添付するプリントを数枚配布し、それを提出させて進捗状況を確認した。
- ② 生徒たちは、自分が問題意識を持ったことについて、コンビニ・清掃センター訪問、図書館やインターネットで調べていた。
- ③ 取材プリント、「記者として伝えたいこと」を確認した後、新聞記事下書きプリントを配布した。
- ④ 下書き確認後、新聞記事消書プリントを配布し、新聞記事を完成させ、それにふさわしい見出しを付けさせた。《資料4-11》

#### (7) 自己評価

- ① 「環境学」と国語「表現指導」のドッキングは、大変うまくいった。それは、「環境学」での学びが土壌にあり、「環境学」への全教科的な取り組みによって環境問題への関心が培養されていたことと、1学期から系統的に進めてきた表現指導が、3学期でうまく融合できたからである。
- ② 情報収集の方法が各自工夫しスムーズに行えたのは、総合的学習としての「環境学」でのフィールドワークの成果が活かされている。
- ③ 最後に「新聞記事」を書いたことは、手紙・脚本・読書紹介・小論文と一連の表現指導の3年段階での締めくくりとなった。これは、高学年での、更に長い文章や多様な表現の基礎となるものである。
- ④ 分かりやすく、的確に表現する方法を身につけるには、多様なものの見方や物事を深く考えることも必要であることが分かる。
- ⑤ 8コマ漫画「弁子ちゃんの生涯」は、現代社会の矛盾を示唆している。つまり、弁当は残さず売れることがよいという視点やリサイクル社会が必要という視点を更に深めることは、他の教科のテーマでもある。
- ⑥ 取り組んだのが3学期ということもあり、時間数も少なく、新聞記事の文体や表現方法に深く入り込めなかったのは残念であった。また、力作がたくさん作成されたにもかかわらず、発表するための授業時間がとれず、紹介するにとどまったことは反省点である。

- ⑦ 生徒の作品は、考えさせられるものも多く、示唆にも富む。やはりフィードバックしていくべきであり、インターネットで学校を越えて発信していくべきである。これは、今後の表現指導には不可欠になっていくだろう。

#### 4. 資料－生徒作品－

##### 資料4－1. 「敬語」を使って手紙を書く

###### ① 拝啓

鈴虫やマツムシがにぎやかに鳴くようになってまいりましたが、先生、お元気でお過ごしですか。私はこの前バレーボールの練習中に、じん帯を切ってしまいました。足以外と心はとても元気です。

ところで、九月十八（土）・十九（日）日に私の学校、奈良女子大学文学部附属中・高等学校の学園祭があります。朝の十時から午後三時までの発表です。私の団体は十八日の十二時から新体育館で「オペラ座の怪人」を上演いたします。主役の演技に迫力があって、ストーリーもおもしろいと思います。私は裏方ですが、ぜひおいでください。

それではこれからも風邪などめされぬようお過ごし下さい。

敬具

###### ② 拝啓

残暑厳しい中、まだまだ紫外線が肌にしみる今日この頃、いかがお過ごしですか。私は元気に学校に通っております。

さて、きたる九月十八・十九日、我が校で学園祭が行われます。今年のテーマは「ルネッサンス」ということで、校門を毎年盛大に飾るアーチも昔のヨーロッパを思わせるものです。私は今年は劇とクラブの演奏に出演いたします。劇は「居酒屋ゆうれい」で、私はゆうれい役を演じております。夏休みもほぼ毎日学校に来て練習しました。クラブではアルルの女よりファランドール、古畑任三郎など、いろいろな方面の曲を演奏いたします。卒業以来お会いしておりませんが、私の成長ぶりが先生にも認めてもらえるとうれしいです。ご家族とご一緒に来られてはいかがですか。

季節の変わり目ですので、朝方は特にお身体にお気をつけて下さい。

敬具

##### 資料4－2. 「ロールプレイ」における人物設定

A組①将軍と家来②店員と客③保護者と先生④裁判官と被告⑤ピザ宅配の店員と客

⑥ウェ이터と客⑦ファーストフードの店員と客⑧大臣と天皇⑨医者と病人⑩レポーターと市民

⑪先生と生徒⑫医者と病人の母⑬先輩と後輩⑭結婚を申し込む男と彼女の父⑮嫁と姑

⑯セールスマンと客⑰タクシードライバーと客⑱コーチと選手⑲上司と社員⑳部長と部員

B組①道を尋ねる人と教える人②ウエイトレスと客③店員と客④アイドルとマネージャー

⑤ファーストフードの店員と客⑥博士と助手⑦校長と用務員⑧先生と生徒⑨お嬢様とメイド

⑩飼い主と犬⑪女王と王子⑫社長と副社長⑬先輩と後輩⑭社長と社員⑮会の主催者と招待者

⑯信長と秀吉⑰店員と客⑱殿様と従者⑲えんま大王と死者⑳先生と保護者

C組①会長と副会長②部長と係長③先生と生徒④店員と客⑤インタビューとプレイヤー

⑥医者と患者⑦王様と従者⑧案内人と観光客⑨王と大臣⑩長官と役人⑪料理人と客

⑫総理と秘書⑬先輩と後輩⑭ウェ이터と客⑮社長と社員⑯将軍と老中⑰お嬢様とじいや

⑱案内係と他社の社員⑲校長と教頭⑳先生と保護者

#### 資料4-3. 「ロールプレイ」における脚本

##### A組⑩セールスマンと客

「こんにちは。お忙しいところ失礼します。ところで、我が社の『万能穴あき包丁』をご存じですか。」

「いえ、知りません。今、忙しいので…。」

「これが我が社の『万能穴あき包丁』でございます。」

「万能って言われても…」

「いえいえ、我が社の商品は本物でございます。どうぞ一度おためし下さい。使っていただければ、ご理解いただけるかと思えます。」

「いえ、申し訳ないですが、結構です。」

##### B組⑪道を尋ねる人と教える人

「すみません。東大寺までの道を教えていただきたいのですが。」

「はい、いいですよ。ここが近鉄奈良駅なので、東大寺行きのバスにお乗りになったらすぐですよ。」

「ありがとうございます。あなたはどちらへいらっしゃるんですか？もしお暇なら大仏と一緒に見に行きませんか？」

「ええ、喜んで。ところで、あなたはどちらからいらっしゃったのですか。」

「私は島根の出雲から参りました。奈良はお寺が多いですね。私の住んでいる出雲では神道の方が主で、神社が多いのですが。私の家も神社をやっておりますので、機会があれば一度おいでください。」

「ありがとうございます。出雲へうかがうことがあれば、是非参りたいと思います。さあ、東大寺へ行きましょう。」

##### C組⑫ウェイターと客

「お待ちしております。ご予約の中川様ですね。こちらのお席へどうぞ。こちらがメニューになっております。当店のおすすめは、太刀魚のムニエルでございます。」

「そうね。それとワインとアイスクリームをいただこうかしら。」

「ワインは1930年ものなどいかがでしょうか。」

「いえ、私は1900年もの赤ワインがいいわ。」

「かしこまりました。これが1900年ものワインです。」

「まあ、かねてからご評判はうかがってございましたけど、品揃えは充分ですね。いただきます。」

#### 資料4-4. 4行文の「起承転結」「起承承結」で学校紹介をする

##### ①私たちは奈良女子大附属中学校に通っています。

緑の木々に愛らしい鹿の姿。

連なる山々に流れゆく川。

私たちは自然とともに生きています。

##### ②奈良におわする奈良女子大学文学部附属中学校。

緑の多い広い敷地。

どこかの中学、おさげに制服、持ち物検査。

自由な服装、奈良女附属に響く笑い声

#### 資料4-5. 4コマ漫画を「起承転結」「起承承結」で説明する。

①奈良の車通りが激しく危ない交差点。ガタピシとお母さんと赤ちゃんが渡ろうとしています。

ガタピシはきょろきょろと左右を見ています。そして、車が来ないかよく確認しています。

ガタピシが突然止まり、動かなくなりました。しかめっ面をし、冷や汗をかいています。

自動車だけが危険ではありません。お母さんが運転するベビーカーも立派な車でした。

②父親は食事の時間が遅いと怒り、食事の内容が嫌いだと怒る。

腹にすえかねる父のわがまま、必死にこらえる母の姿。

母親のみならず息子までにも文句をつけるうるさい父親。

がみがみ騒ぎ、息子の顔にはうんざりの表情。

ぼろりとこぼれた一言に父親ぎくっと冷や汗をかく。

「独裁者はいつか倒される」息子の一言、強烈な皮肉。

そんなことがあってはならないと、機嫌とりにレストラン。

いつもがみがみ怒っていても、やっぱり怖い家族の機嫌。

#### 資料4-6. 「起承転結」「起承承結」で400字の小論文を書く

①「生きること」－最も影響を受けた本

たしか去年のことだった。あの本を僕が手にとったのは、はじめから終わりまで一気に読んだのは、あれが初めてだったような気がする。「人間失格」は僕と同調していた。

この本には主人公の、いや作者の懺悔が並べたてられていた。この世のいやなことばかりが集められて固まっていた。

僕はそれを読んでちょっとだけ生きることが好きになった。なぜなら僕もこの主人公と同じことを考え、同じことをしたことがあるからだ。みんなを笑わせて、自分のいやなところを隠してきたからだ。そんな自分がいやになることだってあった。でもそこから逃げる方法なんてどこにもなかった。「死んだらみんな泣いてくれるかな？」こんなことばかり考えていた。そう、そればかり考えていた。

でも、主人公は死ななかった。ボロボロだったけど、死ねなかった。多分心のどこかに希望があったんだ。生きたかったんだ。僕はたしか、読み終わってから泣いた。

②「私を創るもの」－私の大切なもの

私にとって大切なもの、それは、言葉と感情です。他にも、家族や友達、夢や希望など大切なものはたくさんありますが、これがないと生きていけないと思うのは、この二つです。言葉と感情は私を生かすエネルギーなのです。

言葉と感情は全く正反対のものです。共通しているところはありません。言葉は表現する手段だし、感情は表現されるものですから。その相反するもののどこが私にとって必要なのでしょうか。二つとも全く別物だというのに。

どんな生き物にも心があります。心は生き物にとって生きるエネルギーです。私の心の中には自分でもよくわからない感情がたくさんあふれていて、時々おぼれそうになります。言葉がそれを表現して解放してくれるのです。

だから、感情は私の心の核で、言葉が私を解放するものなのです。私はこの二つがなかったら生きていけません。心を失ったら、生きていけるとは言えないからです。この二つで私は創られていると言ってもいいと思います。



### ③「目標はその日その日を支配する」—私の好きな言葉

「怪物ルーキー松坂」世間で騒がれている本人が出演していた番組で、こんな言葉を耳にした。「目標はその日その日を支配する」その一瞬から、この言葉は松坂が好きな言葉でもあり、僕の最も好きな言葉にもなった。

八月のあるアーチ部に燃えていた頃、帰宅すると松坂がブラウン管の向こう側にいた。好きな言葉を聞かれた彼は、とっさに例の言葉を口にした。これだ。不思議に何かと合った気がした。アーチ部の仕事にあまりにも合っていたからだ。アーチは完成という目標がある。その目標に向かって、一日一日をこなしていかなければならない。この言葉が、その時の僕の状況をうまく表現してくれていたのである。

松坂もプロ野球という目標に向かって日々努力してきたのかもしれない。生き方も性格も違うけれども、支配されてきた道は同じ。完成という目標に向かう。いろいろな目標があるけれども、この言葉は全てをつないでくれます。

### 資料4-7. 「起承転結」「起承承結」で400字の読書紹介を書く

#### ①「いまを生きる」

「感動」という言葉は皆さんの心にはどのように響くのでしょうか？私はこの本から、情熱的だけど優しく、どこか哀しい感動を味わいました。私がこの本を推薦するのは、自分だけの感動を味わってもらいたいからです。

この話の舞台は一九五九年のアメリカ、ウェルトン・アカデミーという厳格な名門校です。今のように、生徒の自主性は認められておらず、伝統と名誉、規律と美徳が成功とされ、自己主張はしてはいけないとされました。

そんな地獄学院に現れた新任の国語教師キーティングは、「きょうを楽しめ」という言葉と風変わりな授業で、縛られていた少年たちに、まぶしい自由な世界と自分を表現することの素晴らしさを教えようとするのです。

「いまを生きる」は、少年たちの自由を求める姿がとても純粹で、鮮やかに描かれています。夢や理想だけではなく、現実も。中途半端に幸せで終わらないし、「いまを生きる」ことの素晴らしさが伝わるのでおすすめします。

#### ②「人間失格」

二年生の時に授業で「走れメロス」を読みました。正義感あふれるメロスと対照的に、その話に出てくる王が言った「わしには人のほらわたの奥底が見えすいてならぬ。」という言葉が印象に残りました。そして、太宰治晩年の「人間失格」にも同じような意味の言葉がありました。

初めて「人間失格」を読んだとき、僕は「本当に両方とも同じ作者が書いたのか？」と思いました。二冊の本は、同じ作者が書いたのにあまりにも話の雰囲気の違いが大きすぎたからです。そして「人間失格」を読んでみて「人間」について一層深く考えさせられました。

両方の作品に共通しているのは、「人間」に対して不安を抱いているところです。「走れメロス」は「人間を信じる」ことのすばらしさを王が知るところで終わりますが、「人間失格」は違います。僕は今、この「人間失格」を読み終えて、「人間」とは何て不思議な生き物なんだろうと思いました。僕の心の中で「人間」って何なんだろうという疑問が心に残されました。

#### 資料4-8. 小説「藪の中」映画「羅生門」から考えたこと

##### ①「芥川氏の死と真実について」

私は食い違った三人の証言から或事を知った。真実は一つかもしれない。だが、事実は決して一つに限らないという事だ。事実を眺め、語る角度は関係者の数だけある。

その原因は、彼らの都合のよい告白にあると思う。三人の告白が、自己を正当化する為の方便なのは間違いない。彼らは真実を明確にする事など考えない。著者はいう。人間は夫婦といえど欲の塊だ。人間は虚栄に満ちた信じるにたりない生き物なのかもしれない。

今回気づいた事は、芥川氏がわりと涙を書くという事だ。私は、涙に対し心の清らかさを感じる。松に縛られた夫が一人泣いていた時もそう感じた。こういう場面を書く彼は、非常に純真な所を持つ人間だったと思う。

おそろしく人間不信な一面。又、青年期特有の幼い純真を持つ一面。芥川氏の自殺にはこれらの事が関係していると思う。彼は、自身や周囲を理解できなかったのだ。そう、彼は全ての真実を「藪の中」に残して消えた。

##### ②「人間について」

人は今まで何の障害もなく成長してきた。精神であれ、肉体であれ。そして傷つくことを覚え、傷つかぬために嘘を覚えた。そして嘘は一人で歩き出した。何の障害もなく、後ろも顧みず。そう、それこそ人間のように。

人は誰でも嘘をつく。可愛い嘘。非道い嘘。もう世界は嘘でぬり固められてしまったみたいだ。みせかけの民主主義、モニターの中の仮想現実。すべては数えきれない藪の中。

多襄丸だって罪を犯しちゃいない。言うなれば僕達も罪人なんだ。嘘という罪。罪人が罪人を咎めたって何になるんだい。どんぐりの背比べにプライドもウソもないんだ。

でも人はか弱いいきものなのかな。嘘って判っていてもつかずにはいられない。あの坊主も、僕達も光の届かない藪の中で必死にもがいているんだ。光探して、明日を夢見て。でも光を見つけるのは僕じゃなくても良いのかもしれない。僕が言いたいのはこういうことなんだろう。それこそあの映画のようにね。

##### ③「真実について」

大抵の人は、「藪の中」で起こるような殺人などの事件と関わらずに生活しています。この話は非日常的に思うかもしれませんが。しかし、この事件は日常的に起こっている事が原因となっているのです。

男、女、多襄丸の証言が三人共違っていたのを、初めにすごく不思議に思いました。犯人が三人もいるわけがないし、同じ事件の話をしているのに、違う話をしているようです。

話は変わりますが、同じ犬を見ても、その犬を怖いと思った人とかわいいと思った人とは印象が違います。二人にその犬の説明をしてもらおうと、同じ犬の説明なのに全然違う犬の説明をされているような気分になります。

極端な話になるかもしれませんが、その人の思いや印象とかで事実を美化したり卑下したりして、それを事実だと思うのです。三人は自分の証言を真実だと思っています。このような事は日常どこにでも起こっています。

##### ④「藪について」

足下には草木が生い茂り、竹や大木に太陽の光をさえぎられ暗くじめじめとした藪の中。こんな気分のさえないところでは、何もかもがあやふやにごまかされてしまいそうだ。今回の事件はそんな場

所で起こった。

多襄丸も女もその夫も自分が殺したと言うが、そんな筈はない。それどころか一人一人の証言が違いすぎる。結局犯人は誰なんだろう？という疑問が湧いてきた。でも、違う種類のパズルのピースを組み合わせようとしているみたいに全く答えが見えてこない。

そしてわたしはこんな結論に辿り着いた。この話には特定の犯人なんて設定されていなかった。そう、作者はきっこう言いたかったのだろう。「犯人は一藪の中である」と。

人の心は複雑だ。同じ花を見てもかわいいと思う人もいれば地味だとか思う人もいるだろう。また、はっきりした気持ちなんてそんなにない。YESとNOの間にはたくさんの段階がある。結局人の心こそ藪の中なのだ。

#### ⑤「人の弱さと優しさについて」

私は「藪の中」を読んで、人間とは身勝手なものだと思いました。三人の証言はばらばら、赤子の着物をはぎとる男をとめた木こりも、こっそり小刀を盗んでいたのです。

私たちも同じです。怒られたくない時や見栄をはりたい時は都合の良いように話をかえます。また、それを真実として、自分自身をごまかしてしまうことさえあります。自己中心に、相手を傷つけて人は生きているのです。

でも、私は人を愛します。木こりは捨て子を育てると言いました。人は自分勝手さだけではなく、相手を思いやる優しさも持っています。二つの相反するものを持っているから、人はその間で苦しんでいるのです。

私は自己中心的なところも、優しさも、一人の人間として受け入れていくべきだと思います。人はみんな自分の中で傷ついています。まだ自分の醜い部分を認めることができないからです。私は人を愛し、また少しずつ自分の弱さを受け入れる強さを持ちたいです。

#### ⑥「人間について」

人間は、人間を信じて生きているのだろうか。また、人間はうそをつき、それを本当のように語るものなのか。それが「藪の中」を読んで私が最初に感じた疑問だった。

「藪の中」では、さまざまな人物が登場し、それぞれの視点から事件の様子を語っている。多かれ少なかれ、誰もが半分の真実と半分の自分で都合のいいように変えたこと、つまりうそが語られていたと思う。

しかし、人間は善でも悪でもない。白でも黒でもない。灰色のようだ。人間は、複雑であやふやな存在なのだ。だから、真実というのはそれぞれの見方、考え方によって違ってくるものであり、また、その現状を受けとめることも必要なのかもしれない。

人間は、人間を信じるように努力するべきだ。真実は、人間の口から語られるものではないと絶望するのではない。その状態をいかに良くしていくかということが大切だと思う。私は、人間を信じて生きていきたい。

#### ⑦「闇について」

多襄丸は、卑怯ではない殺し方をしたと言う。女は、男の冷たい目の光のために殺したと、男は女の言葉のために自らを刺したと述べる。三人共自分の心は良いように主張する。

人間には、このようなしつとや憎しみ、自分を良くみせたがる、責任逃れという感情が存在する。ごたごたした感情の入りまじる闇の中で生きて争い死んでいく。

しかし、本当の闇は別にあるのではないだろうか。「その時誰か忍び足に…」から最後までを読みとろうと思った。男を本当の死へと追いやったのは見えない手なのである。

誰も、その見えない手という何かには気付かない。忍び足で男にとどめを刺しにくる何かを、私は恐ろしく思う。冷たいものが心の中に入って心をしめつける恐ろしさだ。その何かとは何だろうか。人の心の奥にある闇か。もっと違う暗黒のものか。だがやっとその闇を感じられたというとき、人は死ぬ。

資料4-9. 「コンビニ弁当弁子ちゃん」の各コマを一人称の文で表現する。

- ① 1. 私は生まれたばかりのコンビニ弁当弁子ちゃんです。弁之助君と弁太郎くんは、私と仲良しなの。三人とも同じ年で、気も合うし、とっても楽しいのよ。
2. でも、気がついたら弁之助君も弁太郎君もいなくなっちゃたの。私、ひとりぼっちになっちゃって、とてもさみしい。
3. ついに、9時になってしまったわ。今日の9時は、私の賞味期限なの。でも、どこも傷んでいないし大丈夫よね。
4. はっ、何するのよ。どこに連れて行くのよ。離して、この手を離してよ。
5. ヨーグルトさん、サンドウィッチさん、おにぎりさんと一緒に、私はゴミ袋の中に入れられてしまったわ。真っ暗で怖いわ。まだ食べられるのにひどいわ。私、思わず泣いちゃった。
6. そして、工場に着いたの。大きい工場の中に連れて行かれたわ。私とっても不安なの。
7. おにぎりさんたちと一緒に、ぐるぐる回って回って回されて、私一体どうなっちゃうの？
8. だけど、そんなに心配しなくても良かったのよね。私たちは、あの工場で分解され土になったの。こうして、新しい命を作る手伝いをしているの。
- ② 1. 私はコンビニ弁当弁子です。友達と弁之助君と弁太郎君と一緒に同じ棚の上に座っています。
2. すると、弁之助君と弁太郎君は人間に連れて行かれて、私はひとりぼっちになってしまいました。
3. 11月2日午後9時、私の賞味期限が切れてしまったけれど、私はまだ一人で座ったままです。
4. その時、お店の人につかまれました。びっくり驚いたけれど、食べてくれるのかと思って、ちょっとうれしく思いました。
5. しかし、私は賞味期限切れの商品であるおにぎりさん、サンドウィッチさん、ヨーグルトさんと一緒に真っ黒なゴミ袋の中につめこまれました。
6. もくもくと黒い煙が出る工場に着き、今、その中にいます。
7. 私は、お弁当の中身がぐるぐるまわって、気分が悪くなってきました。
8. ふう、パッ！私は栄養いっぱい土になって、今新しい生命を誕生させました。

資料4-10. 「コンビニ弁当弁子ちゃん」の各コマを説明文で表現する。

- ① 1. 弁子ちゃんと弁之助君と弁太郎君は、11月1日に作られたコンビニ弁当の仲良しさんです。
2. 時間の経過とともに、弁之助君も弁太郎君もお客さんに買われていき、弁子ちゃんはひとりぼっちになりました。
3. 11月2日午後9時になりました。
4. 弁子ちゃんの賞味期限が過ぎてしまい、お店の人が弁子ちゃんをつかみました。
5. 弁子ちゃんは誰にも手をつけられることなく、賞味期限の切れた他の仲間とともに、ゴミ袋に入れられてしまいました。
6. ゴミ袋が着いた場所は、ある工場です。
7. 弁当の箱と中身が分けられ、あとはぐるぐるただ回り続けました。

8. そうです。弁子ちゃんは、新しい命を育む栄養ある肥料になれたのです。
- ② 1. 今日は、便利な世の中で街には多くの弁当があふれている。
2. よって、当然、人気がなく売れ残ってしまうものも多々あるのだ。
3. 弁当の寿命は短い。「安全面」から考えると、賞味期限など一日もたたずにやってくる。
4. そして、人間の手によって、商品から除外されてしまう。
5. それは、まだ食べられる多くの食品が、ゴミとして捨てられることを意味している。
6. ゴミは処理工場へと送られる。工場は、24時間絶え間なく活動している。
7. 処理工場に着いたゴミは、さまざまな過程を経て分解される。
8. しかし、ゴミは灰になるのではなく肥料となって「新しい命」を育てる大切なもう一つの命になる。

#### 資料4-11. 生徒作成の新聞記事

##### ①見出し「コンビニが担う生ゴミの未来」

コンビニエンスストアといえば、ここ二十年を象徴するサービスである。コンビニがここまで広まったのも「今欲しいものを今すぐ手に入れたい」という消費者のニーズを満たしたためであろう。だが、その消費者へのサービスが今日問題となってきている。

あるコンビニに取材すると、鮮度を保つために、弁当は一日三回入れ替え、カップヌードルなどは賞味期限は150日あっても販売期限は75日としているそうである。

一体賞味期限とは何なのだろう。おそらく味が保たれている期間ということなのだろうが、その基準がよくわからない。例えば、焼きそばパンは、焼きそばとパンの賞味期限は違うだろうから、賞味期限が短いほうに合わせているのだろう。このように弁当の大半が、弁子ちゃんのように食べられないまま商品からゴミになる。

しかし、弁子ちゃんは違ったのだ。東京ではコンビニ弁当の他にも給食の残飯やホテル・工場の生ゴミが某所に運ばれる。生ゴミリサイクル工場だ。これらはここでコンポストに入れられ、土や発酵菌を加えながら、肥料・飼料に作りかえられる。これを契約農家が野菜栽培に利用、収穫分を弁当に加工し、販売する完全リサイクルシステムが稼働している。コストもあまりかからないらしい。

国内全域に浸透したコンビニだからこそ、今後の流通形態を変革できるのではないだろうか。環境へのサービス実現も期待したいものである。

##### ②見出し「コンポストー『環境を守る』意識への第一歩

年間三千五百トン—これが何の数字かおわかりだろうか。これは、コンビニ企業一社から捨てられる残飯の量、そして五万人が一年に食べる量でもある。

ここ数年で、コンビニはめざましく増加した。そして、店舗の数に比例して残飯の量も増加する一方である。コンビニ弁当や総菜の売れ残りは、一日平均八、三キロである。この残飯を上手くりサイクルできないかと、大手コンビニエンス・チェーンのローソンが、神奈川県で県内の二百店舗を選び、コンポスト化、つまり、リサイクルで堆肥にする計画を始めた。

コンポストにまわされる量は、二百店舗分約一、七トンの残飯と、専用の弁当工場から出る残渣二トンのあわせて三、七トンである。これを、まず産業廃棄物処理業者に委託して、第一次の肥料を作る。次に、より高度な良い肥料にするため、埼玉県の肥料工場に運び、油分を抜いて牛糞などと混ぜて三ヶ月間熟成させる。こうしてできた堆肥を、千葉県下の契約農家グループに渡し、野菜の栽培に使ってもらう。生産された野菜は、神奈川県内のローソンの弁当工場に運ばれ、総菜として使われる。

できた弁当が各店舗に配送されて、リサイクルの環が完成する。

最近では、生ゴミ処理機の開発により、家庭でもコンポスト、堆肥づくりが行われるようになってきた。ゴミを減らし、新しい資源を作るコンポストに、自分が関わることにより、「環境を守る」意識を強める第一歩になるのではないだろうか。

\* ①・④で練習したあと、一番良いと思うものを本稿の中に添削して置く

起 私達は奈良に住んでいます。  
 承 緑の木々に愛らしい鹿の姿。  
 承 連なる山々に流れゆく川。  
 結 私達は自然と共に生きています。

①

起 私は読書がくも好きです。  
 承 本は自分の思考を促します。  
 承 本は世界を広げてくれます。  
 結 だから私は読書が好きです。

②

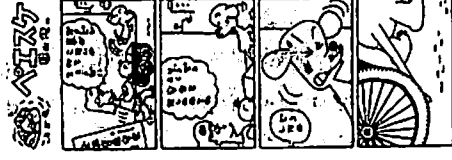
起 私の学校は奈良女子大附属です。  
 承 生徒は自由の下に自主性を持っています。  
 承 先生と生徒はお互いに信頼しています。  
 結 私達の学校はすばらしい学校です。

③

起 私は猫を飼っています。  
 承 猫はわがままで可愛いです。  
 承 私はいつも振りまわします。  
 結 そんな猫がわがままではありません。

④

起 私達は奈良に住んでいます。  
 承 緑の木々に愛らしい鹿の姿。  
 承 連なる山々に流れゆく川。  
 結 私達は自然と共に生きています。



①

赤ちゃんとワロキチ乗る花子は買い物に行きます。  
 花子は、名乗りに車が来ないか見に行かせます。  
 左右をよく確かめて車が来ないかと安全確認。  
 花子は、自分自身を揺りながら歩いています。  
 ワロキチ、頭をしかめて苦しみ始めます。  
 花子は不思議に思いついて、「どうしたの」と声をかけました。  
 ワロキチは、しほを乳母車にひかれたのだです。  
 十分確かめても事故は意外な所へ起こるものなのです。



②

毎日毎日、大三郎は丸子にどなごばかり。  
 「ほしの置置き方がな、どうん、と今日も朝からどなごだ。  
 息子、二郎は机にむかへ勉強中のどうん、どなご声。  
 大三郎「これから俺は新聞を読むんぞ、そよける。  
 少しおこした三郎は、悪戯者はいつかたおされる、と言った。  
 大三郎は、「いつか俺を殺すれんぞ、」と考えた。  
 今日から大三郎は、いい父親になろうと、家庭を、らふ。  
 ちやうどな態度も、自分が安全な位置からめぐる。







研究紀要 第42集(II)

2001(平成13)年3月19日発行

発行者 奈良女子大学文学部  
附属中等教育学校

校長 佐久間 春 夫

〒630-8305 奈良市東紀寺町1-60-1

TEL. 0742 (26) 2571

FAX. 0742 (20) 3660